



## 日本における宗教と空間、社会をめぐる地理学的研究

阪野、祐介

---

(Degree)

博士（文学）

(Date of Degree)

2007-03-25

(Date of Publication)

2011-12-13

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲4127

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1004127>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



学位申請論文

平成 19 年 3 月 30 日

日本における宗教と空間、社会をめぐる  
地理学的研究

阪 野 祐 介

神戸大学大学院文化学研究科社会文化専攻（博士課程）

## 目 次

---

目 次	1
図表一覧	5
緒 論	8

## 第1章 地理学における宗教研究の動向と展望

宗教と空間・社会をめぐって	19
---------------	----

はじめに 20

地理学と宗教 21

(1) 宗教の分布・伝播をめぐる空間と社会

(2) 聖なる空間と社会

日本の地理学における宗教研究 28

(1) 研究テーマの分類

(2) 宗教の分布・伝播をめぐる空間と社会

(3) 聖なる空間と社会

おわりに 本論文の目的と課題 36

## 第2章 新潟県・八海山を対象とした山岳信仰の展開

大崎口崇敬者の分布を中心に	38
---------------	----

はじめに 39

八海山信仰の変遷 41

(1) 開山以前の様相

(2) 開山以降の様相

八海山信仰の分布 47

(1) 大崎口崇敬者の分布

(2) 大崎口周辺の靈神碑からみた分布

(3) 八海山信仰に関わる講の分布

八海山信仰の展開と分布要因 57

おわりに 61

### 第3章 京都府旧佐賀村におけるカトリックへの集団改宗と 農村社会

---

63

序 日本におけるカトリックの分布と歴史的展開 64

(1) 日本におけるカトリックの歴史的概略

(2) 日本におけるカトリックの分布

    関心の所在と課題 70

    集団改宗への契機 74

(1) GHQ 統治とザビエル渡来 400 年祭

(2) 村内の状況

(3) 集団改宗の要因

    社会関係と集団改宗 82

(1) 地縁的関係にみる改宗パターン

(2) 血縁的関係にみる改宗パターン

(3) 世帯別の改宗パターン

(4) 佐賀村の改宗パターンの特性

    旧佐賀村における既存の信仰とカトリック 89

(1) 秋祭りと聖母行列

(2) 位牌と位牌堂

    おわりに 94

### 第4章 戦後日本におけるザビエル渡来 400 年祭

---

96

はじめに 97

ザビエル祭の概要 99

GHQ の宗教政策とキリスト教 101

ザビエル祭とカトリック施設の建設 104

メディア・イベント「ザビエル祭」 106

    おわりに 111

第5章 津和野における巡礼地の形成 \_\_\_\_\_ 112

はじめに 113

調査地概観 116

津和野における浦上キリシタンの流刑と殉教 123

(1) 浦上キリシタンの流刑と殉教

(2) 津和野の国学と復古神道

巡礼地・乙女峠の形成過程 133

(1) 殉教地の「発見」

(2) 巡礼地乙女峠の整備

おわりに 142

結論 日本における宗教と空間、社会 \_\_\_\_\_ 144

付録 150

参考文献 212

## 図表一覧

---

## 図

- 2 1 八海山および山麓略図
- 2 2 八海山大崎口崇敬者の都県別分布（本州東部）
- 2 3 八海山大崎口崇敬者の市町村別分布（関東甲信越および静岡）
- 2 4 八海山大崎口里宮周辺の靈神碑からみた分布
- 2 5 八海山大崎登山口脇の靈神碑群
- 2 6 八海山信仰に関連する講・教会等の分布
- 2 7 木曽御嶽信仰の教会・組織の分布（本州東部）
- 3 1 日本のカトリック 16 教区
- 3 2 1943 年～1950 年のキリスト教関連記事件数の推移
- 3 3 旧佐賀村概観図
- 3 4 賀茂神社
- 3 5 賀茂神社境内に立てられた幟
- 3 6 御輿に乗ったマリア像
- 3 7 村内をゆく聖母行列
- 3 8 報恩寺教会位牌堂外観
- 3 9 報恩寺教会位牌堂内部
- 3 10 カトリック報恩寺教会の位牌の分類
- 4 1 ザビエルの「聖腕」と十字架を捧持するスペイン巡礼団
- 4 2 西宮球場での「莊厳ミサ」広告記事
- 5 1 旧津和野町の人口の変遷
- 5 2 2000 年における津和野町の年齢階層別人口構成比
- 5 3 津和野の中心市街地図
- 5 4 浦上キリシタンの流配地図
- 5 5 千人塚の殉教者追悼碑
- 5 6 石碑「† 信仰の光」
- 5 7 1960 年ごろの乙女峠マリア聖堂
- 5 8 マリア出現を再現した像
- 5 9 乙女峠まつりの聖母行列
- 5 10 マリア聖堂へ続く坂道をゆく聖母行列

## 表

- 2 1 八海山麓の寺院一覧
- 2 2 大崎口里宮周辺の靈神碑からみた市町村別分布
- 2 3 八海山信仰に関連する講・教会等一覧
- 2 4 年代別靈神碑建立数
- 3 1 日本のカトリック信徒に関する統計
- 3 2 1949年上半期の関西発行の新聞におけるキリスト教に関する記事の見出し
- 3 3 1949年における佐賀村内の地区別受洗状況
- 3 4 佐賀村沿革
- 3 5 1949年における佐賀村の各集落の受洗者数と洗礼月日
- 3 6 各カブの改宗状況
- 3 7 地区別信徒世帯の変遷
- 4 1 各宗教施設の戦災・復興状況
- 4 2 西宮球場催物一覧
- 5 1 津和野町への年別および月別訪問観光客数の推移
- 5 2 津和野の主要観光スポット
- 5 3 津和野の主な年間行事
- 5 4 浦上キリシタンの流配状況

## 緒論

---

本論文は、題目『日本における宗教と空間、社会をめぐる地理学的研究』とあるように、宗教と空間および社会との関係について地理学的研究を行うことを目的としている。とりわけ空間や場所への関心を中心とする地理学という学問的特性ゆえに、空間と社会との関係における宗教的要素の探求に主眼があるといえる。宗教を地理学的に分析するということはどういうことであるのかを説明するために、整理すべきポイントが二つある。一つには、宗教の定義の問題であり、もう一点は宗教と空間、社会の関係のとらえ方の問題である。

宗教を扱った研究は、実にさまざまな分野で行われてきている。宗教学はもちろんのこと、神学や社会学や人類学、歴史学など人文科学において宗教は重要な研究対象となっている。それら共通の問題として、宗教を研究対象として取り上げるために、自らが依拠する学問母体に関わらず、宗教をいかにとらえるかという仮説的な宗教の定義が必要となってくる。それは社会学のデュルケムによって、「宗教的現象をとりあつかうのだから、まず宗教的事実についての定義から出発しなければならない。われわれは宗教的事実といったが、宗教とはいわない。というのは、宗教とは宗教的現象の全体であって、全体は部分の後においてしか定義されることはできないからである」<sup>1)</sup>との指摘によってすでに示されている。

宗教地理学に重要な展望を示したソーファーは、「(宗教とは)信仰と礼拝の体系、すなわち……制度化された聖なる信念と儀礼と社会的行為の体系である」<sup>2)</sup>という定義に依拠し、「組織化された宗教体系と、文化体系によって形造られた制度化された宗教行動」<sup>3)</sup>をもって、それらが空間的に、景観上にあるいは社会との関係のなかで相互に関連しあっているのかを問う。それによって宗教を地理学の研究対象とするとことができると提言している。この地理学の研究対象としての宗教のとらえ方は、現在もなお有効なものとされる。宗教学者の岸本英夫は、「目に見えない神が実在するかどうかという問題と、人が神の実在について、どのような思想をもっているかという問題」<sup>4)</sup>とがそれぞれもつ性格の違いを指摘し、両者間の差異を明確に認識する重要性を主張する。すなわち、神が実際にいるの

<sup>1)</sup> デュルケーム「宗教現象の定義」(小関藤一郎編訳『デュルケーム宗教社会学論集』行路社、1983), 60頁。

<sup>2)</sup> Springfield, 'Mass', Webster's Third New International Dictionary, G. & C. Merriam Company, 1961.

<sup>3)</sup> ソーファー,D. E.(徳久球雄・久保田圭伍・生野善應訳)『宗教地理学』大明堂, 1971, 1頁。

<sup>4)</sup> 岸本英夫「宗教学の紹介」(文部省調査局宗務課『宗教の定義をめぐる諸問題』文部省調査局宗務課, 1961), 2頁。

かどうかはわからないというのが宗教の起点ともいえるのであって、それよりも人が神の存在に対して、それぞれの思想をもつことが人間のいとなみに含まれるひとつの現象であるということから、宗教が研究の対象としてなりえるのである。同様に、「宗教体験」もまた、それ自体は個人的な信仰に基づく心のなかの問題であるが、その信仰にともなって生じる行為やさまざまな実践もまた人のいとなみのひとつであり、研究対象の範疇に含まれるものとなるだろう。

研究対象としての宗教については、その定義を大きく3つに類型化するなかで説明されている<sup>5)</sup>。ひとつには、神の觀念を中心とした宗教規定である。第2に、人間の情緒的経験を中心とした宗教の規定である。そして第3の類型として、「人間の生活を中心として、宗教をとらえようとする立場」<sup>6)</sup>である。現在はこの第3の類型に基づき研究が行われていると言える。

まず、ひとつめの神觀念に基づく定義であるが、つまりは人間を支配する絶対的で超人的な特性の存在、力、神の存在に基盤をもつものを宗教と考えるものである。しかしながら、その問題点としては絶対的「神」が存在しないもの、アニミズムや現代の世俗化されたなかでの宗教的なもの、さらには仏教なども含まれるが、それらを規定することが困難となることである。神の觀念が宗教的現象の中心であるとしても、宗教をより正確にとらえるためには、その神の觀念そのものの定義が再び必要となる。すなわち、神の觀念を宗教定義の基礎としてとらえることが困難であり、むしろ人びとのいとなみとしての宗教においては二次的側面であることが示されることとなる<sup>7)</sup>。また、諸宗教における宗教的実践にあらわれているように神と人間の関係はたびたび対等関係になる。例えば、それはさまざまな儀礼を通した神々の人間への恩恵と人間の供犠による神の存続の関係にあらわれている。

次に、人間の情緒的経験を重視した定義である。マクス・ミュラーは次のように述べている。宗教とは、「すべての歴史的言語形態から独立して話す能力が存在するように、すべての歴史的宗教から独立して、人間のなかに信仰の能力が存在し、…（中略）…心的能力あるいは資質を意味する。そして、心的能力は感覚および理性から独立して、いや感覚および理性にもかかわらず、種々の名称の下に、そしてさまざまな見せかけの下に人をして無限なるものを理解することを可能にするのである。その能力がなければ、宗教は言うまでもなく、偶像および呪術の最も低い崇拜でさえ可能ではないであろう。そして、もしも我々が注意深く耳を傾けようとすれば、我々は精神のうめき声、人知をもって考えられな

5) 前掲4)8-9頁。

6) 前掲4)9頁。

7) 前掲1)74頁。

いものを考え、言語に絶してものを言葉で表現しようとする苦闘、無限なるものへのあこがれ、神への愛をすべての宗教のなかに聞くことができるのである」<sup>8)</sup>と。たしかに、宗教は人と神あるいはそれに類似する「何か」との関係のうえに成り立ち、宗教的体験として神々しさや、神聖さ、畏敬といった特徴的な情緒経験が生じるものといえる。しかし、そうした経験があらゆる宗教的場面に常に生まれるものとは断言することはできないであろうし、またそれらに起因してのみ宗教的行動が生じるとはいえないだろう。したがって、この情緒的経験は宗教的な行為に含まれるものひとつにすぎないこととなる。これを宗教的な空間あるいは場所の文脈において読み直すならば、宗教的場所に対し、人びとは神々しさや、神聖さ、畏敬といった特徴的な感覚をもちうるが、それはその場所の固有性とは別に、本質的にその場所が聖なる場所という前提のなかで語られるという問題点を指摘することができる。その経験自体を絶対的ものなかで説明することとなることに対しても批判が生じることは想像に難くない。聖なる場所と人が感じられるのは、宗教的な「人のいとなみ」が介在することによって場所の神聖性が顕れるものと考えられるからである。そして、この考え方方が第3の定義へと接続していく。つまり、文化現象として宗教をとらえ研究対象とするべきであるという視点である。

ここでいう文化現象とは、「社会性を備えた人間のいとなみと、そのいとなみの結果としてつくり出されたもの」<sup>9)</sup>であり、すなわち文化現象そのものが社会性を備えるものといえる。この論の展開は、デュルケムが唱えた宗教現象の定義に大きく影響を受けていることがわかる。宗教とはまさに社会という集合的状態の性質のものであり、社会の個人に優越する力ゆえのものであると主張するデュルケムは、その義務性に注目する。宗教共同体の構成員は、共同の信仰によって結びついているわけであるが、その結びつきが意味することは、その信仰を守るべきであるという義務を社会（共同体）から常に要請されているのである<sup>10)</sup>。これを、義務的信仰とよんでいるが、それは義務的な行事とは全く別のものであることのべている。両者は義務的である点で共通であるが、前者は「ある種の表象を強制」するが、後者は「ある種の行為を強制」するものであり、両者の間には、表象的機能と行動的あるいは実践的機能という異なる次元の義務となる。そして、「義務的な信仰と同時にこの信仰において与えられる対象に関する諸行事をあわせて、宗教的現象」<sup>11)</sup>とするのである。この義務が要請される上で、道徳的権威が必要となるとし、それゆえに宗教＝社会という図式でデュルケムは説明するのである。したがって、「われわれの定義の必然的帰結として、宗教は個人的感情ではなく、集合的精神の状態を起源とするもので、後

8) マクス・ミュラー（湯田豊監修・塙田貫康訳）『宗教学入門』晃洋書房、1990、12-13頁。

9) 前掲4) 15頁。

10) 前掲1) 79-80頁。

11) 前掲1) 83頁。

者，集合的精神の状態とともに変化するものである」<sup>12)</sup>と結論付けられるわけである。つまりは，宗教が文化的現象のひとつとしてとらえるということは，文化が本来社会性を帯びたものであり，社会関係のなかにある人びとのいとなみと，そのいとなみの結果として生産，再生産されるものとの相互作用の過程そのものとしてとらえる必要性を意味するのであるといえよう。

このように，デュルケムの見解においては，宗教とはまさに社会という集合的状態の性質のものであり，個人に対する社会の優越性ゆえの現象であり，聖なるものとは道徳的義務という社会的側面のなかでとらえられる。それゆえに，宗教の社会性を問う可能性も示唆されるわけであるが，地理学という学問的関心の中心が空間，場所，景観にあることや，1990年代以降を中心に人文・社会科学の諸分野における空間への関心の高まりに鑑みると，宗教と空間の関係および空間と社会との関係における宗教的要素の関わりへより注視することが重要であると主張することができるだろう。しかしながら，空間科学としての地理学においても，従来の宗教地理学がどれだけこの問題に対して真摯な対応をしてきたのか，また研究方法を確立してきたのかという点においては非常に疑問を呈せざるを得ない状況ともいえる。したがって，宗教地理学や宗教を取り上げた諸地理学研究の動向について，とくに近代地理学以降を中心としてその見取り図を示す必要に迫られているようと思われる。その上で，今後の宗教地理学の課題や方向性を改めて提示することができるであろう。この課題については，第1章において詳細に対応することにするが，まずこの問題に取り組む際に，宗教と空間や場所についての重要な言及についてここで取り上げることにする。それは，聖なる空間をめぐる議論である。聖なる空間・場所のとらえ方に大きく2つの視点に分類するとされ，その分類にそって整理をすすめる<sup>13)</sup>。

どのような力の顯現(クラトファニー)も，どんな聖の顯現(ヒエロファニー)も，ともに，それが顯現した場を変容させてしまう。すなわち，それまで俗的空間であつたものが，聖なる空間に昇格するのである。<sup>14)</sup>

これは，宗教学者であるエリアーデの言葉だが，聖なる空間とは，「人間が選択するもの」ではなく，聖なるものがその場所を聖別化し，それを人間に「発見される」だけであるという。必ずしも「聖なるもの=宗教」ではないものの，狭義の意味での聖なるもの，本稿

<sup>12)</sup> 前掲1) 86頁。

<sup>13)</sup> 中川正「聖地とは何か」地理48-11, 2003, 8-13頁。

<sup>14)</sup> ミルチャ・エリアーデ(久米博訳)「聖なる空間-寺院，宮殿，「世界の中心」」(『エリアーデ著作集第3巻 聖なる空間と時間 宗教学概論3』せりか書房, 1974), 57頁。

においては組織化・制度化された宗教に絞ってみていくが、聖地といったような場所は、聖なる性質をみずから顯す場所であるということになる。つまり、ヒエロファニー、「聖なるものとは力であり究極的にはとりもなおさず実在そのものを意味する」<sup>15)</sup>のである。しかしながら、この視点は宗教と場所との関係のなかでとらえるならば、神聖なるものの実在を前提とし、神聖なものがある場所においてどのように存在しているのかという本質主義的な問題意識であると指摘される。もう少し、彼の主張を詳しく整理してみると、聖なるものの定義はまずそれが俗なるものの対称であるということから始められる。聖なる空間と俗なる空間の対照関係は「俗なる空間である無限で均質なものをとする俗なる空間に「一つの絶対的な 固定点、一つの 中心 が聖体示現によって」<sup>16)</sup>表出するとされる。そのため、「人間には聖なる場所を勝手に選ぶことは許されないのであって、ただひたすら探し求め、神秘な徵表の力を借りてそれを見出すことが許されるだけである」<sup>17)</sup>と主張する。つまり、俗なる空間がカオス（混沌）であり、聖なる空間はそのカオスなる空間のなかにある秩序付けられたコスモス（宇宙）と位置づけられるのである。この解釈による聖なる空間の認識は、上述の宗教現象の定義すでに指摘してきたように、絶対的な超人の何ものかを前提としている点で批判されるが、神と人との関係のなかで、人びとがその存在にとの関係において行うさまざまな実践（カオスをコスモス化する人の行為として<sup>18)</sup>）を認めしており、ただ本質主義的であるという批判にとどめることには再考すべき部分があるようと思われる。ここで指摘したいことは、神と結びつく場の実在性をめぐり議論するものではなく、宗教を地理学の研究対象として取り上げること、宗教とは何であるのかという理解へ貢献するためにはどのように宗教をとらえるべきかを問題にしているということである。エリアーデも、その「宗教的体験には、経済的・文化的ならびに社会的相違、一言でいえば、歴史に基づいて説明される差異がある」<sup>19)</sup>と言及しており、その差異が生じる場や過程に存在する対立や競合、調整といった人びとのいとなみの可能性を完全に否定していたわけではないのである。そこで、もうひとつの聖なる場所をとらえる立場として構造主義的視点による聖なるもの・場所への言及があげられよう。

リーチの主張に従えば、聖地とは「人間がつくった世界の象徴的秩序化」<sup>20)</sup>のひとつであるとしている。そして、リーチは聖と俗の境界に注目し、「ある種の事物や行為を他のものから区別してひとつの組に分類するため、われわれは象徴を用いるが、その際、「自然の

<sup>15)</sup> ミルチャ・エリアーデ（風間敏夫訳）『聖と俗』法政大学出版局、1993（初版 1969），5 頁。

<sup>16)</sup> 前掲 15) 13 頁。

<sup>17)</sup> 前掲 15) 20 頁。

<sup>18)</sup> ミルチャ・エリアーデ「聖なる空間と世界の浄化」（前掲 15)), 12-58 頁。

<sup>19)</sup> 前掲 15) 10 頁。

<sup>20)</sup> リーチ, E(青木保・宮坂敬造訳)『文化とコミュニケーション』紀伊國屋書店、1981，71 頁。

まま」の状態にあってはもともと切れ目のない連続体である場のさなかに、われわれは人工的な境界をあれこれと割りだしている」とした。つまり聖なるものとは、よりもなおさず存在するのではなく、社会的時間や空間の文節化のなかで象徴として存在するものとなる。リーチは、その境界性に注目し聖なるものの構造を説明する。日常／非日常、時間的限定性／無時間性、明晰分明な範疇／曖昧不分明な範疇、中心／周縁、俗／聖の二項対立を示し、ある2つの日常的状態の交わる不分明な領域を「聖なるもの」であるとする。そのひとつの例としては、子どもという領域から大人という領域へ移行するその間の曖昧な領域であり、そこでは成人式という儀礼が行われることになるのである。そしてこの通過儀礼が行われる過程は、俗的な日常の領域から分離儀礼により離脱し非日常的領域すなわち聖なる領域に入り、統合儀礼により俗なる日常領域へともどるものとしてとらえられるのである。聖地をめざす信仰者の巡礼もまた、聖なる経験を求める行動である、それは時間的・空間的に日常から非日常へと移行する構造をなしているといえよう。そして、構築主義的立場に立つならば、聖なるもの真髄を問うのではなく、この聖なるもの、象徴的なものとして区分する境界というものが生み出されていくそのプロセスを問うのであり、そのプロセス自体が文化であるという理解となる。これは、デュルケムが宗教現象そのものが社会であること、つまりは宗教現象が社会的に作り出されると主張したことつながっていくものとして理解することができるのである。以上の二つの視点が、聖なる空間をめぐる議論の流れを形成してきたものである。

さて、宗教現象をいかなる定義のもとでとらえるかについて、聖なる空間をめぐる二つの解釈を取り上げ説明してきたが、では具体的に地理学的に分析を進めていく際に、次に宗教とはどのような構成要素からなるものであるのかが問題となってくる。宗教の構造、すなわち宗教という文化現象を構成する基本的要素を把握することは、宗教を科学的研究において扱う際、宗教学においてのみ必要であるものではなく、地理学が宗教を扱うにあたっても、その対象を明確にとらえることを意味するだろう。そして、宗教の基本的構造は、教義、儀礼、集団、経験という4つの構成要素の関連性によって成立していると考えられる<sup>21)</sup>。

ひとつめの要素にあげた教義は、神の存在の根拠や、その宗教がもつ倫理観、世界觀を規定するものである。それゆえ信仰者の行動様式や道徳的觀念に深く影響を及ぼすものといえる。儀礼は、教義によって規定された内容、当該宗教の意図・目的を具現化する象徴的行為といえる。また象徴的行為が行われる空間も宗教現象の重要な一側面となる。さらに宗教的諸実践に含まれる意味にも聖俗両領域から注意を向ける必要があるだろう。次の

---

<sup>21)</sup> 小口偉一編『宗教学入門』弘文堂、1981。

集団とは、教義を共有する共同体であり、儀礼行為を実行する人びとの集まりであって、自らが属する宗教の担う存在である。4つの経験は、上述の通り、神と人との関わりにおける情緒的な問題である神秘的経験や教義によって規定される領域を表象化する行為に基づく経験を指すものといえよう。ほぼ同義的単語として体験もあり、宗教的体験は経験に比べてより客体との関係のなかで主体的・主観的もの、個人の身体を基盤として直感的なものとしてとらえられる。経験も体験と同様に、主体的・主観的領域にあるものであるが、それ自体がすでにある程度対象化された次元で認識されるものとされる<sup>22)</sup>。当然のことながらこれら4要素からなる宗教の構造が静態ではなく、社会的状況の変化にともない常にそれぞれの要素が相互に影響を及ぼしあい形成・変容していく過程のなかで宗教の構造も流動的様相を示すことになる。これらの基本的要素によって構成される宗教を、先述した宗教の定義に基づく問題意識にたち、空間、社会との関係において考えるならば、制度化・体系化された教義や儀礼、集団、さらに個人の宗教的体験もまた、多様な社会的関係のなかで常に生産・再生産のプロセスにあるといえよう。またこのプロセスは、ある宗教と対外の社会的関係における相互関係、つまりは統合や分離、競合、調停のみを意味するものではなく、同一の宗教内における集団内の人びとの関係内に存在するものである。そして集団のこうした政治性が、教義や儀礼、集団、経験といった構成要素の連関した絶え間ない変化を生み出すのである。

以上のように、「宗教とは何であるのか」という問題を明らかにするためには、「宗教」を形成するそれら諸現象を多面的にとらえていく作業が必要となる。つまり、宗教とは諸現象の集合体であるといえる。エリアーデ、リーチらの「聖なるもの」の議論、近年隆盛をみる空間論と、宗教地理学との統合させるような理論的な枠組みの整理を行う必要がいまだ課題として残されている。この理論的な整理を深化させることができることが現在の宗教地理学においても重要な点であると考える。そして、宗教的世界觀のような抽象的観念がいかに物質的に表象化されているのかを明らかにすることも重要ではあり、さらには本論文で主張するように、その表象化される「過程」に焦点をあてることも必要とされる。すなわち、抽象的観念の表象化過程にひそむ多様な人びとの関わり、社会における人々の多様な宗教的ないとなみのダイナミクスを明らかにすることを目的とする。

宗教に関する研究が諸分野において行われており、宗教と空間、場所、社会集団、アイデンティティをめぐる議論が共通の課題として掲げられている<sup>23)</sup>。しかしながら地理学に

<sup>22)</sup> 松本皓一「宗教体験」(小口偉一編『宗教学入門』弘文堂、1981)、41-73頁。

<sup>23)</sup> Brace, Catherine., Bailey, Adrian R., and Harvey, David C., 'Religion, place and space: a framework for investigating historical geographies of religious identities and communities', *Progress in human geography*, 30-1, 2006, pp. 28-43.

おいては、必ずしも諸分野をまたがっておきている議論との交わりが十分になされているとはいえないという重大な深刻的状況にあるためでもある。それゆえに、本稿では宗教と空間、場所、社会、アイデンティティをめぐる研究課題をふまえた地理学的視点からの分析を行うことがより重要であると考えるのである。

こうした問題意識から、本論文では主に以下の4点に注目して分析をすすめる。

第1に、宗教の分布という空間的構造に関する分析である。宗教が伝播していく際には、布教の行動が重要な要素となる。また、ひとつの信仰が地域に浸透していく過程においては、これまで述べてきたことを踏まえると、他の信仰との関係も分布形成に大きく影響するものといえる。これらの点に焦点を当てて、宗教の分布の形成される過程を明らかにしながら空間構造の把握を試みる。

第2に宗教の受容の問題である。多様な人びとの集まりである社会のなかで宗教がどのように受け入れられていくのか、あるいは排除されていくのかという問題である。その過程における政治的・社会的・文化的背景との関係や布教する側、さらには受容する側の人びとの社会的関係のなかでどのように宗教が受容されていくのかということをとりあげる。そして第1の宗教の空間構造の分析に対してより受容する側の地域社会の動向に重点をおく。

第3に宗教と国家との関係についてとりあげる。宗教がもつとされる諸集団の紐帯の強化や差異化機能を、政治的・イデオロギー的に利用する場面に注目し、宗教的儀礼が国家的儀礼としてどのように創出され、いかなる社会的影響を及ぼすのかを明らかにすることである。

そして第4に、宗教的場所の構築性について考察する。聖なる空間として信仰者が集う巡礼地が、多様な集団がその場所のもつ固有の記憶を共有する装置として整備されていく過程に注目し、聖なる場所の形成と宗教集団内部の多様性との関係を明らかにしたい。以下に、章構成の概略を提示し、これらの問題意識と本論で取り上げる事例の意図を示す。

まず第1章において宗教地理学の動向を追うことにする。主としてソーファーによる提唱以降を取り上げるが、なかでも1990年代以降のKongやParkらによって提示された宗教地理学の新たな展望を取り上げながら、宗教地理学における研究領域をいくつかに分類しその概観を明らかにする。そのうえで、本稿で扱う3つの視点に関連した項目での動向を整理し、宗教と社会・空間の問題として考察をすすめていく視点、課題、問題設定をより具体的に示したい。

第2章では、宗教の空間構造について言及する。ここでは山岳信仰を対象として、信仰

の空間的広がりに関して考察を行う。そこでは、信仰の分布構造が形成されるプロセスを布教者に焦点をあてて明らかにしたうえで、従来の信仰圏研究で示された同心円構造の問題点を指摘し、分布構造の地域性・多様性について言及する。

第3章では、地域社会において新たに宗教が受容される際に、そこに存在するさまざまな社会関係がどのように影響を及ぼすかを解明した。つまり第2章が布教する側を中心とした考察であるのに対して、本章は、京都府旧佐賀村の集団改宗を取り上げ、受容する側の社会的関係に注目した。地縁的関係、血縁的関係と改宗パターンの関連性を検討する。社会的諸集団と宗教との関係について言及し、宗教のもつ連帯性の強化や他者との差異化機能、あるいは社会的関係が宗教を及ぼす影響を示す。また、新たな宗教の受容が宗教的行為にいかに影響を及ぼしているのかという問題にも着目する。そのことにより、儀礼や装置 教義によって規定される宗規体系において成文化されたものの分析を通して、空間、社会の宗教的構造を明らかにすることが可能となろう。

第4章では、宗教と国家との関係について言及する。このテーマでは、カトリックが1949年に日本を縦断しながら展開したザビエル渡来400年祭を事例とする。焦点となるのは、この行事が、非継続的・一時的な宗教的行事であり宗教的空间の創出であるという点である。そうした非日常的な時間・空間が当時の人びとの間でいかなる意味をもち、どのように認知されたのかを探る。GHQ統治下において、宗教政策とキリスト教支援により精神的側面での支配として日本のキリスト教化があった。一方で、カトリック側においては、ザビエル祭を通して、日本各地での「奇跡の右腕」の顯示・行列を行ない、記念碑の建立や、教会の復興といった宗教施設建設の契機となり、宗教的拠点の空間的な拡大・整備を行っている。つまり、宗教的行事・儀礼の空間が、宗教独自の宗教的世界観の表現であるとともに、宗教のもつ象徴性と国家形成における象徴的な利用という双方向的関係が読み取れよう。

第5章では、構築主義的立場に立ち、津和野のキリシタン巡礼地を取り上げ、多様な主体によりどのように巡礼地として形成・整備されていくかを、明治初期のキリシタン迫害からの歴史的変遷のなかで、巡礼地としてのいかに展開していくかをとらえる。

キリシタン流刑地としての津和野は、明治維新前後の国家神道の形成と関わりの深い場所であり、その津和野においてキリシタンの拷問が行われた。殉教地乙女峠にまつわるさまざまなモチーフ(拷問・殉教・マリア出現など)となる歴史的出来事が生じる。その後、カトリック司祭による殉教地津和野の調査によって、殉教地乙女峠が「発見」され、巡礼地としての整備、つまりはシンボル化の過程がみられる。その過程において、カトリック信徒による巡礼行動を生み出し、その巡礼者の増大、巡礼地としてひろく認知されることになる。この巡礼という行動が巡礼地という場所を維持する構造に変化を生じさせると考えられる。つまり、巡礼地の形成プロセスとそこにかかる信仰者の拡大プロセスの相互作用的関係について考察するものである。そして巡礼地の発見から整備の主体となった神

父や地元の信者らの活動とその地域外の信仰者の巡礼という宗教的行為との関係を巡礼地という場所は内包しているといえるのである。

以上のように、本論ではこれら全5章において、空間形成のなかでも宗教という要素を重視し、それと社会との相互方向的な関係に焦点をあてて考察していくのだが、そこでは、宗教的空間が形成される過程において、そこに影響を及ぼす宗教それ自体を人びとがいかに認識し、利用しているのか、一方で、諸集団のせめぎあいのなかで形成された空間が人びとに対してどのような働きかけをなしているのかが問題として提起されることとなる。各章はそれぞれが完結した論文ではあるが、完全に別個のかたちでこの問題に対して考察が行われているものではなく、宗教の諸側面をとらえながらこの問題に取り組むことを意図するものであり、各章もまた連関したものとして本論は成り立っているといえる。

では、第1章の宗教地理学の動向と課題から、「日本における宗教と空間、社会」に関して考察をすすめていくことにする。

## 第1章

---

# 地理学における宗教研究の動向と展望

## - 宗教と空間・社会をめぐって -

## はじめに

本章は、地理学において宗教を対象とした研究を発展させるために、宗教と空間、社会をめぐる議論の展望を提示するために、概略的に従来の研究の動向を示し本稿の研究課題を述べることを目的とする。

緒論すでに述べたように、ソーファーは、宗教現象が本来人間の宗教体験に基づくものであるため、個人の宗教体験のような空間的に直接の顕れをもたない現象は、地理学の対象として扱うことの難しさを指摘する。そして、宗教地理学では、「信仰内容ではなく、観察される意味で宗教をもっている状態、もしくは宗教慣行への参加状態」<sup>1)</sup>を対象とするとした。すなわち、宗教（宗教的）現象を、一定の広がりをもつ文化体系や儀礼体系、あるいは宗教の制度や組織をとおして制度化・組織化された人びとの宗教的ないとなみとしてとりあつかうことが可能といえる。ここに、近年の空間論との関連性のなかでとらえるならば、制度や組織、あるいは共同体といったものが、秩序や法則としてあらかじめ存在していたものとする前提に立つのではなく、場所や人、意味やイメージが相互に絡み合いながら空間が生産、再生産される過程において宗教的因素に注目することが本稿の中心的な視点となるだろう。

地理学とくに文化地理学においては、伝統的にさまざまな地域の文化に関心を寄せてきたが、宗教は文化の主要な決定因子であるという事実を否定することはなかった。De Blij and Mullerによると、宗教は、「文化の基礎をなし、社会的構造における重要な要素」<sup>2)</sup>であるという。従来の研究でも、宗教が空間や場所にどのような影響を及ぼすかといったことに注意・関心が向けられてきたが、それらは一方的なアプローチであるという点で批判され、宗教と社会、あるいは空間や場所、景観が形成される過程における宗教との関係を十分に明らかにできていないといえる。そのようななかで、文化論的転回や空間論的転回という人文・社会科学においておこったパラダイムの転換による新たな研究項目の発生に影響を受け、宗教地理学においては Kong<sup>3)</sup>や Park<sup>4)</sup>らの主張を契機として、1990年

<sup>1)</sup> ソーファー、D（徳久球雄・久保田圭伍・生野善應訳）『宗教地理学』大明堂、1971、1頁。

<sup>2)</sup> de Blij, Harm J. and Muller Peter O., Human geography: culture, society, and space 3/E, John Wiley & Sons, 1986, p. 181.

<sup>3)</sup> Kong, L., 'Geography and religion: trends and prospects, Progress in human geography, 14, 1990, pp. 355-371.

<sup>4)</sup> Park, Chris C., Sacred world: An introduction to Geography and Religion.

代に入ってからの新たな視点，すなわち空間形成をめぐる宗教と社会との相互方向的な関係へのアプローチが焦点のひとつとなってきた。そこでは，宗教的空間が形成される過程において，そこに影響を及ぼす宗教それ自体を人びとがいかに認識し利用しているのか，一方で，諸集団のせめぎあいのなかで形成された空間が人びとに対してどのような働きかけをなしているのかが問題として提起されることとなる。このことは，文化をめぐる議論のなかで，文化をそれぞれの集団の行動様式を決定付けるような信念体系としてのみとらえる立場から，その文化自体も人間が多様な形で関わり，形成されているものとする視点へと転換したことと関連するのである。社会と空間の構造の理解のために，人びとの宗教的ないとなみに注目する宗教地理学からのアプローチは，それゆえ重要な視点を示すことができるといえよう。

しかしながら，宗教と地理学の関係もまた多様であり，宗教と社会との関係や宗教的空间，あるいは聖なる場所を理解するために，宗教を扱う地理学の動向を整理する必要がある。そこで，本章では，宗教と地理学の諸関係を概観し，そのうえで主に戦後の宗教地理学の動向を概観し，従来行われてきた研究テーマの類型について再検討を加え，本稿の関心の中心となっている日本における宗教と空間，社会に関する研究テーマの課題と展望を提示することを目的とする。

## 地理学と宗教

### (1) 近代地理学の確立まで

地理学と宗教との関係は古く，Kong によると<sup>5)</sup>，それは古代ギリシャの地理学の起源にまで遡り，場所や空間を描く世界地図などの作成のなかで，いかに宗教的な世界が投影されているかを指摘する。中世においても地理学は，とくにヨーロッパにおいては中世キリスト教的世界觀との結びつきのなかで展開してきた。つまりそこでは宗教現象を解明する科学としての地理学ではなく，宗教の布教のためのひとつの手段として，それぞれの教義・神学に基づく世界觀のなかで地理学が展開されていたのである。また，日本においても行基図や中・近世の日本図，參詣曼荼羅図，さらには仏教的世界觀が描かれている五天竺図などにおいて描かれていることは，宗教的世界觀と現実世界との結びつきのなかで作り出

---

Routledge, 1994, pp. 1-30.

<sup>5)</sup> 前掲 3) pp. 356-357.

されてきた空間や場所の表現・理解といえるだろう。そして、近世の日本図や世界図においては、イエズス会士であるマテオ・リッチが作成した坤輿万国全図に代表される西洋による地図が色濃く影響していることが指摘される<sup>6)</sup>。その背景には、キリスト教の世界観を表現し信仰者に示すための道具であったと同時に、キリスト教の布教活動と地理学との関係があげられ、キリスト教の空間的な拡大を地図化することによって、その領域を可視化していく過程でもあった。非キリスト教地域における他宗教の記述や勢力分布の地図化は、他宗教を理解するための調査・作業であるが、それは大航海時代という植民地拡大とも結びついたキリスト教の布教戦略を計画するための調査であり、布教活動の目標達成の手段としての地理学であって、宗教と地理学はつねに深く結びついてきたのである。こうした結びつきは、20世紀に入ってもなお継承されてきたと指摘されているが<sup>7)</sup>、その傾向は18世紀頃から強くなった。環境神学的見解は、人間を取り巻くあらゆる環境は神によって創造され、秩序化された世界であるとみなしてきた。19世紀にはいり、フンボルト(Humboldt, A.)、リッター(Ritter, K.)によって科学的学問として近代地理学が成立することになったが、この近代地理学の確立以降においても、とくにリッターはキリスト教的世界観を地球環境の形成の要素として記述していた<sup>8)</sup>。

その次に地理学の展開に強く影響を及ぼしたのが、環境決定論的思潮である。1859年にダーウィン(Darwin, C.)の『種の起源』は発刊されたが、その年は近代地理学を確立したフンボルトとリッターの没年でもあった。ダーウィニズムの成立は近代地理学の展開に新たな局面の成立を促した。ダーウィニズムの影響を受けた代表的な地理学者としてはラツツェル(Ratzel, F.)やセンブル(Semple, E.)、ハンチントン(Huntington, E.)といった研究者があげられ、人類を地表の産物として捉えた<sup>9)</sup>。彼らは、人びとの宗教的行為・実践・観念は、その宗教が創出された場所の環境によって影響されることを主張してきた。一方で、これらと全く反対の立場があらわれる。

その重要な転換期は、環境決定論に異議を唱えた学派の誕生である<sup>10)</sup>。それは、フランス地理学の祖と称されるポール・ヴィダル・ドゥ・ラ・ブランシュ(Vidal de la Blache, P.)の社会的・歴史的要因をより重視するアプローチを、フランスの歴史学者であり地理学者のリュシアン・フェーブル(Febvre, L.)が「可能論」と位置づけたことによる<sup>11)</sup>。可能論の立場にたつ地理学者は、人間を能動的行為者とみなし、「環境を利用する仕方の一連の

6) 応地利明『絵地図の世界像』岩波新書、1996。

7) 前掲3) p. 357.

8) 高橋正「近代地理学の成立と展開」(坂本英夫・高橋正・木村辰男編著『基礎地理学』大明堂、1994), 5-10頁。

9) Johnston, R.J. (立岡裕士訳)『現代地理学の潮流(上) 戦後の米・英人文地理学説史』地人書房、1997, 74頁。

10) 前掲3) p.358.

11) 前掲8) 7頁。

選択肢を知覚し、その中から自分たちの文化的傾向に最もかなったものを選択する」<sup>12)</sup>ものとした。ただし、可能論者らは、完全に人間の能動性のみを主張したのではなく、環境が人間の諸活動を限定的にする作用力を認めている。1960年代まで、この環境決定論と環境可能論の議論は続いていたが、環境へのアプローチは、その後も環境認知という第3の立場が生まれるなど、地理学において今なお重要な視点のひとつである。

一方で、20世紀初頭からは、二つの立場の環境論をめぐる論争が継続されるとともに、景観への関心が高まり、環境論から景観論へと研究領域が転換していくこととなる。文化地理学のなかでは、景観を最も研究対象として重視するサウアーのバークレー学派が主流となっていた。その流れは宗教を扱う多くの研究において、宗教が環境や景観の変化に対して働く作用に注目した。そのため、宗教のもつ力が人びとの環境認識や景観形成・変化に対する動機となっていることを明らかにする研究に収斂していくこととなった。つまり、宗教はあくまでも景観の要素のひとつであり、景観上からのみの分析にとどまることとなる。もちろん、その後の景観論は、歴史の重視や形態のみを扱うのではなく、発生や機能を問う視点へと展開していくことで地理学における基本的研究アプローチのひとつとなっている。

同時代において、もう一人の言及すべき地理学者として、ヘットナー（Hettner, A.）があげられよう。ヘットナーが提唱した地理学的アプローチは、地域個性の記述を重視するものである。地理学は、学問的性質から、もとより帝国主義や商業的世界の拡大といった植民地化の動きと結びつきやすい傾向にあり、探検によって収集されたデータに基づいた各地の記述が行われてきていた。しかし、ヘットナーの地誌学重視の立場は、それよりも学問的専門性の追及において、地誌的研究の比較の集積から空間的差異を説明する空間科学として提唱されたものであるといえよう<sup>13)</sup>。つまり、地域という空間的差異は、地域固有の条件によって生じるものであって、その地域の個性を記述することが空間的差異に関する科学となるというものである<sup>14)</sup>。ヘットナーの立場は、アメリカにおいても採用されることとなり、1930年代終わりからヘットナーの立場を継承したハーツホーン（あるいはハートショーン；Hartshorne, R）によって広められ、20世紀前半において、「地誌＝地理学」という思潮が主流となっていたのである。しかし個性の比較から空間的差異を説明することは可能であっても、法則を追及するという科学としては限界であることが徐々に主張されることとなる。すなわち個性記述から共通性の抽出への転換である。それは1953年のシェーファー論文によってもたらされ、20世紀後半以降の新たな地理学の出発とされ

<sup>12)</sup> 前掲9) 75頁。

<sup>13)</sup> 前掲9) 69-74頁。

<sup>14)</sup> 野澤秀樹「地理学における空間の思想史」（水内俊雄編『空間の政治地理』朝倉書店、2005），157-158頁。

る<sup>15)</sup>。そこで次節において、新しい地理学の幕開け以降を現代地理学の動向としてとらえ概観・整理し、地理学における空間をめぐる思想的観点から 1990 年代以降の宗教地理学の新しい潮流へと向かう経緯を示した。

## ( 2 ) 現代地理学の動向

戦後の地理学における新たな論争として、まずシェーファー論文の発表から始まる。それは、ヘットナー・ハーツホーンの地誌（地域の個性記述）重視の系譜を例外主義として批判するものであった。シェーファーは、地域の個性のみの追求では、現実には存在する共通性から得られる法則を導き出すことができないと批判し、後の理論・計量地理学へと展開する法則性の追究こそが空間科学としての地理学であると主張した。すなわち、空間の科学・空間分析の科学を提唱し、規則性や法則性から空間的差異の説明を目指すものであり<sup>16)</sup>、フンボルト、リッターによる近代地理学確立のうちに、発展した科学としての地理学が目指すべきものは、空間的法則性の追究であると主張するものである。そして 1960 年代に、アングロサクソン諸国でこの計量地理学が主流となった。

1970 年代になると、計量地理学に対する批判が提出されるようになる。まず計量地理学内部からの反省と深化からの立場としては、人間の意思決定と空間的行動の要素を計量分析に組み入れることで、従来の計量的研究における「経済人」というモデル化された人間への批判を克服する試みがなされるようになった。つまり人間の環境認知（知覚）を取り込んだ分析アプローチが採用された。著名な研究として、イメージマップに始まり、現在ではメンタル・マップとして研究・分析が行われているものがあげられる。一般に知られるところでは、リンチの『都市のイメージ』<sup>17)</sup>やグールドとホワイトの『頭の中の地図：メンタル・マップ』<sup>18)</sup>などがある。またひとつ、同じく 1970 年前後から計量地理学アプローチにおける人間の不在に対するアンチテーゼとして、人間の主觀や意識、主体性を重視する人文（人間）主義地理学が確立した。確立とはいえ、決定的な分析方法の提示がなされたわけではない。この立場の最も重要な視点は、「場所」への注目といえるだろう。代表的な研究者としては、イーフー・トゥアン（Tuan, Y）をはじめとして、エドワード・レルフ（Relph, E）などがいる。人文主義地理学者は、人間は自らの主觀性・主体性をと

15) 前掲 9 ) 87-98 頁。

16) 前掲 14 ) 158 頁。

17) リンチ, K (丹下健三, 富田玲子訳)『都市のイメージ』岩波書店 1969。他に同 (東大 大谷研究室訳)『時間の中の都市』鹿島研究所出版会, 1974。

18) グールド, ホワイト (山本正三, 奥野隆史訳)『頭の中の地図：メンタル・マップ』朝 倉書店, 1981。

おして空間において生きていることの理解の必要性を主張するのである。トゥアンは、人間と空間の関係を、行動地理学における人間が環境・空間を認知（知覚）するだけではなく、経験によって空間が与えられるものとし<sup>19)</sup>、人間の情緒（感性）と場所との結びつき、人間の場所への愛着をトポフィリア<sup>20)</sup>と呼び提示した。また、レルフは画一化された都市景観に場所の喪失性（没場所性； placelessness）を見出した<sup>21)</sup>。人文主義地理学的アプローチにおいて場所の概念が重要であり、その場所は、均質なものではなく、人間の経験や感性との結びつきによって意味に充ちた空間なのである。人文主義地理学の主要な思想的根拠は、現象学である。いうまでもなく、「真理（ロゴス）」の実在性を前提とする世界の説明を追究してきた西洋の形而上学への批判の試みとして現象学は生まれた<sup>22)</sup>。ごく簡略化すると、フッサールの現象学では、客觀とされる「真理」についての判断を保留（エポケー）し、われわれ人間の意識・経験をとおした事物を世界として組み立てていこうとする。人文主義地理学者は、この思想を根拠として生活空間における人間の経験を保証する場所、「生きられた空間」の理解を提唱した<sup>23)</sup>。あらゆる生活空間内の人間の経験は、集合的経験のみならず個人的な経験を含むものであり<sup>24)</sup>、現代のグローバル化における「差異」への注目において、支配 被支配において重要な展望を示唆しているように思われる。ただ地理学における現象学的アプローチへの批判がないわけではなく、まずひとつには、フッサール現象学への批判は、「あらゆる実体をエポケーして、解体したかに見えながらも、あらゆる経験があらわれる場所（わたしたちの意識、そして生きた現在）が絶対的に前提されている」ことである<sup>25)</sup>。一方で、人文主義地理学者らがとらえる場所に対しては、「静態的に、あるいはノスタルジックで安定的に場所を捉えようとする」ことが、本質主義に陥りやすいという指摘がなされている<sup>26)</sup>。緒論でも述べたように、文化や伝統の本質主義的前提はすでに崩壊しており、今日においては、例えば宗教的空間を取り上げると、形成される過程において、そこに影響を及ぼす宗教それ自体を人々がいかに認識し、利用しているのか、一方で、諸集団のせめぎあいのなかで形成された空間が人々に対してどのような働きかけをなしているのかが問題として提起されることとなる。このことは、文化をめぐる議論のなかで、文化をそれぞれの集団の行動様式を決定付けるような信念体系として

19) トゥアン、Y『空間の経験 身体から都市へ』ちくま学芸文庫、1993。

20) トゥアン、Y『トポフィリア 人間と環境』せりか書房、1992。

21) レルフ、E『場所の現象学 没場所性を越えて』ちくま学芸文庫、1999。

22) 小阪修平「形而上学批判としての現代思想 その起源と展開」（小阪修平・竹田青嗣・志賀隆生・永澤哲・西研『わかりたいあなたのための現代思想・入門』JICC出版局、1990），10-38頁。

23) 前掲 14) 162-163 頁、および前掲 22) 25 頁。

24) 前掲 19) 180 頁。

25) 前掲 22) 26 頁。

26) 大城直樹「「場所の力」の理解へむけて 方法論的整理の試み」南太平洋海域調査研究報告 35、2001、7 頁。

のみとらえる立場から、その文化自体も人間が多様な形で関わり、形成されているものとする視点へと転換したことと関連するものといえよう。

この文化をめぐる議論とともにもうひとつ重要な問題が空間論的転回であるだろう。まず、人間の生活空間における行為の主体性は否定されるものではないが、人間の能動的行動によってのみ世界は説明されるものでもなく、社会的規範や制約といったいわゆる構造との関係について問うべきであるという主張から議論は展開していく<sup>27)</sup>。まずギデンズは構造化理論において、主体の行為と構造の相互作用的関係について、空間を媒介として理論化した。そこで空間あるいは場は、社会的統合とシステム統合を結合させる基盤、舞台としてとらえられている<sup>28)</sup>。次に、「社会的に生産された空間と社会との関係」<sup>29)</sup>の理論化が企図されるようになる。その手がかりとして、ルフェーブルが『空間の生産』で提示した三つの契機がもとめられる。すなわち、空間の実践；社会は、その空間的実践においてその空間を分泌する。空間の表象；表象・思考・設計の思惟された空間。表象の空間：イメージ・シンボルを介して人びとが空間に対して抱く生きられた空間、である<sup>30)</sup>。さらにこの提示された理論をグレゴリー（Gregory, D）によって図式化されている。この理論は、われわれ人間が生きる場所というものが、まさにさまざまな介在的プロセスによって構成されていることを我々に示唆するものであるだろう<sup>31)</sup>。この空間 社会の理論は、都市空間のなかで説明されるものであるかもしれない。しかしながら、宗教地理学においても、行為 - 構造、空間 - 社会の諸関係を考察する上で、有用なフレームワークとなる可能性を有しているのではないだろうか。つまり、空間と社会の弁証法的関係における社会を、構造化における社会システムを、宗教という単語に置換可能な関係にあることがそれを暗示しているように思われる<sup>32)</sup>。

このような 20 世紀後半以降の地理学の流れに沿って宗教地理学の動向をみると、後述する内容ではあるが、研究テーマの分類にその特性が見られる。一方で、1960 年代後半のソーファーの提言は、宗教地理学のその後の展開に大きな影響を及ぼすことになるものの、宗教地理学という領域での大きな展開は、1990 年代までみられることはなかった。1990 年代になり、宗教地理学への関心がにわかに増加しているように思われるが、そのなかでソーファーの提言は一定の評価を受けつつ、日本の宗教地理学、あるいは文化地理学の研究対象としての宗教に対して新しい視点の提言がなされることとなっていたのである。それが、宗教地理学の新たな展望<sup>33)</sup>として、「新しい」文化地理学の動向に沿う宗教研究の

27) 前掲 26) 5 頁。

28) 前掲 14) 165-166 頁。

29) 前掲 14) 166 頁。

30) ルフェーブル,H『空間の生産』青木書店, 2000。

31) 前掲 26) 8 頁。

32) 前掲 4) p. 23 頁。

33) 宗教地理学の動向については、前掲 3) によって詳細に述べられており、今後の宗教地

あり方を示した Kong<sup>34)</sup>や構造化理論を援用した Stump<sup>35)</sup>による研究などがあげられる<sup>36)</sup>。Kong は、宗教と空間との関係を解明することは、特定の空間が社会集団によって形成される過程の分析であるとし、宗教を空間形成に反映する社会的条件（民族、階級、ジェンダー）のひとつとしてとらえることを主張する。そして、聖なる空間の分析において、従来政治的なるものを排除してきたことを批判し、「聖なる空間の政治学」を提言した。宗教的空間というものは、人びとの生活空間と別次元に存在するのではなく、宗教現象もまた人びとのいとなみのひとつであることから、例えば聖なる空間をめぐる国家と教団・信者との霸権争いの場としてとらえることが可能であるという。つまり、最近の宗教地理学において、「相互作用」に注目することの必要性を主張している。

そして Stump は、宗教地理学の立場を、ひとつには、「世界や世界のなかに存在し人が属する場所に対する人間の知覚を形成するうえでの宗教の役割」に注目する研究であり、もうひとつを、「宗教それ自体以上に、社会や文化、環境との連関や影響に焦点をあてる研究」とし、このアプローチは、宗教を人間が創り出したものとみなし、人間と環境に関わるさまざまな要素との関連性のなかで宗教現象をとらえる視点へと発展するものという。本稿の研究は、後者の視点に重点をおくものであるが、宗教と他の社会的要素との相互作用関係にのみ注目するのではなく、聖なる空間を構築していく過程においては、宗教的行為の主体となる人間の認知も全く関わりのないものではないことには留意すべきであると考える。

序論で述べたように、宗教と空間、社会との関係を解明するうえでは、あらゆる現象、とりわけ本稿では宗教と空間、社会をめぐるなかで言及するならば、宗教という人びとの宗教的いとなみの集合体が、空間や場所、あるいは人びとの諸関係によって形成される社会に対して一方的に影響を及ぼすものでも、その反対のみの作用によって生じる現象でもないだろう。つまり双方向的関係に注意を払うことの必要性を指摘するのである。その指摘は、宗教と環境との関係を弁証法的関係としてとらえるものであり、上記の一方的な関係を重視する研究が、宗教現象を本質的にとらえることとはなりえないという認識に立

---

理学の指針となる論文のひとつといえよう。

<sup>34)</sup> 前掲 3) のほか以下のものがあげられる。Kong, L., 'Negotiating conceptions of 'sacred space': a case study of religious buildings in Singapore', *Transactions. New series / Institute of British Geographers*, 18, 342-358. Kong, L., 'Ideological hegemony and the political symbolism of religious buildings in Singapore', *Environment and Planning D: Society and Space*, 11, 23-45. Kong, L., 'Mapping 'new' geographies of religion: politics and poetics in modernity', *Progress in Human Geography*, 25, 211-233.

<sup>35)</sup> Stump, R.W., Boundaries of Faith: geographical perspectives on religious fundamentalism, Rowmans and Littlefield Publishers, 2000.

<sup>36)</sup> Kong および Stump の研究動向については、藤村健一「近年の英語圏における宗教の地理学的研究の動向 L・コンと R・W・スタンプを中心として」立命館地理学 16, 2004, 71-80 頁を参照されたい。

つものであるといえよう。この認識のもとに、宗教地理学の研究者であり、バークレー出身であるソーファーは、従来の一方向的研究の批判として、宗教地理学における統合の欠如を主張したのである<sup>37)</sup>。その欠如は、まさに地理学の一分野としての確立がなされていないことであり、研究の対象となる領域や方法論における共通認識の欠如であるといえよう。宗教地理学に関連する研究は広範な領域に認められるが、そうした研究が、必ずしも地理学とりわけ文化地理学の議論や空間をめぐる思想において文脈化されてこなかったためであるだろうし、また宗教学や社会学、文化人類学といった他分野の研究との懸隔は、序論で提示したような宗教の定義をめぐる議論を、宗教を扱う地理学がほとんどかえりみてこなかったことに起因していると考えられる。

## 日本の地理学における宗教研究

### (1) 研究テーマの分類

前章では、地理学と宗教との関係を概観し、戦後の地理学における空間思想の流れと従来の宗教地理学の課題を示してきたが、本章では地理学における宗教に関する事例研究の動向について整理したい。とくに、本論文の目的に関連する研究に関して重点的にレビューすることとなるが、その前に、簡単ではあるが従来の諸研究のテーマの分類について言及する。

Park は、宗教と空間、社会との関係のなかには、相互作用における無数の様態が存在していること、そして宗教がさまざまな点において人びとの行動に影響を与えていていることに言及し、こうした関係において、地理学者は、伝統的に人びとと環境をめぐる空間的パターンや分布、顕現に関心を寄せてきたことから、宗教地理学が宗教現象の解明に貢献できる項目を次のように分類している<sup>38)</sup>。

諸宗教の地理的分布：大まかな空間的尺度においても、宗教が人類の活動パターンに影響を及ぼす問題。

<sup>37)</sup> Sopher, David E., 'Geography and religions', *Progress in Human Geography*, 5-4, 1981, p. 510.

<sup>38)</sup> 前掲 4) pp. 2-7.

文化景観にみられる宗教の痕跡：特徴的でアイデンティティや特定の意味合いを与える宗教上の中枢や，シンボル，墓地など。

生活様式と商業における宗教の影響力：宗教はある行動を禁じたり，制限したり，助長することによって，多種多様な様式における空間パターンに影響を与える。

食物と野生動物に関する宗教上のタブー：農業景観にその影響があらわれることもあり，あるいは植物の伝播が宗教の伝播と結びついていることもある。

宗教と人口：婚姻制度や避妊，婚姻関係と身分制度など教義上の問題が，人口動態に大きく影響を及ぼす。

宗教・政治・紛争：複数の宗教やマイノリティの共存によって生じる政治的衝突（局地的・地域的・国家的レベル）

宗教と自然環境：環境論争において重要な要素は，環境に対する行動や態度の両方を決定する価値や世界観が担う役割である。

日本では，上記の，，が主流をなしているといえるが，より詳細な日本の宗教研究の分類に関しては，松井<sup>39)</sup>によっておこなわれている。松井は，研究対象から 1) 風土・自然環境と宗教，2) 都市・村落景観と宗教，3) 巡礼，4) 宗教の分布・伝播と空間構造の4つに分類している。それに対して，小田は，松井の4類型に関して検討を加え，，宗教都市・宗教集落，，巡礼・参詣，，墓制，，宗教分布・信仰圏，，村落の宗教組織，，絵図，，山岳聖域，，古代という8類型としている<sup>40)</sup>。小田の分類は，根拠とする指標が，不明瞭であり，統一されていないことが指摘できる。そもそも小田自身も，松井が4つに分類することができると主張に対して，「研究テーマのきちんとした分類は，なかなか困難であり，主な研究動向が把握できさえすれば，無理に分類しきる必要はない」<sup>41)</sup>と主張している。しかしながら，松井の分類が意図する部分は，主に戦後の現代地理学の動向と宗教地理学の動向との接点において分類をおこなっており，今後の宗教地理学の重要な展望のひとつと考える。

これら研究対象として分類された各項目自体が新しい視点を提示しているわけではないが，1990年代以降の新たな方向性において，宗教現象における人びとのいとなみと空間，社会との相互作用的関係のなかで分析をすすめていくことが今後の宗教地理学においてもとめられるだろう。本稿ではとくに，新たな宗教の受容をめぐる宗教と空間，社会との

<sup>39)</sup> 松井圭介「日本における宗教地理学の展開」人文地理 45-5, 1993, 75-93 頁（同『日本の宗教空間』古今書院, 2003, 1-37 頁において，同論文の改編版および 2002 年までの研究動向を整理したものとして所収されている）

<sup>40)</sup> 小田匡保「戦後日本の宗教地理学 宗教地理学文献目録の分析を通じて」駒沢地理 38, 2002, 21-51 頁。

<sup>41)</sup> 前掲 40) 32 頁。

関係と、宗教の象徴性をめぐる空間、社会について考察をおこなう。そこで、次項では主に日本における宗教地理学の動向のなかでも、とくに本稿の関心に沿った研究課題（松井の分類における2)3)4)に関連）について述べていくこととする。

## （2）宗教の分布・伝播をめぐる空間と社会

まず、宗教の分布と伝播をめぐる空間構造に関する研究をとりあげる。このテーマに関しては、山岳信仰を対象とした信仰圏研究があげられよう。地理学においては、岩鼻の出羽三山信仰を対象とした研究がひとつの契機となったといえる<sup>42)</sup>。山岳信仰の分布研究は、民俗学においても行われていたが、そこでは分布の形成過程の歴史的展開や、信仰による民俗儀礼の分析が中心であるために、信仰の分布の空間構造としての把握に乏しいことを岩鼻は指摘した。そこで、岩鼻は各地の信仰形態を指標としてその差異から三つの同心円構造を設定し、宗教の空間的パターンの分析をおこなった<sup>43)</sup>。信仰圏研究における宗教の分布の空間パターンの分析は、日本における宗教地理学のひとつの方向性を示したといえる。しかしながら、そこに残された課題も多く指摘されることになる。とくに、信仰圏の同心円構造に区分する際の指標設定の問題である。それは、信仰対象となる山岳からの距離が最も重要な要素となりえてしまうためである。それゆえに、宗教の分布の空間的構造を明らかにすることにおいては、なぜその分布構造が形成されたのかという大きな問題が残されてしまうことになる。それは、金子<sup>44)</sup>や三木<sup>45)</sup>、阪野（第2章参照）<sup>46)</sup>によって指摘され、信仰の伝播過程に注目されるようになった。それは、宗教が各地へと伝播していく過程における人びとの布教活動であったり、当該地域における既存の宗教との関係が

<sup>42)</sup> 岩鼻通明「出羽三山信仰圏の地理学的考察」史林 66-5, 1983, 681-726 頁。

<sup>43)</sup> 岩鼻以降の信仰圏研究に関する主なものとして以下のものがあげられる。 松井圭介「信仰者の分布パターンからみた笠間稻荷信仰圏の地域区分」地理学評論 68A-6, 1995, 345-366 頁。 金子直樹「岩木山信仰の空間構造 その信仰圏を中心にして」人文地理 49-4, 1997, 1-20 頁。 筒井裕「秋田県における太平山三吉神社の信仰圏の空間構造 講中を指標にして」, 秋大地理 46, 1999, 27-32 頁。 筒井裕「鳥海山大物忌神社の信仰圏に関する地理学的研究」秋大地理 48, 2001, 1-8 頁。

<sup>44)</sup> 前掲 43) および金子直樹「日本における信仰圏研究の動向 山岳宗教を中心にして」人文論究 45-3, 1995, 104-117 頁。

<sup>45)</sup> 三木一彦「秩父地域における三峰信仰の展開 木材生産との関連を中心に」地理学評論 69A-12, 1996, 921-941 頁。 三木一彦「山間村落における信仰集団存立の地域的基盤 江戸時代の秩父郡大野村を事例として」歴史地理学 40-2, 1998, 2-21 頁。 三木一彦「江戸における三峰信仰の展開とその社会的背景」人文地理 53-1, 2001, 1-17 頁。

<sup>46)</sup> 阪野祐介「新潟県・八海山を対象とした山岳信仰の展開 大崎口崇敬者の分布を中心に」歴史地理学 45-5, 2003, 1-18 頁。

地域ごとによって多様であったりすること、またそうした宗教的な要素のみならず、当該地域社会における政治的・社会的・文化的要素との関係のなかで、宗教の分布の空間的構造が形成されていくという認識にはじまるといえる。そして最近では、小野寺が、上記の研究においても信仰の分布について地域的差異の形成過程に関する分析にとどまっており、さらに地域社会での差異に分析を深めていくことを指摘する。例えば、宗教に基づく「集団の地域的差異は、それが制度的に発生したものではないとするならば、信仰を受容した地域の経済的・社会的関係、さらに信仰圏との関わりでとらえ直す」<sup>47)</sup>必要性について言及している。

そこで次に、新たな宗教の受容の地域社会での様相に注目する。もちろん、信仰圏研究において明らかとなった宗教の分布・伝播に関する研究の問題点が指摘される以前より、地域社会での宗教の受容の研究は行われてきている。日本の地理学において宗教受容を扱った研究例からみていくと、日本の地理学で宗教を扱った研究の多くは、仏教や神道を対象としていることがわかる。それらの分析対象は、門前町や御師集落など宗教集落の成立過程や機能の解明や、山岳信仰を中心とした信仰圏研究などに偏重していると言える。もちろん他分野に比べると少ないが、宗教の受容を地域的に扱った研究例もある。例えば、当麻は丸山教の展開と土着化に関する考察として教団の布教と、受容と地域性との関係という二点から行い<sup>48)</sup>、さらに当時の社会状況との関連から分析している<sup>49)</sup>。森は山梨県における江戸時代末期から明治初期の明治維新という社会的変革期の禊教の受容と定着に関して、その歴史的展開を提示し、宗教儀礼や社会構造との関連性に着目することで定着の諸要因を明らかにしている<sup>50)</sup>。またキリスト教に関しては、日本への最初の伝来は16世紀中ごろであるが、再伝来以降をみると江戸時代の終わりからはじまり、本格化するのが明治に入ってからで、宗教がもつ性格も西洋に基盤をおくことからも、宗教の受容というテーマのみならず、異文化の伝播・浸透・定着という観点から、その過程と影響力はより動的なものとしてとらえることのできる対象であると考えられる。しかしながら地理学でキリスト教を扱った研究は、他の宗教や信仰等に関する諸現象をとりあげた論分数に比べ、以下にあげる程度で非常に少ない。まず野崎の長崎県生月島のかくれキリストン組織を扱った研究<sup>51)</sup>や、小田のドイツにおける巡礼等を扱ったものがある<sup>52)</sup>。またキリスト教受容

<sup>47)</sup> 小野寺淳「伊勢参宮における講組織の変容 明石市東二見を事例に」歴史地理学 47-1, 2005, 4-19 頁。

<sup>48)</sup> 当麻成志「丸山教団の発展と土着化過程について」地理学評論 31-8, 1958, 13-22 頁。

<sup>49)</sup> 当麻成志「天竜河岸の1農村における宗教受容と地域構造の関係」地理学評論 33-4, 1960, 13-26 頁。

<sup>50)</sup> 森正康「地域社会における教派神道の受容と定着 山梨県下の禊教」歴史地理学 130, 1-17 頁, 1985。

<sup>51)</sup> 野崎清孝「長崎県生月島の触とかくれキリストン組織」奈良大学紀要 9, 1980, 34-48 頁。

<sup>52)</sup> 小田匡保「ギスベルト=リンシェ - デの巡礼研究について」駒沢地理 30, 1994, 129-141

に関しては竹村の末日聖徒イエス・キリスト教会（一般にモルモン教と呼ばれている）を対象として他宗教、主に仏教の宗派の差による受容・定着の地域的差異を分析している研究<sup>53)</sup>があげられるに過ぎない。竹村の末日聖徒イエス・キリスト教会の研究は、ともにキリスト教新宗教の受容のプロセスと現状、地域的特性を明らかにすることを目的とし、定着要因を仏教との関わりから論じている。しかしながら、宗教の受容過程と地域的特性を明らかにする場合において、他宗教との関連という宗教的背景のみならず、歴史的背景や社会的背景を考慮に入れる必要があると考える。宗教の受容を考える場合、その歴史的・社会的背景として教団の布教や教会の設立から論じられがちであるが、「地域住民の宗教観には地域の仏教における宗派別の趨勢が一定の影響を与える」<sup>54)</sup>といった視点も必要であると考える。つまり地域既存の宗教と新たに地域内へ導入される宗教との関わりの問題であり、この関心からの研究として、既存の宗教や民間信仰と外来の信仰との関わりから分析をおこなった藤村の研究がある<sup>55)</sup>。藤村は、新宗教の定着について、住民の社会的属性と民間信仰への対応、新宗教の民間信仰への姿勢から論じている点で興味深い考察といえる。ただし現状では、地域社会での宗教の受容に関しても、本稿で第3、4、5章で対象とするキリスト教に関しても、宗教社会学や文化人類学がより優れた成果をあげてきたといえる。

日本におけるキリスト教の受容に関する研究は、森岡や西山などが、外来宗教の浸透によってもたらされる既存の社会構造の変容に重点をおいている。森岡は、キリスト教の事例<sup>56)</sup>以外に新宗教も対象として地域社会への受容に関して受容要因や土着化過程の検証を行っている。西山もまた同様の研究を行っている。これらの論旨<sup>57)</sup>は、外来の宗教が地域社会に受容される際の社会的背景や在来文化や生活様式の変容にある。また、日本の南西諸島におけるキリスト教の伝播によって、既存の宗教・信仰体系の変容について論述した安斎による一連の研究がある<sup>58)</sup>。安斎は在来文化の変容に注目し、宮古島等を事例に力

---

頁、小田匡保「聖ウォルフガング没後千年祭に見るドイツ南部のカトリック巡礼」駒沢地理31、1995、39-68頁。

53) 竹村一男「末日聖徒イエス・キリスト教会布教の地理学的考察」立正大学大学院年報13、1995、163-186頁。 竹村一男「末日聖徒イエス・キリスト教会受容の地域的差異に関する研究 山形・富山地域における事例を中心に」地理学評論73A-3、2000、182-198頁。

54) 前掲53)、183頁。

55) 藤村健一「奥熊野の一村落における宗教の多様性とその要因」歴史地理学43-5、2001、21-37頁。

56) 森岡清美「日本農村におけるキリスト教の受容」民族学研究17-2、1953、1-14頁。

57) 森岡清美・西山茂「新宗教の地方伝播と定着の過程 山形県湯野浜の妙智会会員調査から」(柳川啓一・安斎伸編『宗教と社会変動』東京大学出版会、1979) 137-194頁。  
西山茂「日本村落における基督教の定着と変容 千葉県下総福田聖公会の事例」社会学評論26-1、1975、53-73頁。

58) 安斎伸「僻地社会とカトリックの受容 奄美大島、西阿室宗教社会調査覚書」(岡田純一

トリック移入による在来の祭祀形態の変容と崩壊について詳細に分析している。

また日本のキリスト教徒の信仰生活に関して、日本の先祖祭祀との関係から分析している研究もなされている<sup>59)</sup>。やはりここでも問題とされているのは、キリスト教という西洋文化が日本に受容されるなかで、どのような変化がみられるのかにある。そして、日本においては、先祖祭祀の存在が日本のキリスト教に一定の特色を与えていたことが示されている<sup>60)</sup>。このほか、日本以外にフィリピンにおけるキリスト教についての事例を扱ったものがあり<sup>61)</sup>、ひとつには外来宗教であるキリスト教と社会との相互作用について、また一方で、土着の信仰の要素と融合した形でキリスト教を受容しているといった、いわゆる宗教の重層性について分析している。地理学から阪野（第3章参照）<sup>62)</sup>が日本におけるカトリックの集団改宗を対象として、宗教の受容と当該地域における社会的関係とに注目し分析を行った。そして、社会的関係と人びとの宗教的実践との結びつきにも言及している。

このように、宗教の受容という場面には、宗教と社会とがいかなる関係にあるのかという様相が如実にあらわれるといえる。

### （3）聖なる空間と社会

宗教を地理学の対象とするとき、そこで問われるものは象徴性という言葉が用いられる。聖なる空間とは、言うまでもなく象徴的空间といえる。しかし聖なる空間は、俗とは異なる

---

他編『日本の風土とキリスト教』理想社、1965) 191-207頁、安齋伸「伝統的信仰と移入信仰の混合と変容 奄美大島西阿室部落の場合」人類科学 18, 76-90, 1966, 同「外来宗教の受容と伝播」(九学連合沖縄調査委員会編『沖縄 自然・文化・社会』弘文堂、1976) 295-364頁、同「基層伝統信仰と移入宗教 沖縄、宮古島調査から」(柳川啓一・安齋伸編『宗教と社会変動』東京大学出版会、1979) 195-233頁、安齋伸『南島におけるキリスト教の受容』第一書房、1984。

<sup>59)</sup> デイヴィッド・リード「キリスト教徒と祖先の関係」(P.L.スワンソン・林淳編『異文化から見た日本宗教の世界 [叢書・現代世界と宗教2]』法藏館、2000) 72-96頁。

<sup>60)</sup> 先にあげた研究以外に、キリスト教を対象とした文化変容や宗教と社会との関係を扱った研究も数多くなされている。また、新宗教受容を扱った研究として磯岡哲也「新宗教の地方伝播・浸透・定着とその要因 立正佼成会茨城支部の事例」(森岡清美編『近現代における「家」の変質と宗教』新地書房、1986) 303-334頁などがある。

<sup>61)</sup> 玉置泰明「社会関係としてのキリスト教 フィリピン低地農村における世俗化と変容」南方文化 16, 1989, 57-88頁、寺田勇文「外来と土着 フィリピンにおける民衆力トリズム世界」(前田成文編『講座東南アジア学 第五巻 東南アジアの文化』弘文堂、1991) 69-92頁、佐々木宏幹・村武精一編『宗教人類学《宗教文化を解読する》』新曜社、1994, 207-215頁。

<sup>62)</sup> 阪野祐介「京都府旧佐賀村におけるカトリックへの集団改宗と農村社会」人文地理 58-4, 2006, 21-40頁。

る空間とも言えるが、日常の生活空間における人びとの行為によって生成される可視的空间でもある。それゆえに、聖なる空間を問うことは、地表でいとなまれる人びとの宗教的実践によって作り出されるものを読み解くことが可能であるといえよう。

聖なる空間をめぐっては、都市や村落景観における宗教的因素に注目した研究がある。それは、前節で述べた宗教の受容によって生じる人びとの宗教的行為によってシンボル化されていく空間や場所の問題といえる。とりわけ、聖地は人びとによって獲得された宗教独自の世界観があらわれる場所と考えられる。こうした聖地や宗教都市、村落における宗教空間に関する研究は、伝統的に地理学の研究対象となってきた。例えば、日本においては、門前町<sup>63)</sup>や山岳宗教集落<sup>64)</sup>がその対象としてとりあげられてきたが、その関心の中心は主に、宗教都市あるいは集落の形態や発達過程、分布、機能などを歴史地理学的アプローチによって解明することであった。また、都市や聖地の景観の一要素としての宗教施設や風景、絵図や曼荼羅図からの象徴的な意味を追究する人文主義的アプローチによる研究も行われてきた<sup>65)</sup>。また、巡礼空間を扱った研究としては、田中による研究が地理学においてひとつの成果としてあげられる。そこでは、聖地をめぐるという宗教的行為が、地域構造とどのような関係にあるのか。こうした宗教的行為が宗教的ネットワークをいかに形成していったのかという視点で行われてきた<sup>66)</sup>。

63) 藤本利治『門前町』古今書院、1970、175頁。有賀密夫「大山門前町の研究」地域研究 14、1971、17-28頁。

64) 浅香幸雄「信仰登山集落の形成(第一報)木曽御嶽の場合」地理学研究報告 3、1959、184-243頁。浅香幸雄「富士北口の上吉田・河口の御師町の形態とその構造 信仰登山集落の形成 第二報」地理学研究報告 7、1963、55-82頁。有賀密夫「大山門前町の研究 門前町の形成と御師の活動と檀家圈」地域研究 14、1971、17-28頁。有賀密夫「出羽三山を中心とする山麓信仰集落について」地域研究 13-1、1972、37-42頁。岩鼻通明「出羽三山信仰の歴史地理学的研究」名著出版、1992、262頁。

65) 岩鼻通明「宗教景観の構造把握への一試論 立山の縁起、マンダラ、参詣絵図からのアプローチ」(京都大学文学部地理学教室編『空間・景観・イメージ』地人書房、1983) 163-185頁。岩鼻通明「立山マンダラにみる聖と俗のコスモロジー」(葛川絵図研究会編『絵図のコスモロジー下巻』地人書房、1989) 223-238頁。佐々木高弘「都市景観のなかの宗教 宗教地理学の一試論」日本学報 8、1989、105-128頁。山口泰代「聖地的山里室生の景観の構造 人を魅了する風景へのアプローチ」人文地理 49-2、1997、63-78頁。

66) 田中智彦「近畿地方における地域的巡礼地」神戸大学史学年報 1、1986、45-63頁。田中智彦「愛宕越えと東国の巡礼者 西国巡礼路の復元」人文地理 39-6、1987、66-79頁。田中智彦「『四国偏礼絵図』と『四国遍路道指南』」神戸大学文学部紀要 14、1987、41-61頁。田中智彦「石内より逆打と東国の巡礼者 西国巡礼路の復元」神戸大学文学部紀要 15、1988、1-23頁。田中智彦「西国巡礼の始点と終点」神戸大学文学部紀 16、1989、39-61頁。田中智彦「日本における諸巡礼の発達」(国際日本文化研究センター編『聖なるものの形と場 Figures and places of the sacred』(国際シンポジウム第 18 集) 1996) 225-244頁。ほかに、小野寺淳「道中日記にみる伊勢参宮ルートの変遷 関東地方からの場合」人文地理学研究 14、1990、231-255頁など。

そして、近年では 1990 年代の Kong<sup>67)</sup>や Park<sup>68)</sup>らによって示された視角が、日本の宗教地理学においても援用、あるいは検討されつつある。聖地研究では、聖地の実在性を重視する立場と、聖地の社会的構築性を重視する立場という二つのとらえ方によって分類される。

前者の立場は、エリアーデの「聖なるものとは力であり、究極的にはとりも直さず実在そのものを意味する」<sup>69)</sup>という定義に依拠するものである。すなわち、これは、聖地がもつ場所の力の議論との関係でとらえられるものであるわけだが、この実在性重視の立場によると、聖地として神聖視されている場所はそこから移動することはないのである。したがって、聖地をめぐる宗教的な対立は、聖地という場所が神聖性を本質的に有しているという認識によって生じているとするのである。

もう一方の、聖地の社会性を重視する立場によれば、聖地が「本物であるか偽者であるかという区別に、大きな意味はない。…聖地が生み出され、その聖地が信仰者にとって意味深い象徴とみなされていくプロセスそのものが文化であると主張」<sup>70)</sup>する。この立場からは、まず大城が、「村落景観の社会性 沖縄本島北部村落の祭祀施設の場合」<sup>71)</sup>によって、1990 年代以降の日本における宗教を扱う地理学的研究に重要な指針を示したのではないだろうか。同様に文化地理学の視点から、森の四国八十八所巡礼を対象として行った優れた成果がある<sup>72)</sup>。田中らによる従来の巡礼研究では、空間内での移動パターンを歴史資料から復元することに重きがあがれてきたが、しかしそれは、「さまざまな作用がせめぎあう複雑なプロセスのなかで、巡礼の道がどのように形成され、そこにどのような宗教的意味が生成するのかという課題」<sup>73)</sup>を克服することまでには至っていなかった。

また同じく聖なる空間の研究では、川合が聖なる風景を人びとがどのように認識してきたのかを人文主義的立場に依拠しつつ検討をしている<sup>74)</sup>。そのなかで、聖なる空間を社会

67) 前掲 3)。

68) 前掲 4)。

69) エリアーデ、M『聖と俗 宗教的なるものの本質について』法政大学出版局、1969、5 頁。

70) 中川正「聖地とは何か」地理 48-11、2003、8-13 頁。

71) 大城直樹「村落景観の社会性 沖縄本島北部村落の祭祀施設の場合」歴史地理学 159、2-20 頁。

72) 森正人「遍路道にみる宗教的意味の現代性 道をめぐるふたつの主体の活動を中心に」人文地理 53-2、2001、75-91 頁。 森正人「場所の真正性と神聖性 高知県室戸市の御厨人窟を事例に」地理科学 56-4、2001、252-271 頁。 森正人「近代における空間の編成と四国遍路の変容 両大戦間期を中心に」人文地理 54-6、2002、535-555 頁。

森正人「戦後から 1980 年代までにみる四国 88 か所巡礼の動態 マス・メディア、観光との関わり」人文論究 51-4、2002、160-173 頁。

73) 前掲 72)、76 頁。

74) 川合泰代「「聖なる風景」の復原方法についての一試論 富士講と富士山を例として」歴史地理学 46-1、2004、50-64 頁。川合泰代「近世奈良町の春日講からみた「聖なる風景」 春日曼荼羅と儀礼の分析を通じて」人文地理 58-2、2006、57-71 頁。

的構築物としてとらえる立場を評価し、人文主義地理学との折衷を試みているが、聖なる空間が諸制度やさまざまな権力関係を通じて構成されるという認識に立ちながらも、描かれたものの図像分析や信仰者の行為からの分析にとどまっており、聖なる空間の形成過程における宗教集団をはじめとした社会と聖なる空間との相互作用的関係を明らかにするまでには至っていない。しかしこうした場所や空間への人びとの行為による作用のみならず、人間の情緒的経験領域を加味する人文主義的方法論のなかで、コスモロジーと社会との関係など聖なる空間や場所をいかにとらえるかという視点は、今後の宗教地理学においても看過することのできないものであるといえよう。それは、社会と空間の構造や意味を理解するためには、より制度化・組織化されたものから個人的経験をも含む人びとの宗教的行為が、社会的空間構造の編成や再編成に深く関係することを認識することがきわめて重要であると考えられるからである。

## おわりに　本論文の目的と課題

以上の宗教地理学における研究の動向をふまえ、本稿では宗教の分布・伝播、聖なる空間について考察を行っていきたい。ここでの宗教の基本的なとらえ方は、社会から乖離した存在ではなく、社会空間における人びとの集団的行為としてあらわれる現象とするものである。またその機能的側面から宗教は、教義、儀礼、集団、経験の4要素から構成されることを確認してきた。それゆえ、宗教の集団をめぐっては、その存立基盤との関係は、教義的なものよりも社会的・文化的条件において成立するものととらえることで、こうした諸条件の変化が、社会的な基盤との結びつきのあり方にも変化を生じさせることとなる。つまりその関係は、宗教と社会はお互いに影響しあうなかで形成されていくものであり、宗教の変化は社会の変化に、また社会の変化は社会にも影響を与えてゆくといえる。つまりは宗教の受容は、こうした相互作用的関係における変化の過程としてとらえられる現象であろう。

次に、このように宗教を社会的産物としてとらえる、あるいはその社会性に注目することによって、研究の視野はアイデンティティや空間の政治性、聖なる場所の構築への関心へと研究の領域を拡大していくことができるだろう。宗教的空间の形成は、その宗教の成員である信仰者にとってアイデンティティのよりどころの形成であり、共同体のアイデンティティが宗教を通していかに構築されるかを解明することが課題となるだろう。それは、例えば宗教の受容によって社会的関係が編成・再編成されることを明らかにすること、一方で編成・再編成された共同体のアイデンティティの具現化としての宗教施設の設置や儀

礼行為も当然のことながら分析対象となる。この宗教施設の設置や儀礼は、空間をパターン化し、視覚化していくのである。

そして、宗教にはそれぞれ固有の価値体系に支えられながら、空間を聖なるものと俗なるもの、同質と異質、内と外とに分割する機能を有している。こうした機能が、共同体アイデンティティの形成に大きく影響することになるのだが、それは時に、むしろあらゆる場面において政治的に利用されることにも気付かされ、聖なる空間における政治との関連性の存在を確認することになる。また聖なる空間が創出されるプロセス自体が政治的側面を有していることでもあり、それゆえに聖なる空間の形成を明らかにするためには、宗教と社会集団との相互的関係を追究する立場がきわめて重要であるのである。つまり、宗教的イデオロギーは、人間の行動に一定の規範を設けることで、土地や景観にある特定の「かたち」を与えていく要因となりうるのである。こうした世界観が、時間や空間の秩序化に寄与するとき、ある明瞭な人間の規範化された行動や空間パターンが生み出されることになるといえよう。

最後に、「宗教のもつ力」をどのようにとらえるのかという前提の問題であるが、ここでは、人びとの宗教的いとなみである宗教現象を明らかにすることから、宗教のもつ力も人びとの関わりのなかで形成されていくものであると考えられる。これは、人びとの慣習といった行動様式を決定付ける基盤としての文化という定義から、それ自体も人びとの行為や諸集団間の政治のなかで常に創り出され、変化させられるものであるという文化のとらえ方の変移に沿うものである。人びとの宗教的いとなみとしての宗教現象という前提においては、聖なるもの、聖なる空間は、人間が認知・知覚することによってはじめて聖なるものとされるのであって、そうしたところの経験・認知の属する社会、集団による差異の存在が、さまざまな聖なる時間と空間を創り出していると考える。

以上のことから、宗教的世界観が儀礼や聖なる空間を通して表現されているかを検討するだけではなく、その宗教的アイデンティティや地域的アイデンティティの形成における宗教的な制度や実践、宗教的場所の構築といった諸側面が社会空間構造と相互に作用しあう複雑で多面的な検討をおこなう必要があるだろう。そして本稿では、序論でも述べたように、第2章および第3章において宗教が地域社会へと受容されていく様相をとらえ、宗教の受容による空間的パターンの特性や地域の社会構造と宗教との関係を明らかにする。第4章では、聖なる空間の政治的利用に注目し、日本の地理学では殆ど扱われることの無かった限られた時間に現出した宗教的式典を扱う。そして、第5章では、巡礼地を対象として、そこに関わる多様な人びと、同じ宗教組織の成員間においても、その場所に見出す意味に差異が存在することを、巡礼地の形成過程に注目しながら明らかにしていく。

## 第2章

---

新潟県・八海山を対象とした山岳信仰の展開

- 大崎口崇敬者の分布を中心に -

## はじめに

山岳信仰を対象とした研究は、様々な分野・視点で行われてきた。そのなかのひとつに、分布・伝播を扱った研究があり、地理学では、主に信仰圏に焦点を当てた研究がなされてきた<sup>1)</sup>。主なものとして石飛<sup>2)</sup>、岩鼻<sup>3)</sup>、松井<sup>4)</sup>、金子<sup>5)</sup>などの研究がある。石飛の研究は、1980年代以降に議論されている信仰圏とは性格が異なるが、地理学における山岳信仰を対象とした分布・伝播の研究に対して、同心円的な空間構造で捉えるという方向性を与えたといえる。岩鼻や金子は、山岳信仰の地域構造の解明として、信仰の空間的広がりを提示し、複数の指標により地域区分を行っている。松井は、山岳信仰以外の信仰においても同心円構造としての信仰圏を設定することができることを示した。しかしこれらの同心円構造を用いた信仰圏研究では、そこで示された構造の歴史的な形成過程や、その構造によって示される信仰の空間構造の形成要因については、さほど関心が寄せられていなかった。

これに対して、信仰の浸透過程の違い、講の成立過程や要因などは各地域によって異なり、むしろ信仰の受容要因などを地域ごとに分析する必要があると主張する立場がある。この視点としては、三峰信仰を対象とした三木による一連の研究があげられる<sup>6)</sup>。この主張については、金子もまた、「モデルばかりではなく、そこに宗教的、社会的な諸状況がどのように関わっているかを、明らかにする」ことが重要であると指摘している<sup>7)</sup>。こうしたことから、受容地域における既存宗教を含めた文化的・社会的諸状況がどのように関わっているか、また信仰の伝播の類型やプロセスを検討し、その分布・信仰圏の形成要因を明らかにすることは重要と考える。なぜなら、信仰というものは、各受容地域の様々な要

1) 金子直樹「日本における信仰圏研究の動向 山岳信仰を中心にして」人文論究 45-3 , 1995 , 104-117 頁では、地理学のみならず民俗学での動向についても言及されている。

2) 石飛一吉「屋久島における山岳信仰圏の研究」鹿児島地理学会紀要 21-1 , 1976 , 44-52 頁。

3) 岩鼻通明『出羽三山信仰の歴史地理学的研究』名著出版 , 1992 , 262 頁。同上「戸隠信仰の地域的展開」山岳修験 10 , 1992 , 31-40 頁。

4) 松井圭介「信仰者の分布パターンからみた笠間稻荷信仰圏の地域区分」地理学評論 68A-6 , 1995 , 345-366 頁。

5) 金子直樹「岩木山信仰の空間構造 その信仰圏を中心にして」人文地理 49-4 , 1997 , 311-330 頁。

6) 三木一彦「秩父地方における三峰信仰の展開 木材生産との関連を中心に」地理学評論 69A-12 , 1996 , 921-941 頁。三木一彦「江戸における三峰信仰の展開とその社会的背景」人文地理 53-1 , 2001 , 1-17 頁。

7) 前掲 1), 114 頁。

素との関連のなかで人々の間に浸透してゆくものであると考えられるからである。

信仰圏研究においては、前者の立場により地域区分を行うことで、信仰の空間的広がりの特色を明らかにできるだろう。一方で、後者の受容する側の要因に注目することは、信仰受容の地域差を明らかにしていく上で有用であろう。しかしながら、本稿で注目したいことは、信仰の分布の形成過程、分布の全体像としての形成要因にある。従来の研究において宗教あるいは信仰の分布・伝播を考察する際は、伝播・浸透の過程において、信仰を受容する側の人と信仰との間に介在し、信仰を広める立場にある布教者に対しては、その役割が重要であるにもかかわらず、検討が十分に行われてきたとはいえない。従来の山岳信仰の分布に関わる研究においては、信仰を広める側として寺社が取り上げられてきたが、直接に信仰の拡大を担った行者の活動にも注目する必要があると考える。とくに、本稿の対象地域を含む中部地方では、衰退しつつあった山岳信仰を木喰行者<sup>8)</sup>が復興し、靈山を民衆に開放したことが、大きな特色のひとつとして指摘されている<sup>9)</sup>。

本稿で対象とする八海山信仰に関する研究は、主に民俗学において行われてきた<sup>10)</sup>。鈴木は<sup>11)</sup>、八海山信仰の展開を宗教組織の機能に注目して分析し、近世末の八海山信仰の発展に木曽御嶽信仰が影響していることを指摘した。宮家は<sup>12)</sup>、御嶽信仰の浸透が八海山信仰の宗教組織の機能・構造にどのように影響を与え、また御嶽信仰が八海山麓においてどのように浸透したのかを宗教組織の動向を中心に分析している。すなわち、主に八海山信仰の歴史的変容に加え、八海山信仰における宗教組織の機能と構造の解明に収斂しているといえよう。このように八海山信仰に関する研究においては、その分布・伝播という視点での分析が不十分である。

そこで本稿では、中部靈山のひとつである八海山を対象として、信仰の歴史的展開のみならず、布教主体の一要素である行者の活動に注目し、八海山信仰の分布の特色と分布要因について考察することを目的とする。とくに本稿で取り上げたいのは、開山以降の展開

8) 木喰行者とは、木の実や果実を食べ、米や野菜を常用しない修行である木喰戒を守る僧の総称をいう。

9) 鈴木昭英「富士・御嶽と中部靈山」(鈴木昭英編『富士・御嶽と中部靈山』山岳宗教史研究叢書9、名著出版、1978) 2-24頁。

10) 主な研究として、鈴木昭英「八海山信仰の展開」(新潟県教育委員会編『新潟県文化財調査報告 第15集 南魚沼』新潟県教育委員会、1977) 402-410頁。鈴木昭英「八海山信仰と八海講」(鈴木昭英編『山岳宗教史研究叢書9 富士・御嶽と中部靈山』名著出版、1978) 434-486頁。宮家準編『慶應義塾大学宮家研究室報告 修験者と地域社会 - 新潟県南魚沼の修験道』名著出版、1981、294頁。山崎久雄「越後三山地域の八海山信仰」(日本自然保護協会『日本自然保護協会調査報告 第34号 越後三山・奥只見自然公園学術調査報告』財団法人自然保護協会、1968) 243-259頁などがあげられる。宗教学では、松本皓一「越後八海山信仰調査の中間報告 実体と今後の課題」宗教学論集8、1974、29-50頁などがある。

11) 前掲10)。

12) 前掲10)。

であるが、ここで八海山信仰に関して、注目すべき点がいくつかあげられる。ひとつは、鈴木や宮家が指摘するように<sup>13)</sup>、木曽御嶽信仰の影響である。八海山信仰が大きく展開することとなるのは、近世末期の開山以降であるが、この開山を行った行者は、木曽御嶽の王滝口を開いた普寛であった。そのため、八海山信仰の開山以降の展開に関して考察を進める上で、木曽御嶽信仰の影響は、無視することのできない要素のひとつと考えられる。また木曽御嶽信仰の影響に関連して、靈神碑の建立についても注目する。詳細については後述するが、靈神碑の建立は、八海山信仰および木曽御嶽信仰にみられる特有の習俗とされ<sup>14)</sup>、八海山の山頂から山麓部にかけて数多く建立されている。この碑には建立者および靈神の出身地、建立年代が刻まれており、この碑から得られる情報を八海山信仰の展開を検討するためのデータのひとつとして用いることにする。この靈神碑のほか、八海山大崎口社務所の「八海山大崎口里宮崇敬者名簿」(以下「大崎口名簿」)<sup>15)</sup>、講の分布<sup>16)</sup>も資料とする。以降、まず では八海山信仰の歴史的な変遷を、普寛による開山の前と後に分けて概観し、 で上記のデータから提示される八海山信仰の分布の特性を分析する。その上で、分布の形成過程を歴史的・社会的文脈のなかで捉えていくことにする。

## 八海山信仰の変遷

### (1) 開山以前の様相

本稿で取り上げる靈山・八海山は、新潟県南魚沼郡六日町と同大和町の境界に位置し、当山に続く中ノ岳、駒ヶ岳とともに魚沼三山、あるいは越後三山と称されている。

日本では古くから山を神とする觀念が各地にある。この觀念のため古代の人々は登拝す

13) 前掲 10 ) , を参照。

14) 児玉允「木曽御嶽の靈神碑」(鈴木昭英編『山岳宗教史研究叢書 9 富士・御嶽と中部靈山』名著出版、1978) 187-201 頁、および前掲 10 ) を参照。

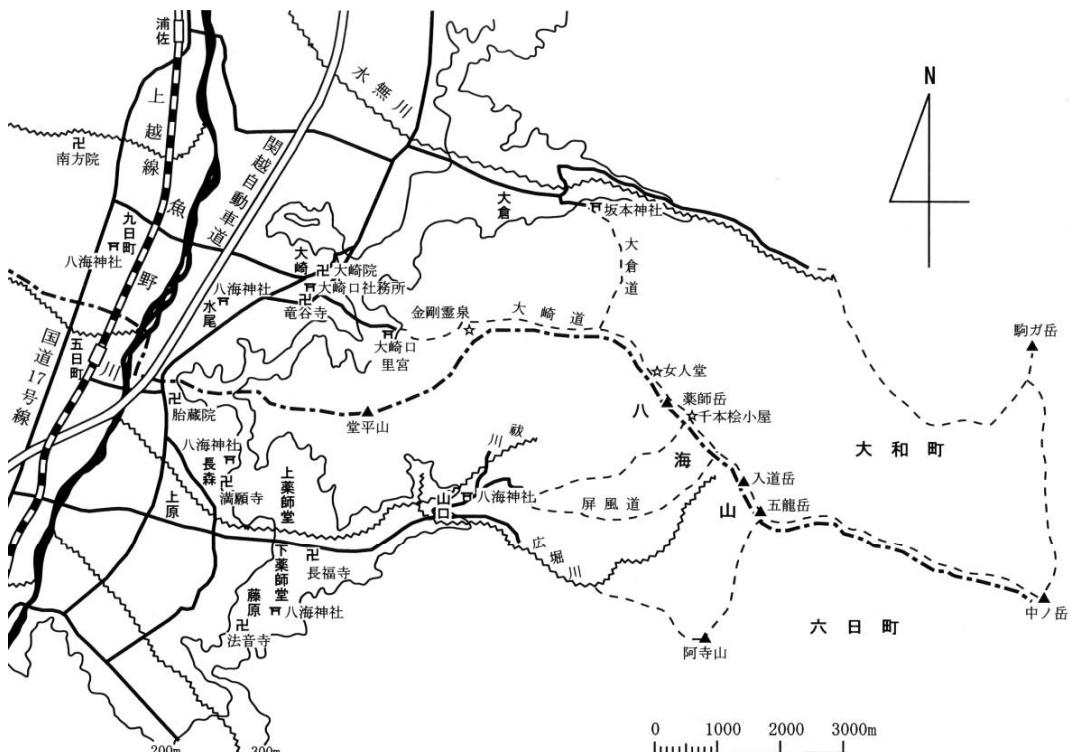
15) 『八海山大崎口里宮崇敬者名簿』八海山尊神社社務所。1999 年 11 月の調査時の名簿を用いた。八海山尊神社山田泰利氏によると『八海山大崎口崇敬者名簿』に記載されている崇敬者には、神社直結のタイプと、先達・行者・世話人などの代表者のみの記載の場合と、それ以外のタイプ(一度来たのみの場合も含む)があるといい、その区別はされていないという。

16) 前掲 15 ) の名簿に記載されている講と、全国神社名鑑刊行会編『全国神社名鑑 上』全国神社名鑑刊行会、1977 に記載されている教会などを抽出し 講の分布として用いた。

ることではなく、山麓から遙拝するにとどまったという<sup>17)</sup>。原初的山岳信仰では、山は主に農作を守る作神や水分神として崇められることが多く、八海山も例外ではない<sup>18)</sup>。八海山においてこうした信仰内容は、今日でもなお伺い知ることができる。そのひとつに、八朔祭がある。八海山の信仰登山が八朔の日に行われていることは、八海山神が農民にとって作神として信仰されてきたことを意味しよう。

その後、山岳信仰は全国的に大きく変化する。中世に入ると、山岳信仰の仏教化が進み、修験道が成立する。古代の原初的山岳信仰が行われている地域へ仏教が伝えられることにより、両者が深く習合し修験道は生まれ独自の宗教として展開していったのである。

修験道は、原初的山岳信仰と仏教の密教的要素が習合した宗教であるが、それは靈山だけではなく、修験者に対する帰依信仰をも指すものである。修験者は山伏とも呼ばれるが、



第2-1図 八海山および山麓略図

資料：国土地理院 1/50,000 地形図「十日町」(平成10年)および「八海山」(平成6年)をもとに作成。

<sup>17)</sup> 大和町史編集委員会『大和町史 中巻』新潟県南魚沼郡大和町役場, 1991, 875-877頁, および前掲10), 463頁を参照。

<sup>18)</sup> 前掲10), 464-470頁, および前掲17) 893-894頁。

第2 1表 八海山麓の寺院一覧

所在地	寺院名	宗派	備考
六日町 藤原 新堀新田 岡 上薬師堂 下薬師堂 上原 下原 長森 京岡	報音寺	真言宗	
	龜福寺	真言宗	法音寺末
	泉福寺	真言宗	法音寺末
	延命院	真言宗	満願寺末
	栄久院	天台宗	
	長福寺	真言宗	法音寺末
	薬師堂		
	薬師堂		
	西珠院	真言宗	法音寺末
	玉泉院	天台宗	大崎院末
大和町 一村尾 水尾 大崎	善照院	曹洞宗	竜谷寺末
	満願寺	真言宗	
	薬師堂		
	南方院	天台宗	
	胎藏院	真言宗	
大崎	薬師堂		
	竜谷寺	曹洞宗	
	大崎院	天台宗	

資料：南魚沼郡教育会『南魚沼郡誌』、大正9年

山深く入り込み修行を行うことで、超人的な験力を体得し、祈祷師や呪者として民衆に崇敬された<sup>19)</sup>。まず、ここで神のいる場として怖れ敬う対象であった山が、修行の場として人がその聖域に入るという変化が生まれた。

八海山信仰においても同様に、仏教化は進み、八海山の山中や山麓に祠や仏寺、仏堂といった宗教施設が建立されることとなった。第2 1図および第2 1表に示した山麓の六日町と大和町における八海山信仰に関わる寺院・仏堂をみると、六日町では旧三国街道（現・国道17号線）から登拝口の山口に至る道中に、上薬師堂の八海山長福寺、下薬師堂・上原・京岡・野田では薬師堂が確認できる。

また大和町の大崎には、八海山竜谷寺がある。現在では八海山信仰との関わりは認められないが、山号が八海山であり、古くは八海山と尾根続きにある堂平山中腹に位置し、水尾から八海山への中世の古道沿いにあったとされ、八海山信仰と関わりがあったことが推測できる<sup>20)</sup>。

ところで、中世における八海山信仰の拠点は、六日町側であると考えられている。このことについては、八海山の本地仏が薬師如来であることから、山麓において薬師如来が祀

<sup>19)</sup> 帰依信仰であることから、験力が優れている山伏ほど、民衆からの信仰は厚いものとなる。修験道に関しては、村上重良『日本宗教事典』講談社学術文庫、1988、164-169頁 参照。

<sup>20)</sup> 前掲10)、443-444頁。

られている寺院の立地より推察されている<sup>21)</sup>。表 2 1 表より六日町では、上述の長福寺や 3ヶ所の薬師堂が確認できる一方で、大和町では、水尾の薬師堂のみである。また長福寺の開基年代については不詳とされているが、その本尊の薬師如来は室町時代のものとされている。そのため、中世において八海山信仰の拠点が六日町にあったとされ、そのなかでもとくに長福寺が中心的な寺院であったと考えられているのである<sup>22)</sup>。

しかしながら八海山信仰が、山麓部を除いて、当時どの程度の範囲にまで浸透していたかを確認することはできない。また、近世期に入ってから、普寛によって開山されるまでの間は、それほど山岳信仰として八海山信仰が興隆することはなかったようである<sup>23)</sup>。

## (2) 開山以降の様相

八海山信仰は、近世末期に転換期を迎えた。その展開は、普寛や泰賢らによる開山に始まる。普寛は木曾御嶽の王滝口を開いた行者であり、またその弟子の泰賢は、八海山麓の大崎出身（表 2 1 図）で、現在の大崎口を開いたとされる行者である<sup>24)</sup>。

八海山の開山は、行者普寛を中心に 1794（寛政 6）年 6 月になされた。八海山の開山について記したものに『八海山開闢傳紀』がある<sup>25)</sup>。以下に引用する。

### 八海山開闢傳紀

抑越後國魚沼郡上田郷山口里宮鎮座八海山之中興  
開山尋<sub>ニ</sub>、寛政六<sub>甲寅</sub>年正月十八日御告<sub>ニ</sub>始ル。  
爰<sub>ニ</sub>武州秩父郡大瀧郷落合村<sub>ニ</sub>而木食行者普寛、江  
戸八丁堀<sub>ニ</sub>出張之時、有夜之夢<sub>ニ</sub>大般若内提頭賴神王降  
臨有而、行者向、謹而可聞、我者是八海山屏風倉靈込  
置間、何卒而信心之者力合、其上開山可賜、告

21) 前掲 10), 443 頁, および同, 223 頁。

22) 前掲 17), 888 頁。

23) 前掲 10), 444 頁。

24) 前掲 17), 972-973 頁を参照。泰賢は、普寛による開山の後の寛政 10 (1798) 年に、現在の里宮の脇にある靈窟で塩断・穀断の木喰修行を行い、享和 3 (1803) 年には大崎口登山道の開削に着手したとされている。

25) 五來重編『山岳宗教史研究叢書 17 修驗道史料集 [1]』名著出版, 1983, 502 頁所収。

終後夢晴觀者、同年五月十日、行者隨身之者江戸和田孫八、奈良田治兵衛、内田庄治郎、行者共四人<sub>ニ</sub>而從江戸出立、堀之内驛五十嵐多三郎宅<sub>ニ</sub>落付、後山口明川新田艸分萬左衛門、山口入新田半右衛門先而、大崎村圓成院泰賢、以上八人山口村傳九郎方江來リ、長ノ御止宿被遊、則傳九良共九人<sub>ニ</sub>而、右御山五十鈴瀧通リ、屏風盤倉御開闢有之。同年六月十八日、彌宮殿御勸請<sub>ニ</sub>

傳九郎 つるのはし とうぐハ

相成、其節開山道具者、半右衛門 せきのミ 右三

萬左衛門 いしのみ

間ニ以今連綿残候事實正之傳紀也。

御嶽山八海山武尊山中興開闢

大木食行者普寛

二代 行者泰賢

信弘木曾駒嶽野州永野北辰嶽中興開山

三代木食行者普明

印 印

開山行者之眞筆有是所

不殘眞滅附、當弘化三丙午

年閏五月從願十日始十二日終。

授

南雲茂兵衛什賣者也

この傳紀に書かれている内容を要約すると、普寛は隨身として江戸から3人の行者とともに来越し、堀之内の五十嵐多三郎、山口村の万左衛門、半右衛門、伝九郎、大崎村の泰賢をともない、屏風道を開削し、八海山は開山されたと伝えられている。この『八海山開闢傳紀』は、1846(弘化3)年5月に木喰行者普明が書き記したものであるが、そこには「御嶽山八海山武尊山中興開闢」を行った者として、「大木喰行者普寛 二代 泰賢」と記されている。普寛は、『八海山開闢傳紀』に記載されているように、八海山のほか、木曾御嶽や上州武尊山の開山も行っている。そうしたことから、少なくとも木曾御嶽、八海山、武尊山の三山の信仰に関連性があり、この三山を重要視していたことが推察できる。

これら行者の活動を契機として、八海山が靈山として民衆の間に広がることとなり、山麓部における各神社の活動もそれに連動して活発化することとなった。ここでは神社の活

動のひとつであった登山道の開削からその様相をみてみる<sup>26)</sup>。第2-1図で示した八海神社8社（坂本神社を含む）のうち、登拝口となる神社は、大和町大崎、大倉、六日町山口の3社あり、各社からそれぞれ登山道が延びている。

大崎登山道の最古の道は、中世以来のもので、水尾船岡山・堂平山・猿倉山とたどり、尾根を伝って延びていたとされる。その起点には、大崎の南西に隣接する水尾の八海神社があり、創立は1276（建治2）年とされるが、現在この道は廃道となっている。おそらくは、堂平山の中腹にあった六万寺（現・竜谷寺）が天文年中（1532-55）に現在地へ移り、さらに1794（寛政6）年の普寛の開山後に、泰賢が現在の大崎口を開削したことにより、登山道も新たに設置され、次第に信仰の拠点が大崎へと移動したことによると考えられる。

中世以来の古道とされる大倉登山道は、「八海山」の由来を説明する諸説のひとつとなつた八つの池がある。大倉口に鎮座する坂本神社は、「八海神社」とも称されており、最古の登拝口ともいわれている。

山口からの登山道は、旧道を含め屏風道、生金道、祓川道の3道である。最古とされる祓川道は、弘法大師が810（弘仁11）年に八海山を開山した際に登った道が起源とされているが、このことが史実であるとは考え難い。とはいえ、少なくとも真言宗による入山があったと推察されている<sup>27)</sup>。この道も、現在では使われていない。

屏風道は、普寛が八海山開闢を行った際に作られた登山道であり、生金道はその後に開削された道である。これらの両道が延びる山口里宮の八海神社は村山家が神主を務め、八海山登拝者の祓いを行い、鳥居の維持、管理を開山以前から行っていた<sup>28)</sup>。山口の社殿が建立されたのは開山後であるが、普寛による開山とともにその契機のとなったのが、六日町藤原の八海神社による生金道の開削である。生金道は、六日町藤原の八海神社の井口家が中心となり、1840（天保11）年に開削された。生金道が整備されて以降、井口家が、群馬、埼玉など関東方面からの登拝者の到着所となり、同年には講の協力を得て生金道7合目に八海神社の小社を建立した<sup>29)</sup>。この井口家の活発な動きに対し、村山家が危機感をもつたことが、里宮の建立がなされた要因のひとつとも考えられている<sup>30)</sup>。

このように普寛らによる開山以後、八海山信仰は大きく展開していくこととなったといえよう。各神主家は、互いに対抗するように八海山信仰の中心的な拠点としての地位の確立を望み、活発な動きを見せた。そして、開山以前は遙拝所に鳥居が立てられているのみで、そこでは「鳥居参り」と称される参拝習俗であったものが、社殿が建てられ、修験者のみならず一般信者の登拝行動をともなう信仰へと発展したのである<sup>31)</sup>。

26) 登山道については、前掲17), 936-964頁を参照。

27) 前掲10), 442頁、および前掲17), 891-892頁。

28) 前掲10), 454-456頁。

29) 前掲10), 454-456頁。

30) 前掲10), 459-460頁、および同, 227-229頁。

31) 前掲10), 440頁、および前掲17), 876-877頁。

以上みてきたように、八海山は古くから靈山として崇められてきたが、中世に入り修験道として発展し、修験者らが修行の場として入山することとなった。そして八海山信仰が民衆の間に登拝行動をともなう信仰として広く浸透するのは、近世末期の普寛らによる八海山開闢以降であることがわかるだろう。ここまで八海山信仰の歴史的な展開を概観してきたが、次に八海山信仰の分布の分析を進めていくことにする。

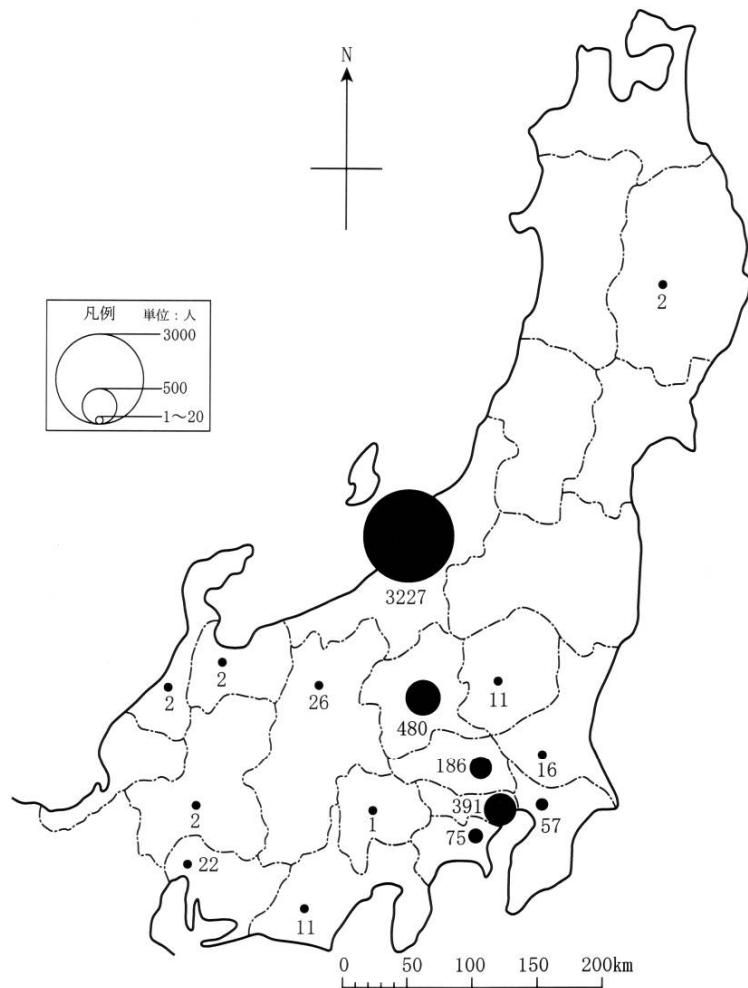
## 八海山信仰の分布

### (1) 大崎口崇敬者の分布

八海山信仰の分布として、まず八海山麓に位置する神社のひとつである大崎口の八海神社（正式名：八海山尊神社）の現在<sup>32)</sup>での崇敬者の分布特性をみてみる。資料は、「大崎口名簿」を用いる。大崎口の神社は3つの登拝口のなかで、現在最も活動が盛んな神社である。現在の大崎口崇敬者の分布は、「大崎口名簿」より作成した第2-2図からわかるように、関東甲信越地方に多く認められ、中でも新潟県が3,227人（全体4,522人の71.4%）と突出している。次いで、群馬県の480人（同10.6%）、東京都の391人（同8.7%）、埼玉県の186人（同4.1%）が注目される。このほか1%を越えるのは、神奈川県の75人（1.7%）、千葉県57人（同1.3%）である。より詳細に市町村レベルで分析すると、「大崎口名簿」から得た市町村ごとの崇敬者の分布を第2-3図として地図化した。新潟県では、まず八海山が位置する南魚沼郡大和町（以下 数字は、第2-3図の数字に対応する。）302人、同六日町222人、その周辺の十日町の166人、北魚沼郡の104人と魚沼地方に多く分布していることがわかる。また長岡市の512人や、長岡市周辺の三島郡に204人、小千谷市95人、栃尾市85人、見附市134人、三条市95人、南蒲原郡中之島町104人と多いことがわかる。さらに、上越市333人や中頸城郡頸城村の72人、大潟村の41人といった上越市とその周辺や、新潟市139人、佐渡（両津市、佐渡郡）の251人もまた崇敬者が比較的多くいることが確認できる。

---

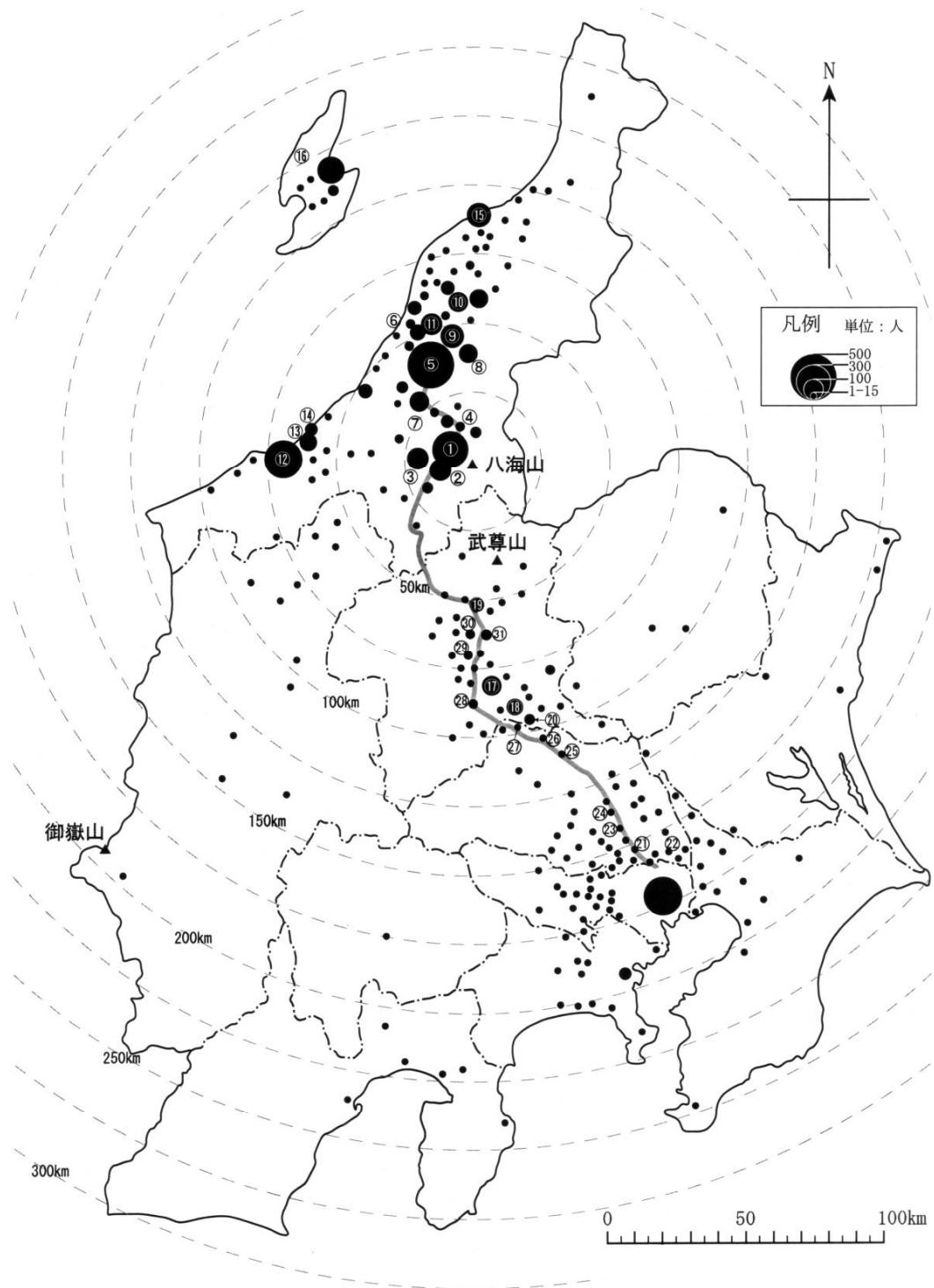
<sup>32)</sup> 本章での「現在」は、八海山で調査を行った1999年現在を指す。以下同じ。



第2 2図 八海山大崎口崇敬者の都県別分布（本州東部）

資料：「八海山大崎口崇敬者名簿」八海山尊神社社務所，1999

次に群馬県をみると、前橋市 の 94 人、伊勢崎市 の 69 人、沼田市 の 57 人、佐波郡境町 の 32 人があげられる。東京都は、23 区で 356 人を数える。県の合計では崇敬者数が多い埼玉県は、浦和市<sup>21</sup>の 16 人が最大であり、集中して崇敬者が多く存在しているところではなく県内に分散して分布している。ここで確認できる点は、まず新潟県内においては、新潟市以南と佐渡において卓越していること、また崇敬者の分布が関東にまで広がっていて、崇敬者数の多い新潟県、群馬県、埼玉県の市町村が、中山道および三国街道に沿って続いていることである。順にみていくと、埼玉県川口市<sup>22</sup> 8 人、浦和市 16 人、大宮市<sup>23</sup> 15 人、上尾市<sup>24</sup> 6 人、熊谷市<sup>25</sup> 6 人、深谷<sup>26</sup> 8 人、本庄市<sup>27</sup> 7 人と続き、群馬県に入ると、高崎市<sup>28</sup> 24 人、前橋市 94 人、渋川市<sup>29</sup> 22 人、北群馬郡子持村<sup>30</sup> 23 人、勢多郡赤城村<sup>31</sup> 29 人、沼田市 57 人となる。新潟県では、南魚沼郡六日町 116 人、同大和町 302



第2 3図 八海山大崎口里宮崇敬者の市町村別分布（関東甲信越および静岡）

資料：「八海山大崎口里宮崇敬者名簿」八海山尊神社社務所所蔵，1999より作成。

注) 図中の 数字は、本文 - (1)の 数字と対応している。図中の灰色太線は、現在の国道 17 号線を示す(以下の図も同じ)。

人，北魚沼郡小出町 25 人，同堀之内町 38 人，小千谷市 95 人，長岡市 512 人，三島郡 204 人，佐渡 250 人と続く。それに対して，八海山からの距離では，群馬県や埼玉県，東京都などと同じ程度の東北地方や，富山県，新潟県北部ではほとんど崇敬者の分布を確認することはできない。こうしたことから，江戸から新潟・佐渡を結ぶ中山道と三国街道を行者が行き来し，その道沿いを中心に，各地で布教活動が行われたと考えられる。つまり，信仰の分布を形成する過程において，行者の布教可能な範囲を限定する物理的な要因が影響している可能性を指摘することができるだろう。それは，修験道が修験者への帰依信仰であることから，靈験名高い行者の存在が重要な要素となる宗教的な特性を示しているといえるだろう。

ただし，ここで提示したのは現在の崇敬者の分布から導き出した推察にとどまるものといえる。そのため，次節で崇敬者のなかでもとくに信仰の発展に寄与したものだけが建立を許可される靈神碑の分析を行うことで，より多面的に八海山信仰の分布の特性を捉えることができるだろう。

## ( 2 ) 大崎口周辺の靈神碑からみた分布

靈神碑とは，木曽御嶽信仰と八海山信仰の特色のひとつであり，靈神碑建立時には，遺骨，遺髪，遺品などを納める習俗もある<sup>33)</sup>。木曽御嶽や八海山も，他の靈山と同様に，死後における靈魂安住の地とされ，山中他界の觀念が現れている<sup>34)</sup>。靈神碑建立の起源は，近世末期木曽御嶽を民衆に開放した覚明と，同じく木曽御嶽の中興開山を行った普寛の両行者の死後，彼らの偉業を讃えるために彼らの靈を神として，弘化年中（1844～48）頃，御嶽に祀ったことに遡るとされる<sup>35)</sup>。

その後，信仰への功績が大きいとされる先達などが亡くなった場合にも靈神碑が建立されることとなった。靈神碑の建立を許された崇敬者には，靈神号が与えられる。この靈神号は，一般に八海神社によって授与されるが，神社から大先達の免状を与えられた先達も，この授与を行う資格をもっている<sup>36)</sup>。

この靈神碑の大部分は，靈神名，建立者名，建立年次，靈神あるいは建立者の出身地などが彫り込まれている。そこで，この大崎口里宮周辺の靈神碑に刻まれている靈神あるいは建立者の出身地から第 2 図と第 2 表を作成し，その分布を提示した。これらによ

33) 前掲 10)，473 頁，および前掲 14)，193 頁。

34) 前掲 10)，471 頁，前掲 14) を参照。

35) 前掲 14)，188 頁。

36) 新潟市八海山尊社宮司大橋興作氏からの聞き取りによる。

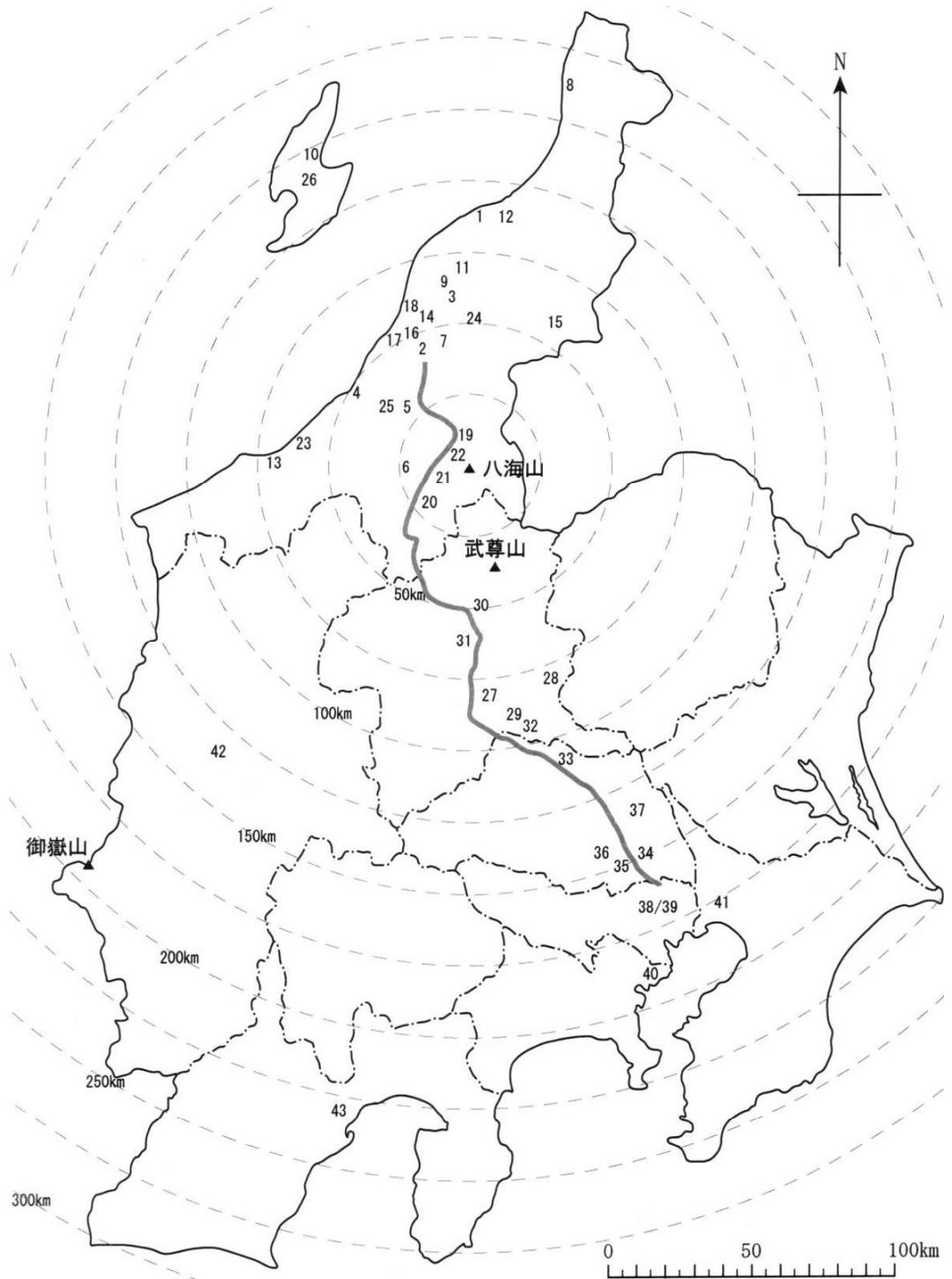
れば、都県別では、新潟県出身者が 153 人、次に東京都の 33 人、群馬県の 29 人、埼玉県 9 人などが多い。市町村別では、新潟県長岡市 54 人、新潟市 28 人、上越市 8 人、大和町 6 人、群馬県沼田市の 13 人、伊勢崎市 7 人などが上位を占めていることが確認できる。さらに新潟県においては長岡市周辺部（柏崎市、小千谷市、見附市、与板町など）での分布が密であることがわかる。また八海山麓部出身者の靈神や建立も確認できるが、崇敬者数との対比では、むしろ靈神碑の建立が少ないと捉えることができるだろう<sup>37)</sup>。

第 2 表 大崎口里宮周辺の靈神碑からみた市町村別分布

No.	出身地	人	No.	出身地	人
	<b>新潟県</b>	153		<b>群馬県</b>	29
1	新潟市	28	27	前橋市	3
2	長岡市	54	28	桐生市	1
3	三条市	5	29	伊勢崎市	7
4	柏崎市	3	30	沼田市	13
5	小千谷市	3	31	子持村	2
6	十日町市	4	32	境町	2
7	見附市	4		その他	1
8	村上市	1		<b>埼玉県</b>	9
9	燕市	2	33	熊谷市	1
10	両津市	4	34	浦和市	1
11	白根市	1	35	与野市	1
12	豊栄市	1	36	上福岡市	2
13	上越市	8	37	白岡町	1
14	中之島町	1		その他	3
15	上川村	2		<b>東京都</b>	33
16	与板町	4	38	新宿区	1
17	出雲崎町	2	39	浅草	5
18	寺泊町	2		その他	27
19	小出町	2		<b>神奈川県</b>	2
20	塩沢町	1	40	川崎市	2
21	六日町	2		<b>千葉県</b>	3
22	大和町	6	41	船橋市	2
23	頸城村	3		その他	1
24	南蒲原郡	5		<b>長野県</b>	2
25	刈羽郡	1	42	松本市	2
26	佐渡郡	2		<b>静岡県</b>	1
	その他	2	43	清水市	1

注) 1999 年の現地調査による。「その他」に分類されているものは、都県名のみ刻印されている場合を表す。太字の数字は、各都県の合計。No. は、第 2-4 図に対応している。

<sup>37)</sup> 大和町出身者の靈神碑 6 基のうち、少なくとも 2 基は八海山尊神社山田家建立の靈神碑であり、崇敬者 302 人に対し靈神碑 4 基 (1.32%) となる。



第2-4図 八海山大崎口里宮周辺の靈神碑からみた分布

資料：1999年に行った八海山大崎口里宮周辺の靈神碑調査によるデータをもとに作成。

注)図中の数字は、第2-2表のNo.に対応する。市町村に関しては、1999年当時の行政区画に依っている。



第2 5図 八海山大崎登山口脇の靈神碑群

注) 1999年11月, 筆者撮影

靈神碑は、先達などのような信仰に功績を残した人に許可されるが、そのことから、靈神対象者や建立者が密に分布している地域というのは、指導的な崇敬者の存在がいたことを示していることになる。一方で、地元では登拝講を結成する必要がなく、また指導的立場に里宮の神主家があるため、先達のような存在がここでは認められないため、靈神碑の建立が僅かであるといえる。そもそも靈神碑建立自体が、木曽御嶽を起源とする外部から八海山へ導入された習俗であり、歴史的にも新しいものであるため、靈神碑建立の習俗がもとよりみられないである。山麓部においては古くから生活に密着した八海山信仰が存在しており、近世以降に山麓部外へと浸透した八海山信仰とは異なる性格をもつものと考えられる。こうしたところから、崇敬者の分布密度に比べ靈神碑建立の割合が低いといえよう。

### (3) 八海山信仰に関わる講の分布

次に、八海山信仰に関わる講として、大崎口崇敬者名簿に記載されている講と靈神碑に

刻まれている講『全国神社名鑑<sup>38)</sup>』に記載され八海山信仰に関連のある組織を取り上げる。これらのデータから確認できた講を図表化した第2~5図および第2~3表より、基本的には八海山麓を含む半径15km圏内には存在が認められない。八海山麓の大崎には泰賢講と呼ばれる講が組織されているが、他の地域の講とは異なり、当然ながら代参講ではなく、大崎口を開削した泰賢を崇拜して作られた講で、八海山尊神社で執り行われる行事の手伝いなどを行う組織である<sup>39)</sup>。

山麓以外の地域の講については、御嶽教系の講が多いことに気づく。名簿などに記載されている講のうち、御嶽教の名称がついている講および組織のほか、一心講や神徳会もまた御嶽講あるいは御嶽教から派生した講である<sup>40)</sup>。判別できる御嶽教系の講の分布をみると、新潟県長岡市に多いほか、新潟県においては長岡周辺の三条市や加茂市・佐渡、群馬県では渋川市・佐波郡境町、埼玉県熊谷市・川口市、東京都板橋区・新宿区があげられる。また、八海山信仰と関連する講の分布特性のひとつは、新潟県、群馬県、埼玉県、東京都、千葉県、神奈川県に限り確認できる点にある。木曽御嶽信仰との関連性を考慮すると、長野県においても組織されていることが予測されるものの、実際には組織されてはいない。

八海山への参詣および登拝については、八海講の場合、主に八朔の日に行われるが、必ずしもそれだけに限るものではない<sup>41)</sup>。御嶽教は、八海山への参詣および登拝は代参ではなく任意の参加である。新潟県長岡市の御嶽講は、明治期より行者が活動しており、八海山や木曽御嶽山へ毎年登拝が行われていた<sup>42)</sup>。神徳会については、7月の中には大崎口より登拝し、10月20日の火渡り大祭にも参加している。また御嶽山にもほぼ毎年登拝するが、いずれも代参ではなく任意の参加となっている<sup>43)</sup>。

崇敬者の分布に関して、新潟市や長岡市などの分布数の多さは、転居などにより山麓から移転したことの反映も可能性として考える必要があるだろうが、講の分布から、崇敬者の移動による分布への反映というよりも、山麓の神社のみならず各地の先達らも含めた布教活動を通して、地域ごとに維持や浸透がなされてきていると考えるべきである。いうのも講組織は、ひとつの講につき講員が10人程度から100人以上と規模は様々ではある

38) 全国神社名鑑刊行会編纂『全国神社名鑑 上』全国神社名鑑刊行会、1977。

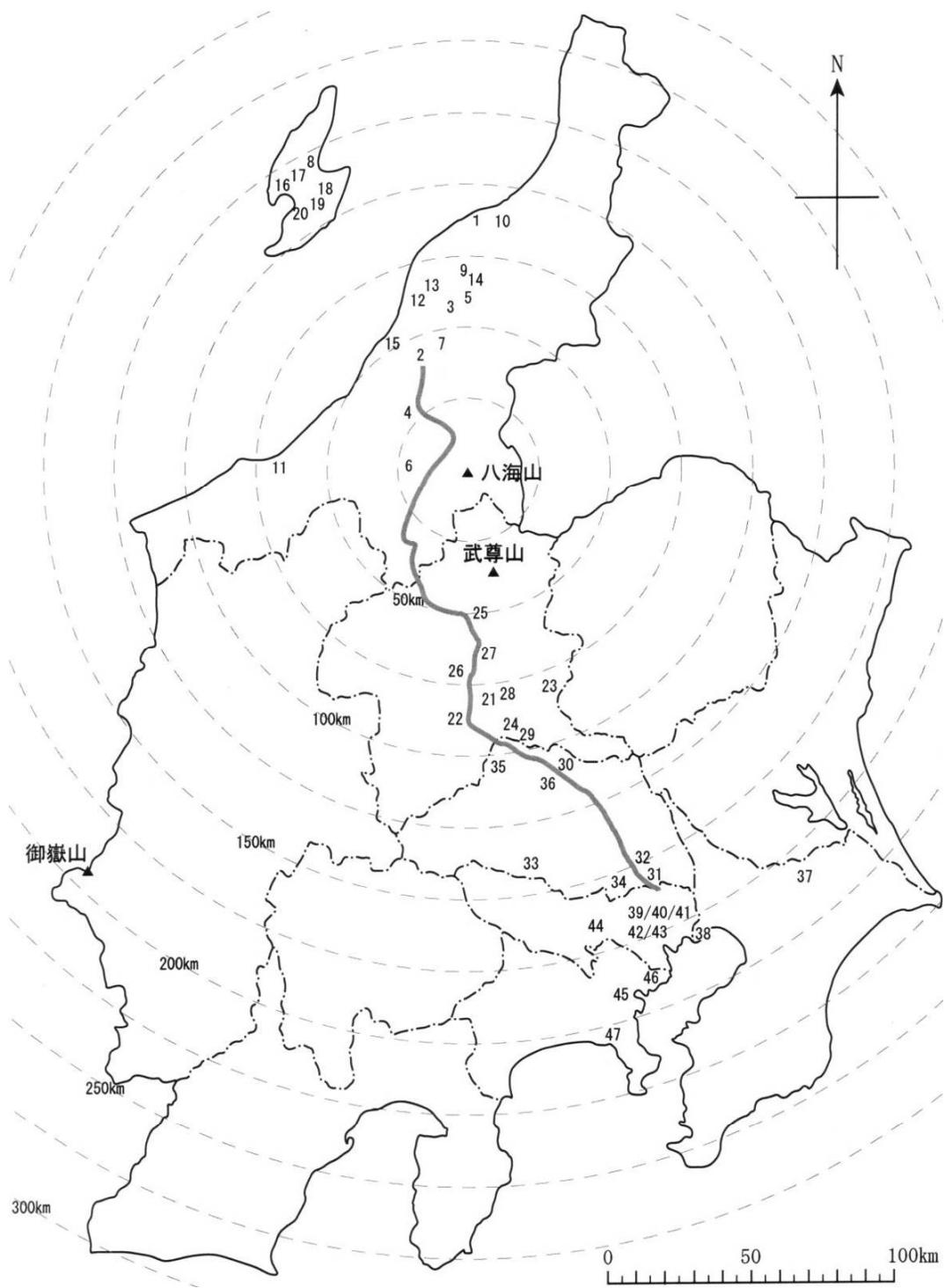
39) 前掲10), 233頁。

40) 神徳会は、昭和25年に長岡の行者が御岳教から派生し組織した。一心講の起源は、武蔵国出身の御岳行者一心が、江戸を中心に、武蔵、上野、下野で組織した講である。長岡市編『長岡市史 別編 民俗』長岡市、1992, 517頁参照。

41) 例えば、群馬県子持村の場合10月20日の火渡り大祭の時、募集により参る(子持村誌編さん室編『子持村誌 下』子持村、1987, 986頁)。同じく群馬県境町の場合は、毎年8月7日ごろ希望者を募り参拝・登山した(群馬県教育委員会編『境町の民俗』群馬県民俗調査報告第5集、1964, 129頁)。

42) 前掲40), 517頁。

43) 前掲40), 518頁。



第2 6図 八海山信仰に関する講・教会等の分布

注)「八海山大崎口崇敬者名簿」八海山尊神社社務所所蔵、1999、全国神社名鑑刊行会編『全国神社名鑑 上』全国神社名鑑刊行会、1977、および 1999 年に筆者が行った現地調査での靈神碑に記載されている講に関する情報から作成。図中の数字は第 2-3 表の No. に対応している。

## 第2 3表 八海山信仰に関連する講・教会等一覧

No.	所在地	講名	系	No.	所在地	講名	系	No.	所在地	講名	系
1 新潟県 新潟市	新潟八海山教会	10 豊栄市 知野豊栄講	八	29 境町 境町一心講	八	御					
	新潟市八海山扶教會	11 上越市 上越市講中(伊倉)	扶	29 境町 丸江一心講	八	御					
	靈風講	12 分水町 地藏堂八海講	八	29 境町 御嶽教群馬県奉贊会	八	御					
	大野講	13 吉田町 八海山吉田教会	八	30 熊谷市 境玉県	八	御					
	長岡御	14 田上町 白根知野講	御	30 熊谷市 御嶽教丸江一心教会	八	御					
	御嶽教海心靈風會	15 出雲崎町 出雲崎講社	御	30 熊谷市 熊谷御嶽教会	八	御					
	御嶽教神祇教	16 佐和田町 神徳会	御	31 川口市 丸玉講	八	御					
	御嶽教八海山神盛會	17 金井町 神誓会	御	31 川口市 御嶽教丸江一心教会	八	御					
	長岡一心講	18 新穂村 野外講中	御	32 浦和市 優和会	八	御					
	不動一心講	19 畑野町 柴坂講	御	32 浦和市 普寛中教会	八	御					
2 長岡市	御嶽教愛國泰神教會	20 真野町 神誓会	御	33 飯能市 神寿教会	八	御					
	神靈會	20 真野町 神徳会	御	34 朝霞市 優和会	八	御					
	神徳會	20 真野町 神徳会	御	35 尾玉郡 危除御山神社	八	御					
	長岡神明教會	20 真野町 神徳会	御	36 大里郡 神明講社	八	御					
	三條正導講社	群馬県	群馬県	37 成田市 千葉県	八	御					
	三條市神心講	21 前橋市 山王講		37 成田市 丸江一心教会	八	御					
	御嶽教八海山本部大教会	21 前橋市 八海山友の会		38 浦安市 新泉講	八	御					
	八海山布教所	21 前橋市 優和会		東京都	東京都	御					
	大湊講	22 高崎市 福堂講中		39 板橋区 御嶽教会	八						
4 小千谷市	神習教八海山支教会	22 高崎市 優和会		40 江東区 笠原講	八						
	八海山布教所	22 高崎市 福堂講中		41 品川区 百合丘講	八						
5 加茂市	御嶽教八海山加茂教會	23 桐生市 優和会		42 新宿区 御嶽山大教普寛大殿教會	八						
	八海山三神教會	23 桐生市 八海山友の会		43 目黒区 寺田講社	八						
6 十日町	八海山三神教會	24 伊勢崎市 伊勢崎八海講		44 府中市 大勝講	八						
	八海講	24 伊勢崎市 大勝講		神奈川県	神奈川県	御					
7 見附市	八海講	25 沼田市 子持一心講		45 横浜市 大心教会	八						
	両津市八海講	25 沼田市 優和会		46 川崎市 栃木寺田講社	八						
8 両津市	御嶽教両津教會	26 渋川市 子持一心講		47 鎌倉市 百合丘講	八						
	神徳會	27 赤城村 優和会		47 鎌倉市 百合丘講	八						
9 白根市	白根海宝会	28 大胡町 アブミ講		47 鎌倉市 大心教会	八						
				47 鎌倉市 栃木寺田講社	八						

注)「八海山大崎口崇敬者名簿」八海山尊神社社務所所蔵、1999、全国神社名鑑刊行会編『全国神社名鑑 上』全国神社名鑑刊行会、1977、および 1999 年に筆者が行った現地調査での靈神碑に記載されている講に関する情報から作成。

No. は、第 2-5 図の数字に対応している。

八:八海山，扶:扶桑教，御:御嶽教の略。講の系統は、判別可能なものの記載し、不明は空欄とした。

るが<sup>44)</sup>、靈神碑に記載されている年代を考慮すると、新潟市や長岡市などの講による靈神碑建立のうち確認できるものに限っても昭和初期のものがあり、講組織というものが講員の間で存続され、ある程度安定したものと考えられる。さらに靈神碑建立に必要な靈神号を受けるためには、10～20年といった年月の修行を要することからも、さらに遡った時期、つまり布教活動が盛んに行われていた時代から信仰が維持されてきたと考えられるからである。

<sup>44)</sup> 八海山尊神社山田泰利氏の話による。

## 八海山信仰の展開と分布要因

では八海山信仰の分布として、大崎口崇敬者名簿、大崎口里宮周辺の靈神碑、八海山に関わる講の3つの分布から、八海山信仰の分布に関するいくつかの特色を確認することができた。まず、八海山信仰の分布が、新潟県、群馬県、埼玉県、東京都などに集中している一方で、新潟県北部や東北地方、長野県、富山県などでは少ないと。また中山道から三国街道沿いに分布が集中してみられることなどである。ここで考えられる分布の主な形成要因として、木曽御嶽信仰の影響と交通路と行者の活動の関係という2つがあげられよう。そこでここでは、八海山信仰の展開をふまえ、八海山信仰の大崎口崇敬者の分布にみられる特色を形成する要因について以上の観点から検討することにする。

八海山信仰の展開については、宮家が、靈神碑に刻まれている建立年代から、靈神碑建立の盛んな時期を確認することができるとして、以下の4つの時期に区分している<sup>45)</sup>。年代別の靈神碑建立数については、第2-4表に示した。

第1期：普寛による八海山開山につぐ幕末の1840

~60年頃。

第2期：明治維新後の八海山信仰が再度発展をとげた明治16年から30年頃。

第3期：大正末から昭和初期の関東への拡大期。

第4期：大崎の八海神社を中心とする活動が活発化する昭和36年以降。

第2-4表 年代別靈神碑建立数

建立年代	靈神碑数(基)
明治1~5	1
6~10	0
11~15	0
16~20	15
21~25	8
26~30	4
31~35	2
36~40	0
41~44	4
大正1~5	7
6~10	11
11~14	14
昭和1~5	17
6~10	28
11~15	14
16~20	7
21~25	1
26~30	5
31~35	2
36~40	48
41~45	2
46~50	10
51~55	3
56~60	5
61~63	2
平成1~5	3
6~10	4
11~13	2

注) 宮家準編『慶應義塾大学宮家研究室報告 修験者と地域社会 - 新潟県南魚沼の修験道』名著出版、1981、231頁をもとに作成。昭和56年以降については、1999年の大崎口里宮周辺の現地調査により追加。

<sup>45)</sup> 前掲10)，231-237頁。

第1期以前については（1）で述べたように、古代の原初的山岳信仰に始まり、中世に入ると仏教化が進むこととなったが、八海山信仰がどれほどの広がりを有していたのかは江戸末期に至るまで確認することができない。そのためここでは、宮家の区分に従い、近世末の普寛による開山以降の展開を第1期から第4期として述べることとしたい。

第1期は、1794（寛政6）年の普寛による八海山の開山により、八海山信仰が大きく展開し民衆に広まりはじめ、山麓部における各八海神社の活動が活発化した時期である。

第2期は、各地で行者を中心に講が形成された時期であり、大崎の泰賢講もこの時期に組織された。

第3期では、それまで山口や藤原の八海神社が積極的に布教活動を行うなど活発な動きをみせていたなか、新たに大崎の八海神社が加わり新たな局面を迎えた。すなわち、里宮間の崇敬者の獲得争いが激しくなり、各社の布教活動が関東へと拡大した時期と捉える。

第4期の戦後になると、八海山信仰の最大の拠点は、大崎の八海神社へと移ることとなつた。

八海山大崎口崇敬者の分布は、新潟県のほか、群馬県・埼玉県・東京都に数多く認められるわけである。それは、江戸を拠点として活動していた普寛が、木曽御嶽を開山したことにより、まず関東一円に御嶽信仰をもたらしたことと関連する。その後八海山の開山を行うことによって、普寛の活動にともない御嶽講の成員が、木曽御嶽振興と関係する靈場・修行の場として八海山への登拝が起きたためであるといえるだろう。

ここで、木曽御嶽信仰について簡単に触れると<sup>46)</sup>、まず尾州春日井出身の行者覚明が、1785（天明5）年に黒沢口から登拝し、木曽御嶽の開放を行い、その後、秩父出身で、江戸を拠点として活動していた普寛が、1792（寛政4）年6月に木曽御嶽の王滝口を開き中興開山を迎えた。普寛は翌々年において八海山や武尊山なども開山している。王滝口開削後の御嶽信仰は、普寛が江戸を中心に積極的に信者をまとめ講中を作ったことにより、関東を中心に大幅に分布が拡大したとされる。普寛の死後においても、弟子の広山、順明、泰賢などが布教活動を続けたこともあり、御嶽信仰はさらに普及した。このことが民衆の間に御嶽信仰を急速に普及させる要因となっているのである。覚明を師事し結成された覚明系の講は、普寛系の講が江戸を中心に結成されたのに対して、御嶽山麓にまず結成され、覚明の出身地である濃尾平野を中心に関西、四国、九州と西方へ普及していった。

このように、行者普寛が江戸を中心とした関東一円に御嶽講を組織していたことにより、八海山の開山以降は、修行の山のひとつとして八海山への御嶽講の登拝が行われるようになったことが、八海山信仰の拡大を生んだ要因のひとつといえよう。八海山信仰に関わる講において、御嶽教系の講が多くみられたこともまた、こうした木曽御嶽信仰の影響によるものと考えられる。明治期以降も、長岡市や佐渡などの地域においても、御嶽行者の活

<sup>46)</sup> 木曽御岳信仰の概略については、宮田登「近世御岳信仰の実態」（鈴木昭英編『山岳宗

動により八海山信仰が拡大したとされる<sup>47)</sup>。

八海山信仰が展開する以前において既に全国的に浸透・定着していたと考えられる御嶽信仰の存在が、現在みられる八海山信仰の分布を規定した要因のひとつと考えられる。つまり、八海山信仰は御嶽信仰を媒介あるいは基盤として山麓域を超えた範囲まで展開することができたと考えられ、このことから八海山信仰の分布地域と御嶽信仰の普及地域が重層していることが推察される。

そこで、木曾御嶽信仰の分布を都府県別にみてみる。

『全国神社名鑑』<sup>48)</sup>より御嶽教の教会・組織を抽出し分布をみると、全国的に広く分布しているが、ここでは本州東部に限ることとする。第26図より、まず愛知県に多く分布していることがわかる。また関東一円にも認められる。新潟県の分布数が42であることも注目できる。新潟県内における御嶽信仰の分布は、長岡市とその周辺の三島郡に多く分布がみられるほか、新潟市や佐渡、上越市などにもある程度の数が存在している。また『全国神社名鑑』に記載されている御嶽教会のなかで、八海山の名がついている教会は、長岡市の御嶽教八海山神盛会、三条市の御嶽教八海山本部大教会、加茂市の御嶽教八海山加茂教会と、新潟県内のみで確認できる。これらの御嶽教教会の所在地は、大崎口八海山尊神社の崇敬者の数が多い地域である。

しかしながら、八海山信仰の分布は、新潟県、群馬県、埼玉県、東京都、神奈川県、千葉県以外の地域への浸透が弱いことを本章で示した。そうしたことから、八海山信仰が受容される要因として御嶽信仰の有無をあげるのみでは十分な説明にはなっていない。また靈山を中心として時間経過とともに、同心円的に広がっていっただけでもないことがわかる。もし同心円的に拡大していくのであれば、東北地方においても八海山信仰がもっと浸透していても良いはずだからである。

そこで、もうひとつ分布を規定する要因として、あげた交通路に関して次に検討する。崇敬者の分布の特徴のひとつとして、新潟県、群馬県、埼玉県において、中山道および三国街道（現・国道17号線）沿いに分布の集中がみられた。これは、行者の活動がそうした街道沿いに行われたためと考えられる。そのため、靈山からの距離だけでなく、行者普寛の活動に関わりある場所、拠点も分布に特色を与えているだろう。例えば、本庄市は、普寛・泰賢の両者の没した地であり、両者の遺骨を分骨し埋葬しているうちのひとつである普寛堂が建立されていることから<sup>49)</sup>、八海山信仰の要所といえる。そのため、周辺の群馬県伊勢崎市や佐波郡境町といったところも、八海山信仰が盛んな地域として形成されていると考えることができる。

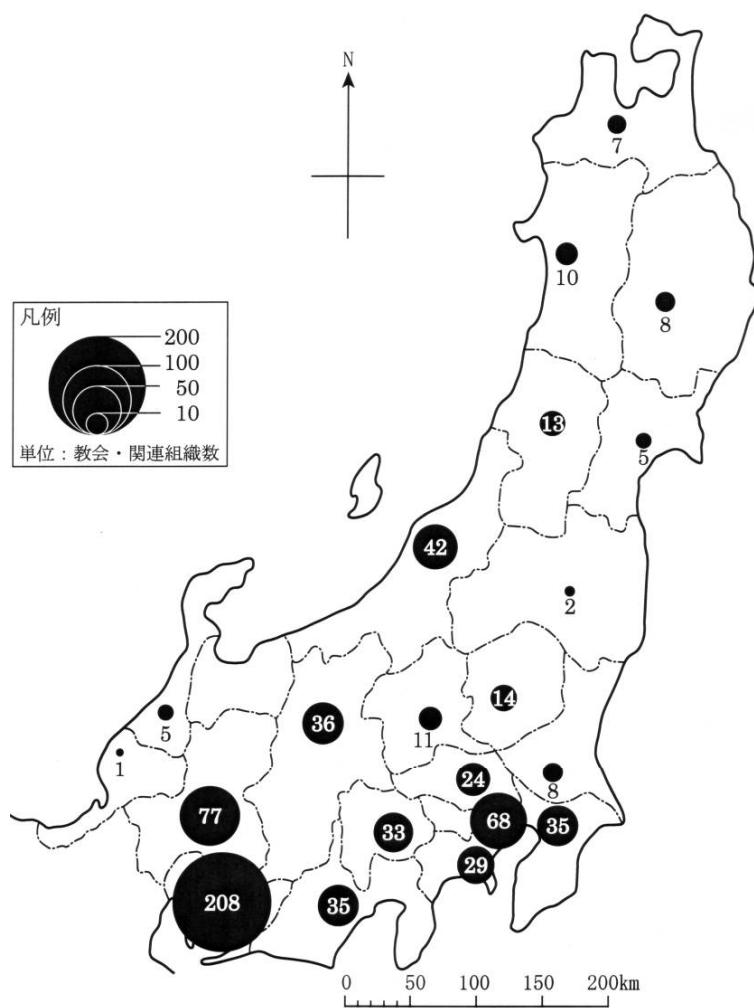
---

教史研究叢書9『富士・御岳と中部靈山』名著出版、1978) 167-186頁を参照。

47) 前掲10), 231-237頁。

48) 前掲38)。

49) 前掲17), 970-973頁。



第2 7図 木曽御嶽信仰の教会・組織の分布（本州東部）

資料：全国神社名鑑刊行会編『全国神社名鑑 上』全国神社名鑑刊行会、1977より作成。

このように八海山信仰の分布は、八海山から離れるにつれて、崇敬者数も減少していくという単純なパターンに見えるが、分布の形成の過程と要因に関して考察を進めてみると、分布の構造について以下のことが予測できるだろう。すなわち、分布が密である地域が、北部を除く新潟県内、群馬県、埼玉県、東京都に限られる要因として、行者普寛の活動が重要な要素となっていることがあげられる。また、木曽御嶽信仰の影響も予想される。しかしながら、木曽御嶽信仰は全国的に拡がっているにもかかわらず、上記の4県以外で八海山信仰が浸透していないといえる。つまり、普寛系の御嶽講との関係性から木曽御嶽信仰の伝播が八海山信仰の発展に大きく影響したことを意味している一方で、木曽御嶽からの距離が近い地域には八海山信仰が浸透しなかったことが認められる。それは、八海山信仰の展開においては、木曽御嶽信仰の影響を大きく受けているが、その影響はあくまで一

方的であり、その反対の方向、つまりは八海山信仰から御嶽信仰への作用力は小さかったといえる。こうしたことから、複数の靈山の間に階層性が形成されていることを指摘することができるのではないだろうか。

## おわりに

以上、本稿では八海山信仰を対象に、その展開の歴史的背景をふまえ、その分布に関して分析してきた。

まず時間経過に沿って八海山信仰の分布を整理してみると、近世末以前、つまり普寛らによる中興開山以前における八海山信仰の分布域は、古代においては山麓部を中心とした広がり、そして中世になり仏教化によって越後有数の靈山として発展したことが考えられるわけだが、その後近世に入っても長い間賑わうことなく、近世末以降の普寛ら行者の活躍を勘案すると、それ以前の分布域は八海山麓周辺にとどまっていたと考えるのが妥当であろう。次に、近世末の中興開山から、江戸を拠点として活動していた普寛によって結成された御嶽講が八海山へ登拝することで、八海山信仰の分布は江戸を中心とする関東へと拡大したと考えられる。靈神碑の建立年代など<sup>50)</sup>から、少なくとも昭和初期においては八海山信仰が埼玉、群馬県にまで展開していたといえよう。靈神碑の建立が多い1955年代以降は、大崎口の布教活動が活発になったことが要因となっている<sup>51)</sup>。

そして、このような分布が形成された要因として確認できた点は、八海山信仰が近世末以降の信仰の形態や分布において、木曽御嶽信仰の影響を受けていたことであり、御嶽信仰の浸透は、八海山信仰の伝播・浸透の基盤となっていたと考えられる点である。しかし木曽御嶽からの距離が近い地域においては、反面、八海山信仰が伝播する上での阻害要因となっていることも示唆される。また、図示した八海山信仰の分布から、普寛ら行者の布教活動が交通路沿いに行われたことが類推され、そのことにより八海山信仰の分布は、中山道および三国街道沿いにみられることとなったといえよう。

また、八海山麓の地元住民による靈神碑建立は稀であり、建立する主体の多くは、新潟県内でも遠隔地や県外に住む崇敬者であることがわかった。それは、大崎集落や城内地区

50) 霊神碑のほか、「八海山城内口案内組合誌」(池田亨「八海山火渡祭 八雲流三段法」高志路 231, 1974, 3-5 頁)に、「昭和五年四月日本山岳会登録（中略）登山案内信者地方名 東京都, 神奈川県, 埼玉県, 群馬県, 栃木県, 長野県, 愛知県, 新潟県一円」とある。

51) 山田泰利氏（八海山尊神社）によると、ひとつの登拝集団が、大きいもので 100 ~ 200 名にも上ったという。一人毎年一回は夏山に登拝していたという。

などの地元の崇敬者とそれ以外の崇敬者との間に存在する信仰形態の差異によるものである。その差異が生じることとなった要因は、地元の崇敬者による信仰が八海山を古代より作神、水分神とする性格を有しているのに対して、遠隔地の崇敬者による信仰は、近世末の中興開山に始まり、木曽御嶽信仰の影響を受けつつ発展した信仰であるからと考えられる。ただし、後者において全ての地域の信仰が、木曽御嶽信仰の影響を受けた信仰とは限らないことも留意すべきである。それは、靈山からの距離だけではなく、信仰の伝播過程とも関わると考えられ、遠隔地とした地域内で隣接する地域間において必ずしも同様の信仰ではないだろうからである。

この点に関しては、今後、各地域の信仰の受容について詳細に検討する必要があるだろう。もうひとつ、八海山と木曽御嶽といったように複数の靈山が互いに関連しながら信仰の空間的広がりを成り立たせているような場合に、各地域においていかに信仰が受け容れられているかという問題においては、信仰の重層性という側面からも注目すべき事象であり、今後の課題としてあげておく。

## 第3章

---

京都府旧佐賀村におけるカトリックへの集団改宗と  
農村社会

## 序　日本におけるカトリックの概略

### (1) 日本におけるカトリックの歴史的展開

本章以降では、日本におけるカトリックを事例として宗教と空間、社会との関係について考察を進めていくため、ここで日本におけるカトリックの歴史的展開と分布に関して概観しておこう。

日本におけるカトリックの歴史的展開のなかで、カトリックが教勢を強めた時期をいくつか確認することができる<sup>1)</sup>。まず第1期として日本へはじめてカトリックが伝来した時代である。よく知られているように、1549(天文18)年にイエズス会士の聖フランシスコ・ザヴィエルが鹿児島に上陸し宣教を始めたことに始まる。聖フランシスコ・ザヴィエル以降、数多くの宣教師が日本に上陸し、1569(永禄12)年には、信長は宣教師ルイス・フロイスと会見し、布教許可の朱印状を与え、キリスト教の保護を確約した。その背景には、信長と敵対関係にあった比叡山や高野山、日蓮宗、真宗などの仏教勢力の対抗勢力としての存在価値を信長が見出していた<sup>2)</sup>。信長から保護の約束をとりつけカトリックは九州から中国、畿内、東国へと教線を順調に拡大していった。とくに、九州から山陽にかけてはキリスト教の有力な地盤が築かれ、領主自らがキリスト教となり、その領内では大名の権力のもと布教が行われていた。しかしその後、当初は信長の全国統一の意思を受け継ぎ、宗教政策の面でもキリスト教を容認し、その保護政策をとっていた秀吉が、1587(天正15)年にキリスト教の禁止を発令した<sup>3)</sup>。ただし秀吉の禁教令は、その後の江戸幕府による宗教政策に比べると厳酷なものではなく発令後もキリスト教の数は増えつづけ、江戸幕府成立直後において70万人以上と報告されていたという<sup>4)</sup>。

1) 日本におけるキリスト教の歴史については、海老沢有道・大内三郎『日本キリスト教史』日本基督教団出版局、1970、五野井隆史『日本キリスト教史』吉川弘文館、1990、鈴木範久『日本キリスト教史物語』教文館、2001、小野泰博他編『日本宗教事典』弘文堂、1980、村上重良『日本宗教事典』講談社、1988を参照。

2) 村上重良『日本宗教事典』1988、212頁。

3) キリスト教弾圧の始まりは、1597年の長崎における26人のキリスト教殉刑である。いわゆる26聖人の殉教である。

4) 前掲2), 217頁。一方では、30万~40万ともされる。(末木文美士『日本宗教史』岩波新書、2006、126頁)。

これに対して、江戸幕府によるキリストン禁制は徹底的であった。江戸幕府は 1614(慶長 19)年全国にキリストンの禁止を発し、その後流血をともなう迫害と抵抗が繰り返し起ることとなった。以降キリストンは江戸時代末期まで日本から姿を消した。江戸幕府が衰退し終焉を向かえつつあった 19 世紀中頃から、再び外国人宣教師が日本へ上陸し始め、1865(慶應元)年 2 月 19 日長崎にフューレ、プチジャン両神父らのもと大浦天主堂が建てられるにいたる。翌 3 月 17 日約 15 人の老若男女が教会を訪れ、キリストンが日本に存在し続けていたことを知ることとなったが、その信仰形態は、周囲の目から逃れるために神道や仏教の要素を取り込んだ結果、その形態自体が彼等にとっての信仰形態の正当な姿となっていた<sup>5)</sup>。そのため宣教師らは、潜伏しつづけてきたキリストンたちを再教育して、彼らを新しいカトリック信徒として復活させていったのである。ただ明治へと時代が変わっても、政府は宗教政策として江戸幕府のキリスト教に対する政策を踏襲し、キリストンは邪宗門視され迫害は続いていた。しかしながら、1871(明治 4)年に岩倉使節団がヨーロッパ各地を訪問した際、ヨーロッパ諸国からキリストン迫害に対して激しく抗議をうけ、欧米諸国との関係発展のために、キリスト教解禁への政策変更を余儀なくなり、1873(同 6)年、「切支丹禁止、邪宗門禁止」の高札が撤去され、キリスト教布教が解禁され、日本におけるキリスト教の新たな展開を迎えるにいたったのである。明治の解禁以降は、カトリックよりもむしろプロテスrantの各教派の活動のほうが活発であり、とくに教育の場面においての貢献が大きく、今日における多くのキリスト教系大学が明治時代において既に開校されている<sup>6)</sup>。日本のキリスト教発展期のもう一つの時期が、戦後のおよそ 10 年間である。1945(昭和 20)年、日本は戦争に敗北し、連合軍に対して無条件降伏を宣言した。これ以降、日本に GHQ がおかれ連合軍統治の時代となった。カトリックは統治国の支援を背景に活発に活動を行なったのである。

以上が日本におけるキリスト教の歴史的概観であるが、新たな宗教が人々の間に入り込む余地として、思想的・精神的・社会的不安定状態の間隙をつくことが条件となる<sup>7)</sup>。つまり、時代の転換期である。上記のように、キリスト教が日本で多くの人々に受け容れられた時期というのも、室町幕府の衰退から江戸幕府の確立まで、江戸幕府の終焉と近代化の時代、第 2 次世界大戦敗戦と連合軍統治時代と、社会の変革あるいは社会的混乱の時代であることが分かるだろう。

5) 前掲 1) , 66 頁。

6) 前掲 1) , 84-88 頁。

7) 安斎伸「宗教と社会」(小口偉一編『宗教学』弘文堂, 1981) 145-187 頁。

## (2) カトリックの分布

現在日本におけるキリスト教徒の割合は、総人口のおよそ1%程度といわれている<sup>8)</sup>。日本のカトリックの組織形態についてみると、第3-1図に示したとおり北は札幌教区、南は沖縄教区までの16教区からなり、教勢に関してはカトリック中央協議会発表の2000年度統計<sup>9)</sup>により作成した第3-1表に示したように、教会数が1,034カ所（巡回教会・集会所を含む）、修道院987カ所あり、聖職者数は、合計1,749人、信徒数は16教区合計で43万5,944人となっている。この信徒数43万5,944人という数字は、2000年における日本の総人口1億2,692万5,843人<sup>10)</sup>の0.343%に過ぎない。全キリスト教徒のうちカトリックが約半数近くを占めると踏まえると、日本人のキリスト教徒率は1%未満となる。このように統計から判断すると、日本においてキリスト教は宗教として少数派に分類される。

カトリックの信徒分布を都道府県別でみると、信徒数の上位は、東京都、長崎県の7万人前後で、次いで神奈川県、大阪府、福岡県、兵庫県が2万人以上となる。信徒率でみると、長崎県の4.454%が最も高く、他の地域に比して完全に群を抜いている。長崎県の場合においては、歴史的背景によることが容易に創造できよう。他の地域に関しては、まず日本全体の信徒率よりも高いのは、上位から東京都、鹿児島県、福岡県、沖縄県、神奈川県、兵庫県、京都府、山口県である。福岡県や山口県に関しては、長崎県と同様に、カトリック伝来以来の歴史的背景より信徒率の高さが理解されよう。また、東京都、神奈川県、兵庫県、京都府などは、大都市圏を形成する都府県であるとともに、東京、大阪という日本の管区にあたる教区あるいは隣接地域であることから、近代以降においてカトリックが都市部において宣教され、普及したことによると考えられる。しかし、千葉県や埼玉県などは、周辺に位置しながらも信徒率は低いことも指摘できる。それは必ずしも、教会側の宣教による影響ばかりが原因ではないことを示していることになるのではないだろうか。沖縄県や鹿児島県などでは、必ずしも都市部において受け容れられているわけではなく、農村部においてむしろ受け容れられてきたと言える。これらを踏まえると、とくに近代以降におけるカトリック受容の特徴を理解するうえで、布教活動という要素以外に、さらに

<sup>8)</sup> 統計に表われないキリスト教徒、つまり宗教団体として認可されていない小さな教派等を含むと200万人以上、約2%になるともいわれる。Oda, M., 'Distribution of Christianity in Japan', *The Pennsylvania Geographer*, 37-1, 1999, pp. 17-37.

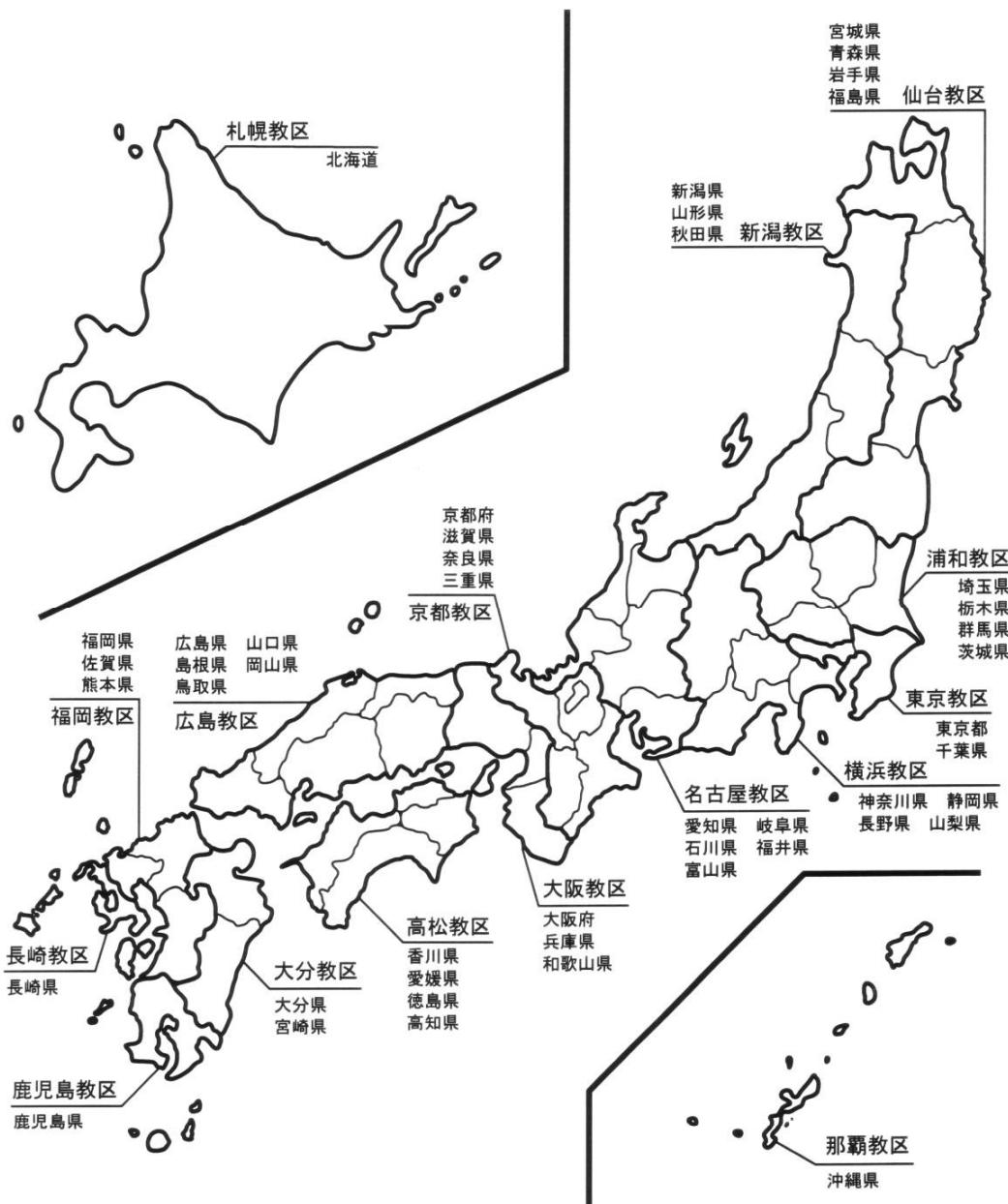
<sup>9)</sup> カトリック中央協議会HP「教勢調査(統計)」URL:

<http://www.cbcj.catholic.jp/jpn/data/00static.htm> 2003年2月6日検索。

<sup>10)</sup> 総務省統計局『平成12年国勢調査全国都道府県市区町村別人口及び世帯数(確定数)』総務省統計局, 2001。

は各地域における宗教的背景や社会的状況との関連から捉える必要性が十分に理解されよう。

現在のキリスト教徒の割合は上述の通り、日本においてキリスト教が主要な宗教の一つとして確立するまでには至ってはいないのが現状である。その理由としては、唯一の神への信仰、普遍の存在としての神を信仰するキリスト教に対して、多様な宗教・信仰を同時に持ちうるという日本人特有の宗教観、日本特有の宗教的な環境によることが一つに考えられる。そしてその日本人の信仰として維持され、家の存続基盤として存在してきた先祖に対する独特な感情、死者に対する観念が、キリスト教が日本において適応することを困難にしている要因の一つと言える。



第3 1図 日本のカトリック 16 教区

教区	都道府県	教会数	修道院	聖職者	信徒数	教区内都道府県別人口	信徒率
<b>札幌教区</b>	北海道	63	43	83	<b>17,510</b>	<b>5,683,062</b>	<b>0.308</b>
		63			17,510	5,683,062	0.308
<b>仙台教区</b>	宮城県	57	38	64	<b>10,869</b>	<b>7,384,163</b>	<b>0.147</b>
	青森県	17			4,052	2,365,320	0.171
	岩手県	12			2,150	1,475,728	0.146
	福島県	14			1,738	1,416,180	0.123
		14			2,929	2,126,935	0.138
<b>新潟教区</b>	新潟県	32	14	36	<b>7,414</b>	<b>4,909,159</b>	<b>0.151</b>
	山形県	21			4,825	2,475,733	0.195
	秋田県	4			820	1,244,147	0.066
		7			1,769	1,189,279	0.149
<b>浦和教区</b>	埼玉県	52	39	67	<b>19,387</b>	<b>13,953,351</b>	<b>0.139</b>
	栃木県	19			10,383	6,938,006	0.150
	群馬県	13			2,633	2,004,817	0.131
	茨城県	10			3,461	2,024,852	0.171
		10			2,910	2,985,676	0.097
<b>東京教区</b>	東京都	77	237	421	<b>84,733</b>	<b>17,990,386</b>	<b>0.471</b>
	千葉県	62			73,605	12,064,101	0.610
		15			11,128	5,926,285	0.188
<b>横浜教区</b>	神奈川県	84	88	150	<b>51,190</b>	<b>15,360,707</b>	<b>0.333</b>
	静岡県	43			38,997	8,489,974	0.459
	長野県	19			7,163	3,767,393	0.190
	山梨県	17			3,697	2,215,168	0.167
<b>名古屋教区</b>	愛知県	53	49	142	<b>24,406</b>	<b>12,281,772</b>	<b>0.199</b>
	岐阜県	36			18,690	7,043,300	0.265
	石川県	6			2,403	2,107,700	0.114
	福井県	5			1,865	1,180,977	0.158
	富山県	2			584	828,944	0.070
		4			864	1,120,851	0.077
<b>京都教区</b>	京都府	56	56	73	<b>19,126</b>	<b>7,287,357</b>	<b>0.262</b>
	滋賀県	32			10,626	2,644,391	0.402
	奈良県	6			2,130	1,342,832	0.159
	三重県	8			3,416	1,442,795	0.237
<b>大阪教区</b>	大阪府	86	106	192	<b>55,146</b>	<b>15,425,567</b>	<b>0.357</b>
	兵庫県	43			29,446	8,805,081	0.334
	和歌山県	32			22,916	5,550,574	0.413
<b>広島教区</b>	広島県	42	47	99	<b>21,204</b>	<b>7,732,499</b>	<b>0.274</b>
	山口県	12			8,635	2,878,915	0.300
	鳥根県	14			5,496	1,527,964	0.360
	岡山県	5			1,050	761,503	0.138
	鳥取県	8			4,939	1,950,828	0.253
<b>高松教区</b>	香川県	27	15	49	<b>5,328</b>	<b>4,154,039</b>	<b>0.128</b>
	愛媛県	8			1,578	1,022,890	0.154
	徳島県	10			2,226	1,493,092	0.149
	高知県	4			712	824,108	0.086
		5			812	813,949	0.100
<b>福岡教区</b>	福岡県	55	70	97	<b>31,241</b>	<b>7,751,697</b>	<b>0.403</b>
	佐賀県	32			24,345	5,015,699	0.485
	熊本県	9			2,804	876,654	0.320
<b>長崎教区</b>	長崎県	14			4,092	1,859,344	0.220
<b>大分教区</b>	大分県	72	97	152	<b>67,552</b>	<b>1,516,523</b>	<b>4.454</b>
	宮崎県	72			67,552	1,516,523	4.454
<b>鹿児島教区</b>	鹿児島県	26	36	63	<b>5,591</b>	<b>2,391,147</b>	<b>0.234</b>
		16			2,705	1,221,140	0.222
<b>沖縄教区</b>	沖縄県	29	36	44	<b>9,126</b>	<b>1,786,194</b>	<b>0.511</b>
		29			9,126	1,786,194	0.511
		19	16	17	<b>6,121</b>	<b>1,318,220</b>	<b>0.464</b>
<b>総 計</b>		830			<b>435,944</b>	<b>126,925,843</b>	

第31表 日本のカトリック信徒に関する統計

資料：カトリック中央協議会 HP「教勢調査(統計)」2000年12月31日現在

(<http://www.cbcj.catholic.jp/jpn/data/00static.htm>) および、総務省統計局「平成12年国勢

調査全国都道府県市区町村別人口及び世帯数(確定数)」、総務省統計局、2001。

注)教会数に関しては、小教区教会および所属信徒数が示されている準小教区・巡回教会の合計数

である。太字ゴシックは、教区内合計を表す。

## 関心の所在と課題

宗教が新たに人々の間に浸透する条件の一つとして、思想的・精神的・社会的不安定状態の間隙をつくことが指摘されている<sup>12)</sup>。本稿では、1949年に京都府何鹿郡佐賀村（現在は福知山市と綾部市に分属）において、村民の約半数にあたる816名がカトリックの洗礼を受けた集団改宗を取り上げ、宗教が社会から乖離して存在しているわけではなく、むしろ密接かつ複雑に社会の諸要素と関連していることを明らかにしたい。宗教と社会の関連については、例えば欧洲をはじめとした国々のキリスト教や、日本の神道や仏教などが、地域社会を形成し維持する基盤の一要素となり、当該地域の信念体系を支えてきた。その一方で、同一の信仰や宗教をもたない他者との差異が明確化する可能性もある。その端的な表れとして、地域的紛争問題における宗教の影響が想起されるが<sup>13)</sup>、他方、社会に対する影響力や機能をもちうる宗教が、逆に政治的に利用されることも指摘できる。つまり、宗教と社会は相互に影響しあう関係にあると言えるのである<sup>14)</sup>。

カトリックが日本において教勢を強めた時期は、数度確認することができる。概略すると、ザビエル渡来から江戸幕府確立期まで、江戸幕府の終焉と近代化の時期、第二次世界大戦後のGHQ統治期であり、これらの時期が社会の変革期や混乱期であることがわかる。本稿の対象となる時期は、1945年以来のGHQ統治のもとでキリスト教が宗教界での立場を強め、活発に布教活動が行われた時期といえる。またこの時期には、既存の宗教が衰退し、地域社会を支えてきた従来の価値体系が大きく変化しはじめていた。

旧佐賀村で集団改宗が起きた要因については、既に鈴木<sup>15)</sup>によって言及されている。それによれば、旧佐賀村の事例は、同時期に生じた和歌山県龍神村のカトリックへの集団改宗といくつかの共通点を有し、戦後の混乱と精神的荒廃、既存宗教の衰退、村の指導者や有力者層の積極的受容、経済的貢献への期待、キリスト教への親和性などが主な要因とし

12) 安齋伸「宗教と社会」(小口偉一編『宗教学』弘文堂、1981) 145-187頁。

13) 中野毅「宗教・民族・ナショナリズム-読み解くための基礎と問題の所在」(中野毅・飯田剛史・中山弘編『宗教とナショナリズム』世界思想社、1997), 3-26頁。

14) 宗教景観や宗教空間の形成過程における社会の諸要素の影響や、空間形成過程における宗教の影響について言及している主な研究として以下のものが挙げられよう。 Park, C. C., *Sacred world: an introduction to geography and religion*, Routledge, 1994, pp. 1-30, 大城直樹「村落景観の社会性-沖縄本島北部村落の祭祀施設の場合-」歴史地理学 159, 1992, 2-20頁, 森正人「近代における空間の編成と四国遍路の変容 両大戦間期を中心に」人文地理 54-6, 2002, 535-555頁など。

15) 鈴木範久『日本のカトリック村』宗教学研究会、1974。

て挙げられるという。

この旧佐賀村の集団改宗は、戦後に起こった三事例ある集団改宗のうちの一つであるが、集団改宗という事例はやはり特殊なものと思われる。現在でも日本のキリスト教徒の割合は、総人口の約1%に過ぎないが、カトリックはそのうちのおよそ半数を占める。信徒数は2003年12月31日現在で441,102人<sup>16)</sup>であり、日本における主要宗教の一つとして確立するまでには至っていない。日本においては一般的に、キリスト教は個人の信仰に基づく宗教、つまり都市的宗教と考えられている。このため地域共同体の結束が固く、伝統的家制度が強く維持されてきた農村部において、キリスト教が普及することは困難であったとされる<sup>17)</sup>。これに関連して言えば、カトリックの受容に際しては、「家」<sup>18)</sup>が阻害要因であると考えられる一方で、逆にカトリックが定着するために、まさに「家」の宗教として受容されることが必要であった可能性も指摘できるだろう。

日本人の意識には、潜在的に直系家族の観念が存在しているとされる<sup>19)</sup>。そして、直系家族の観念の象徴といえる祖先崇拜とキリスト教との関係に言及した研究では、祖先崇拜の存在が日本独特のキリスト教を形成したことが指摘されている<sup>20)</sup>。確かに都市部に比べ、家制度と地域共同体の連帯性が維持されてきた農村部だからこそ、キリスト教の受容は、集団改宗という特殊な形で現れた可能性がある。キリスト教の中でも、とくにカトリックの場合は、祖先崇拜などの既存の信仰への妥協的態度が一つの特徴として指摘でき、また幼児洗礼によって信仰が維持されているという側面をもつ。そのため都市や農村に関わらず、「家」の宗教として受容され、維持されてきたと推測することもできる<sup>21)</sup>。こうした理由から、本稿で扱う集団改宗の事例は、日本におけるキリスト教受容の特性を知るうえで重要な事例と考えられる。また、鈴木の旧佐賀村の集団改宗を扱った研究の焦点は受容の要因や動機に向けられ、一定の成果が挙げられているが、改宗と「家」および社会関係との関連についての分析は十分とは言えない。例えば、後述する位牌堂をもつ教会に関して

16) URL : <http://www.cbcj.catholic.jp/jpn/data/index.htm> 2005年4月17日検索。

17) 鈴木範久「教会と地域社会」(小野泰博他編『日本宗教事典』弘文堂, 1985), 583-585頁, 鈴木範久『日本キリスト教史物語』教文館, 2001, 194-196頁, 泉琉二「山村におけるキリスト教の受容(1) 和歌山県日高郡龍神村下柳瀬地区におけるカトリック教会の設立」待兼山論叢5, 1972, 101-123頁。

18) ここで言う「家」は、直系家族を志向することで家の永続性を希求してきた日本固有の家制度によって成立する集団を指す。

19) 鳥越皓之『家と村の社会学 増補版』世界思想社, 1993, 19-24頁。

20) キリスト教と日本の家制度や先祖祭祀 死者儀礼との関係に関する主な論文として以下のものが挙げられる。森岡清美「日本農村におけるキリスト教の受容」民族学研究17-2, 1953, 1-14頁, リード「キリスト教徒と祖先の関係」(P.L.スワンソン・林淳編『異文化から見た日本宗教の世界 [叢書・現代世界と宗教2]』法藏館, 2000) 72-96頁, 川又俊則「キリスト教会の日本社会への適応 東北・関東地方の教会墓地を中心に」国立歴史民俗博物館研究報告91, 2001, 187-200頁。

21) 鈴木範久「総説」(小野泰博他編『日本宗教事典』弘文堂, 1985) 549頁。

言及はあるものの、まさに特徴的な局面と考えられる祖先崇拜とキリスト教との関係については、なお検討の余地があるといえよう。

地理学において、日本のキリスト教に関する研究は少ないが、宗教の受容を扱った研究が皆無というわけではない<sup>22)</sup>。とくに、宗教の分布・伝播に関しては、山岳信仰を対象として主に研究がなされてきたといえる<sup>23)</sup>。それらの研究では、宗教の分布がいかに形成されてきたかについて、当該地域の宗教受容の過程を社会的・文化的文脈を踏まえながら読み解くことが課題として挙げられている<sup>24)</sup>。

日本のキリスト教に関する研究としては、小田によるキリスト教徒の分布を図示した論文があるが、そこでは、諸宗教の分布・伝播の研究と同様に、各地域での浸透過程や、その要因の分析が不十分であると指摘されている<sup>25)</sup>。竹村の末日聖徒イエス・キリスト教会（通称モルモン教）を対象とした研究は、モルモン教が地域社会において受容される際、当該地域に既存の仏教諸宗派の差異による地域特性が生じることを明らかにしている<sup>26)</sup>。宗教受容についての考察を進めるうえで、既存の宗教との関係は着目すべき要素の一つと言えよう。

主に宗教社会学の分野では、宗教の受容に関して、文化変容と土着化という概念を中心とした数多くの業績がある<sup>27)</sup>。森岡によると、文化変容と土着化は、宗教の受容という現象の中で同時にみられ、観察の視座を在来宗教と外来宗教のどちらに置くかによって区分することができる。前者が文化変容で、後者が土着化となる。共通する観察項目は、「何が

<sup>22)</sup> 主な研究として以下のものが挙げられる。 当麻成志「天竜河岸の1農村における宗教受容と地域構造の関係」地理学評論 33-4, 1960, 13-26 頁、 森正康「地域社会における教派神道の受容と定着 山梨県下の禊教」歴史地理学 130, 1985, 1-17 頁、 藤村健一「奥熊野の一村落における宗教の多様性とその要因」歴史地理学 43-5, 2001, 21-37 頁。

<sup>23)</sup> 日本における宗教に関する地理学の動向に関しては、 松井圭介「日本における宗教地理学の展開」人文地理 45-5, 1993, 75-93 頁を、 信仰圏研究の流れは、 金子直樹「日本における信仰圏研究の動向 山岳信仰を中心にして」人文論究 45-3, 1995, 104-117 頁を参照。信仰圏研究に関しては、 岩鼻通明『出羽三山信仰の歴史地理学的研究』名著出版, 1992, 金子直樹「岩木山信仰の空間構造 その信仰圏を中心にして」人文地理 49-4, 1997, 311-330 頁, 拙稿「新潟県八海山を対象とした山岳信仰の展開 大崎口崇敬者の分布を中心に」歴史地理学 45-5, 2003, 1-18 頁など。

<sup>24)</sup> 三木一彦「江戸における三峰信仰の展開とその社会的背景」人文地理 53-1, 2001, 1-17 頁、前掲 23) , , など。

<sup>25)</sup> Oda, M., 'Distribution of Christianity in Japan', *The Pennsylvania Geographer*, 37-1, 1999, pp. 17-37 を参照。

<sup>26)</sup> 竹村一男「末日聖徒イエス・キリスト教会受容の地域的差異に関する研究 山形・富山地域における事例を中心に」地理学評論 73A-3, 2000, 182-198 頁など。

<sup>27)</sup> 土着化概念をめぐる議論として、以下のものが挙げられる。 武田清子『土着と背教』新教出版社, 1967, 3-26 頁、 桜井徳太郎・小沢浩「外来宗教の土着化をめぐる問題」史潮 108, 1971, 68-82 頁、 森岡清美「『外来宗教の土着化』をめぐる概念的整理」史潮 109, 1972, 52-53 頁などがある。

変化して何が変化しなかったのか」，また「中心的価値は変化したのか」である。土着化については，さらに受容・変容・定着の三つのプロセスが問題とされる。まず，受容は外来宗教の理念的要素（教義）と行動パターン的要素（儀礼）とを受け容れることであり，定着とは，受容された外来宗教が在来宗教により変容し，安定することである。森岡をはじめとする宗教社会学の研究では，この概念図式を用いながら，対象地域でのキリスト教受容の過程に注目するものが多い<sup>28)</sup>。これらの論旨の中心は，外来宗教が地域社会に受容される際の社会状況や既存の生活様式の変容にある。しかし，この図式に基づく研究は，受容後の一時的な状態において社会と宗教の関係を捉えるにとどまっており，その後の宗教と社会の相互作用には言及していないという点で問題がある。従来の宗教に関する地理学的研究も，宗教が空間や場所の形成にどのように影響するのか，といった一方向的な分析に集中していたといえる。

以上のこと踏まえ，本稿ではまず，旧佐賀村のカトリック報恩寺（ほおじ）教会の『洗礼台帳』<sup>29)</sup>，『信徒名簿』<sup>30)</sup>，および位牌<sup>31)</sup>を資料として当時の家族構成を復元し，カトリックが受容される過程において，旧佐賀村内の地縁的関係と血縁的関係が集団改宗にいかなる影響を与えたのかを明らかにする。次に文化変容と土着化について，とくに宗教と社会との関係を映し出す儀礼とみなされる秋祭りと位牌を取り上げ，地域社会とカトリック教会，家とカトリック教会との関係の分析を行う。そうすることで，居住する人々の諸関係からなる社会と宗教との関わりを，この集団改宗の事例から明らかにすることを目的としたい。

<sup>28)</sup> 前掲 20），また 森岡清美・西山茂「新宗教の地方伝播と定着の過程 山形県湯野浜の妙智会会員調査から」（柳川啓一・安齋伸編『宗教と社会変動』東京大学出版会，1979），137-194 頁や，磯岡哲也「新宗教の地方伝播・浸透・定着とその要因 立正佼成会茨城支部の事例」（森岡清美編『近現代における「家」の変質と宗教』新地書房，1986），303-334 頁など，新宗教を扱った研究も参照。キリスト教の受容にともなう既存宗教・信仰の変容・崩壊を扱った研究としては，安齋伸「伝統的信仰と移入信仰の混合と変容 奄美大島西阿室部落の場合」人間科学 18, 1966, 76-90 頁，安齋伸「基層伝統信仰と移入宗教 沖縄，宮古島調査から」（柳川啓一・安齋伸編『宗教と社会変動』東京大学出版会，1979），195-233 頁などを参照。

<sup>29)</sup> 『洗礼台帳』（No. 1~4）。カトリック報恩寺教会に所蔵されているもので，1949~2002 年の報恩寺教会での受洗者が記録されている。

<sup>30)</sup> 『信徒名簿』。報恩寺教会に所蔵されており，2003 年現在までの信徒動向が世帯ごとに記録されている。

<sup>31)</sup> 報恩寺教会では 1957 年に，聖堂横に位牌堂が建設された。現在 243 基の位牌が納められている。位牌および位牌堂の存在は，日本の教会でも非常に珍しいものであるが，日本でキリスト教が受け入れられる条件の一つが示されているとも言えよう。詳細は 章で述べる。

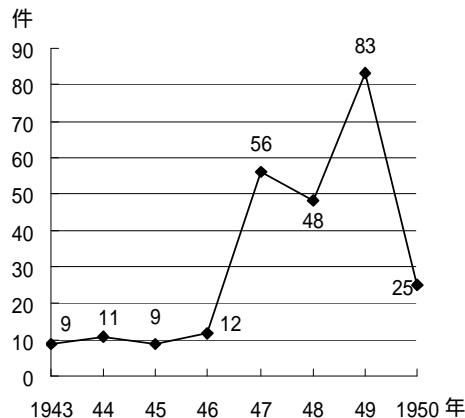
## 集団改宗への契機

### (1) GHQ統治とザビエル渡来400年祭<sup>32)</sup>

佐賀村で集団改宗が起きた1949年は、聖フランシスコ・ザビエルが日本へ渡来し、宣教を開始してから400年にあたる年であった。前年の1948年に、日本の司教会議において、400年を記念する行事を盛大に行なうことが決定されたのである<sup>33)</sup>。

当時のキリスト教をとりまく日本社会の状況を把握するために、キリスト教に関する新聞記事の見出しを抽出し、第3-2図にその件数の推移を表した。戦中期では件数自体が少なく、さらに「生れ変る贊美歌 三月から米英色一掃」(朝日新聞1943年2月22日付)や「加教徒も決然起つ 日本精神の宣揚へ」(同7月28日付)などとあるように、日本国内に戦時体制がしかれ、キリスト教諸宗派を含め宗教界の多くが、戦争協力へと流れてゆく状況となっていた<sup>34)</sup>。

戦後になると、キリスト教を扱った記事数が急増する。とくに1949年はザビエル渡来400年祭という記念行事について多くの記事が掲載され、この年が日本のカトリックにとって



第3-2図 1943年～1950年のキリスト教関連記事数の推移

資料：朝日新聞（東京本社版），1943-1950

<sup>32)</sup> ザビエル祭に関しては、本論文の第5章で詳細に考察を加える。

<sup>33)</sup> パウロ・フィステル編『日本のイエズス会史 再渡来後、1908年から1983年まで』イエズス会日本管区、1984、119頁。

<sup>34)</sup> 五野井隆史『日本キリスト教史』吉川弘文館、1990、298-303頁。

って大きな意味をもつ年であったと推察できる。このザビエル渡来 400 年祭は、公式式典として 5 月 29 日から 6 月 12 日までの約 2 週間にわたり行われた。公式式典は、長崎を皮切りに九州各地から、山口、広島、兵庫、大阪、京都、愛知、東京と、ザビエルの「聖腕」が国際巡礼団とともに巡り、長崎や西宮、東京ではザビエルの日本上陸 400 年を記念する「莊嚴ミサ」が催された。これら公式式典終了後も、巡礼団と聖腕は、北海道から東北地方など全国各地を巡り、いわば全国規模の行事であったと言えよう。

当時の日本は戦後の GHQ 統治下にあり、キリスト教は宗教界のみならず社会的にもその立場を優位にしていたようである。同じく新聞記事によると、巡礼団の来日に際し、マッカーサーは声明文を発表し、巡礼団との会談を行っていることが伝えられているし、各地を巡る中で、巡礼団が各地の市長や知事から招宴されるなど、歴訪した各所で歓迎されている様子が伝えられている<sup>35)</sup>。さらに記念ミサの広告が大々的に掲載され、ミサ式典には皇室からの列席者もみられる<sup>36)</sup>。第 3 表は関西地方発行の新聞から見出しを抽出したものである。それらでは、このザビエル渡来 400 年祭と関連付ける形で、佐賀村の集団改宗も取り上げられている。これらザビエル渡来 400 年祭を巡る一連の記事から、当時の社会状況や GHQ 側の意図の中で、キリスト教が「明るい未来」の象徴として扱われていることが読み取れる。もちろん宗教界への影響もあった。例えば、4 月 8 日の「悩みつきぬ佛教界 尼僧“同権”を叫ぶ 激しいキリスト教攻勢」という記事によると、「佛教界で最も真剣に考えられているのは戦後目ざましい攻勢を展開しているキリスト教への対応策であろう。……民主化のアラシが佛教界を強く吹きまくり、涼しい顔をしていられない時代」となっていたのである。

敗戦直後の日本では、GHQ の積極的な支援を受けてキリスト教、とくにカトリックが活発に布教活動を行うことができた<sup>37)</sup>。逆に言えば、GHQ もまた、戦後の混乱期にある日本の社会を再建するための精神的支柱として、キリスト教を積極的に用いたと推察できる。つまり、GHQ の政治的思惑としての日本のキリスト教化と、キリスト教会の宣教活動という欲求が合致していたことが読み取れるのである。

<sup>35)</sup> 前掲 33 ) 125 頁によると、公式式典後も北日本および西日本を訪問したことが伝えられており、「訪問することの出来なかつた町においても信者は駅へ来て列車の中の聖腕を崇敬したこともある」とある。

<sup>36)</sup> 高松宮の列席に関しては、カトリック大阪司教区編『カトリック大阪司教区・宣教 100 年・大阪教区史』カトリック大阪司教区、1966、76 頁において写真とともに記録されている。

<sup>37)</sup> 鈴木範久『日本キリスト教史物語』教文館、2001、190-193 頁。前掲 33 ) 119 頁、前掲 34 ) 303-308 頁。

第3 2表 1949年上半期の関西発行の新聞におけるキリスト教に関する記事の見出し

記載月日	見出し	新聞名	掲載版
2月19日	西宮球場で大ミサ 近畿のザビエル祭行事 キリスト教禁制定書 宝塚に貴重な古文献現る	朝日	京都版
2月20日	大ミサや巡歴 近畿のザビエル祭本決り 二つの“新顔”宗教 伝道はじめたモルモン教・クリスチャンサイエンス協会	朝日	京都版
2月23日	仏に模したマリアの像 丹後の農家から発見 細川ガラシヤ夫人を顕彰	朝日	京都版
3月12日	村あげてカトリックへ 京都府下で千五百名が帰依	朝日	京都版
3月15日	仏の村に“基督”的風吹き 成るか全村の改宗 きのう盛大な迎神祭	毎日	大阪版
3月27日	サヴィエルと日本 渡来四百年を偲ぶ座談会	毎日	大阪版
4月3日	公会堂を天主堂に カトリック村の昨今	朝日	京都版
4月8日	悩みつきぬ仏教界 尼僧“同権”を叫ぶ 激しいキリスト教攻勢	朝日	京都版
5月22日	西宮の“狂歌ミサ” 近づくサヴィエル四百年祭典 平和、復興の祈り 一般の参加待つ 史上16回目の盛儀	毎日	大阪版
5月25日	“見た希望の光” サヴィエル祭 キ枢機卿ら東上	朝日	大阪版
5月25日	“聖職として深い喜び” 法皇使節キ枢機卿昨夕入京	毎日	大阪版
5月26日	サヴィエル祭にマ元帥声明 花咲くを信ず ギルロイ特使マ元帥と会見	朝日	大阪版
5月26日	平和への道しるべ サヴィエル四百年祭にマ元帥声明 ギルローイ枢機卿、マ元帥訪問	毎日	大阪版
5月27日	「サヴィエル奇跡の右手」来日 昨朝スペインの旗に包まれて 巡礼団・東京に勢揃い 今朝 特別列車で長崎へ出発 “豊かな祝福を” オルティズ司教談 米代表も到着 日本の精神的再建へ ギルローイ卿声明	毎日	大阪版
5月29日	血は呼ぶ長崎の丘 巡礼団に若いスペイン娘 きょう 幕開くサヴィエル四百年祭 長崎で 全村あげて西宮のミサへ	朝日	大阪版
5月30日	サヴィエル四百年祭はじまる 殉教の丘に聖歌 信者三万が狂歌ミサ ピオ十二世に電話 原爆の長崎に立って ギルローイ法王特使の手記	朝日	大阪版
5月31日	「聖腕」で特別ミサ 永井博士ら廿五名に 巡礼団、鹿児島へ サヴィエル記念碑 平戸で除幕式	朝日	大阪版
5月31日	原爆の長崎に立って ギルローイ法王特使の手記 ミサと聖体行列 宮津のサヴィエル記念祭	朝日	京都版
6月5日	開こう平和の道 今秋・国民宗教大会 京都で聖腕行列	朝日	京都版
6月6日	狂歌ミサ西宮球場 力強く“平和”“平和”と三度 ミサ・ソレムニスに二万の祈り	朝日	大阪版
6月6日	狂歌ミサ(第一面上写真表題) 狂歌ミサ “見よ偉大な司祭” 青空に満つ 祈りと聖歌 西宮の盛儀 大阪市内文化財界人代表と歓談 宝塚劇場で京阪神知事が招宴 六百五十人参加のカトリック村	毎日	大阪版
6月7日	近畿の聖跡を歴訪 サヴィエル巡礼団 目立った佐賀村民 西宮の狂歌ミサに七百名	朝日	京都版

注) 大・中・小見出しを抽出。朝日新聞に関しては大阪版と京都版で同日で同見出しの場合には、京都版を省略している。太字ゴシックは、佐賀村の記載がある記事の見出しを表す。

## (2) 村内の状況

集団改宗を巡る佐賀村内の状況は、一通の手紙の中に記されている<sup>38)</sup>。ここでは、その内容から当時の村の様子を述べたい。

戦争終結以前から佐賀村ではキリスト教の導入がはかられていたようであり、その中心には、佐賀村報恩寺の檀那寺である昌宝寺の檀家総代高橋作二、佐賀村前村長片岡均、報恩寺筍農業組合長片岡次郎といった村の有力者らの名前がみられた。

佐賀村内でも、報恩寺の生産高は田一反で最高 15,000 円であり、同村内の私市の 75,000 円、石原の 65,000 ~ 70,000 円と比べると土地生産性が低かった。そのような経済的状況の打開のために村内の団結が必要であると、高橋氏ら周辺の人々の間から声が上がり、仏教に代わってキリスト教導入の話題が出るようになった。それが、1941 年頃であったとされる。

1945 年 8 月に、日本は敗戦を迎えた。村内は、「男はみんな労働者にされ」、「女はみんな連れて帰って隸者にされる」といった話がまことしやかに囁かれるなど、不安に満ちていた。その状況の中で、高橋氏と昌宝寺住職とが「キリスト教を村に呼ぶ」ことを確認したという。つまり、報恩寺の檀那寺の住職自らもキリスト教の導入を認めていたのである。その後、高橋氏ともう一人の檀家総代の二人は、村民に対してキリスト教導入について伏せたまま、1948 年 12 月 21 日に総代の地位から退いた。年が明け、1949 年になると、京都都市内でカトリックの司祭に会うなど、より現実的・具体的に話が進められ、2 月中旬に報恩寺の中心的立場にあったとされる先述の高橋氏ら 3 人の間で談合がもたれ、カトリックを村に呼ぶことが決意された。

談合翌日に、片岡家に奥佐賀（報恩寺・印内・山野口の 3 集落）の主な人を集めて会合が開かれ、さらに翌日、報恩寺公会堂で奥佐賀中の会合が催された。奥佐賀の会合では、全会一致でカトリック導入が議決された。その会合が終わると、佐賀村の全集落（報恩寺・印内・山野口・私市・小貝・石原）による役員会が開かれ、1949 年 3 月 14 日に迎神祭<sup>39)</sup>を行うことが決定された。

<sup>38)</sup> 「高橋作二氏から A 氏への書簡」全 7 頁、1960 年代、A 氏所蔵。この書簡は、集団改宗後に洗礼を受けた人物 A 氏の報恩寺教会設立に関する問い合わせに対し、高橋氏が返答として記したものである。これは、本稿のための現地調査による新出資料である。

<sup>39)</sup> 芦田昇・松田公一・野田吉夫編『三十年のあゆみ』報恩寺カトリック教会、1979、15 頁。当時の大阪司教区田口司教による司式のもと、最初のミサが佐賀小学校講堂で行われた。このミサは「迎神祭」と呼ばれ、旧佐賀村のカトリック報恩寺教会の出発とされる。

第3 3表 1949年における佐賀村内の地区別受洗状況

地区名	総世帯数	受洗世帯数	受洗世帯率 (%)	総人口	受洗者数	受洗者率 (%)
奥佐賀 <sup>1)</sup>	259	193	74.5	1369	766	56.0
(報恩寺) <sup>2)</sup>	(204)	(153)	(75.0)	(1093)	(597)	(54.6)
(印内)	(28)	(26)	(92.9)	(141)	(115)	(81.6)
(山野口)	(27)	(14)	(51.9)	(135)	(54)	(40.0)
私市 <sup>1)</sup>	99			481	24	5.0
口佐賀+私市 <sup>3)</sup>	192	0	0.0	989	0	0.0
不明					26	
佐賀村	550	193	35.1	2839	816	28.7

1) 現在、福知山市に属す。

2) 報恩寺・印内・山野口の数値は、奥佐賀の内数のため( )を付した。

3) 現在、綾部市に属す。

4) 表内の「—」は、数値不明を表す。

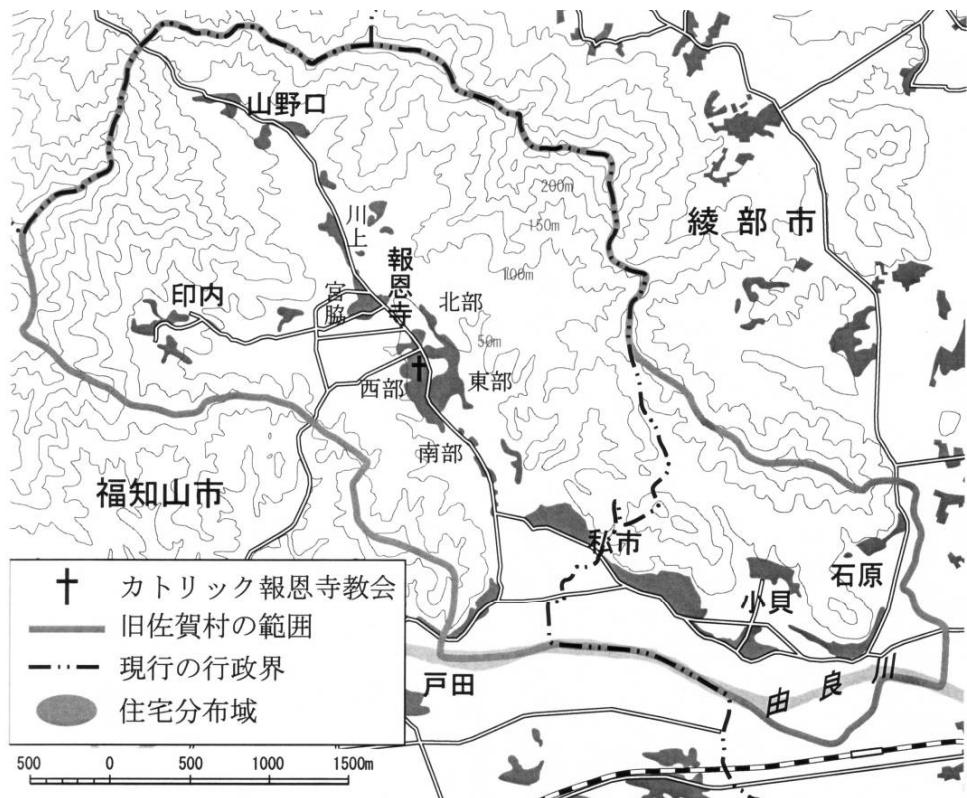
資料：総世帯数・総人口は、『京都府統計書』京都府、1950。受洗世帯・受洗者数は、カトリック報恩寺教会『洗礼台帳』、1949。

迎神祭は、佐賀村立佐賀小学校の講堂にて執り行われた。本格的な布教活動として、公教要理教育<sup>40)</sup>が板倉豊神父<sup>41)</sup>と一人の伝道師によって行われた。そして、4月17日の10人の受洗者を皮切りに、1949年12月末日までに合計816名が洗礼を受けるに至った。ただし、第3 3表からもわかるように、村内の受洗者率には集落によって差異が認められる。奥佐賀では、報恩寺が54.6%、印内が81.6%、山野口が40.0%にのぼり、また現在福知山市に属する私市でも5.0%とわずかながらも受洗者が出ていている。しかし口佐賀および私市（現在、綾部市に属する）では、受洗者は皆無である。

このような差異が生じた要因は、佐賀村の沿革から読み取ることができる（第3 3図・第3 4表）。佐賀村の沿革によると、江戸時代には、何鹿郡報恩寺村・印内村・山野口村・

40) 公教要理教育は、幼児洗礼の子どもや、洗礼志願者に対して行われた。教義をはじめ、信仰生活のあり方、宗教儀礼の作法などに関するカトリックの教えを伝えるものであり、聖書研究とは異なる。第2ヴァチカン公会議以降は、子どもや洗礼志願者のみならず、成人信徒にも教育を施すことが力説されるようになる。現在は、「カトリック要理」と称されている。高柳俊一「カトリック要理」（新カトリック大辞典編纂委員会編『新カトリック大辞典 第1巻』研究社、1996），1159-1160頁を参照。

41) 板倉豊神父は大阪司教区内にある西宮市の夙川教会から赴任した神父である。当初報恩寺教会をはじめ京都府北部地域は、大阪司教区の管理下にあったが、1951年に京都司教区へ編入され、以来レデンプトール修道会舞鶴修道院によって司牧されてきている。



第3 3図 旧佐賀村概観図

第3 4表 佐賀村沿革

	何鹿郡						
	報恩寺村	印内村	山野口村	私市村	栗村		
元禄郷帳 1700年					小貝村	石原村	...
地方行政区画便覧 1886年							
市町村制施行時 1889(明治22)年	何鹿郡佐賀村				大字小貝	大字石原	...
町村合併促進法 1953(昭和28)年	大字報恩寺	大字印内	大字山野口	大字私市			
1956(昭和31)年	福知山市				綾部市		
1957(昭和32)年	大字報恩寺	大字印内	大字山野口	大字私市	大字小貝	大字石原	...
現在	福知山市				綾部市		
	大字報恩寺	大字印内	大字山野口	大字私市	私市町	小貝町	石原町

資料：平凡社編『日本歴史地名大系 26 京都府の地名』平凡社、1981、角川日本地名大辞典編纂委

員会編『角川日本地名大辞典 26 京都府（上・下巻）』角川書店、1982。表中「...」は、本論とは直接的には関連しない複数の村・大字・町を簡略に示すことにした。

私市村・栗村の5カ村に分かれていた。さらに栗村は、小貝村や石原村など数カ村に分村した。1889年の町村制施行によって、報恩寺・印内・山野口・私市・小貝・石原の6村が合併し何鹿郡佐賀村が誕生した<sup>42)</sup>。しかし、集団改宗から7年を経た1956年9月31日に、佐賀村は福知山市と綾部市とに分村合併した。1953年に町村合併促進法が制定されると、報恩寺・印内・山野口からなる奥佐賀と、小貝・石原からなる口佐賀および私市の3地域間で合併問題が生じることとなった<sup>43)</sup>。その要因として、奥佐賀と口佐賀という、元来異なる生活圏が合併して一村を形成していたことが挙げられる。さらに佐賀村は、福知山市と綾部市の間に位置するものの両者を結ぶ主要道路からは離れた立地条件にあり、単独で発展するような将来性に乏しかったと考えられ、合併先の決定には、より慎重な議論が求められたのだろう。結果として、受洗者の出た地域と出なかつた地域に分村し、前者が福知山市へ、後者が綾部市へと合併することとなった。

佐賀村の主要産業は農業であるが、稻作とは別の経済的基盤として筍栽培が行われてきた。報恩寺の筍栽培の歴史は1812年に始まると伝えられる。1908年には報恩寺190戸の約8割が筍栽培に従事するに至り、1909年に最初の組合「報恩寺筍生産組合」が発足した。現在、組合は解散したが、収穫・出荷のみの「報恩寺筍生産グループ」を報恩寺・印内・山野口の生産者約200名が組織している<sup>44)</sup>。これら組合の成立からグループの組織化に至るまでには、奥佐賀の3集落（報恩寺・印内・山野口）が関わってきた経緯があり、ここでも奥佐賀が口佐賀や私市とは異なつた生産活動の基盤を有していたことがわかる。これらのことも、改宗率に大きな差異が生じた要因と考えられよう。

### (3) 集団改宗の要因

次に集団改宗の要因について、前述の鈴木が提示した点に即しつつ述べたい。

まず挙げられる要因は、戦後の社会的・精神的な混乱であり、村の将来への不安である。終戦を迎えた直後の日本は、敗戦国として社会的・経済的状況は荒廃し、GHQの統治により、それまでの天皇を頂点として確立されていた日本社会の諸価値観は覆された。経済

<sup>42)</sup> 平凡社編『日本歴史地名大系 26 京都府の地名』平凡社、1981、560-562頁、599-602頁、893-899頁、角川日本地名大辞典編纂委員会編『角川日本地名大辞典 26 京都府 上巻』角川書店、1982、658頁。

<sup>43)</sup> 旧佐賀村の合併問題の経緯は以下を参照されたい。綾部市史編さん委員会編『綾部市史 下巻』綾部市役所、1979、589-592頁、片岡春太郎編『佐賀村報』佐賀村役場、15~50号、1951~1954、田邊重敬『佐賀村誌』田邊重敬、1995、168-195頁。

<sup>44)</sup> 報恩寺筍の歴史に関しては、佐賀加工農業協同組合清算人会『報恩寺タケノコの歴史』、2003、前掲43) 145-148頁を参照。

的には、佐賀村、とくに奥佐賀は山に囲まれ、農地拡大の余地がなく、前記のごとく土地生産性も低かった。精神的な支えを担う宗教に関して言えば、奥佐賀内だけでも三つの仏教寺院があり、神社についても、ほぼ集落ごとに置かれていた。つまり仏教であれ神道であれ、佐賀村レベルでの宗教的中心あるいは象徴となる求心的な存在はなかったと言えよう。また葬式仏教と呼ばれもするように、寺院は日常生活上の精神的な拠り所とは決して言えない状態であった。

政治的・経済的・精神的に疲弊し荒廃した状況にあった日本において、戦勝国の宗教の一つであるカトリックは、日本の宗教の主流となる可能性を秘めた宗教であり、また豊かな象徴でもあった。例えば「村予算の大部分が教育費であるように、教育問題は極めて重要であるが、合併と同時に直面するのは中学校問題」<sup>45)</sup>とあるように、合併問題でも取り沙汰された、中学校建設をはじめとする村内の生活基盤の整備への経済的支援の期待を、カトリックは村民に大いに抱かせもした。また、既存宗教の衰退を眼前にして、この新たな宗教に村の建て直しをはかるうえでの精神的支柱の役割を期待したとも考えられる。

次に挙げられるのが、村の指導者や有力者層の改宗に対する積極的な姿勢である。佐賀村の集団改宗の場合、カトリック側から来村し布教活動を通して信者を獲得していくのではなく、先述した高橋氏や片岡氏といった村の有力者層を中心となって主体的・積極的にカトリックの導入をはかったことは、注目すべき点である。それと同時に、そうした中心的立場の年齢層よりもさらに上にあたる高齢者層が、積極的に受洗したことも注目に値する。既存の価値体系を否定することにもなりうるこのカトリックの導入に際して、最も保守的な態度を取ることが予想された高齢者層の人々が、熱心にカトリックの教義に耳を傾けたことは、特筆すべきこととして伝えられている<sup>46)</sup>。こうしたことが、集団改宗という現象を起こす要因となったことは否定できないだろう。

もう一つの要因は、キリスト教に既に接触していたことに基づく、キリスト教への親和性である。綾部市や福知山市は、戦前より主要産業として養蚕業・製糸業が発展していた土地柄であった。1896年に郡是製糸株式会社が設立され、何鹿郡（現・綾部市および福知山市）内の女性達が女工として働いていた。その中には、佐賀村の女性達も少なからず含まれていた。1909年に、郡是製糸の教育係として川合信水が招かれ、精神教育としてプロテスタントの教えに基づいた教育がなされることになった<sup>47)</sup>。実際に佐賀村の女性の数人

<sup>45)</sup> 前掲 43) 179 頁。

<sup>46)</sup> 筆者が行なった現地調査（2003 年 8 月 14・15 日、同年 9 月 20・21 日、同年 10 月 11・12・18・19 日）での聞き取りによる。以下、本章中の「現地調査」、「聞き取り」はこれに同じ。

<sup>47)</sup> 何鹿郡の養蚕業および製糸業の発達に関しては、前掲 42) 130-175 頁および 307-370 頁にまとめられている。また養蚕製糸業とキリスト教の展開についても、同書の 254-258 頁で言及されている。

がプロテスrantの信徒になったことも伝えられている<sup>48)</sup>。こうした接触の事実が、後の集団改宗というカトリック受容の下地としてわずかながらも働いたのではないかと考えられるのである。

## 社会関係と集団改宗

旧佐賀村では1949年の1年間で816人の受洗者を生み出すこととなったが、受洗者の大多数が奥佐賀の住民であり、現在では口佐賀に信徒はいない。このカトリックの受容を巡る地域差の要因の一つは、複数の生活共同体が一行政村内に存在していたことにあるものと思われる。また、奥佐賀であっても、改宗した住民は結果的に約半数であった。当時の日本社会におけるキリスト教は、教勢を伸ばす絶好の機会・環境にあったにも関わらず、その勢いは数年で衰えていった。これは、キリスト教が日本でさらに拡大・進出するためには、「家」の宗教として定着する必要があったことが要因と考えられる。以上の点から、集団改宗における村内の社会的諸関係と日本の家制度の影響に関して検討を加えたい。

具体的には、『洗礼台帳』、『信徒名簿』、位牌等を資料として、改宗パターンや、当時の家族構成、家と家の結びつきを復元し、改宗における地縁的・血縁的関係、「家」の影響について考察する。

### (1) 地縁的関係にみる改宗パターン

まず村内の地縁的な結びつきが、カトリックへの集団改宗にどのような影響を及ぼしたのかを検討する。福武によれば、農業における共同体制は、農作業のみならず、他の生活場面にもおよび、冠婚葬祭における相互扶助や家屋の建築・修理等での協力などにも、村落の共同体的一体性は存在し、さらにこの一体性は、各村落のもつ氏神すなわち鎮守に象徴されたとする<sup>49)</sup>。そのほか、年齢階層集団や葬式組、宗教・信仰による講集団なども、村落の地縁的内部集団として機能しうるといえよう。こうした農村の社会的基本構造を踏まえ、村民がカトリックを導入することで、それ以前は神社が有していた村の象徴としての機能をカトリック教会に求めたと仮定すると、地縁的な関係や集団組織が、新たな宗教

<sup>48)</sup> 前掲38)，および聞き取りによる。

<sup>49)</sup> 福武直『日本の農村』東京大学出版会、1971、87-94頁。

を受け容れる過程で大きな影響を及ぼしたと推測することができる。

現在の報恩寺教会信徒会は、居住地によって信徒をグループに分けて組織されている。そして各地区から男女一人ずつ計2名の代表者が出て、年数回の地区委員会が開かれる。また教会からの報告の伝達や教区報等の配達、教会維持費等の集金についても、この地区単位で行われており、代表者がその役割を担うこととなる。任期は2年で、持ち回りとなっている。この地区分けは、報恩寺・印内・山野口という上述の地縁的集団（集落）と一致している。報恩寺に関しては、さらに東部・西部・南部・北部・宮脇・川上の6地区に分かれる。このように信徒会の組織は、明確に地縁的集団を基礎として形成されているといえる。このことから、教会側が既存の地域的な結合を利用することで、教会運営を地域社会内に安定させようとした意図が読み取れる。一方で、村民側がカトリックを受容する際、地縁的関係がある程度の統制力を発揮したことも予測される。

第3 5表 1949年における佐賀村の各集落の受洗者数と洗礼月日

月日	総受洗者数	奥佐賀合計	報恩寺						印内	山野口	私市	不明
			東部	西部	南部	北部	川上	宮脇				
4 17	10	10	0	3	2	2	2	0	1	0	0	0
5 1	16	14	1	6	3	0	0	2	2	0	0	2
8	60	58	4	11	11	15	3	10	2	2	0	2
14	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
15	28	26	0	9	4	3	0	7	3	0	0	2
22	96	91	2	18	2	12	0	8	49	0	4	1
29	48	43	0	4	0	12	1	5	21	0	4	1
6 2	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
12	23	19	1	0	0	1	0	14	3	0	4	0
15	1	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
22	2	2	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0
7 1	2	2	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0
3	6	5	0	0	0	2	3	0	0	0	0	1
8	8	8	0	0	0	0	0	0	8	0	0	0
9	21	21	8	9	0	4	0	0	0	0	0	0
10	77	76	0	37	1	21	0	9	8	0	0	1
17	2	2	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0
24	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
8 5	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0
10	1	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
15	205	192	38	14	50	14	25	29	15	7	4	9
17	27	26	0	0	0	0	26	0	0	0	0	1
18	39	38	6	0	0	0	32	0	0	0	0	1
21	52	49	23	2	10	4	1	6	2	1	0	3
22	45	44	0	0	0	0	0	0	0	44	0	1
27	1	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
29	10	7	3	3	1	0	0	0	0	0	3	0
9 3	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
4	5	5	4	0	0	0	0	1	0	0	0	0
18	16	16	1	1	13	1	0	0	0	0	0	0
11 12	4	4	3	0	0	0	1	0	0	0	0	0
12 11	1	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
17	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
31	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
計	816	766	96	119	98	95	94	95	115	54	24	26

注)旧佐賀村の小貝および石原は改宗者が0人のため省略した。

資料:カトリック報恩寺教会『洗礼台帳』, 1949。

1949年の受洗者の内訳および受洗状況をみると、第3-3表に示したとおり、私市（現在、福知山市側）の受洗者率5.0%という数値は、奥佐賀の3集落と比較すると非常に低い。ともに福知山市へ合併したものの、この両者間の地域的なつながりは希薄であると言えよう。一方で報恩寺・印内・山野口の3集落からなる奥佐賀全体の受洗者率は56.0%，受洗世帯率は74.5%にのぼる。印内に至っては、92.9%もの受洗世帯率を記録している。

次に受洗日別に、第3-5表の受洗者の内訳をみていく。全体として10人以上が一度に洗礼を受けた日は、4月17日、5月1・8・15・22・29日、6月12日、7月9・10日、8月15・17・18・21・22・29日、9月18日である。とくに8月15日は、聖母被昇天祭というカトリックにおける大祝日の一つにあたるため、一日に205名の受洗者を数えた。さらに地区別に分析すると、地区によって受洗のピークが異なることが特徴の一つとして読み取れる。8月15日は、受洗者数が抜きん出ているため、受洗者を生んだ全ての地区である程度の受洗者数を確認することができるが、必ずしも各地区の最多受洗者数日とはなっていない。印内では比較的早い時期である5月22日に最多の49人、同29日にも21人の受洗者が確認される。また山野口に関しては他地区と比べると遅く、8月22日にピークとなり、44人が受洗している。これは山野口全受洗者の81.5%にのぼる。また報恩寺内を詳細に検討すると、東部・南部・宮脇が8月15日にピークを迎える、川上も8月15・17・18日の3日間の受洗者数は合計83人であり、川上の全受洗者数の88.3%に達する。西部および北部は5月中と7月10日に受洗が集中している。宮脇や南部に関しては、5月中の受洗者数は10人をこえている。

以上のように、地区単位で受洗の集中する日が異なっていることから、地縁的関係による統制力が改宗に対して働いたと捉えることができる。泉は龍神村の集団改宗を対象とした研究で、カトリック受容に際して、地縁的関係のみでもかなりの統制力が働くことを示し、それに血縁的関係が重なった場合、より強い統制がなされると指摘する<sup>50)</sup>。そこで次に、カブと呼ばれる同族関係を中心として取り上げ、血縁的関係と改宗パターンとの関わりについて言及したい。

<sup>50)</sup> 泉琉二「山村におけるキリスト教の受容（2） 和歌山県日高郡龍神村下柳瀬地区におけるカトリック教会への集団改宗とイットウ組織」三重大学教育学部研究紀要 25-3, 1974, 23頁。龍神村に関する研究はこのほかに、前掲15) 5-38頁、前掲17) がある。

## (2) 血縁的関係による改宗パターン

ここで、血縁的関係による改宗への統制力について考察するために、血縁的関係について概略的に説明したい。まず血縁的関係は、同族関係と親類関係という二つの親族組織に分類できる。同族は、祖先中心的な親族組織として定義され、本家と分家や、分家同士という家相互の系譜関係によって結びつく。構成単位は家であり、その結びつきは各家の構成員である個人の動向（死亡・誕生・婚入・婚出）に関係なく維持される。従って同族は、定形性・自立性・永続性を有し、経済的・社会的・宗教的に同じ志向をもちやすい。一方で、親類は自己中心的に組織化される関係で、個人の動向により、家と家との結びつきが生じたり、解消したりする。つまり、親類は同族とは異なり、恣意的・流動的な関係といえる<sup>51)</sup>。

この二つの親族組織の差異に注目して、集団改宗を分析する際には、前者の同族と称される家の連合がより重要となると考える。旧佐賀村が位置する丹波地方一帯には、カブ、株講、マキと呼ばれる同族集団が存在する<sup>52)</sup>。旧佐賀村では、カブを単位として先祖講という習俗がみられる<sup>53)</sup>。この講は、同一のカブが同一の先祖を祀ることに由来するものである。先祖講の日には、同一カブを構成する各家から大体二人ずつ代表として参加し、先祖祀りをした後、その年の当番の家で宴会が催される<sup>54)</sup>。先祖講はカブごとに行われる日時はまちまちであるが、いずれも12月～3月という農閑期に行われている。そしてこの先祖祀りの際、その年の当番家が属する檀那寺の住職により誦経されたが、集団改宗後は、当番の家がカトリックの場合、神父がその習俗の司式を行うこともあったと言う。つまり、同一カブ内において、必ずしも同一の宗教で統一されているわけではないことがわかる。

復元できたカブは7系統に限られるが、各カブの改宗の傾向を第3～6表に示した。同一のカブを構成している世帯でも、同じ地区に居住している場合に、改宗に対して統制力がより働いていることが認められる。カブという同族組織それ自体では、集団改宗に対して、肯定的であるか否定的であるかという方向性はみられず、それほど強く統制力は働かなかったと言える。つまり同一カブの構成世帯であっても、全てが同じ宗教的行動を取るとは限らず、むしろ居住地区の差異の方が、宗教的行動に対してより大きく影響すると指摘できる。

51) 山本質素「親類と同族」（福田アジオ・宮田登編『日本民俗学概論』吉川弘文館、1983）、24-34頁、前掲19) 47-48頁。

52) 滋賀県教育委員会・京都府教育委員会・奈良県教育委員会編『都道府県別 日本の民俗分布地図集成 第8巻 近畿地方の民俗地図1 滋賀京都奈良』東洋書林、1999。

53) 先祖講に関する記述は、現地調査およびアンケート（2003年9月21日配布、同年10月12日回収）による。以下、本章内の「アンケート」はこれに同じ。

54) 宿（ヤド）とも呼ばれる。当番の家（当番宿）の決定は、くじ引きや、あるいは上流側から順番にまわすなど、カブによって異なる。

第3 6表 各カブの改宗状況

カブ	構成 世帯数	改宗 世帯数	改宗率 (%)	構成世帯の居住地
A	2	1	50.0	全ての構成世帯が同じ地区
B	8	3	37.5	全ての構成世帯が異なる地区
C	3	3	100.0	全ての構成世帯が同じ地区
D	12	6	50.0	改宗世帯のうち西地区3, 北部2, 宮脇1, 非改宗は, 北部1, 不明5
E	5	5	100.0	全ての構成世帯が同じ地区
F	7	4	57.1	改宗世帯は全て同じ地区
G	3	2	66.7	全ての構成世帯が同じ地区

資料:カトリック報恩寺教会『洗礼台帳』, およびアンケート調査。

ここまで, 集団改宗時において, 地縁的関係と血縁的関係という人々の諸関係がいかなる影響を及ぼすかを示してきた。しかし, 宗教と地域社会との関連を究明するうえでは, その後の定着状況についても分析を加える必要がある。なぜなら, 宗教と社会との相互作用的な関係は決して静態的なものではなく, 繼続的かつ動態的であると考えるからである。

### (3) 世帯別の改宗パターン

本節では, 1949年に起きた集団改宗以降の信徒世帯の変遷を分析し, カトリックの定着について言及したい。第3 7表には, 奥佐賀における改宗世帯の変遷として, 1949年の地区別の改宗世帯数, 改宗世帯中の2000年現在における信徒名簿への記載の有無, 世帯主の改宗・非改宗, および位牌の有無を示した。

改宗者を出した世帯数は193であり, そのうちの87世帯が2000年現在まで信徒世帯である。それ以外に, 信徒名簿には記載がないものの, 位牌が教会に納められているケースが5世帯確認できるが, これらは, 後代の転出などにより, 報恩寺教会に籍が置かれていないことが要因となっている。

そして, 1949年の改宗世帯のうち, 2000年現在まで信仰が存続している世帯と仏教へと戻った世帯の差異を生じさせた要因の一つとして, 世帯主の改宗の有無が推察されるのである。実際, 世帯主が改宗した150世帯のうち85世帯が信仰を守り続けている一方で, 世帯主が非改宗の43世帯のうち41世帯がカトリックから仏教へと再改宗している。また

世帯主が改宗で、2000年まで信徒世帯であるのは、わずか2世帯にとどまっている。このことは、日本の「家」と密接に関係するものと考えられる。

日本では、戦前まで直系家族が維持されてきたとされる。直系家族は、以下の3点によって表される。 家は財産としての家産をもっており、この家産に基づいて家業を経営している一個の経営体である。 家は家系上の先人である先祖を祀る。 家は世代をこえて直系的に存続し、繁栄することを重視する<sup>55)</sup>。

一方、戦後の家族の形態は、小家族化し、夫婦の死亡および子どもの結婚等によって消滅するものと定義される核家族へと移り変わってきた。直系家族は永続性を、核家族は非永続性を特徴とする。この変化は祖先崇拜等にも変化をもたらしたとされる。しかしながら、核家族化し系譜意識が徐々に希薄化したとは言え、日本人には潜在的に系譜意識が残っているとも指摘されている<sup>56)</sup>。この家ごとの系譜意識の存在が信仰の継続を可能にするといえる。つまり、集団改宗が起きた時点における浸透、あるいは受容の段階から、定着のレベルに進むには、直系家族の系譜意識が基盤をなしていたと言えよう。

第3 7表 地区別信徒世帯の変遷

改宗世帯数 (1949年)	信徒名簿の 記載有無 (2000年)	世帯主の 改宗・非改宗	位牌	
			あり	なし
報恩寺 東部:25	あり 6	改宗 6 非改宗 0	4 0	2 0
	なし 19	改宗 14 非改宗 5	0 0	13 5
報恩寺 西部:28	あり 18	改宗 18 非改宗 0	15 0	3 0
	なし 10	改宗 3 非改宗 7	0 0	3 7
報恩寺 南部:28	あり 8	改宗 7 非改宗 1	6 0	1 1
	なし 20	改宗 12 非改宗 8	0 0	12 8
報恩寺 北部:27	あり 19	改宗 18 非改宗 1	18 1	0 0
	なし 8	改宗 4 非改宗 4	1 0	3 4
報恩寺 宮脇:23	あり 10	改宗 10 非改宗 0	10 0	0 0
	なし 13	改宗 9 非改宗 7	0 0	4 7
報恩寺 川上:22	あり 10	改宗 10 非改宗 0	10 0	0 0
	なし 12	改宗 10 非改宗 2	0 0	10 2
印内:26	あり 7	改宗 7 非改宗 0	3 0	4 0
	なし 19	改宗 13 非改宗 6	0 0	13 6
山野口:14	あり 9	改宗 9 非改宗 3	9 3	0 1
	なし 5	改宗 1 非改宗 2	1 0	2 2
奥佐賀 合計:193	あり 87	改宗 85 非改宗 2	75 1	10 1
	なし 106	改宗 65 非改宗 41	5 0	60 41

資料:カトリック報恩寺教会『洗礼台帳』、

1949~2000、カトリック報恩寺教会

『信徒名簿』、2000、および位牌

(現地調査)。

#### (4) 旧佐賀村の改宗パターンの特性

55) 前掲 19) 10-12 頁。

56) 前掲 19) 19-24 頁。

鈴木の分析結果では、「宗教で統一された株はあまりないようで」、「報恩寺でのカトリックの受容の基盤を、まったく同族的結合によっているとみなすこと」が困難であるとしている。そして受容の基盤は、家族単位でもなく、地縁的諸関係の方がより統制力を発揮したと結論付ける<sup>57)</sup>。

鈴木の結論を踏まえ、旧佐賀村の改宗パターンに関する本章での分析を整理したい。まず地縁的関係であるが、確かに受洗日の点で集落あるいは地区ごとに特色がみられ、改宗に際して、地縁的関係が統制力を発揮したといえる。同族関係の分析では、同じカブ内の全ての世帯が必ずしも、改宗に対して同じ態度を示してはいなかった。そして、旧佐賀村の集団改宗では、龍神村を対象として泉が指摘したような、地縁的関係による改宗パターンを血縁的関係が強化したとは言いかがたい結果が示された。このことは、第3-5表で示したように、地区をまたいだ同族関係がある場合、改宗への態度が一致するケースが少ないことから確認できる。つまり改宗に際して、血縁的関係はほとんど統制力を発揮せず、地縁的関係による影響が大きいことから、カトリックの受容の基盤が、空間的に連続して居住することで形成される地縁的関係にあると捉えることができる。これは、鈴木の分析結果をある意味で追認するものである。

しかし鈴木の研究では、その後の旧佐賀村における、信徒の動向に関する分析がなされていない。新たな宗教が受容されてから、信仰が人々の間に定着する段階までを分析する必要がある。なぜなら前節で明らかにしたように、改宗に際しては、地縁的関係のみならず、世帯主自身の意思決定という要素も関わっているからである。そして、その世帯主の意思決定は、「家」の意思決定となる。その背景には各家の系譜意識が存在する。一方で、血縁的関係に着目すると、カブを基礎として催行される先祖講は徐々に衰退し、改宗に対してもほとんど統制力を発揮しておらず、カブ組織が形骸化しつつあったと考えられる。

このように、受容の段階において、改宗に対する住民の態度には地縁的関係が大きく影響したが、定着という段階においては、その基盤は「家」であったと言えよう。そして、この二つの影響により、受容から定着段階へと進む中で見られる変容が、信仰者の宗教的行動に顕著にも現れている。そこで次章では、信徒の宗教的な実践に表れる既存宗教とカトリックとの関わりを検討し、地域とカトリック、家とカトリックの結びつきについて明らかにしたい。

---

<sup>57)</sup> 前掲 15 ) 39-75 頁。

## 旧佐賀村における既存の信仰とカトリック

### (1) 秋祭りと聖母行列

旧佐賀村の年間行事の中に秋祭りがある。この祭は、「お宮さんの祭」、「氏神祭」などとも呼ばれ、旧佐賀村および周辺地域においてほぼ同時期に行われている<sup>58)</sup>。開催時期は10月上旬である。旧佐賀村の秋祭りは、以前は10月9日に報恩寺の賀茂神社（第3・4図）で、10日に私市の佐須我神社で行われていたという。また印内と山野口もそれぞれ神社をもっており、それぞれ秋祭りが行われている。祭が近づくと、例えば報恩寺であれば各地区（東部・西部・南部・北部・宮脇・川上）の辻々と神社の境内に、「賀茂神社 氏子（講中）」と書かれた地区ごとの幟（第3・5図）が立てられ、辻々には各地区名が入る。報恩寺の賀茂神社の宵宮は、当番が夜通し境内で太鼓を打つ。本祭は午前中に子ども神輿が集落内を練り歩き、賀茂神社へと進む。正午過ぎより社殿で神事が行われ、当番地区の各年代の代表が座すことになっている。神事が済むと、成人男性による神輿が神社を出発し、各地区の辻々でその地区の住民から接待を受けるのである。



第3・4図 賀茂神社

注) 2003年10月12日、筆者撮影。



第3・5図 賀茂神社境内に

立てられた幟

注) 2003年10月12日筆者撮影。

<sup>58)</sup> 秋祭りの概要は、現地調査とアンケートによる。

ところで、農村の祭が村落の地縁的関係を基盤として行われることは今までにも指摘されてきた。つまり氏神を祀るといった宗教行動は、血縁的関係に基づくものではなく、また同一の地縁的集団が二つの神を祀るということは稀である。もし二つの神が祀られているならば、それは、地縁的関係が重複しているか、全く異なる神が祀られている場合などである。しかしそれでも氏神として祀られるのは、あくまでも一つに限られる<sup>59)</sup>。

集団改宗を契機として、旧佐賀村にはキリストという既存の神とは全く異なる神が祀られることになった。カトリックを導入した動機の一つに村の一致が掲げられ、カトリックが神社に代わる共同体の連帯のシンボルとして受け容れられた。このため、それまで氏神を祀ってきた神社を中心とする社会関係に何らかの歪みが生じ、カトリック信徒と非信徒との間に摩擦が生じたと考えられる。実際、とくに改宗直後には、地域社会の行事である秋祭りへの参加をカトリック信徒が拒否したことにより、両者間で秋祭りの催行を巡り軋轢が起こったという。ただし第2ヴァチカン公会議<sup>60)</sup>での取り決めの中で示されたように、カトリックの布教活動において、当該社会の既存宗教への態度が、否定や拒否から容認へと軟化したこともあり、カトリック信徒は徐々に社会的行事として秋祭りへ参加するようになった。場合によっては、カトリック信徒が氏子総代を務める場合もあるという。

一方で、カトリック報恩寺教会では聖母行列（第3-6図および第3-7図）という象徴的な行事が、1983年から行われるようになった<sup>61)</sup>。現在、報恩寺教会では、カトリックで定められた大祝日の一つである8月15日の聖母被昇天祭の日に、マリア像を御輿に載せて、報恩寺集落の西部・北部・東部を信徒がロザリオの祈りを捧げながら行列が進んでゆく。この聖母行列は、信徒自らが村内でカトリック固有の行事を望んだことで、新たに創り出されたのである。

当初、カトリック教会は村内一致のシンボルとして期待され受容されていたが、現在では信徒と非信徒とを明確に差異化する役割を果たしているようである。聖母行列という行事の開催は、まさにカトリック信徒が非信徒とは異なることを強調するための行動の一つと言える。つまり、カトリック信徒は秋祭りには社会的軋轢を生じさせないために参加するが、聖母行列を行うことで自らの宗教的アイデンティティを維持していると言えるだろう。

59) 原田敏明『村の祭祀』中央公論社、1975、141-163頁。

60) 第2ヴァチカン公会議は、1962年から1965年にかけて開催された。その目的は、現代世界に生きるカトリック教会となるための全面的な自己改革であり、従来の閉鎖主義を撤回し、開かれた教会をめざした。具体的には、典礼の改革、信教の自由、プロテstant教会との教会合同運動、諸宗教との対話などである。ネメシェギ「ヴァチカン公会議、第2」(新カトリック大辞典編纂委員会編『新カトリック大辞典 第1巻』研究社、1996), 579-589頁を参照。

61) 聖母行列の概要は、カトリック報恩寺教会『50年のあゆみ』カトリック報恩寺教会、1999、6頁、および現地調査による。



第3 6図 御輿に乗ったマリア像

注) 2003年8月15日,筆者撮影。



第3 7図 村内をゆく聖母行列

注) 2003年8月15日,筆者撮影。

## (2) 位牌と位牌堂

秋祭りが,地縁的関係と宗教的行動に関わる問題であるならば,血縁的関係との関わりでは,まず先述した先祖講が一つの事例として挙げられよう。そしてもう一つ,報恩寺教会を特色付けている位牌に注目したい。報恩寺教会には位牌堂が設けられている(第3 8図および第3 9図)。現在でも信徒が亡くなると,位牌が作られ,この位牌堂に納められる。全ての信徒に対して位牌が作られるわけではないが,信徒名簿から把握できる限り,少なくとも現在まで,信徒の死者数178人中136人の位牌が作られている。現在位牌堂には243基の位牌が納められている。

これらの位牌は,前面の記載内容と形態によって大きく6つの形式に分類できる(第3 10図)。Aは,信徒の死亡後に最初に作られるタイプ。B-1は,形態としては仏式であるが,十字架と洗礼名が記載される一人から二人用の位牌。B-2は,一人用で集団改宗以前に亡くなられた人のものに,十字架を付したもの。C-1は,洗礼名と俗名が刻まれ,非信徒の場合には俗名のみを記したもの。C-2は,非信徒を戒名で記す点で,C-1と異なる。



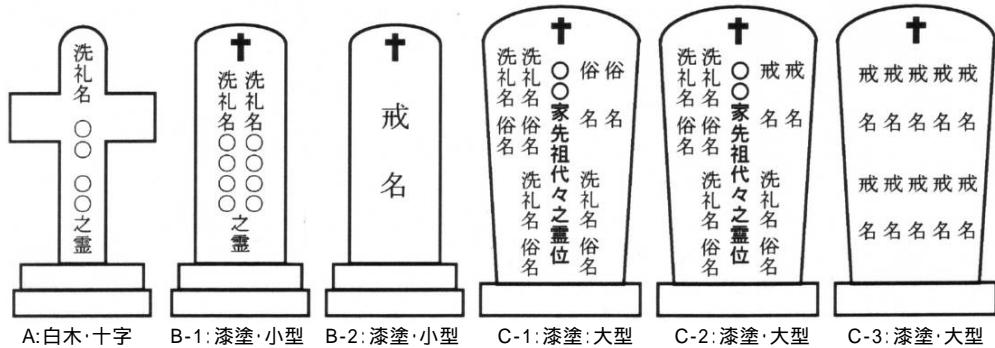
### 第3 8図 報恩寺教会位牌堂外觀

注) 2003年8月15日,筆者撮影。



### 第39図 報恩寺教会位牌堂内部

注) 2003年8月15日,筆者撮影。



### 第3 10図 カトリック報恩寺教会の位牌の分類

C-3は、集団改宗以前に作成され、完全に仏式のもので全てが戒名であるが、上部に十字架が付されている。いずれの裏にも、死者の死亡日が記載されている。A、B-1、C-1、C-2は、全て改宗後に作られたものであり、B-2とC-3は、寺院から集団改宗後に教会へと移納されたものである。従って、位牌堂の中の位牌数は、信徒の死者数よりも多くなっている。

カトリックでは、位牌を作るといった風習は元来ない。日本には位牌が納められているカトリック教会があるが、報恩寺教会のように位牌堂が作られ独特な景観を作り出している教会はおそらくないであろう<sup>62)</sup>。カトリックが日本で受容される際の特色の一つである

62) 筆者が確認した周辺の教会では、西舞鶴教会、東舞鶴教会にもいくつかの位牌が聖堂内

祖先崇拜の影響を考えるうえで、この位牌堂を取り上げることは必要と考える。

日本の祖先崇拜は、祖先が家の連続と継承の象徴としての意味をもち、日本の「家」制度を特色付ける象徴的な儀礼として位置づけられる。近親者による儀礼を通じて死者を祖靈化することによって、祖先は崇拜の対象となりシンボル化するのである。その儀礼は、葬式に始まり、一周忌、三周忌と年忌法要が営まれ、一般的には33回忌で弔い上げとなることが多い<sup>63)</sup>。この最終年忌に、仏壇に納めてあった個々の位牌は焼き捨てられ、家の「先祖代々」の位牌にまとめられるか、あるいはそのまま墓や寺院に納める地方もある<sup>64)</sup>。

報恩寺教会の場合、位牌は一般に仏式と同様に葬式を行うときに作られる。その際の形態が、先述のAのタイプである。その後の位牌の扱いは、毎年8月15日に、1年間に亡くなった方々の靈を、C-1の形態で作られた故人の「家」の位牌に、「先祖代々之靈位」の一つとして加え、故人の洗礼名と俗名を刻む。そして、白木の十字型の位牌(Aのタイプ)は焼き捨てされることになっている。また仏式の各法要にあたる儀式も行われる。その内容は、まず「追悼の祈り」として十日祭・二十日祭・三十日祭・四十日祭が営まれ、五十日祭は追悼式として催行される。これら十日祭から五十日祭は、当該家屋が教会で行われる。年忌法要に関しては、個人的にミサを司祭に依頼する場合もある。

ところで、この祖先崇拜の特性は、「仏教の影響を全く取り去ったとしても、ほとんどそのまま存続できると言えるほど程度の高い自立性を持ち続けている」ことにある<sup>65)</sup>。また祖先崇拜は、仏教と古くから密接に関わってきたのと同じように、神道や民間信仰などとも関わりながら存在している。つまり、祖先崇拜自体が普遍的な存在であるという前提に立つと、カトリックも、祖先崇拜に対して取った対応によって、日本的特点を含むことになったと考えられよう。

カトリック中央協議会は、第2ヴァチカン公会議以降の他宗教への対応に関する方向性に沿って、「日本の社会では、宗教と言えば必ず死者をまつる行事が伴います。このような状況の中で、……カトリック信者が他の宗教の死者に関する行事に参加することは、信仰に反するのではないかという疑問をもつことがあります。他方では、このような行事に参加しなければ、社会生活を円滑に営んでゆくことができない」場合があることを踏まえ、死者儀礼に対しての手引きを発行している<sup>66)</sup>。カトリックでも、祖先への愛と尊敬の教えがあ

---

の一部に納められていたが、報恩寺教会のような、位牌のための建造物の存在は確認できなかった。

63) 宗派によっては50年が最終年忌となる場合がある。前掲19)27-28頁。

64) オームス・ヘルマン『祖先崇拜のシンボリズム』弘文堂、1987、66-71頁、前掲19)27-28頁。

65) 前掲64)16頁。また鳥越も祖先崇拜と仏教との関係について、「年忌法要はたいへん仏教色のつよい儀式であるが、祖靈觀が仏教の教えと根本的に違っている点は注意しなければならない」と指摘する(前掲8)28頁)。

66) 日本カトリック諸宗教委員会編『祖先と死者についてのカトリック信者の手引』カトリック中央協議会、1985。

り、死者の記念が行われる。それは、あくまでも祖先を祖靈化するような信仰とは異なるが、祖先崇拜の觀念を完全に否定することは日本での宣教活動を非常に困難なものとする。報恩寺教会において、集団改宗後も位牌が継続して作られ納められてきたことは、報恩寺教会がこの地で受容され定着するために必要不可欠であったのかもしれない。

いずれにせよ、外来の宗教が受容されながらも日本特有の死者儀礼に基づく位牌が作り続けられていることは、日本におけるカトリックの受容を考えるうえで重要なことを示唆しているといえる。報恩寺教会は、日本の祖先祭祀とカトリックとの関係について、位牌を通して窺い知ることができる事例である。それは、カトリックが日本で受容され定着するための基盤として、「家」が重要な位置を占めていることの表れといえるだろう。

## おわりに

本稿は、村落社会において新たに宗教が受容される際に、そこに存在するさまざまな社会関係がいかに作用するかに注目した。

改宗パターンに関して、まず地縁的関係に着目した分析を行った。旧佐賀村では、宗教の受容に際して人々の地縁的なつながりが非常に大きな影響を与えていたことが示された。それは、血縁的関係の一つであるカブという同族関係以上の統制力であることも明確に示すことができた。また、集団改宗以降の変遷を捉えると、「家」という単位を基礎として信仰が継承されていることも窺い知ることができた。

次に、住民の宗教的実践に目を向けると、まず地縁的行事である秋祭りの場合、改宗を契機に、カトリック信徒と非信徒との間で摩擦が生じることとなった。それは、神社の祭が各集落の祭礼組織によって行われているためであり、その組織は当該地域社会の連帯性や共同性を基盤として成立しているからである。そのため、カトリック信徒の祭への参加の拒否は、元来は仏教寺院が担ってきた「家」や親族内で成立する葬式や法事といった死者儀礼に比べ、住民間の摩擦をより引き起こしやすいものであった。改宗に対して、ほとんど影響を及ぼすことのなかった血縁的関係に基づく先祖講は、現在では先祖祀りはせずに、農閑期の宴会のみが行われる場合や、あるいは宴会も行われず、この習俗自体が衰退しつつある<sup>67)</sup>。一方で、位牌堂の建設なども含め、位牌に象徴されることとは、まさに「家」の宗教としてのカトリックの受容である。これは、日本人のもつ祖先崇拜の觀念の影響であり、そこみられるのは、直系家族にみられる系譜意識の保持であった。

<sup>67)</sup> 旧佐賀村も青年・壮年層の流出等により過疎化が進み、高齢者のみの世帯も増え、このほかの習俗も徐々に簡素化されつつある（聞き取りによる）。

以上のように、カトリック報恩寺教会は、地域的な要求として旧佐賀村内の共同体としてのつながりを強化すべく、神社に変わる村のシンボルとしての役割を期待され受容された。結果として、カトリックは村の宗教としてまでは発展していない。むしろ現在では、カトリック信徒と非信徒との差異が際立つこととなったように思われる。これは、宗教がもつ、同一集団内の連帯を強化する力とともに、他者との差異化をも引き起こす力を映し出しているといえるだろう。

もう一つ、それまで仏教寺院が担ってきた死者儀礼、祖先崇拜のシンボルである位牌の管理に関しては、その機能もカトリック教会が有することとなった。しかしこのことは、旧佐賀村という農村部におけるカトリック教会に限ったことではなく、都市部のカトリック教会にも共通した機能であると考える。位牌堂のような象徴的なものはないが、どの教会でも年忌のミサが依頼されているように、日本では「家」の宗教としてカトリックが受容されてきたといえる。

信徒に対して実施したアンケートの回答の一つに、「結婚式から葬式、富参りまですべて教会にお世話になっている」とあった。この事例は、日本的なカトリックの受容の特性を象徴しているように思われるのである。

しかし、都市部におけるカトリック教会と地域社会や家との関わりについては、いまだに具体的な分析はなされていない。そうしたことから、今後、都市部でのカトリック教会についても分析対象としたうえで、改めて日本におけるカトリック受容と社会との関係について論じることを課題として挙げておきたい。

## 第4章

---

日本をめぐったザビエル渡来 400 年祭

## はじめに

本稿では、1949年に行われたザビエル渡来400年祭（以下、ザビエル祭）という宗教式典を対象として、戦後日本のカトリックの展開における意味と、この非日常的な式典が国家規模の行事として日常の空間に現れたことの意味について分析を行いたい。

聖なる空間あるいは場所に関する研究として、これまでの研究では、宗教都市や集落の歴史的形成や伝播過程<sup>1)</sup>、あるいは宗教景観の象徴的な意味を問うもの<sup>2)</sup>が主であった。ある空間が社会集団によって形成される過程において、その空間形成に反映する社会的諸条件のひとつとして宗教を捉える研究が行われてきている。つまりは、宗教というものが、他の社会を形成する諸要素と同じように、独立したものではなく、空間を形成する一要因、一要素とするならば、聖なる空間や場所もまた、社会的に構築されるものと考えができるのである<sup>3)</sup>。1990年代以降、宗教を扱う地理学研究において、こうした宗教的空間や場所もまた、宗教的観念のみが表象される空間として形成されるものではなく、むしろ歴史的・政治的・社会的諸関係の形成過程そのものであることが主張されてきている<sup>4)</sup>。

ただし、こうした視点からの研究の対象は、宗教施設、聖地、巡礼空間といった、物理的に保存されてきたようなある程度の永続性を有するものが主な対象として扱われてきたといえる。しかし、本稿で取り上げるザビエル祭のような一時的な宗教的儀礼の空間もまた、宗教的な世界観のみならず、当時の日本の社会的状況が象徴的に表現されている時間・空間と捉えられ、社会空間を織り成す他の諸要素との関係のなかで読み解く必要があるだろう。

また、ザビエル祭は、国家規模で行われた宗教的式典であることから、国家と宗教との

1) 松井圭介「日本における宗教地理学の展開」人文地理 45-5, 1993, 75-93 頁を参照されたい。

2) 岩鼻通明「宗教景観の構造把握への一試論 立山の縁起、マンダラ、参詣絵図からのアプローチ」（京都大学文学部地理学教室編『空間・景観・イメージ』地人書房、1983）、163-185 頁。岩鼻通明「立山マンダラにみる聖と俗のコスモロジー（葛川絵図研究会編『絵図のコスモロジー 下巻』地人書房、1989）、223-238 頁。川合泰代「近世奈良町の春日講からみた「聖なる風景」 春日曼荼羅と儀礼の分析を通じて」人文地理 58-2, 57-72 頁など。

3) 中川正「聖地とは何か」地理 48-11, 2003, 8-13 頁。

4) 大城直樹「村落景観の社会性 沖縄本島北部村落の祭祀施設の場合」歴史地理学 159, 1992, 2-20. Kong, L., 'Geography and religion: trends and prospects', *Progress in Human Geography*, 14, 1990, pp. 355-371. 森正人「近代における空間の編成と四国遍路の変容 両大戦間期を中心に」人文地理 54-6, 2002, 535-555 頁など。

関係に注目すると、国家による宗教のイデオロギー的利用が指摘されてきている。それは、宗教には、「共同体性」や「特殊性」、「つまり民族集団その他の固有のアイデンティティを強化する働き、他の集団との差異を強調する差異化機能、個別利害を正当化するイデオロギー化機能の顕在化」<sup>5)</sup>がみられるからである。そのような機能をもつ宗教の儀礼や式典の国家的儀礼としての開催が、そこに参加する人々に、自らが属する国家の存在と国民というアイデンティティの確認を促進させることになる。

こうした国家規模で人々の間に浸透していくようなイベントにおいては、宗教的儀礼に限らず、メディアが重要な役割を果たしていく。そのようなイベントをメディア・イベントという概念によって捉えることができる。メディア・イベントは以下の3つの形態に分類される<sup>6)</sup>。

メディアが主催するイベント：新聞社や放送局などの企業としてのマス・メディアによって企画され、演出されていくイベント。

メディアが媒介するイベント：国家や国際機関が主催の場合にも、それが受容されていく過程で、メディアが決定的な役割を果足していくイベント。

メディアによってイベント化された社会的事件。

ザビエル祭の場合、このメディア・イベントとして分類することができ、メディア・イベントの特性により、一宗教の、さらにはキリスト教の式典という非日常的な行事が、人々の日常生活の一場面として登場することとなったといえる。

その特性とは、開催に先行してイベントのイメージを大衆に浸透させることができることであり、また経過を連日のように報道することにより人々の関心を集中させていくことができる点にある。そして、メディアが決定的な役割を果たしながら、国家という不可視の共同体を、実在なものとして想像させるという操作がなされるのである。こうした点において、近代国家と国家儀礼の密接な関係性が指摘されているのである<sup>7)</sup>。

以上のことから、本稿では、ザビエル祭を対象として、聖なる空間がさまざまな方法で強化、創出され、多様な意味が付与されることに注目し、宗教と政治・社会との関係について解明することを目的とする。

具体的には、このザビエル祭をめぐって、まずGHQの宗教政策とキリスト教支援の実態、ザビエル祭に際してのカトリック側のさまざまな動向を追っていきたい。そして、このような国家規模で行われる行事での、メディア、とくに新聞の役割に言及しつつ、カトリックの非日常的・象徴的な宗教的式典が、国家規模の行事として展開していく諸相につ

5) 中野毅「宗教・民族・ナショナリズム 読み解くための基礎と問題の所在」(中野毅・飯田剛史・山中弘編『宗教とナショナリズム』世界思想社、1997), 7頁。

6) 吉見俊哉「メディア・イベント概念の諸相」(津金澤聰廣編著『近代日本のメディア・イベント』同文館、1996), 3-30頁。

7) 前掲6)13-20頁。栗津賢太「近代日本のナショナリズムと天皇制」(中野毅・飯田剛史・山中弘編『宗教とナショナリズム』世界思想社、1997), 194-216頁。

いて考察を進めていくことにする。

## ザビエル祭の概要

第二次世界大戦敗戦から 4 年後の 1949 年に、キリスト教の聖人の一人であり、日本にキリスト教を伝来させた人物である、聖フランシスコ・ザビエルが日本へ渡来、宣教を始めてから 400 年を記念する式典が行われた。

式典開催は、前年の 1948 年に行われた日本の司教会議で決定された。開催準備には、教区連盟復興部長ビッター（B. Bitter）神父が代表となり進められた。同神父は、1949 年 2 月 2 日に、東京を出発し、アメリカを経てローマへと向い、国際巡礼団派遣について各国と交渉を行っている<sup>8)</sup>。

公式式典は、1949 年の 5 月 29 日から 6 月 12 日の約 2 週間にわたって日本各地で行われた。この式典に際し、世界各国のカトリック教会から司教クラスの聖職者を含む巡礼団が来日した。当初、ビッター神父の報告によると、「ローマ法王庁からの特使のほか米国から二百名、オーストラリアから百名スペイン、ポルトガル、ベルギー、フランスなどから百廿名の巡礼団」<sup>9)</sup>の約 420 名を含む、600 名をこす大巡礼団が来訪する予定であった。しかしヨーロッパ方面からの希望者 400 余名が、中国の動乱で航路の不安を理由に不参加となったため、実際に来日した巡礼団は、80 名程度の規模となった。

内訳をみると、まず 5 月 24 日に、ローマ教皇特使として任命され巡礼団団長の役を担ったオーストラリア・シドニー大司教ノーマン・ギルロイ枢機卿が、ほか 5 人の神父とともに来日した。翌日にはスペインから 35 名の使節団が、聖フランシスコ・ザビエルの「聖腕」と十字架を捧持し到着した（第 4-1 図）。そのほかにも米国、フィリピン、インドなどから聖職者らが日本に集った。

公式式典にともなう巡礼団の行程は、5 月 29 日の長崎浦上天主堂廃墟前でのミサを皮切りに、九州各県を半時計方向に各県をまわり、山口、広島、兵庫、京都、大阪、奈良、愛知、静岡、神奈川、東京と各地でさまざまな行事を行い、訪れた地で歓待を受けながら、6 月 12 日の明治神宮外苑でのミサで全日程を終えた。

この式典での目玉は、国際巡礼団とともに、ザビエルの聖腕、「奇跡の右腕」が招来されたことであった。「聖腕」は、約 2 週間の公式式典終了後も、上智大学の司祭によって全国各地をめぐり顯示された。「聖腕」は、6 月 24 日に札幌で崇敬されてから、函館、青

8) 朝日新聞東京本社版、1949 年 1 月 23 日。

9) 神戸新聞、1949 年 2 月 27 日。



第4 1図 ザビエルの「聖腕」と十字架を捧持するスペイン巡礼団

出典：毎日新聞大阪版，1949年5月27日。

森, 盛岡, 仙台, 福島, 山形, 秋田, 鶴岡, 新潟, 金沢の各市を三週間にわたって歴訪し, 各地で数多くの信者が「聖腕」を崇敬し, 聖フランシスコ・ザビエル渡来400年の記念を熱心に祝ったとされる。また, 訪問することのできなかった町においても, 「聖腕」を乗せた列車が通過する駅に信者が押しかけ, 列車内の「聖腕」を崇敬したことさえあった。7月下旬からは, 静岡, 岡山, 松江, 米子, 高松, 高知, 姫路などでも「聖腕」が顯示されたという<sup>10)</sup>。ただし, すべての人々が「崇敬した」として捉えるのは早計と思われる。信仰的に集まった人々とともに, 巡礼団や「聖腕」という珍しいものみたさの人々もそこにいたであろう。しかし, 多くの人々が注目するなか, 巡礼団一行と「聖腕」が, 日本各地をくまなくめぐったことに変りはないのである。

戦後直後に, このような大規模な行事が, 日本において行うことができた背景には, 日本の政府および実質的大部分はGHQによる支援があったことが考えられる。そこで次に, 当時の日本におけるキリスト教をめぐる社会的様相を捉るために, GHQの宗教政策との関わりを軸に述べていくことにする。

<sup>10)</sup> パウロ・フィステル『日本のイエズス会史』イエズス会日本管区, 1984, 119-128頁。

## GHQ の宗教政策とキリスト教

戦後、日本の宗教界の状況が大きく転換することとなる起点として、信教の自由の確立と国家神道の解体があげられよう。

1945年10月4日に出された SCAP<sup>11)</sup>指令で、市民的自由指令が発令され、「政治的民事的及宗教的自由ニ対スル制限ノ撤廃」がなされ、信教の自由が保証されることになった。また法規制に関しては、治安維持法や宗教団体法<sup>12)</sup>等といった戦前から戦中期にかけて制定された弾圧統制法規が撤廃された。

同年の12月15日のSCAP指令「国家神道、神社神道ニ対スル政府ノ保護、支援、保全、監督及弘布ノ廢止ニ関スル件」、いわゆる「神道指令」において、国家神道の廃止と政教分離が目的として掲げられた。

1946年2月2日には、宗教法人令が発令され、法人化に関する諸手続きは以下のようになった。教派・宗派・修道会・神社・寺院・教会の設立を希望する者は、その財産管理の方式を定めた所定の規則を定め、当該規則を当該地方の所轄官庁に届けることとされ、法人化は届出によって発効することとなる。諸宗派は文部省に、また地方の神社・寺院・教会等に関しては、所在地の都道府県庁に届出を行うこととされた<sup>13)</sup>。

「届出によって発効」、つまりは政府の「許認可」が不要になったことにより、宗教法人の組織・活動に対して、政府行政機関によるいかなる支配もおよばされないようになったのである。このように法人化に関する諸手続きの簡略化・自由化が進められた。また宗教に対して、政府行政機関が統制・支配的影響をおよぼすことがなくなったことは、すべての宗教が全く同じ基礎に立ち、同じ機会と保護を受けることを意味するのであった。

<sup>11)</sup> SCAP : Supreme Commander for the Allied Powers = 連合軍最高司令官。

<sup>12)</sup> 宗教団体法は、戦時下の1940年に施行された。そこでは、公認の宗教団体は、法人化によって税金免除や資産保護が保証される一方で、政府の統制対象となる。法人化の条件は、一宗派信者数5000人、集会場所50を有することであった。結果として、佛教系28、教派神道13、キリスト教2のうちに統合させられることとなった。 笹川紀勝・本間信長訳『宗教』(『GHQ 日本占領史』第21巻 / 竹前栄治・中村隆英監修; 天川晃[ほか]編集委員)日本図書センター、2000、25-26頁。同書、「『GHQ 日本占領史』は、連合国最高司令官総司令部(GHQ / SCAP)が編纂した英文タイプの歴史論文をもとに編集・復刻された『日本占領 GHQ 正史』(全55巻、1990年、小社刊)を底本とし、翻訳した」ものとある(同書「凡例」より引用)。

<sup>13)</sup> ウィリアム・P・ウッダード(阿部美哉訳)『天皇と神道』サイマル出版会、1988、102頁。

第4 1表 各宗教施設の戦災・復興状況

	損傷・破壊	新設	再建	一時建替
神道	1459	0	117	587
仏教	7900	0	2815	
日基	505	35	187	0
聖公会			78	0
カトリック	102	114	75	0

資料：本文注 12) 参照。

注)「日基」は、日本基督教会団を表す。

しかしながら、実際には必ずしも諸宗教が平等であったとはいえず、とくにマッカーサーによるキリスト教支援の態度は明確であった。ひとつの象徴的な出来事としては、国際基督教大学の設立があげられ、マッカーサー自らが設立委員会名誉会長に就任している。その設立計画は、「建設予定地は都下三鷹町の元中島航空研究所跡の約四十三万坪であり、建設資金としては一万田日銀総裁を会長とする大学建設後援会が国内から一億五千万円、アメリカでも大学建設資金一千万ドルを集め運動が米国赤十字社副社長ジェームス・フィーチャー氏を中心として」<sup>14)</sup>進められていた。

戦後の各宗教団体の大きな問題のひとつに、財政的な困窮が指摘され、戦争により破壊された建物の再建問題は深刻であった。各宗教施設の復興状況に関する GHQ による 1951 年での報告では(第4 1表)、神道系では 1459 の神社が損傷・破壊を受け、117 が再建、587 が一時的建替えにとどまる。仏教では、7900 の寺院が損傷・破壊を受け、2815 が再建されたものの、その多くがその場しのぎの小さな堂舎などであった。

一方で、キリスト教では、1945 年の日本基督教団で 505 の破壊が報告されているが、1951 年の報告では、187 が再建、35 が新設、日本聖公会では 78 が建築あるいは改築、カトリックは、1945 年に 102 の破壊が報告され、1951 年の段階で 75 の再建と 114 の新設となっている。さらに、キリスト教に対しては、多くの占領軍施設を宣教師等が利用できるようにすることで支援していたことも報告されている<sup>15)</sup>。このような各宗教の経済的状況に鑑みると、国際基督教大学の設立や宗教施設の再建問題は、キリスト教をめぐる環境がいかに恵まれたものであったかを証明する象徴的な事例であるといえるだろう。

ただし、GHQ あるいはマッカーサーによる日本のキリスト教化の計画は、こうした経済的支援のみで効果的に進められるものではなかった。GHQ の宗教政策のなかで、真の宗教の自由の確立のために、神道の徹底的な改革が必要と考えられてはいたが、天皇の存在を不可欠なものとして位置づけていた。「天皇は日本の精神的復活に大きい役割を演じ、占領の成功は天皇の誠実な影響力に負うところがきわめて大きかった」<sup>16)</sup>とし、日本支

14) 朝日新聞東京本社版、1948 年 10 月 4 日。

15) 前掲 13) 249-258 頁。

16) ダグラス・マッカーサー(津島一夫)『マッカーサー回想記 下』朝日新聞社、1964、

配の精神的・心理的側面において天皇の権威を利用していたといえる。

当時の皇室のキリスト教への関わりをみると、フェザーが来日し天皇と会見した際に、「天皇は私にこの大学は世界が必要としている道徳的再生のための手段となることができるだろうと」<sup>17)</sup>語ったと伝えられている。そして、「国際キリスト教大学の建設基金として天皇陛下から十万元、皇后陛下から五万元の御寄付があった」<sup>18)</sup>と、同大学建設準備会から発表されている。GHQ占領期におけるキリスト教化の象徴である同大学建設への天皇からの寄付が伝えられていることが重要な意味をもっている。さらに、ザビエル祭のプログラムのひとつで、西宮で行われた野外莊嚴ミサに、皇室からの参列者がみられるのである<sup>19)</sup>。

ところで、明治維新から始まる近代国家としての日本建設において、国民という主体を作り出し、実態として捉えることのできない共同体を形成するためには、その根拠となるものが必要であった。そこで、近代日本の天皇制というものが確立され、その根拠となつたわけである。同様に、戦後のGHQ占領下でも、天皇の存在が正当性を保証する役割を担い続けることになった。その象徴天皇が、キリスト教大学に協力することの意味するところは大きかったであろう。

また、1949年4月17日には「復活祭 皇居前広場で野外礼拝」<sup>20)</sup>が行われた。皇居前広場は、戦前においては近代天皇制の、そして1946年からはGHQの、「権力を視覚的に見せるための政治空間として」<sup>21)</sup>使われていた。そこでキリスト教の礼拝を行うことは、まさに精神的側面での支配の視覚的效果を生み出していた。GHQ占領期のこうした状況のなか行われたザビエル祭もまた、この点において同様の空間を作り出したといえるのではないだろうか。

マッカーサーは、「キリスト教のゆるぎない教義に占領政策のあらゆる面を適合させ、また占領軍の全員が常にそれを実践するという生きた判例を示していることにより、必然的にキリスト教についての初步的な理解が生まれ…、日本人の心の中へしみ込んでいっている」<sup>22)</sup>と考えていた。そして、「日本に若い宣教師が来ることの急務を説いて、一千名の宣教師が日本に来れば日本はキリスト教化できる」<sup>23)</sup>と語り、日本のキリスト教化を画策していたのである。

---

143 頁。

17) 朝日新聞東京本社版、1948年12月18日。

18) 朝日新聞東京本社版、1949年4月19日。

19) 毎日新聞大阪版、1949年5月22日で、「高松宮、同妃殿下が参列」することが伝えられている。

20) 朝日新聞東京本社版、1949年4月18日。

21) 原武史『皇居前広場』光文社新書、2003、134頁。

22) 前掲16), 178頁。

23) 朝日新聞東京本社版、1949年6月25日。

## ザビエル祭とカトリック施設の建設

カトリック側も、戦後日本を布教拡大の絶好の機会とみていた。1948年12月7日、皇室が行ったカトリック布教機関への報告のなかで、「1945年以来天皇、皇后両陛下はキリスト教に多大の関心を示され、日本におけるカトリックの慈善事業に対しても皇室からの援助が行われた。日本のカトリック教信者の多くは、天皇がカトリックの洗礼を受けられるなどを祈っている」<sup>24)</sup>と述べてあり、GHQの占領政策同様に、天皇の権威性を利用する動きがみられる。そして、前章でみたようなGHQの支援を背景としたキリスト教をめぐる好条件のもと、ザビエル祭を挙行できるのは、願ってもない状況であったといえよう。

ザビエル祭の式典は、5月30日の「原爆の地長崎」浦上天主堂廃墟でのミサに、「大浦天主堂山口司教、法王特使ギルロイ枢機卿以下内外巡礼団、地元聖職者、一般信者ら三万人」が参列し、「盛大に」、その幕が開けられた<sup>25)</sup>。さらに、大浦天主堂に場所を移し、午後二時から聖腕奉持行列が行われた。その様子を新聞記事から窺うことにして、以下に引用する。

「先頭の大十字架、聖職者について聖母騎士、神学生、各学校の男子生徒、一般信徒がならび、楽隊、教区内の男子巡礼団、市内各教会役員らのあとに外人巡礼団、黒衣の聖職者が参列、つづいてオープンの自動車に聖腕をささげてギルロイ特使らが乗車、護衛隊、来賓、修道女、女子巡礼団、各学校の女子生徒、一般婦人などえんえん三万余名の行列は、同天主堂から西坂祭場にいたるおよそ三キロの市内を行進、道路の両側を埋めた市民の祝福を受けつつ、祈りと聖歌の歌声がゆっくりと行列の波に揺れて」<sup>26)</sup>といったとある。こうしたパレードが、「道路の両側を埋めた市民の祝福」に規模の差こそあれ、主な訪問地で行われていったわけである。

しかし、巡礼団が歴訪したそれらの地は、必ずしもザビエルゆかりの地というわけではなかった。日本でのザビエルの足跡は、1549年8月15日に鹿児島に上陸し、それからの2年間に訪れた地としては、平戸、山口、ミヤコ（京都）、堺、大分が知られている。一方で、ザビエル祭国際巡礼団は、まず各国の巡礼団が東京に集結し、天皇やマッカーサーと会見し、長崎へと向い、以降は、第 章で示したとおりである。

ここで、カトリックの宗教施設の建設とザビエル祭との関連に着目したい。以下は、ザ

<sup>24)</sup> 朝日新聞東京本社版、1949年12月9日。

<sup>25)</sup> 朝日新聞東京本社版、1949年5月30日。

<sup>26)</sup> 前掲25)。

ザビエル祭を期に建設、建立されたものである。

まず、ザビエルゆかりの場所である平戸<sup>27)</sup>、鹿児島<sup>28)</sup>、山口<sup>29)</sup>、壱<sup>30)</sup>では、ザビエルの記念碑の除幕式が行われ、鹿児島や山口ではさらに記念聖堂や記念公園が建設された。しかしそれとともに、ザビエルの足跡とは直接関連することのない場所、例えば朝日新聞後援の設計コンテストも行われた広島幟町教会平和記念聖堂の着工<sup>31)</sup>や、高槻の高山右近記念碑の建立除幕式<sup>32)</sup>、明治期の殉教地である津和野での巡礼地としての整備の開始と寄付<sup>33)</sup>、西宮では二十六聖人の一人であるトマス小崎記念碑の建立<sup>34)</sup>などが行われていることが確認できる。おそらくは、地方紙等の分析をより詳細に行っていけば、ザビエルゆかりの地とともに、各地で宗教関連施設の設置が盛んに行われていたことが明らかとなろう。

いずれにせよ、このように巡礼団が日本を縦断していくなか、ザビエル祭の日程にあわせ、新たな教会堂の建設や復興、またザビエル記念碑などの建立がみられることがわかる。

つまり、ザビエル祭が、新たな宗教施設建設の契機となっていることが指摘できる。それは布教の一環として宗教的拠点の増加、拡大として捉えることができる。ザビエル祭国際巡礼団の訪問地や、前述の新たな宗教施設の建設地とザビエルの足跡を比較すると、ザビエルの足跡を称え祝福するだけではなく、二十六聖人や高山右近、津和野の浦上キリスト教殉教という日本におけるカトリックの歴史をこのザビエル祭をとおして日本の歴史の一場面として人々のなかに浮かび上がらせる効果が生じているといえよう。

こうした動きは、決してカトリックだけではなく、地方自治体においても、キリスト教と歴史的に深いつながりがあることを主張する動きがみられるのである。兵庫県を例にあげるならば、神戸新聞に、「明石と高山右近 「キリスト教」に異説」の記事のなかで、「地位と名誉を捨てて信仰の自由に生きたキリスト教大名高山右近は一般には、大阪高槻城主の時に追放されているが、これは誤りで兵庫県明石城主であった時その名誉をなげうってキリストの教養に殉じたのだ」と兵庫県宝塚に住むザビエル四百年祭総務委員加藤省吾氏（六二）が次の如く異説を立て話題を投げている<sup>35)</sup>とあり、その歴史の正当性を主張している。また、同じく神戸新聞の記事「サヴィエル祭にちなんで 姫路城の十字架 築城奉行は篤信家の黒田如水」<sup>36)</sup>のなかで、姫路城にある十字架が刻まれた瓦を紹介し、キリスト教との歴史的なつながりを取り上げているのである。

27) 朝日新聞東京本社版、1949年5月31日。

28) 朝日新聞東京本社版、1949年6月1日。

29) 防長新聞、1949年5月30日。

30) 神戸新聞、1949年6月7日。

31) 朝日新聞東京本社版、1948年3月28日、同年6月30日。同紙、1949年6月3日。

32) 神戸新聞、1949年3月14日。

33) 防長新聞、1949年6月3日。

34) 前掲9)。

35) 前掲32)。

36) 神戸新聞、1949年5月31日。

そのほか、ザビエル祭を記念した展覧会や美術展、聖堂設計コンクールなど、カトリックは新聞社との共催でイベントも数多く行っている。そして、このザビエル祭においても、新聞の役割は見過ごすことのできない要素である。そこで、次にザビエル祭と新聞との関連をみていくことにする。

## メディア・イベント「ザビエル祭」

前章まで、ザビエル祭という空間と時間のなかに表象された、GHQ やカトリックによる日本のキリスト教化の試みやそれにともなう布教活動の動向をいくつか示してきた。

本章では、そうした意図と結びつきながら、ザビエル祭という宗教的式典が人々にどのように受け入れられていったのかを、第 1 節で述べたように、その過程において決定的な役割を果たしたメディアに注目しながら追っていきたい。ここではとくに、ザビエル祭の公式プログラムのひとつである、西宮での莊厳ミサ<sup>37)</sup>を中心に論じていくこととする。

国際巡礼団と「奇跡の右腕」の来日以降、連日ザビエル関連の記事が新聞に掲載され、巡礼団の動向が逐一、人々に伝えられていった。そして、6月3, 4, 5日の三日間、京阪神各地でもさまざまな式典が催されたわけであるが、なかでも最大の行事が、6月5日に行われた西宮の莊厳ミサである。日本では初、世界でも 16 回目の莊厳ミサが西宮球場で行われたのである。

ところで、会場となった西宮球場では、第 4-2 表に示したとおり、1937 年に球場が完成して以来、さまざまなイベントが開催されている。戦中期においては 1938 年の「支那事変聖戦博覧会」や「大東亜建設博覧会」などといった国威発揚の博覧会が行われている。戦後になると、一転して、アメリカ・ブームを導き出すようなイベントが開催されている。最も象徴的なものとしては、1950 年に行われた「アメリカ博覧会」があげられよう。

津金澤によると、1948 年頃から、すでに博覧会ブームが起り始めており、戦時中娯楽に飢えていた人々にとって、戦後の博覧会など各種イベントは、賑やかな祝祭への憧れの気持ちや、復興のきっかけとなることの期待感をもっていたことが指摘されている<sup>38)</sup>。

<sup>37)</sup> 莊厳ミサは、現在では、「司祭が挙式し、助祭および（または）侍者に補佐されて行う聖体祭儀」を意味するが、かつては「教皇または司教が挙式し、他の司祭が補佐するミサ」を意味した。ジョン・A・ハードン「莊厳ミサ」（ジョン・A・ハードン編著、A・ジンマーマン監修、浜寛五郎訳）『現代カトリック事典』エンデルレ書店、1982、438 頁参照。

<sup>38)</sup> 津金澤聰廣「朝日新聞社の「アメリカ博覧会」」（津金澤聰廣編著『戦後日本のメディア・イベント [1945 - 1960 年]』世界思想社、2002）、162 頁。

第4 2表 西宮球場催物一覧

年	月日	催物
1937	5/1	西宮球場開場式
	5/3	開場記念大学野球
	5/5~9	職業野球
	7/18	日米対抗レスリング大会
	12/9~12	職業野球大毎杯争奪戦
	1/2~5	職業野球正月大会
	4/1~6/14	支那事変聖戦博覧会
	6/24~7/3	大日本相撲協会関西大場所
	8/20	第1回全国煙火芸術協会競技大会
	10/18~19	米国女子野球団模範試合
1938	11/3	第1回全関西映画俳優オールスター野球大会
	11/20~21~23	第2回職業野球オールスター東西対抗試合
	4/1~6/20	大東亜建設博覧会
	4/6~5/12	近代機械化兵器野外大演奏会
	8/27	新交響楽団野外大演奏会
	4/1~5/31	国防科学博覧会
	7/5~8/10	大東亜戦争戦利品大展覧会
	4/15~5/31	決戦航空博覧会
	9/20~10/31	学徒大空へ出陣大展覧会
	12/1~2	日本野球選抜東西対抗試合
1939	1/1~4	復活第1回リーグ戦職業野球正月大会
	8/15~21	全国中等学校優勝野球大会
	11/1~3	第1回国民体育大会
	1/25~26	南予闘牛大会
	3/20~31	関西大場所
	5/4	第1回リズム体操祭
	9/13	拳闘大会
	10/19	フォークダンス・デモンストレーション
	1/10~11	第6回朝日招待サッカー
	10/31	映画人野球大会
1940	6/5	祭典・荘厳ミサ
	7/23~31~8/6~13	たそがれコンサート
	10/21	日米親善野球
	3/9	パリーグ・オールスター新旧7球団対抗戦
	3/18~6/11	アメリカ博覧会
	8/19	上方演芸会
	9/4	日米親善ノン・プロ野球
	11/26	日本野球選手権試合
	12/9~10	パ・リーグ東西対抗戦
	9/3	日米親善野球
1941	11/8	講和記念日米親善野球
	11/25	日本対スエーデン国際サッカー試合
	5/10~30	オール・アメリカン・サークル
	7/3	日本野球オール・スター野球戦
	9/19~21	日米親善プロ・バスケット・ボール
	5/5	西宮球場初ナイター
	6/7	日独親善交歓サッカー
	10/31	日米親善野球
	8/23	宝塚ページエント・1954年
	9/16	第1回西宮ボウル
1942	10/24	日秦親善サッカー
	8/14	第2回映画スター東西対抗野球大会
	10/2	日本・ビルマ交歓サッカー
	10/29~30	日米親善野球
	7/18~19	日米大学親善野球
	7/24	ナイター・コンサート
	8/2	阿波踊りと花火大会
	10/28~11/1	第11回国民体育大会
	11/4	日米親善野球

資料:京阪神急行電鉄株式会社『京阪神急行電鉄五十年史』

京阪神急行電鉄株式会社, 1954 より抜粋要約。

西宮球場では、1950年に、アメリカ博覧会が行われたわけであるが、この博覧会で、豊かさと幸福の象徴「アメリカ」が、復興した日本の未来の姿として提示された。これは、GHQの占領政策の意に沿ったものであると同時に、戦時中の態勢を糾弾されていた朝日新聞社にとっても、名誉回復の絶好の機会となっていた。そして、朝日新聞社主催で積極的宣伝のもと、GHQの全面的なバックアップによって、200万人の大衆動員という大成功を収めるにいたったのである<sup>39)</sup>。

それでは、その前年に西宮球場で行われたザビエル祭の莊厳ミサはどのように展開されていったのだろうか。

ザビエル祭は、1949年1月23日に「觀光かねて巡礼団 ザビエル四百年祭 今夏国際的行事」という見出しほり、開催の第一報が伝えられた<sup>40)</sup>。戦後になり、キリスト教に関する新聞記事件数は増加傾向となるわけだが、朝日新聞東京版を年次別でみると、1949年はザビエル祭の記事によって急増していることがわかる<sup>41)</sup>。新聞に掲載される記事では、ザビエル祭の日程が決定するごとに、その詳細が扱われ、人々に伝えられていった。

また、各紙でザビエルの足跡や「聖腕」や、「聖腕」にまつわる伝承的な話を紹介する、特集が組まれたり、あるいは、社説でも、ザビエル祭が、テーマとして取り上げられたりもしている<sup>42)</sup>。

そして、巡礼団第一陣が到着する5月23日以降は、ザビエル祭終了翌日の6月13日まで、連日巡礼団の動向や各地での式典の様子などが、詳しくかつ逐一大衆へと伝えられていったのである。

西宮の莊厳ミサに関しては、第4-2図であげたように、毎日新聞大阪版5月22日付で、「平和、復興の祈り 一般の参加待つ 史上16回目の盛儀」という広告記事が掲載され、大々的に宣伝された。

ミサ会場の準備は、阪急西宮球場経営部によって進められた。西宮球場は、「球場正面屋上に、…高さ四十二尺の大十字架が建てられ」<sup>43)</sup>、ピッチャー・プレート付近に、「高さ六間、幅五間、奥行六間半の大聖壇を特設しルネッサンス式の聖壇に描かれるファティマ

39) 前掲 38) 163-164 頁。

40) 前掲 8)。

41) 拙稿「京都府旧佐賀村におけるカトリックへの集団改宗と農村社会」人文地理 58-4, 2006, 24 頁。

42) 例えば、朝日新聞東京本社版では、「ザビエルの聖遺物 奇跡の右腕」(1949年2月17日)、「聖サヴィエル 語るカンドウ神父「日本こそわが歓喜」「四百年前の種子」みのる」(同5月23日)、「社説 ザビエル渡来四百年」(同6月1日)。毎日新聞大阪版では、「サヴィエル渡日本 渡来四百年を偲ぶ座談会」(同3月27日)。神戸新聞では、「奇跡の右手とは 科学者もついに降参 四百年前のものがそのままに 海賊船が動けなくなった」(同5月25日)など。

43) 神戸新聞、1949年6月2日。



第4-2図 西宮球場での「莊嚴ミサ」広告記事

出典：毎日新聞大阪版，1949年5月22日。

の聖母像<sup>44)</sup>が設置され、「聖なる祭場」として式典を迎える準備が整えられた。さらに、ザビエル祭を期に西宮市では、兵庫県と協力して、会場への巡礼団の入場ルートとなる阪神国道から西宮球場への道路に、総工費350万円を投じて自動車道路へと拡張工事が実施されている<sup>45)</sup>。この道路は、今も「ザビエル道路」と呼ばれている<sup>46)</sup>。

6月3日、4日は、宝塚大劇場で記念公演として日本交響楽団演奏会が行われた。そして迎えた6月5日、「平和、復興の祈り」の式典が催された。

午前10時、スタンドを埋めつくした一般参加者約5万人が見守り、百名の日本交響楽団の演奏、聖歌隊250名のコーラスによる入祭の歌が流れるなかを、長い祭服を纏った法

44) 前掲19)。

45) 前掲19), 43)。

46) 南野武衛『西宮メモ』西宮夙川ロータリークラブ, 1991, 24頁。

王特使ギルロイ枢機卿を先頭に、「聖腕」の捧持者らからなる司祭団が入場しミサが始まった。厳かな雰囲気で進められた祈りの時は約 2 時間で終えた。その後、「聖腕」は、神戸の中山手教会での式典で顯示されてから、再び西宮に戻り夙川教会に安置され、徹夜で信者らに崇敬された<sup>47)</sup>。

ところで、この莊嚴ミサは、前出の広告記事のなかで、「世界平和と日本復興の祈願をこめて」行われるため、「ひろく一般会衆の参列が期待」されていたとある<sup>48)</sup>。宗教的に平和の希求はもちろんではあるが、信者にとっては、聖人への崇敬の念を表す祈りの空間と時間である。しかしながら、ここで第一に、平和と復興というメッセージが前面に掲げられていることに気付く。原爆被爆地である浦上や広島でミサが大々的に行われたことも、そのことを象徴しているであろう。

それとともに、マッカーサーは、ザビエル祭が開催されるにあたり特別声明を出している。翌日の新聞に掲載された見出しのいくつかをみると、「マ元帥声明 サヴィエル四百年祭に寄す 人類精神進化への一里塚 遠大な伝道運動の糸口」<sup>49)</sup>、「サヴィエル祭にマ元帥声明 花咲くを信ず」<sup>50)</sup>、「聖人の心」で平和を サヴィエル四百年祭 マ元帥きのう声明」<sup>51)</sup>、「平和への道しるべ サヴィエル四百年祭にマ元帥声明」<sup>52)</sup>などと付されている。前者 2 誌がキリスト教拡大を、後者の 2 誌が平和をキーワードとして捉えている。

復興に目を向けると、津金澤が指摘したように、このようなイベントが地域の復興の契機となることを人々は期待していたことが考えられる。

ひとつの例には、西宮の道路拡張があげられ、またひとつには、各自治体による歓待ぶりもその表れといえよう。例えば、神戸市では、式典終了後、巡礼団のうち 24 名はニューオリエンタルホテルでの神戸市長の招宴に出席し、その後大丸で池長美術館<sup>53)</sup>出品のキリストian美術品を観覧し、宝塚歌劇場では日本舞踊、歌劇「高山右近」<sup>54)</sup>を鑑賞する予定であり、さらに兵庫県からは出石焼が贈呈されるとある<sup>55)</sup>。

このような連日の新聞報道により、ザビエル祭は人々の日常の一場面として形成され、そこには GHQ の占領政策やカトリックの布教戦略におけるキリスト教化の意図とが密接

47) 神戸新聞、1949 年 6 月 6 日。

48) 前掲 19 )

49) 神戸新聞、1949 年 5 月 26 日。

50) 朝日新聞大阪版、1949 年 5 月 26 日。

51) 朝日新聞東京本社版、1949 年 5 月 26 日。

52) 毎日新聞大阪版、1949 年 5 月 26 日。

53) 池長孟のコレクションは、現在、神戸市立博物館に受け継がれており、そのなかに茨木市千提寺で発見されたザビエル像が含まれている。ザビエル祭に際して、1949 年 5 月 22 日付の神戸新聞に、「サヴィエル 四百年によせて 池長孟」という池長の記事が掲載されている。

54) 神戸新聞、1949 年 5 月 22 日。ザビエル祭に合わせて 6 月 1 日から 20 日まで公演された。

55) 神戸新聞、1949 年 5 月 21 日。

に関連していた。そして、メディアを媒介として平和復興の象徴＝キリスト教というイメージ戦略が行われていたのである。

## おわりに

以上のように、1949年に日本をめぐったザビエル祭という宗教的式典が国家規模の行事として展開していく様子をみてきた。

GHQ の宗教政策のもと、信教の自由と政教分離が進められたが、マッカーサーにより積極的にキリスト教支援が行われ、精神的側面での支配として日本のキリスト教化が企てられていた。そのなかで行われたザビエル祭は、まさに GHQ の宗教政策を人々に受け入れさせる絶好の空間と場所となった。

カトリックにとっては、ザビエル祭が宗教施設建設の契機となり、それは布教をにらんだ宗教的拠点の空間的な拡大がなされたといえよう。それに連動し、各地で日本のなかのキリスト教関連の場所・歴史の掘り起こしがなされた。もうひとつには、ザビエル祭をとおして平和・復興の象徴＝キリスト教というイメージがつくられていったこともみられた。

宗教的行事・儀礼という、いわば、独自の宗教的世界観が表現される舞台において、宗教のもつ象徴性と国家形成における象徴的な利用という双方向的関係がみられるのである。

本稿では、ザビエル祭の全国的な展開を概略的に捉えたが、このような聖なる空間と地域社会との関連やそこに集った人々、他宗教との関係の視点が課題として残った。この点については、今後の課題としたい。

## 第 5 章

---

津和野におけるキリスト教巡礼地の形成

## はじめに

聖地や巡礼地といった聖なる空間や場所のとらえ方には、緒論でも取り上げたように、大きくふたつの立場がある。ひとつには、エリアーデがいうように、「聖なるものとは力であり究極的にはとりもなおさず実在そのものを意味する」<sup>1)</sup>のであり、従って聖なる空間・場所は、「人間が選択するもの」ではなく、聖なるものがその場所を聖別化し、それを人間が「発見する」にすぎないとする立場である<sup>2)</sup>。

それに対して、リーチが主張するように、「われわれは人工的な境界を」<sup>3)</sup>、空間的にも時間的にも創り出しているとし、その境界によって聖なる空間と感じるようになるとする立場がある。この視点からは、ある空間が社会集団によって形成される過程において、その空間形成に反映する社会的諸条件のひとつとして宗教をとらえる研究が行われてきている。また同時に、社会集団によって形成された空間は、集団の創出・紐帯強化・分離といったように社会集団に対しても作用していくのである。

こうした聖地をめぐる議論の視点に関して植島は<sup>4)</sup>、そこが特別な場所であるからそこに人びとが吸い寄せられさまざまな行為が付帯され聖なる空間となっていたのか、あるいはある人物や物語に関わる場所が聖地となり、そこに人がランドマークとなるような特有な自然景観を見出していったのかというように要約している。さらには第3の見解として、「人間が集ることによって特殊な磁場が形成され、そこが聖地なる」があげられている。それは、聖地を意図的に作ることができるかどうかという問題設定と関連している。

聖地や巡礼地に関する地理学における研究に関して目を向けると、まずあげられるのは宗教と都市や村落景観との関係を扱った研究である。日本ではとくに門前町や鳥居前町といったように宗教を中心として形成してきた都市および村落を対象として行われてきた。門前町を対象とした著書の中で藤本利治は<sup>5)</sup>、宗教都市あるいは集落の形態や発達過程、分布、機能などを地理学における研究項目としてあげている。また研究の成果が豊富であるのが、山岳宗教を取り上げたものである。その山麓部に立地する、いわゆる山岳宗教集

<sup>1)</sup> ミルチャ・エリアーデ(風間敏夫訳)『聖と俗』法政大学出版局、1969、5頁。

<sup>2)</sup> ミルチャ・エリアーデ(久米博訳)『エリアーデ著作集 第三巻 聖なる空間と時間 宗教概論3』せりか書房、1974、60-61頁。

<sup>3)</sup> エドマンド・リーチ(青木保・宮坂敬造訳)『文化とコミュニケーション』紀伊国屋書店、1981、71-76頁。

<sup>4)</sup> 植島啓司『聖地の想像力 なぜ人は聖地をめざすのか』集英社新書、2000、27-28頁。

<sup>5)</sup> 藤本利治『門前町』古今書院、1970、175頁。

落の形成過程や要因を、集落の形態との関係や布教者の活動から説明している<sup>6)</sup>。また、都市や聖地の景観の一要素としての宗教施設や風景、絵図や曼荼羅図からの象徴的な意味を追究する人文主義地理学による研究も行われてきた<sup>7)</sup>。しかしそれは、おのずと明確な聖と俗という二項対立という枠組みにおいて両者を分離して議論してしまう傾向にあるといえる。そのため、場所の象徴的意味には多くの注意を払ってきた一方で、その場所形成の過程の歴史的・社会的背景に焦点があてられてきたとはいえない。

本章では、巡礼地というものは社会的に構築されるものであるという理解に立つことから始める。巡礼空間や個々の巡礼地を社会的構築物としてとらえた地理学的研究として、スペインのサンチャゴ・デ・コンポステーラを扱った Graham and Murray による研究成果がある<sup>8)</sup>。その研究でも指摘されていることは、巡礼とは、人びとが神や聖人との神秘的な精神的な接触を求めて、聖なる場所へと旅する宗教的現象であるが、序論でも述べたように、こうした宗教的経験もまた人びとの信仰に基づく宗教的行為にともなうものであり、その行為は文化的現象あるいは産物であるといえる。そして文化とは、ある集団や組織がもつ習俗や慣習であって、その集団の成員の生活様式や行動パターンを規定するものであると從来とらえられてきた。しかし、近年その文化自体もまた、一方的に人びとのさまざまないとなみを規定するのではなく、人びとのいとなみが文化と呼ばれるものを生み出し、変容させていくものであるという認識の転換が行われた。従って、宗教的行為がともなう聖なるもの、聖なる空間もまた、社会的に構築されるものとしてとらえることができる。それゆえに、社会的構築物である聖なる空間は、「特定の形態はそれが引き起こったある特定の社会的・政治的・歴史的文脈」<sup>9)</sup>のなかで読み解く必要があるだろう。

6) 浅香幸雄「信仰登山集落の形成（第一報）木曽御嶽の場合」地理学研究報告 3, 1959, 184-243 頁。浅香幸雄「富士北口の上吉田・河口の御師町の形態とその構造 信仰登山集落の形成 第二報」地理学研究報告 7, 1963, 55-82 頁。有賀密夫「大山門前町の研究 門前町の形成と御師の活動と檀家圏」地域研究 14, 1971, 17-28 頁。

有賀密夫「出羽三山を中心とする山麓信仰集落について」地域研究 13-1, 1972, 37-42 頁。岩鼻通明「出羽三山をめぐる山岳宗教集落」地理学評論 56-8, 1983, 535-552 頁。

7) 岩鼻通明「宗教景観の構造把握への一試論 立山の縁起、マンダラ、参詣絵図からのアプローチ」（京都大学文学部地理学教室編『空間・景観・イメージ』地人書房, 1983) 163-185 頁。岩鼻通明「立山マンダラにみる聖と俗のコスモロジー」（葛川絵図研究会編『絵図のコスモロジー下巻』地人書房, 1989) 223-238 頁。川合泰代「聖なる風景」の復原方法についての一試論 富士講と富士山を例として」歴史地理学 46-1, 2004, 50-64 頁。川合泰代「近世奈良町の春日講からみた「聖なる風景」春日曼荼羅と儀礼の分析を通じて」人文地理 58-2, 2006, 57-71 頁。佐々木高弘「都市景観のなかの宗教 宗教地理学の一試論」日本学報 8, 1989, 105-128 頁。山口泰代「聖地的山里室生の景観の構造 人を魅了する風景へのアプローチ」人文地理 49-2, 1997, 63-78 頁。

8) Graham, B. and Murray, M., 'The spiritual and the profane: The pilgrimage to Santiago de Compostela', Ecumene, 4-4, 1997, pp. 389-409.

9) Turner, V. and Turner, E., Image and pilgrimage in Christian culture: anthropological perspective, Blackwell, 1978, p. 19.

そして、「重要なことは、そのものの自身が変容を引き起こすような文脈における、あらゆる巡礼に関する文化表象の継続的な変容」<sup>10)</sup>であるといえる。

日本の地理学における巡礼研究のなかの代表的な成果として、まず西国三十三ヶ所巡礼を対象とした田中<sup>11)</sup>の一連の研究があげられるが、その中心的な関心は、主に巡礼者の行動や巡礼路の歴史的な復元に向けられていた。一方で、Graham and Murray が巡礼研究に新しい視点を取り入れたように、森<sup>12)</sup>が日本の巡礼空間を対象として成果をあげている。森は、四国遍路という聖なる空間が、その形成過程における宗教団体や行政、巡礼者の営為に注目することで、異なる多様な主体間のせめぎあいの舞台となっていることを明らかにしたのである。そうしたせめぎあいは、場所と記憶の結びつきの問題である。

世界の多くの聖なる場所には、何らかの物語が結び付けられているが、それは聖書のような公式の聖典であったり、神話のようなもの、あるいは個人の信仰体験の語りであったりする。同じ宗教団体の成員の中で共通して認識される記憶として語られるものから、個人の記憶としての個々の宗教的体験も含まれることとなるのである。個々の記憶や集合的な記憶は、「様々なレヴェルのヘゲモニーを通じて、時には動員・利用・篡奪し、時には排除・抑圧することで構築される」<sup>13)</sup>ものであるととらえられる。聖なる場所は、そうした構築された記憶が付与されるプロセスを含んでいることにも言及していく必要があるだろう。

以上の既往研究の成果や課題を踏まえ、本章では、現在「山陰の小京都」として知られる観光地であるとともに、キリストン殉教地のひとつであり、多くのカトリック信徒が訪れる巡礼地となっている津和野・乙女峠を対象として、その場所が巡礼地としていかに形成されていくかという過程に注目し、聖なる場所の構造を明らかにすることを目的とする。すなわち、場所の象徴的意味を探るのではなく、その場所が象徴化されていく過程に対して関心を向けるものである。

問題の焦点となるのは、聖なる場所への人びとの働きかけやその場所にさまざまな意味

10) 前掲 8) 389 頁。

11) 田中智彦「近畿地方における地域的巡礼地」神戸大学史学年報 1, 1986, 45-63 頁。  
田中智彦「愛宕越えと東国の巡礼者 西国巡礼路の復元」人文地理 39-6, 1987,  
66-79 頁。田中智彦「『四国偏礼絵図』と『四国遍路道指南』」神戸大学文学部紀要 14,  
1987, 41-61 頁。田中智彦「石内より逆打と東国の巡礼者 西国巡礼路の復元」神戸大学  
文学部紀要 15, 1988, 1-23 頁。田中智彦「西国巡礼の始点と終点」神戸大学  
文学部紀要 16, 1989, 39-61 頁。田中智彦「日本における諸巡礼の発達」(国際日本文化  
研究センター編『聖なるものの形と場 Figures and places of the sacred (国際シン  
ポジウム第 18 集)』1996) 225-244 頁。

12) 森正人「遍路道にみる宗教的意味の現代性 道をめぐるふたつの主体の活動を中心に  
」人文地理 53-2, 2001, 173-189 頁。森正人「場所の真正性と神聖性 高知県室戸  
市の御厨人窟を事例に」地理科学 56-4, 2001, 252-271 頁。

13) 小関隆「コメモレイションの文化史のために」(阿部安成・小関隆・見市雅俊・光永雅  
明・森村敏己『記憶のかたち コメモレイションの文化史』柏書房, 1999) 8 頁。

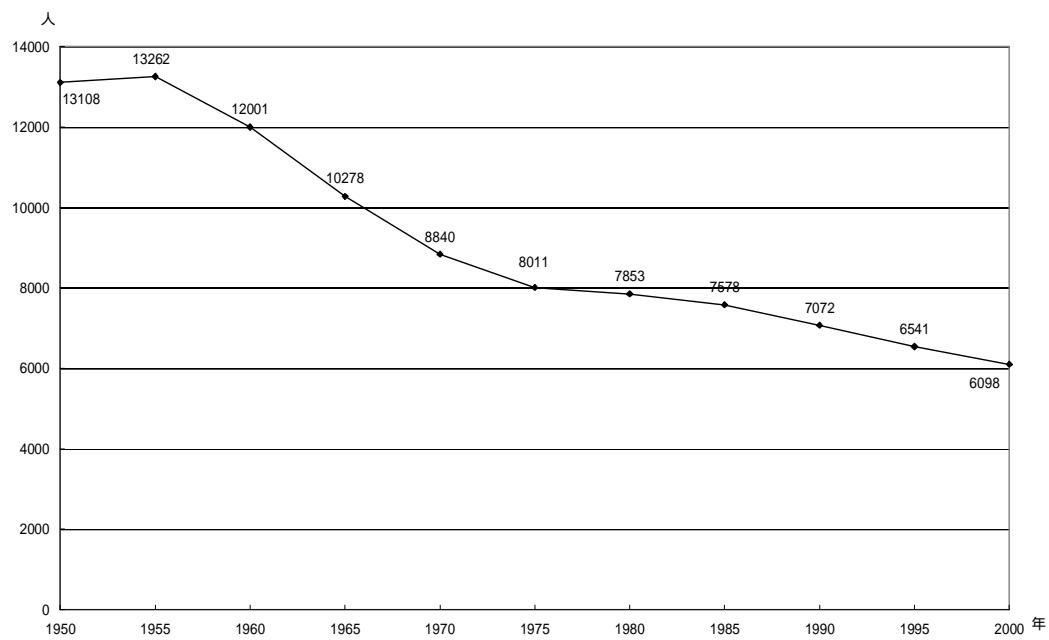
が付与される過程である。まず布教者による巡礼地の「発見」や「整備」、「維持」という作用である。その場面には布教者のみならずさまざまな人びとが登場していることに注意する必要があるだろう。それは、カトリックのようにヒエラルキカルな組織形態をとっている場合でも、教区や小教区（一教会区<sup>14)</sup>）単位といった地域的なアイデンティティのなかで巡礼地が形成されていくが、信者あるいは信者に限らず観光客などを含め他地域の人びとに広く知られることにより、その巡礼地として象徴化されていくと考えられる。従って、教区や小教区という空間を越えた支持者層の存在に注意する必要があるだろうし、その場所に関わる人びとの空間的な拡大は、巡礼地に付与される意味の多様化にも注目していく。次節以降、まず津和野の概観を述べ、次に幕末から明治初期の浦上キリストンの迫害と津和野との関係をとらえる。第4節で、具体的に巡礼としての展開していく過程を、「発見」・「整備」・「維持」の各段階に分類しつつとらえる。そして、カトリックという一宗教に属する成員間においてもさまざまなアイデンティティを有しながら、巡礼地という聖なる空間の形成に関わっていることをとらえていきたい。

## 調査地概観

本章の研究対象地である津和野は、島根県最西端で山口県との県境を形成し、町の中心部を津和野川が流れている。また、その周りを山頂が908mある青野山をはじめとした山々が囲む海拔150m前後の谷底の小盆地に位置している。津和野町<sup>15)</sup>の人口は、2005（平成17）年現在で3,626世帯、9,512人である。ただし、2005年9月25日に日原町と合併する以前の旧津和野町の人口変化（第5-1図）をみると、1955年の13,262人をピークに右肩下がりの傾向が続き、2000年では6,098人、2,295世帯となっている。また、第5-2図に示した2000年の年齢別人口構成比をみると、65歳以上の人口が2,039人を数え、全人口の33%を占めている。つまり、津和野もまた他の山間地域の町村と同様に、過疎化・高齢化が進んでいる町といえるだろう。このような過疎・高齢化が進む津和野において重要な産業となっているのは観光産業である。年別の観光者数の推移をみると、第5-1表に示したように、毎年100万人前後の観光客が訪れており、その経済的效果は非常に大きなものとなっている。

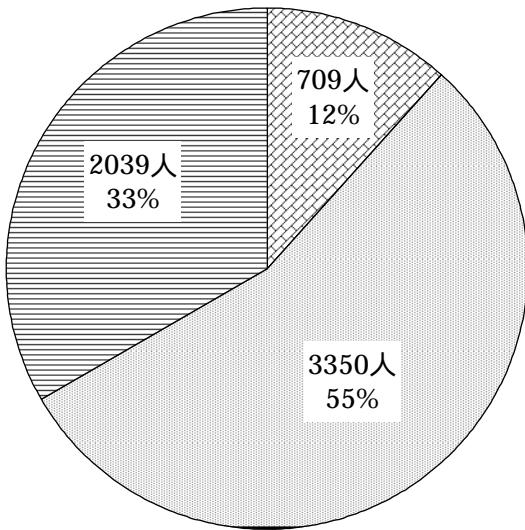
<sup>14)</sup> 小教区とは、各カトリック教会の司牧域のことである。ただし、カトリックの場合、日本において多くの信者は居住地から近い教会の成員となるが、明確に小教区間の境界線が引かれているわけではない。とくに複数の教会が存在するような都市部においては、居住地と教会の位置関係からみると、信者が「越境」している場合も多々ある。

<sup>15)</sup> 2005年9月25日に旧日原町と旧津和野町が合併し、現在の津和野町となっている。



第5 1図 旧津和野町の人口の変遷

資料:しまね統計情報データベース(下記アドレス)よりダウンロードしたデータをもとに作成。  
(<http://www.toukeika.pref.shimane.jp/toukei/st0/st0100.asp>)



第5 2図 2000年における津和野町の年齢階層別人口構成比

資料:しまね統計情報データベース(下記アドレス)よりダウンロードしたデータをもとに作成。  
(<http://www.toukeika.pref.shimane.jp/toukei/st0/st0100.asp>)

第5 1表 津和野町への年別および月別訪問観光客数の推移

西暦	総数	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	島根県 総数	県内における割合(%)
1971	799,600	234,400	33,500	30,100	41,700	104,000	26,800	24,800	35,700	45,300	47,600	149,000	26,900	13,069,521	6.1
1972	903,548	264,737	50,777	59,846	52,382	117,460	35,620	28,010	66,315	51,981	64,212	81,488	30,720	15,860,756	5.7
1973	1,116,244	260,766	71,849	74,927	66,578	154,577	46,971	47,505	91,183	71,369	73,458	131,195	25,866	18,939,164	5.9
1974	1,166,420	290,699	81,346	49,763	67,291	140,939	56,856	46,497	103,275	85,266	77,108	145,418	21,961	17,622,130	6.6
1975	1,252,808	340,191	55,165	72,209	79,439	149,534	64,325	57,002	108,790	84,776	87,228	138,306	15,843	16,473,580	7.6
1976	1,376,142	369,674	113,791	77,886	77,599	161,334	62,250	55,352	115,152	75,754	126,191	121,550	19,809	16,173,431	8.5
1977	1,241,713	302,630	36,832	88,656	72,804	156,760	53,128	47,360	102,986	78,613	127,217	154,308	20,419	15,914,952	7.8
1978	1,273,453	360,245	39,908	88,937	63,702	122,861	38,699	44,527	121,818	83,745	124,978	136,051	28,181	16,087,540	7.9
1979	1,520,300	418,100	98,400	92,700	96,600	142,300	61,900	59,300	138,900	108,300	116,600	148,200	39,000	16,785,700	9.1
1980	1,436,900	282,300	86,400	94,600	72,800	138,500	59,600	68,100	196,900	96,100	115,700	202,800	23,100	15,678,300	9.2
1981	1,169,000	148,200	73,500	89,000	77,100	128,700	58,200	60,400	149,900	102,000	121,700	133,600	26,700	15,449,100	7.6
1982	1,341,500	228,200	155,900	96,000	79,900	134,200	65,600	63,300	145,000	92,500	130,000	114,500	36,400	16,859,618	8.0
1983	1,265,900	271,500	59,300	95,900	90,400	138,700	69,400	70,100	126,700	96,500	102,600	118,700	26,100	15,101,323	8.4
1984	1,082,000	135,200	51,700	77,800	84,300	127,100	58,200	57,000	119,000	97,900	123,400	122,600	27,800	16,184,912	6.7
1985	1,215,200	307,900	65,500	83,200	88,900	116,100	55,500	49,200	112,700	85,500	111,000	114,600	25,100	16,111,189	7.5
1986	1,132,300	197,600	59,900	78,000	77,900	117,200	62,500	54,400	122,600	91,700	114,400	127,700	28,400	16,940,940	6.7
1987															
1988	1,199,500	338,600	59,500	80,700	66,700	122,000	53,500	50,900	112,800	79,000	105,300	102,000	28,500	15,615,815	7.7
1989	1,246,000	336,200	63,300	66,500	73,300	117,100	61,400	73,500	116,800	81,700	103,200	116,000	37,000	16,893,429	7.4
1990															
1991	1,249,300	305,600	72,600	77,700	72,300	122,100	62,100	59,000	119,400	91,600	99,200	118,000	49,700	19,160,944	6.5
1992	1,230,400	352,000	68,400	75,300	70,500	116,100	64,300	54,200	99,000	76,700	102,400	118,900	32,600	19,462,013	6.3
1993	1,185,800	377,300	66,100	64,200	67,500	108,400	54,600	48,200	86,000	70,200	101,600	107,300	34,400	19,744,088	6.0
1994	1,142,600	364,300	57,200	62,500	66,800	111,200	55,000	47,700	81,400	65,000	94,200	105,400	31,900	20,307,144	5.6
1995	1,100,800	328,000	57,300	59,100	60,000	115,000	58,300	51,900	77,000	70,000	91,000	102,200	31,000	19,029,722	5.8
1996	1,111,500	340,700	46,600	70,000	76,100	120,000	56,800	51,600	74,700	72,900	77,000	97,800	27,300	20,343,647	5.5
1997	1,127,700	337,100	59,500	63,200	68,500	95,400	60,300	47,000	90,900	65,000	92,600	116,400	31,800	24,168,059	4.7
1998	1,117,100	365,000	65,600	64,800	61,000	92,600	48,900	48,700	78,500	62,800	73,000	123,600	32,600	23,915,061	4.7
1999	1,008,000	365,100	44,700	51,400	52,700	91,200	48,300	43,200	66,900	48,100	73,400	93,500	29,500	23,510,771	4.3
2000	1,055,463	377,725	47,913	56,703	60,808	91,128	48,338	47,424	68,191	52,842	65,850	101,447	37,094	25,956,134	4.1
2001	1,216,738	340,334	58,004	56,177	81,370	109,415	65,132	68,739	89,384	81,151	90,675	129,946	46,411	26,051,520	4.7
2002	1,007,306	305,472	58,547	62,809	60,172	76,429	55,544	42,084	70,034	67,173	69,523	103,962	35,557	25,230,933	4.0
2003	967,616	318,783	51,116	54,780	54,635	72,587	51,121	40,322	67,054	55,363	67,157	106,942	27,756	25,163,902	3.8

資料:『島根県統計書』(1971 年は島根県総務部統計課, 1972 ~ 1989 年は島根県企画部統計課,

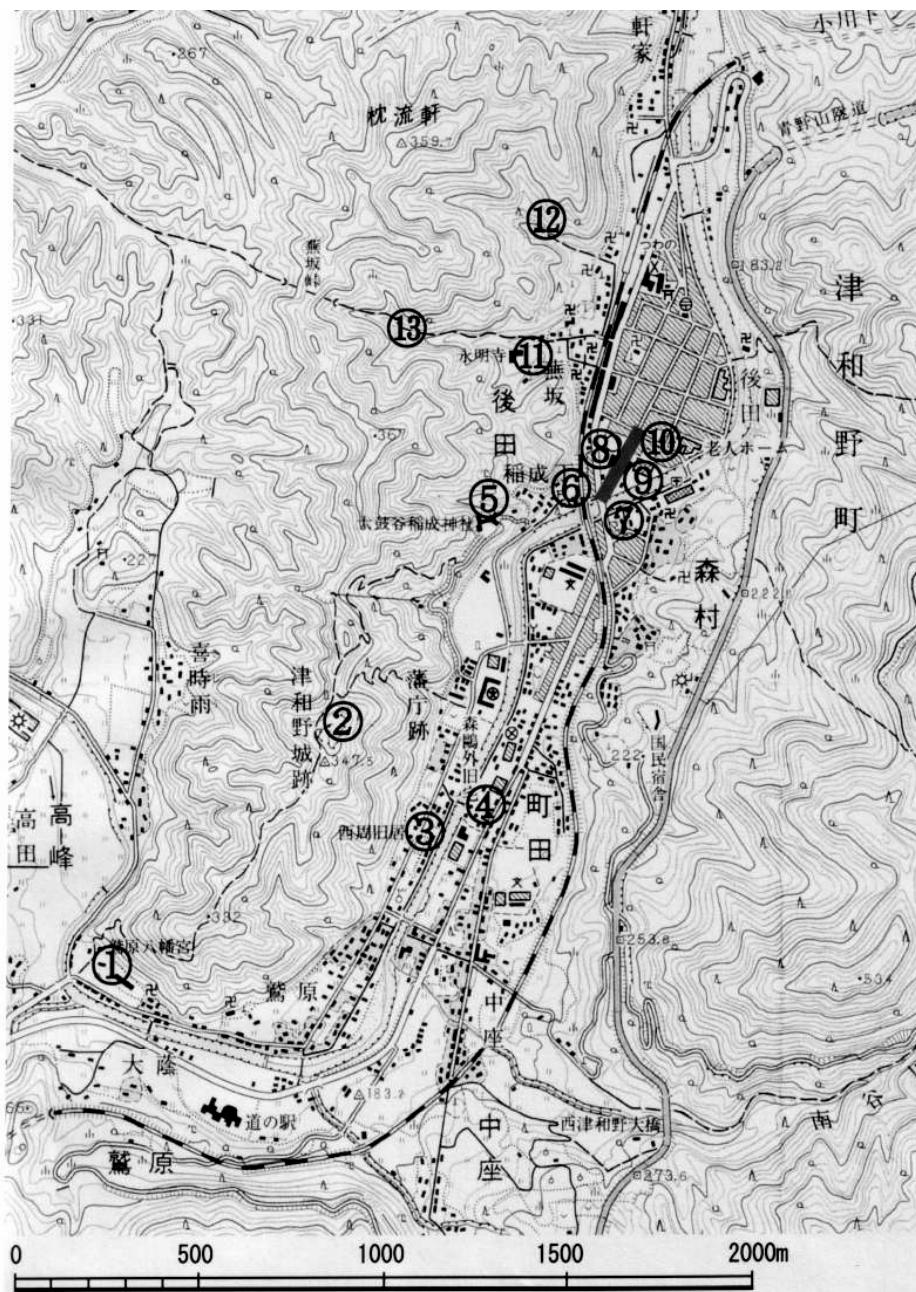
1991 ~ 2000 年は島根県企画振興部統計課, 2001 ~ 2003 年は島根県政策企画局統計調査

課が編纂・発行。1987 年および 1990 年に関しては、未確認のため空欄のままである。

津和野は、前述のとおり現在「山陰の小京都」として広く知られているが、こうした津和野における観光ブームは、1970 年ごろから始まる。その要因のひとつは、1970 年に行われた大阪万国博覧会にあわせて国鉄では輸送力の増強がなされたが、その後の旅客数の確保は重要な課題であった。そこで国鉄は、旅行需要の促進を目的として「ディスカバー・ジャパン」を展開することとなった<sup>16)</sup>。また、1968 年には明治百年を記念する行事や記念碑の建立などが全国的に行われ、歴史ブームがおきていた。それ以前の津和野は、観光統計に記載されることなく、一般に観光地として知られてはいなかったようである<sup>17)</sup>。そしてこのディスカバー・ジャパンや明治百年を期とした歴史ブームにより、有名観光地のみならず、全国各地の歴史的町並みへの関心が人びとのなかで高まっていき、津和野の城下町の景観も注目されることになり、津和野は観光客数が年間 100 万人を大きく越える観光地となったのである。

16) 白幡洋三郎「ディスカバー・ジャパン」(長谷政弘『觀光学辞典』同文館出版, 1997), 59 頁。

17) 野本晃史「小京都の街づくり 津和野」地理 26-5, 1981, 42 頁。ただし、第 5 1 表をみてもわかるように、近年では 2003 年の観光客数が 100 万人を切るなど津和野への観光は下降しつつある。また、日帰り観光客がほとんどを占めている。



第5 3図 津和野の中心市街地図

資料:国土地理院「1:25,000 地形図 津和野」2003年発行(1968年測量, 2001修正

測量)

注)図中の 番号は、第5 2表の番号と対応している。

第5 2表 津和野の主要観光スポット

鷺原八幡宮(流鏑馬神事)
津和野城跡
西周旧居
森鷗外旧宅
津和野太鼓谷稻成神社
弥栄神社(鷺舞)
殿町( 多胡家老門・ 藩校養老館・ 津和野カトリック教会)
覚皇山永明寺
マリア聖堂
千人塚
青野山
吉永米穀店
葛飾北斎美術館
津和野美術館
郷土館
杜塾美術館
伝統工芸舎
堀庭園
アンティックドール美術館
安野光雅美術館
桑原史成写真美術館
中村吉蔵記念館
民俗資料館(養老館)
中村吉蔵生誕地の碑
中田瑞穂先生生誕地の碑
小藤文次郎生誕地の碑
森鷗外遺言碑
徳川夢声句碑
西周生誕地の碑
天野雉彦童話碑
嘉樂園(大国隆正の碑, 福羽美静の碑, 山辺丈夫の碑, 加盟茲監の碑)
森鷗外詩碑
高岡兄弟の碑
津和野今昔館

注)津和野町観光協会発行『ゆ~うにしんさい津和野』2004, 津和野町商工観光課・津和野町観光協会発行『山陰の小京都津和野』(発行年は記述内容より2001年以降), 萩市観光課・津和野町商工観光課ほか発行『萩・津和野ガイドブック』2006より作成。表中の番号～は, 第5 3図の番号と対応。

第5 3表 津和野の主な年間行事

行事名	場所	催行日	備考
元旦祭	稻荷神社	1月1日	初詣。四国・九州地方からも参拝客多数。
初午祭	稻荷神社	2月初午の日	中国・四国・九州からの参拝客。
津和野あがん祭	町民センター	2月最終の土・日曜日	
初市	今市	3月10日	苗木市
		3月20日	種いも市
		3月28日	ひいな市
鷺原八幡宮大祭 (流鏑馬神事)	鷺原八幡宮流鏑馬馬場	4月第2日曜日	
花まつり	町内当番寺	4月8日に近い日曜日	釈迦の誕生祭。稚児行列。
乙女峠まつり	乙女峠	5月3日	殿町のカトリック教会より乙女峠まで聖母行列がなされ、マリア聖堂で野外ミサが行なわれる。
稻荷神社春の大祭	稻荷神社	5月15日	五穀豊穣、商売繁盛を祈願する春の大祭
輪くぐり	弥栄神社	6月30日	弥栄神社の祭事で輪をくぐることにより無病息災等を祈願する。
祇園祭 (鷺舞神事)	弥栄神社	7月20日、24日、27日	無形文化財鷺舞と小学生による子鷺踊りが町内を練り歩く
柳まいり	新丁	8月10日	新丁観音講の祭で津和野の盆踊りはこれにより始まる
盆踊り大会	殿町	8月15日	無形文化財津和野踊りは念佛踊りの一種で室町時代からの古い形を残したもの
灯籠流し	大橋河畔	8月20日	
稻成神社秋の大祭	稻荷神社	11月15・16日	一年間のかごに感謝し、来年の開運厄除を祈願。境内では菊展。
奴道中	町内各所	11月23日に近い日曜日	松林山天満宮大祭の一つ。

注) 津和野町観光協会発行『ゆ~うにしんさい津和野』、2004.6 頁より作成。

行政サイドからの津和野町での観光を軸とした地域振興の展開に関しては、まず 1964 年に「津和野町観光協会」が設立された。そして、1970 年代以降のこの観光客の増大に呼応する形で、1971 年に「津和野町総合振興計画」が打ち出され、1973 年には「環境保全条例」が制定された。1978 年には、国土庁が第三次全国総合開発計画に基づいて、地方都市整備事業の一環として「伝統的文化都市環境保存地区整備事業」を行い、その第一弾として、柳川市、竹田市、津和野町の 3ヶ所が指定を受けた。この整備事業に際して、5ヶ年計画初年度の 1979 年には、「一億円の特別事業が予算化され…事業費は国が五〇〇〇万円、残りを県と町が負担」することとなっていた<sup>18)</sup>。津和野町では、この事業費によって観光資源の整備に本格的に着手していったのである。この整備事業では現在でも観光資源の中心となっている殿町といわれる城下町の景観の修復・復元がなされていった。そこで次に、津和野の主な観光資源の概略を述べていくことにする。現在の津和野の観光資源を、第5 3図および第5 2表、第5 3表に示した。

津和野城および城下町の形成は、1282(弘安5)年に津和野へ入部した吉見頼行が、1295(永仁3)年に野々一本松城(現在の津和野城跡)を築いたことに始まる。吉見氏は、1600(慶長5)年に長門国へ移るまで、この津和野を拠点としていた<sup>19)</sup>。さらに、1601(慶長

18) 前掲 17) 47 頁。

19) 「鹿足郡津和野町」(平凡社地方資料センター編『島根県の地名』(日本歴史地名大系 33)平凡社、1995) 783-801 頁。

6) 年に吉見氏に代わり津和野藩主となった坂崎出羽守直盛は、津和野城を改築し城下町には、新たになまこ堀という珍しい堀をもつ家老屋敷街として殿町を作ったり、掘割をめぐらしたりするなど、近世城下町の基礎となる市街地プランを策定した。津和野城下町は盆地に位置していたため、火災が発生すると大火となる場合が多く、その対策として防火用水の確保を目的として、掘割がめぐらされたとされる。それとともに、この掘割造成によるボウフラ発生を予防するために鯉が放たれたとされ、それが現在の殿町を中心に町内の堀での放鯉の始まりとなっている<sup>20)</sup>。

しかし、坂崎氏の時代はわずか17年で終わり、1617(元和3)年に龜井政矩が津和野の城主となったのち、明治維新まで藩政をつかさどったのは龜井氏であった。龜井氏藩政において特筆すべき政策が藩の教育である。1789(天明6)年に、8代龜井矩賢(のりかた)によって創設された藩校養老館に教育政策の重視がみられる<sup>21)</sup>。とりわけ、11代龜井茲監は藩政を支えていく藩士養成を目的として教育の振興を藩政の中心に据え、養老館の改革に着手し、国学・蘭医学に力を注いでいくことになる。この国学の重視が幕末から明治新政府の宗教政策において、津和野が重要な影響を及ぼしていくことになる(詳細は次節で述べる)。現在修復・復元されている藩校養老館は、1789年に建設され下中島にあった学舎が1853(嘉永6)年に消失したため、1855(安政2)年に移転新築したものである。この養老館出身の人物としては、津和野の国学研究の中心であり、明治新政府の宗教行政に深く関わり影響力を持っていた岡熊臣・大国隆正・福羽美静がいるが、そのほかにも西周や森鷗外といった近代日本を代表する学者や文学者を生み出しており、この二人の旧居や永明寺の墓地、記念館なども重要な観光資源となっている。

また、ひとつの特徴として津和野の景観を形成している要素としては、町の規模に対して宗教施設や宗教行事があげられる。日本五大伏見稻荷系の神社とされる太鼓谷稻成神社は、津和野城跡のある山の中腹に位置し、その参道には朱の鳥居がトンネルのよう立ち並んでいる。2月の初午や春秋の例大祭には、参詣者が中国、四国、九州から訪れる。また正月三が日には、毎年20万人を超える初詣客で賑わうという。また、4月に流鏑馬神事が行われる鷺原八幡宮や、国指定無形民俗文化財である「鷺舞」が披露される舞台となっている弥栄神社もあげられる。

そして、津和野町商工観光課・津和野町観光協会発行の観光パンフレットで「祈りの風景」として太鼓谷稻荷神社などとともに取り上げられているのが、カトリック津和野教会と乙女峠マリア聖堂である。カトリック津和野教会は、津和野の観光拠点となっている殿町の一角に立っており、城下町の景観のなかでこの教会がアクセントのひとつともなっている。また毎年5月3日には、全国から2000人ほどの信者が参加する「乙女峠まつり」

<sup>20)</sup> 松島弘『藩校養老館』(津和野ものがたり8)津和野歴史シリーズ刊行会、1994、2-4頁、熊野栄助「城下町をたずねて21 津和野」月刊文化財156、1976、34-46頁。

<sup>21)</sup> 前掲20)、4-8頁。

が行われる。乙女峠まつりでは、この教会からマリア聖堂までの約1kmの道のりで、津和野の中心部を聖母行列がゆく。この乙女峠まつりは、1867年に浦上でおきたキリスト教迫害、いわゆる浦上四番くずれにより摘発されたキリスト教徒3394名が全国22ヶ所に流刑されたことに関係する<sup>22)</sup>。その流刑地のひとつが津和野であった。現在乙女峠マリア聖堂、津和野へは1868年と1870年の2回分けて合計153名のキリスト教徒が送られた。彼／彼女らは、厳しい取調べと拷問を受け、1873年にキリスト教徒禁制が解かれるまでに39名の殉教者を出すこととなった。1892年になり、殉教者が埋葬された地にヴィリオングループが顕彰碑を建立した。さらに1948年にはネーベル神父が、キリスト教の取調べが行われた光琳寺跡地に、「マリア聖堂」を建設し、殉教地乙女峠が全国の信者に知られるようになる。そして、1952年からは殉教者を偲ぶため乙女峠まつりがはじめられ、現在では、多くのカトリック信者が訪れる巡礼地ともなっているのである。

では、なぜ津和野がキリスト教徒流刑地のひとつとなったのだろうか。そこで次節では、明治維新前後という動乱期の日本において、津和野藩がどのような立場にあったのかに注目し、キリスト教徒の流刑が行われ殉教者を生み出すことになったのかを述べていくことにする。

## 津和野における浦上キリスト教徒の流刑と殉教

### (1) 浦上キリスト教徒の流刑と殉教

浦上四番くずれ<sup>23)</sup>は、1867(慶應3)年という幕末最末期におきた。いうまでもなく、日本は1587(天正15)年に豊臣秀吉が伴天連追放令を出し<sup>24)</sup>、1597(慶長1)年には日本26聖人の殉教、さらに江戸幕府において1613(慶長18)年12月に再度伴天連追放令が発せられて以降、禁教の徹底とキリスト教徒迫害が強化され、キリスト教徒は日本社会から

<sup>22)</sup> 片岡弥吉『日本キリスト教殉教史』時事通信社、1979、626-627頁。

<sup>23)</sup> 「くずれ」とは、キリスト教徒の検挙事件をさし、とりわけ「大量検挙によって潜伏組織が崩壊に瀕したこと」(前掲22)537頁)を呼ぶ。浦上では、1790(寛政2)年、1842(天保13)年、1856(安政3)、1867(慶應3)の4度のくずれがおきている(村上重良『日本宗教事典』講談社、1988、252頁)。

<sup>24)</sup> その後も、1614年の禁教令が出るころまでキリスト教徒の教線拡大は続き、慶長年間に最盛期を迎え、全国に約70万人の信者がいたとされる。前掲23)村上、216-217頁。

表面上姿を消すこととなつた。そして江戸幕府によるキリストン禁制が制度として確立していく過程において展開していったのが、寺檀制度である。寺檀制度は、1614(慶長19)年頃から一部地域において始まっているという<sup>25)</sup>。もともとは、寺檀関係はキリストンの取調べのために特別に作られたものではなく、寺と先祖供養を任せた檀家との関係であり、仏教伝来から存在していた関係と考えられる。ただし、この寺檀関係を江戸幕府による民衆掌握を目的とした制度として展開していったのが、寺檀「制度」である。とくに、キリストン禁教令が発令され、そのキリストン宗門改め<sup>26)</sup>に関して、1659(万治2)年になり幕府は寺院に対してその任を与えたのである。これ以降は、キリストンであるかどうかは関係なく、すべての人を檀那寺と檀家の関係に帰属させていくこととなつたのである<sup>27)</sup>。そして寺檀制度の確立とともに、領内の人びとの宗旨を登録する帳簿、すなわち宗門改帳あるいは宗旨人別帳が作成されるようになった。このようにキリストンの取り締まり体制が定着していったが、こうした取り締まりの結果としてキリストンの露顕が少なくなると、寺檀制度と宗旨人別帳の役割は、人口・戸籍調査に重点が移動し、幕藩体制の確立に大きく寄与するものとなつていったのである。つまり寺院が宗教拠点ではなく国家体制のなかの機関として組み込まれていったことを意味している。幕藩体制のなかでは、もちろんキリストンはとくに禁圧の対象であったが、国家体制機関として組み込まれた寺院もまた、自らの宗教的機能も葬式や法事といった仏事に制限されていたのである。

再び時代を幕末期に戻すと、幕藩体制が弱体化し始める18世紀後半頃からは、さまざまな民衆宗教が起り始める。人々の現世利益の表出ともいえる。当時の現世利益的欲求の担い手は、「修験・巫女・陰陽師といった巷間の職業的宗教者」であった。幕末から近代にかけては、多くの民衆宗教 如来教・天理教・金光教・丸山教・大本教など が生まれ、当時の社会変動による不安からの開放を人びとが求めた新たな救済の表れといえるだろう。

キリストンに関してみてみると、浦上一番くずれが1790(寛政2)年に、神社への寄付を拒否したことにより発覚、検挙・取調べがおこなわれるものの、お咎めなしで釈放となった。秀吉の伴天連追放から、異国と国内のキリストンの組織の存在が脅威となり徹底的な弾圧をおこなってきた徳川幕府の封建制・宗教統制・鎖国という幕藩体制による国家統一に、このころからほころびが出始めたと考えられよう。

そして日本へのカトリックの再布教は、1854(嘉永7)年にアメリカ合衆国特派大使ペリー提督の来航により締結された江戸幕府との「和親条約」を期に、約250年続いた鎖国

<sup>25)</sup> 村井早苗『キリストン禁制と民衆の宗教』(日本史リブレット37)山川出版社、2002、46頁。

<sup>26)</sup> 前掲25)48頁。キリストン改めは、「藩庁からキリストン世帯へと棄教請文が渡され、各家ではこれに家族全員が署名・血判して、これを檀那寺に持参して裏判を貰い受け、それを藩庁に提出」することによって行われていた。

<sup>27)</sup> 前掲25)57頁。キリストン禁制のみを目的としているのではなく、「小農」の土地緊縛や民衆の宗教意識の統制の機能を有していた可能性を指摘する。

の終焉とともに始まる。1858(安政5)年7月29日には、全14条からなる日米修好通商条約が調印され<sup>28)</sup>、その第8条には<sup>29)</sup>、

日本にある亞墨利加人、自ら其國の宗法を念し、礼拝堂を居留場の内に置も  
障りなく、並に其建物を破壊し、亞墨利加人宗法を自ら念するを妨る事なし、  
亞墨利加人、日本人の堂宮を毀傷する事なく、又決して日本神仏の礼拝を妨  
き、神体仏像を毀る事あるへからす、  
双方の人民、互に宗旨に付ての争論あるへからす、日本長崎役所に於て、踏絵  
の仕来りは、既に廃せり、

とある。これにより、日本在住となる外国人の信教の自由と宣教師の居留地における布教活動が許可されることになった。また踏絵の廃止の確認がなされている。

同じく1858年に、フランスもまた幕府との間で「日仏修好条約」の調印をおこない、同様にその第4条において居留地での信教の自由が認められた<sup>30)</sup>。

日本にある仏蘭西人、自國の宗旨を勝手に信仰いたし、其居留の場所へ、宮社  
を建るも妨なし、  
日本において、踏絵の仕来りは、既に廃せり、

これにより、1844(天保15)にすでに琉球に上陸していたパリ外国宣教会が、まず横浜に天主堂を建設、そして1865(元治2/慶応1)年2月19日に長崎の大浦に天主堂を完成させた。それからおよそ1ヶ月後の3月17日、大浦天主堂に派遣されたブチジャン神父が聖堂において浦上のキリストianらと出会い、250年の潜伏期間を経て、再びキリストianが歴史上に登場することとなる。

その様子をブチジャン神父が、当時横浜の天主堂に赴任していたジラール神父宛に手紙を書き記している<sup>31)</sup>。以下にあげる。

<sup>28)</sup> 五野井隆史『日本キリスト教史』吉川弘文館、1990、247頁。1860(万延元)年に米国において批准され、発効となる。

<sup>29)</sup> 「一九四六月十九日調印日本國亞米利加合衆國修好通商條約並貿易章程 第八條」(東京大学史料編纂所『大日本古文書 幕末外國關係文書之二十』東京大学出版会、1972復刻(1930発行))、481-482頁。当該書では、旧字体使用。

<sup>30)</sup> 「一五三 九月三日調印日本國仏蘭西國好修通商條約並貿易章程 第四條」(東京大学史料編纂所『大日本古文書 幕末外國關係文書之二十一』東京大学出版会、1972復刻(1932発行))、315頁。当該書では、旧字体使用。

<sup>31)</sup> 浦川和三郎著『浦上切支丹史』国書刊行会、1973(復刻原本1943)、50-52頁。当該書では、旧字体使用。

### 長崎に於いて一八六五年三月十八日

親愛なる教区長様、心からお喜び下さい。私達は直ぐ近所に昔のキリストンの後裔を沢山持つて居るのでです。彼等は聖教の記憶を随分保つて居るらしく思はれます。然し先づ私にこの感動すべき場面、私が自ら與かって、かうした判断を下すにいたりましたその場面を簡単に物語らして下さい。

昨日十二時半頃、男女小児を打混ぜた十二名乃至十五名の一団が天主堂の門前に立つて居ました。ただの好奇心で来たものとは、何やら態度が違つて居る様子でした。天主堂の門は締まつて居ましたから、私は急いで門を開き、聖所の方へ進んで行きますと、参觀者も後から尾いて参りました。私は一ヶ月前（献堂式当日）あなたが私達にお與へ下さいました御主様、私達が聖体の形色の下に、愛の牢獄たる聖櫃内に奉安し申して居る御主様の祝福をば心から彼等の上に祈りました。

私は救主の御前に跪いて之を礼拝し、心の底まで感動せしめるに適切な言葉を私の唇に與へて、私を囲繞せるこの人々の中より主の為に礼拝者を得しめ給へと嘆願いたしました。ほんの一瞬間祈つたかと思ふ頃、年の頃、四十歳か五十歳かくらゐの婦人が一人私の傍に近づき、胸に手を当てて申しました。

「ここに居ります私共は皆貴師様と同じ心であります。」

「ほんたう？何処の御方ですか貴女達は？」

「私共は皆浦上の者でございます。浦上では大抵の人が私達と同じ心を持って居ります。」

かう答へてからその同じ人が、直ぐ私に向ひ、「サンタマリアの御像は何処？」と尋ねました。「サンタマリア！」、この慶い御名を耳にして、もう私は少しも疑ひません。今私の前に居る人達は日本の昔のキリストンの後裔に相違ない。私はこの慰悅を天主に感謝しました。そして愛する人々に取囲まれて、聖母の祭壇の前に、私たちの為にあなたがフランスから御持参下さいました彼の聖像を安置せる祭壇の前へ彼等を案内しました。

彼等ば皆私に倣つて跪きました。祈を誦へようとする風でしたが、然し喜びに得堪へないで、聖母の御像を仰見るや口を揃へて、「さう、ほんとうにサンタマリア様よ、御覧なさい、御腕には御子ゼズス様を抱き申しておいでになります」と言ふのでした。やがて其中の一人が私に申しました。

「私達は霜月の二十五日に御主ゼズス様の御誕生の御祝ひを行ひます。御身様はこの日の夜中、厩の中に生れ、それから難儀苦労の中に御成長になり、御年三十三歳の時、私達の魂のたすかりの為に十字架にかかるて御死去なさいました。唯今私達は悲の節の中あります。貴師達もこの御祝ひをお守りになりますか。」斯う問ひますから、私も、

「さうです。秘達も守ります。今日は悲の節の十七日目です。」  
と答へました。私はこの悲の節と云ふ言葉を以て四句節を言ひたいのだと悟つたのでありました。

この善良な参観者達が聖母の御像を眺めて感動したり、私に質問を発したりして居る間に、他の日本人が聖堂に這入つて参りました。私の周囲に居た彼等は忽ちパッと八方に散り散りとなりましたが、直ぐまた帰つて参りまして、「今の人達も気遣ひすることはありません。村の者で、私達と同じ心でございます」と申しました。

私は聖堂内を巡覧する各種の人々が往つたり、來たりするのに妨げられて、参観者と思ふ存分話をすすめることができませんので、復出直して遇ひに来る様にと、浦上のキリスト  
私は今日から彼等をこんなに呼びたいのです　と取極めをしました。彼等が何を保存して居るか、少しづつ見ませう。彼等は十字架を尊敬し、聖母マリアを愛し、祈を誦へて居ます。然しそれがどんな祈であるか、私には判りません。その他の詳しいことは近日中にお知らせ致します。

日本の宣教師　ベルナルド・ペティジョン

この日を境として、浦上をはじめとしたキリストが九州各地から大浦天主堂を訪れるようになり、パリ外国宣教会の宣教師らから直接カトリック要理教育を受け、土着化したキリスト信仰からカトリックの信仰へと戻り始めていった。そのことは、しかし、浦上四番くずれのきっかけとなったのである。その行動のひとつは、キリストの自葬や檀那寺の修繕費徴収に対する拒絶によって宗教統制の機能を担っていた檀那寺との寺檀関係の解消を行ったことであり<sup>32)</sup>、つまりは幕府の禁教令への反対の意思を示し、キリストによるカトリックの信仰の表明が行われていったのである。1867(慶應3)年4月の自葬問題の発覚に対して、長崎奉行所は彼らに自葬の許可を出す一方で、彼らと宣教師との接触を内偵し江戸へと報告していた。そして、同年7月15日未明に、浦上の中心的立場のキリスト68名を捕縛・監禁し、浦上四番くずれが始まった<sup>33)</sup>。10月6日に一度は棄教を前提として彼らは釈放された。しかし、そのおよそ1ヵ月後の11月15日に大政奉還がなされ、1868(慶應4)年1月3日には朝廷により王政復古が宣言され、キリストの処分・取扱は未決定のまま時代は明治へと移ることとなった。

明治新政府の政治方針は、天皇を頂点とする国家主義体制の確立を明確に打ち出すものであり、宗教政策において神道の国教化を強く推し進めていた。すなわち、キリスト教は、徳川幕府の政策を引継ぐ形で明治政府においても、1868(慶應4)年3月15日から

32) 前掲31)100-102頁および122-133頁。

33) 前掲22)581-594頁。

掲示された高札のひとつに、

「切支丹邪宗門之儀ハ堅ク御制禁タリ。若不審ナル者有之バ、其筋之役所へ可申出御褒美可被下事」

と記され<sup>34)</sup>、禁教対象として位置づけ続けられた。これに対して外国公使団から抗議が出たが、その対応はとして次のように高札の記載内容の変更を布告した<sup>35)</sup>。

「先般御布告有之候切支丹邪宗門は、年来固く御禁制に有之候処、其外邪宗門の儀も総て固く被相禁候に就いては混淆いたし、心得違有之候はば不宣候に付、此度別紙の通り被相改候条、早々制札調替可有掲示事。

閏四月四日

太政官

### 定

一、切支丹宗門之儀ハ、是迄御制禁ノ通り固ク可相守候事  
一、邪宗門之儀ハ固ク禁止之事

」

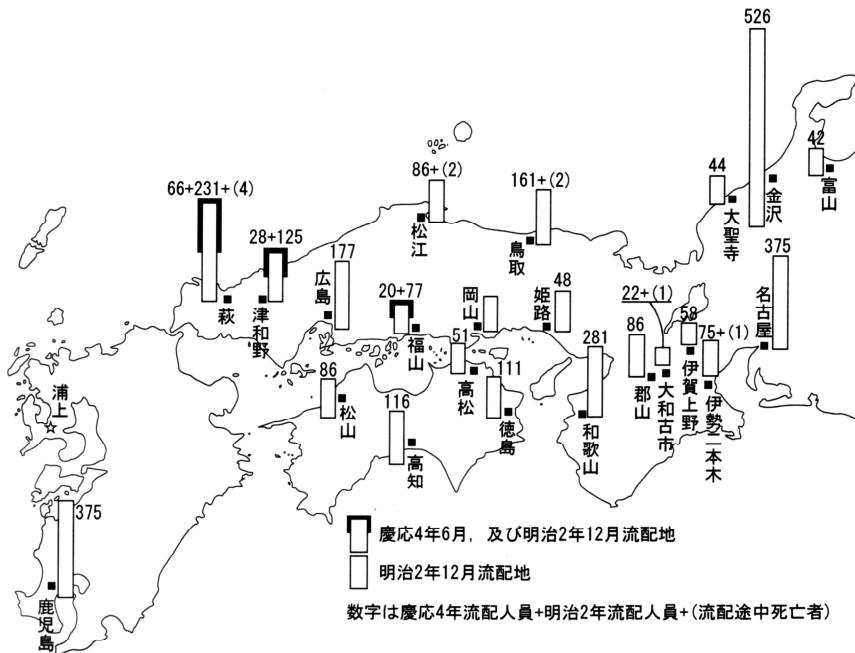
しかしその内容は切支丹（キリスト教）を邪宗門と分けることで、切支丹が邪宗門ではないとしながらも、諸外国からの抗議を回避するためだけの表面的な処置であり、結局は邪宗門と同様に弾圧の対象から抜け出すことはなかった。そして、明治政府による浦上キリストンの処分検討が再開されると、1868（慶應4）年、彼らに流罪という処分が下された。

1867（慶應3）年に浦上四番くずれがおきたのち、第5 4図および第5 4表に示したように翌年の1868（慶應4）年および1870（明治3）年の2度にわたって、計3394人の浦上キリストンが諸藩へ流刑に処された。津和野へは、1回目に28人、2回目125人の計153人が送られ、乙女峠にある廃寺となっていた光琳寺跡へと収容された。

ところで、この流配地と流刑者数との関係をみると、流配地となった諸藩の多くは石高が10万石以上であるのに対して、津和野藩は4万3千石でありとりわけ小藩であったといえる。藩の規模と流刑者受け入れの負担の関係を示すために、表中「対石高比」の項目で流刑者一人に対する石高の割合を出してみると、つまり一人当たりの数値が低ければ低いほどその負担が大きいことを示すわけだが、津和野への流刑者の対石高での割合は、全流配地平均で1857.7、他の諸藩は1000ポイント以上を示していることと比較すると、津和野のそれは281.0と算出され極端に低いことがわかるだろう。

34) 松島弘編『津和野町史第4巻』津和野町教育委員会、2005、383頁。

35) 前掲34) 383-384頁。



第5 4図 浦上キリストンの流配地図

出典: 広島教区 80周年記念大会殉教地・巡礼地ネットワーク『広島教区殉教地・巡礼地案

内 2003年版『カトリック広島司教区』, 2003, 61頁。

第5 4表 浦上キリストンの流配状況

流配地	流刑者数(人)		死亡者数 (人)	死亡率 (%)	石高 (石)	対石高比 (%)	
	合計	1968年	1970年				
名古屋	375	0	375	72	19.20	619,500	1652.0
富山	42	0	42	5	11.90	100,000	2381.0
金沢	526	0	526	103	18.07	1,025,000	1948.7
大聖寺	44	0	44			100,000	2272.7
津	157	0	157	15	9.55	270,900	1725.5
郡山	86	0	86	4	4.65	151,200	1758.1
和歌山	281	0	281	95	33.81	555,000	1975.1
鳥取	163	0	163	45	27.61	325,000	1993.9
松江	88	0	88	8	9.09	186,000	2113.6
<b>津和野</b>	<b>153</b>	<b>28</b>	<b>125</b>	<b>39</b>	<b>25.49</b>	<b>43,000</b>	<b>281.0</b>
姫路	48	0	48	8	16.67	150,000	3125.0
岡山	117	0	117	17	14.53	315,000	2692.3
福山	97	20	77	6	6.19	110,000	1134.0
広島	177	0	177	39	22.03	426,500	2409.6
山口(萩)	301	66	235	39	12.96	369,000	1225.9
徳島	111	0	111	13	11.71	257,000	2315.3
高松	51	0	51	5	9.80	120,000	2352.9
松山	86	0	86	8	9.30	150,000	1744.2
高知	116	0	116	39	33.62	242,000	2086.2
鹿児島	375	0	375	53	14.13	728,700	1943.2
<b>合計</b>	<b>3,394</b>	<b>114</b>	<b>3,280</b>	<b>613</b>	<b>18.06</b>	<b>6,243,800</b>	<b>1839.7</b>

注) 浦上キリストンに関する数値は、片岡弥吉『日本キリストン殉教史』時事通信社、1979,

626-627頁を、石高については、「近世大名配置表」(浅尾直弘・宇野俊一・田中琢編

『角川新版日本史辞典』角川書店、1997) 1293-1329頁を参照。

また、津和野に流刑された 153 人のなかには、高木仙右衛門・守山甚三郎という浦上キリシタンの指導的立場の人物が含まれていたことも特筆すべきことであるだろう。

そして、1873(明治 6)年に切支丹禁制の高札が撤廃されキリスト教が解禁となるまで、ここ津和野では、流刑から釈放、帰村の間に 36 人の殉教者を生み出すこととなったわけである。ではなぜ、このような小藩に、指導的立場の人物を含む 153 人ものキリスト教徒が流刑されることになったのだろうか。

次項では、その主な要因となったと考えられる津和野藩の教育政策と、倒幕から明治維新を経て確立されていく近代国民国家の形成における国家神道や復古神道との関係について述べていくことにする。

## ( 2 ) 津和野の国学と復古神道

上述のとおり養老館での国学・蘭医学重視の教育政策は、明治新政府における国家神道の確立過程のなかに深く関わっていくことになるわけだが、そこでまず国家神道の形成されていく過程について触れておく必要があるだろう。

国家神道とは、明治維新から第 2 次世界大戦敗戦までの間、近代日本の国家形成におけるイデオロギー的基礎として位置づけられた国教としてとらえられる。国家神道の確立は天皇を絶対的頂点とすることを前提とし、天皇の存在を伝統的根拠とする国家を形成することを意味するものである。その天皇に日本の国家としての正当性の根拠を追求したのが、復古神道である。

キリスト教弾圧が行われていた明治初頭における明治政府の宗教政策、すなわち神道国教化の確立過程において復古神道はその主導的立場にあったのである。江戸中後期に復古神道は、本居宣長の国学研究を継承した門人平田篤胤によって、国学における宗教的側面を展開し体系化されたものである。本居宣長の神道説の継承し発展させた平田篤胤は、『靈能真柱』のなかで、「古学を学ぶものは、第一に大和心を固めなければならない。そのためには、なにより人の死後の靈の行方を知ることが肝要である。靈の行方を知るには、まず天・地・泉の三つの世界のなりはじめを知り、それぞれの世界をつくった神々の功德をわきまえ、日本が万国の本の国であり、万事万物が万国をぬいて優れていること、天皇が万国の大君であることを熟知しなければならない」と説いた。これは神道説に基づく他界観・神觀による新たな救済論のひとつとしてとらえられる一方で、当時の社会が幕府の衰退・対外問題といった不安定な情勢であるなかで、復古神道は、『古事記』や『日本書紀』などの古典に依拠しつつ「復古を実現するための理論としての実践性」を求め、「天皇崇拜

の絶対化」を主張する人びとにその根拠として受け入れられた<sup>36)</sup>。そのため復古神道の主張は、天皇の宗教的権威の復活による打開を主張し展開された尊王攘夷運動の根拠となつた。

この「天皇崇拝の絶対化」をめざす復古神道の特徴のひとつは、徹底的な排他的・排撃的性質であった。神道の伝統的な性質が、むしろ習合性にあるとするならば、復古神道は非常に異質な思想を確立したものであった。しかし、ここにこそ国家神道の萌芽を作り出したように、政治的イデオロギーとして用いる有効性を備えていたといえる。そして、1868（明治1）年には明治政府は祭政一致のスローガンを掲げ神仏分離令を発令し、全国的に廃仏毀釈運動が展開していったのである。しかし、近代天皇制国家が誕生していくなかで、明治政府は近代化政策に合わせるように、急激な神道国教化から組織的な国民教化へと宗教政策を転換したことにより、当初その主導権を握っていた復古神道はその立場を急落させていくことになった。しかしながら、幕末から明治初頭における宗教政策に色濃く影響を及ぼし、まさにキリストン禁制を1873（明治6）年まで継続させる一要因となったこの復古神道と、津和野の養老館の国学教育が深く関係していたのである。

前述したように、津和野では、1786（天明6）年に藩校養老館が創設され、とくに最後の藩主となった亀井茲監は、養老館における藩士養成の改革を行い、とりわけ国学・蘭医学を重視していく。

その茲監があこなった養老館の改革で掲げられた学則は、次のような内容であった<sup>37)</sup>。

「道は、天皇の、天下を治め給ふ、大道にして、開闢以来地に墜ちず。人物の、因って立つところにして、今日万機、即ち其道なり。惟神とは神の道に隨うも、またおのづから、神の道あるをいふなり、亦曰。古道に順考して、政を為し給ふと。夫、学者は、道を知るもの、道を行うことは、其人にあり。正、其学に志すや、本を探りて隠れたるを顯し、素れたるを釐めて、これを正しきに返し、用いて、以て、鴻業を贊輔し、然して、人心、世道の古に復して、治平の、弥久しきを希うもの道に学ぶものの志のみ。

#### 右一則

学者、まさに名分を正し、大義をしる以て要とす。一日、片時も、臣子の職をわするべからず。嗚呼、恐るべし。天朝、幕府、國君上にまします。臣子たるもの、平生、豈仮にも外夷に服従し、蕃主に阿諛して、君父の國を外視せんや、造次にも、顛沛にも、國体を貶さず、よろしく、尊内卑外の大義を推して、もって忠孝の真理を守るべし。

#### 右二則

道を学ぶもの、外には法令を背かず、内には忠孝を励し、各自ら其祖先の遺業を専らに守りて永く子孫に伝うべし、是則神皇保建したまう所にして、よくこれをしり、これを

<sup>36)</sup> 小澤浩『民衆宗教と国家神道』(日本史リブレット61)山川出版社、2004、40-45頁。

<sup>37)</sup> 前掲20)，30-32頁。

保つを以て我道の極みとす。徒に，博学，多聞を，道の緊要とせんや。抑，道を学ぶは竟におのれか為にして，学を成就して國家の用に効するは遠し，しかるを今，此道をおこし給うの如此き想うべし。会公の至澤にして，豈其美德のみならんや。

右三則

上件三条，これを胸裏に維持し旦暮心を研ぎ身を修め，講席に臨んで可なり。もしそれ館中諸法度の如きは，既に其御制あり。いささか放逸怠慢すべからず。

教師 岡 熊臣 謹識」

第1則において，本居宣長から平田篤胤に引継がれ展開した国学，とくに復古神道の影響がみられ，第2則では幕末から維新へと導いた尊王攘夷の思想が明確に示されていることがわかるのである。津和野における国学の系譜をみると<sup>38)</sup>，復古神道を確立した平田篤胤の国学の流れを汲んでいることがわかる。また藩校養老館の改革を行った藩主龜井茲監自身が，平田派の熱心な神道家であったようである。津和野藩校養老館の国学者には，大国隆正・岡熊臣・福羽美静といった名がみられるが，彼らは，龜井茲監とともに，明治新政府における神道国教化政策に大きく寄与し，宗教行政上の重要ポストを占めていた。龜井茲監は，明治新政府に新たに発足した神祇官事務局の判事になり，後に昇進して神祇官事務局輔に任命されている。大国隆正は王政復古の宣言に多大な影響を与えたとされ，やはり新政府における神祇官諮詢役に就いている。1871(明治4)年に官制が改定されると，福羽美静は神祇官大輔に任命され，新政府における宗教行政のトップに就任することとなったのである<sup>39)</sup>。このように，幕末から明治初頭の日本の宗教政策における津和野藩がいかに影響を及ぼしていたのか，そして幕末から維新时期の日本における津和野藩の政治的立場がわかるだろう。

それゆえに津和野藩は，浦上キリストン流配地のひとつとなり，高木仙右衛門，守山甚三郎といった浦上キリストンのなかでも重要な人物を含む153人のキリストンが小藩であった津和野へと送られた要因のひとつとなったといえよう。こうした背景により津和野藩へと浦上キリストンは流され，収容所での拷問をともなう取調べ，過酷な収容環境により36人が殉教するという結果をまねくこととなったのである。

しかしながら，浦上キリストンの流配地は津和野を含めて20藩22ヶ所を数えるが，現在において津和野ほど巡礼者をひきつけている浦上キリストンの殉教地は無いといって良いだろう。他藩の殉教者数やその割合からみても津和野だけが特別に高いというわけではないことは，第54表を示したとおりである。では，なぜ同じ浦上キリストンの殉教が起った各流刑地のなかで津和野がこれほどまでに殉教地として注目され，巡礼地として発展していくことになったのだろうか。それは，聖なる空間というものが，エリアーデのい

38) 前掲20)，145頁。

39) 前掲34)366-372頁。

うように、聖なるものがその場所を聖別化していくものであり、人はそれを発見するだけであるとするならば、津和野以外の流刑地はいまだ人に「発見」されていないだけであるということになるのだろうか。また、それらの場所はすでに聖別化はされているといえるのだろうか。

しかし、その発見を通して実際に巡礼地として発展している津和野をみると、やはりそこには人びとの何らかの関わりを通すことで顕れるものであることを否定するものではない。そのため、聖なる空間や場所の理解をするためには、その場所に人びとがいかなる働きかけを行っているかに我々は注意を向けていく必要があるだろう。そこで次節では、津和野の乙女峠という殉教の地がどのように巡礼地として展開していくかを、乙女峠の「発見」と「整備」という2つの段階にわけてとらえていくことにする。

## 巡礼地・乙女峠の形成過程

### (1) 殉教地の「発見」

本項では、巡礼地の形成において、重要な存在として関わることとなった数人の神父の活動を中心に「発見」の段階から、その過程をおっていきたい。

乙女峠が巡礼地として形成されていく過程の中で、「発見」という段階に活躍した人物としてあげられるのが、ヴィリオン神父である。彼は、パリ外国宣教会の宣教師として1868(慶應4)年に来日し、長崎大浦天主堂に赴任した。そのため彼の眼前で、浦上四番くずれにともなう処分として1870(明治3)年に2回の大規模な流刑はおこなわれ、その際に自身も大浦天主堂内に監禁されていたという<sup>40)</sup>。その翌年からヴィリオン神父は、神戸、京都、山口、萩、奈良と転任していった。

1871(明治4)年11月24日に、ヴィリオン神父は神戸に着き、阪神間において最初に創設され、神戸外国人居留地内の現在の神戸大丸の裏手にあたる場所にあった三宮教会に着任した<sup>41)</sup>。前述のキリスト教に対する諸外国の抗議は、同時期に日本を出帆し翌年の5月にアメリカ合衆国に上陸した岩倉使節団への現地での抗議によって、条約締結を目

<sup>40)</sup> 池田敏雄『人物による日本カトリック教会史』中央出版社、1968、131頁。

<sup>41)</sup> 池田敏雄『ビリオン神父 現代日本カトリックの柱石』中央出版社、1965、115-116頁。

的とする政府はキリストンの扱いに関して方針転換の必要性をより切迫したものと感じ始めていた。そのためか、流罪中のキリストンの待遇も改善され、監視も緩んできていたようである。その頃から、金沢や愛知、和歌山、四国、中国方面など各地に流配されている浦上キリストンたちが、留置所から抜け出し大阪の川口教会や三宮教会へと訪れ始めた<sup>42)</sup>。

当時、川口教会に着任していたクゼン神父がプチジョン神父宛てた書簡によると、流罪された信徒は、「引かれて当地を通過し、加賀、尾張、伊勢等に送られた者も少なくなかつことは御承知の事と存じます。彼等は其等の國々へ、永久に流されたものと最初は皆信じて居ましたが、唯今では疑ひを容るべき余地がありさうです。彼等は殆ど皆大阪に拘留され、一棟の牢獄に二百名も囚はれて」<sup>43)</sup>いたとあり、この時期、おそらくは大阪以東に流されたキリストンと考えられるが、大阪に少なくとも二百名のキリストンが集められていたようである。それから、数日後の報告によると、「夜中庭園の門を激しく叩く音が聞え、それと共に大声が耳に入りました。急いで駆付けて見ると、半身を露出し、腰は梓の弓に曲り、頭には大きな笠を戴き、腰に扇を挟める一人の老翁が立つて居るのです。私は喫驚しました。よくよく見れば流罪に処せられた信徒の一人ではありませんか。彼は秘蹟を授かるが為に兵庫へ行き、私が大阪に居住せる由を聞き、一夜を此處に明かして、その途を続け、囚れの地へ帰るべく立寄った」とある。兵庫、つまりは神戸の三宮教会に天主堂（カトリック教会）が創設されたことが流刑とされた各地の浦上キリストンの間に知れ渡っていることがわかる。そしてこの時点で脱獄に対する处罚も各藩に任せられており、その内容も、数日の謹慎处分程度になっていたようで、取り締まり自体も相当寛大になっていたといえるだろう。こうした密行者のなかには、津和野に囚われていた守山甚三郎ら数人のキリストンも含まれており、三宮教会を訪れヴィリオン神父に面会していたほどである。そして、1873（明治6）年、太政官布告によりキリストン禁制の高札が撤去された。これをもって、浦上四番くずれによって各地へと流されていたキリストンたちは、釈放、帰村となった。

それからヴィリオン神父は京都へ移り、1889（明治22）年京都から山口に転任した。1890（明治23）年3月に長崎では、旧信者発見二十五周年祭が行われ、日本中の司教・神父が集った。浦上の信徒も焼く2500人が参列した。そこで、高木仙右衛門と守山甚三郎から、「津和野へ布教に行ったら、自分らの沈められた池へ見に行ってください。殉教者の墓を見舞ってください」<sup>44)</sup>と告げられた。

ヴィリオン神父は、その3ヵ月後に最初の津和野への訪問を行い、本格的調査は翌1891（明治24）年6月、浦上キリストン流刑者の一人であった広島教会伝道士ヨハンナ岩永を

<sup>42)</sup> 前掲41) 115-144頁。

<sup>43)</sup> 前掲31) 320頁。

<sup>44)</sup> 池田敏雄『津和野への旅 長崎キリストンの受難』中央出版社、1992、248-249頁。

ともなって始められた。取調べと拷問が行われたその頃の光琳寺跡地は、「町はずれの丘」の「細い坂道を登っていくと、丘の中腹に小さな平坦地があった。雑草の生い茂ったその中央に、仏僧の墓石が」<sup>45)</sup>いくつも立ち並び、「幾重にも仕切られた田と石垣」という風景へと変貌していた<sup>46)</sup>。ここ一帯は、現在森鷗外の墓など津和野で最大の寺である永明寺所有の土地となっており、ヴィリオン神父が訪れたときには、収容されていた廃寺光琳寺は取扱われ、土地はならされ水田となっており、すでにキリスト迫害の痕跡は無くなっていたといえる。しかしながら、当時牢番を勤め、殉教したキリストの埋葬にも携わった人物が、ヴィリオン神父らの案内を行っていることから<sup>47)</sup>、完全に津和野町人びとの記憶から消え去った出来事ではなかったといえる<sup>48)</sup>。

次に、ヴィリオン神父が取り掛かった活動は、まず蕪坂の千人塚にある殉教者の遺骨が埋葬されているところへ墓と碑の建立であった。ヴィリオン神父は津和野より以前に、萩において浦上キリストや江戸時代初期に殉教したキリストの墓碑や遺骨の収集整理を行い、キリスト墓地を建立していた<sup>49)</sup>。1892（明治25）年、津和野の蕪坂千人塚の土地は、フランス公使、井上馨外相、原保太郎山口県知事らの協力により、津和野教会<sup>50)</sup>所有となった。同年8月、殉教者36名の合同墓地をつくり、「為義而被害者乃真福（義のために迫害を受けるものは幸い）」と刻印した殉教者を祈念する石碑を建立した（第5-5図）<sup>51)</sup>。このヴィリオン神父によるキリスト遺跡の探索は、新たな信者を生み出す布教活動となり津和野にもカトリック信者が生まれ始めた。津和野の最初のカトリック信者となつた俵繁次は、1899（明治31）年、官場町に民家を購入し教会施設のために寄付し、最初の津和野教会となつた。

そして1922（大正11）年に、次は浦上キリストの収容所であった光琳寺跡地にヴィリオン神父が、石碑「信仰の光、1870」を建立した。その場所は、1981年に乙女峠を訪れたときに、同行していたヨハンナ岩永が石垣から滴り落ちた水を見て一瞬閃光がはしり

45) 前掲41) 354頁。

46) 前掲44) 250頁。

47) 沖本常吉『乙女峠とキリスト』（津和野ものがたり3）津和野町教育委員会、1971、151頁、前掲41) 337頁。

48) 殉教地を訪れた夜にヴィリオン神父は、津和野町内に「光琳寺のキリストに関する講演会 於津和野劇場」というポスターを貼り、講演会を行っている。会場は聴衆で埋まり、聴衆の中には光琳寺でのキリストのことを知っている者も少なくなかつたようである。そこでは、キリスト改宗の説得側の人物も証言者として聴衆の中から壇上に呼び出した。前掲44) 250頁。

49) ただし、1994年に墓地記念碑の石組みの組み換え作業の際深く掘ったが、遺骨が全く見つけ出されることはなく、それ以降は当地を「萩キリスト殉教者記念公園」と称されることとなつた。広島教区80周年記念大会殉教地・巡礼地ネットワーク『広島教区殉教地・巡礼地案内2003年版』カトリック広島司教区、2003、8-9頁。

50) この年の6月22日には、俵繁次氏という青年がカトリックの洗礼を受け津和野教会がスタートしていた。

51) 前掲41) 364頁。



第5 5図 千人塚の殉教者追悼碑

注)2004年7月28日筆者撮影。



第5 6図 石碑「+ 信仰の光」

注)2004年7月28日筆者撮影。

当時の記憶がよみがえり指差した場所であった（第5 6図）<sup>52)</sup>。その場所とは、津和野へと流されたキリストンたちが厳しい取調べと拷問を受けた場所であり、真冬に落とされた池と6畳間に35人を押し込めた光琳寺の跡である。

石碑建立の話は、すぐに浦上の守山甚三郎に手紙で知らされ、1924（大正13）年に彼は津和野への巡礼を家族とともにしている。こうして、ヴィリオン神父によって、殉教者の追悼の場である蕪坂の千人塚と、キリストンたちが信仰を守り拷問に堪え続けた乙女峠・光琳寺跡地にそれぞれ碑が建てられることになったのである。

このように、発見のきっかけは津和野に流された人びとのなかに、浦上キリストンを中心的人物が含まれていたことが要因のひとつとしてあげられよう。つまり、キリストン発見記念式の際に、高木・守山の二人がヴィリオン神父に要請をしたことが契機となったといえるからである。また、ヴィリオン神父も、明治維新からのカトリックの再伝来以降の日本での布教活動において中心的役割を担っていたことも、津和野の殉教地「発見」に必要な要素であったといえる。

そして、殉教地が「発見」された瞬間は、弾圧を経験した者の記憶と場所が結びついた瞬間といえる。すなわち、少なくともこの津和野の巡礼地としての成立していく条件とし

52) 前掲47) 152頁。

ては、ほかの誰でもなくその場所での迫害の経験を持つ者が不可欠であることを示しているのである。もちろん、ひとつの場所に対しても、さまざまな人びとによって多様な意味が帯びさせられていることも注意しておく必要があるが、この殉教地の「発見」においては、殉教者の関係者やカトリックの関係者からの視点の作用、その場所への働きかけによるものであるといえるだろう。とくに、そうした千人塚と乙女峠に建立されたそれぞれの碑が、殉教者への追悼とキリストが受けた拷問という苦痛の記憶をその場所に維持することとなる。しかし裏を返せば、迫害側にあった人びとにとっては殉教の記憶をその場所から消し去ること、あるいは忘却の場としておきたかったとも考えられるが、この点は推測の範囲を越えない。

ところで、このヴィリオン神父による「発見」の段階においては、津和野の殉教地を形成し支えていく主体は、津和野町内に生まれ始めたカトリック信者と、津和野に流された浦上キリストたちという範囲でとどまっているといえよう。そして「発見」当初は、取調べと拷問が行われた乙女峠の光琳寺跡地よりも、実際に殉教者らが埋葬されている墓と追悼碑が建立されている蕪坂の千人塚のほうが重要視されていた。

こうしたキリスト殉教地の発掘作業は、津和野に限らず行われていたようであり、これらのことから考えるならば、乙女峠が現在多くのカトリック信者をひきつける巡礼地として発展することとなったのは、ヴィリオン神父らによる発見よりも後の段階での活動がより重要な意味を持っているようと考えられる。そこで次に、巡礼地として発見された後、乙女峠にカトリックの宗教的施設の建設や拷問に使われた池や、マリア出現の場面を再現した像の建立など巡礼地として整備され、徐々に人びとの間に、とくにカトリック信者の間に知れ渡っていく過程について述べていくことにする。

## ( 2 ) 巡礼地乙女峠の整備

前項でみた「発見」の段階では、殉教地である乙女峠よりもむしろ殉教者が眠る蕪坂が重要視されていたが、その後、次第に乙女峠を中心とした巡礼地の整備が行われていくことになる。

1922(大正11)年、それまで津和野教会をふくむ広島教区はパリ外国宣教会(パリミッション会)から、イエズス会に司牧が委託されることになった。ヴィリオン神父は1924(大正13)年まで、津和野教会に留任していたが同年神戸へと転任し、代わってイエズス会のヴェケレー神父が着任した。イエズス会は、津和野においてまず宗教共同体としての基盤づくりを行った。ヴェケレー神父が主任であった1928(昭和3)年には、現在のカトリック津和野教会の敷地となっている殿町の旧堀家(元家老)の屋敷を購入した。1929(昭

和4)年には、1920(大正9)年に秋田で創立された女子修道会の聖心愛子会(現在は、聖心の布教姉妹会)が幼花園を開設した<sup>53)</sup>。そして、その翌年の1930(昭和5)年にカトリック津和野教会の聖堂、神父館、聖心愛子会の幼花園を新設したが、火事で全焼し、1931(昭和6)年に再度、教会、幼花園を再建するに至った。このように、イエズス会が津和野に来た当初は、千人塚や乙女峠に関する記録が全く無く、津和野での教会運営の基盤づくりに力が注がれていたと考えられる。また、日常的な宗教活動の拠点づくりに資金が多く費やされていることから、経済的に乙女峠の整備をおこなうほどのゆとりもなかったとも思われる。事実、教会再建から8年後の1939(昭和14)年に、当時の主任司祭であったセルメニヨ神父が、乙女峠の浦上キリスト教が収容され取調べと拷問があこなわれ、その後永明寺が土地の所有者となっていた禅寺廃寺光琳寺跡地を津和野教会のものとして購入することができたのである。しかも土地購入資金は、メキシコ聖母青年団による募金の寄付であった。その経緯が、1940(昭和15)年10月13日付のカトリック新聞に掲載されている<sup>54)</sup>。その抜粋を以下に記すことにする。

「ポルチュンクラの聖母の祝日なる八月二日(昭和十四年)にこの殉教の聖地(津和野光琳寺跡)が教会のものとなりました。この聖地が教会のものとなりました経緯もまったく聖母マリアが世の人びとからこの聖地において尊敬を受けられたいとの思召しでお摂理になった明らかな証拠と考えられます。ちょうどこの聖地が買収される二、三か月前、私がメキシコのある青年に書き送った次の手紙に始まります。

『私のありますこの津和野の土地は昔の聖地でありまして、聖母マリアはその殉教者たちにしばしば出現されました。偶然にも二日前この土地が六百円で私の手に入ることを耳にしました。どうぞ聖母マリアにこの聖地を買うことができますようにお祈りください。』

かくして私が予期していました通り、聖母マリアはメキシコの聖母青年団(コングレガション・マリアナ)の手をもってその手段を与えて下さいました。この熱心なメキシコの青年の手紙の一文を紹介してその説明にかえます。

『敬愛する神父様、われわれは聖母マリアが出現なされましたという土地をお買いになるために金子をお送りすることを非常な幸いとし、かつまた光榮に存じます。ペレス神父様(青年団指導者)は神父様よりのお手紙の一部分を五月聖母聖月の集まりにお読みになりました。その時すぐある婦人が百ペソを寄付しました。また質素な服装をした婦人が二百四十ペソも出して下さ

<sup>53)</sup> 幼稚園設立の経緯は、国枝幸子「島根県の「津和野幼花園」の創設についての一考察」聖園学園短期大学研究紀要32、2002、37-54頁参照。

<sup>54)</sup> 前掲44)272-273頁。

いました。その他小さな寄付が集まって日本貨で八百余円も集まりました。前記の婦人の八百ペソは革（毛皮ではないでしょうか）のためにかねて準備されたものであるということでした。

その婦人はその金子によって自分の子どもたちが宣教師となる思召を天主から戴くために聖母マリアに献げられたものであります。しかるに聖母聖月にわずか二日間にわれわれ青年団の聖母の御力によってお頼みを受けました八百円の金子を集めることができたのは、実に聖母御自身が日本の聖母になられたいと思召を示されたのに相違ありません。この寄付金については、われわれはただの一銭たりとも、われわれ青年団の名誉とする権利は少しもありません。しかしわれわれが聖母のためにわざかなりともお世話することができますのを、われわれの無上の喜びとします。神父様、われわれのためにお祈り下さいますのを楽しみにお待ちしております』……。」

聖母マリアの出現は、公認のみならず非公認であってもカトリックの多くの聖地にある話のひとつであり、とくに聖母マリアに関わる神秘的現象（聖母出現や聖母像に起る奇跡など）が起きたというところは多くの人びとをひきつけてやまない。そのため、津和野・乙女峠で殉教者たちの前にマリア出現があったという話は、浦上キリストンや津和野だけではなく、全世界のカトリック信徒の注目を集めるのに有益なものである。この両者の手紙をみても、殉教者や迫害を受けた人びとの信仰によって引き起こされた悲劇よりも、その話題の中心は聖母マリアの出現となっていることが見て取れよう。少なくとも、乙女峠購入以前に、マリア出現の話がセルメニヨ神父は知っていたのであり、津和野の信者らの間では知られていた話であったのだろう。そして、カトリック新聞にこの記事が掲載されたことにより、公認ではないが津和野乙女峠のマリア出現の話は、遅くとも日本の信徒の間にも知られ始ることになったといえる。

そして、戦後の 1946（昭和 21）年に津和野教会に着任したパウロ・ネーベル神父はすぐに乙女峠に記念聖堂を建設計画に着手し、本格的に聖なる場所として整備され始ることになる。2 年後の 1948（昭和 23）年に具体的な記念聖堂建立計画が立てられ、元町長望月氏らを中心とする聖堂建設委員会が発足されている。記念聖堂建設には当時の島根県知事原夫次郎や占領軍軍政部エンスト・マウステレット、占領軍島根軍政部グレーテン・モーサルトらが賛助している<sup>55)</sup>。ネーベル神父は着任後、まず乙女峠の麓から光琳寺跡までの農道であった道を整備し、津和野でのキリストン拷問の象徴ともいえる池を掘り起こしている<sup>56)</sup>。ネーベル神父着任により、聖堂建設が実行され 1951（昭和 26）年に、乙女峠マリア記念聖堂が献堂されることになったが、セルメニヨ神父が乙女峠の土地を購入し

<sup>55)</sup> 防長新聞 1949 年 6 月 3 日。前掲 44 ) 274 頁。

<sup>56)</sup> 前掲 44 ) 274 頁。

た頃からそうした計画があったとも考えられる。とはいえるとして、こうして殉教者の追悼と、苦悩を味わったキリストianたちを偲び、またそうした彼ら出現した聖母マリアの慈愛に祈り捧げる場所が徐々に作り出されはじめたのである。では、記念聖堂建設当初の巡礼者はどのようなものであったのだろうか。守山甚三郎の孫である守山寛によると、ネーベル神父は長崎の浦上教会で津和野に流配された人びとの親族を探したが、戦後という混乱期でもあり、さらに浦上は原爆の爆心地でもあることから、名乗りでるものはいなかったという。そのころ浦上キリストianの親族らも津和野へ訪れるものはいなかったようである。

1952年から行われた第1回の乙女峠まつりには、この守山寛や島根出身で『乙女峠』<sup>57)</sup>を書き記し長崎で被爆した永井隆博士の子どもたちが参加している<sup>58)</sup>。

この乙女峠まつりは、毎年5月3日に殿町のカトリック津和野教会からマリア聖堂（第5・7図・第5・8図）までの約1kmの道のりを聖母行列（第5・9図・第5・10図）をおこない、乙女峠でミサが催行される。1959（昭和34）年には初の野外ミサがおこなわれ、約700人が参加した。1968（昭和43）年には、聖母出現百年を記念して乙女峠に殉教記念碑が新たに建立された。その建立は、岡崎祐次郎神父<sup>59)</sup>が「乙女峠は日本の教会の誇りだから、記念碑はぜひ日本信者の手で」と募金を呼びかけて実現した<sup>60)</sup>。そして、現在では、乙女峠まつりへの参加者は全国から1500人から2000人ほどへと増加している。乙女峠まつり以外の巡礼者も増加し、1970年代において10万人以上に達したとされる<sup>61)</sup>。津和野教会の信徒数は、2000年で49人であることにくらべると、どれだけ多くの信者が乙女峠がひきついているかがわかるだろう。

日本でのカトリック巡礼として、現在、日本26聖人の足跡を辿るカトリック信徒の行動がみられる。今から22年前の1982年に、ある信徒が「長崎への道」巡礼を提言して以来、多くの人が巡礼を行うようになった。こうした巡礼者の増加という経過とともに、1994年に「日本26聖人足跡を辿る京都～長崎 1000km：巡礼地図帳」が信徒主導で作られ、1997年の日本26聖人殉教400年記念を期に「新巡礼地図帳」が完成した。そして、京都から長崎までの完歩者には完歩証書が贈呈される。ただし、この地図帳や完歩証書、機関紙は、カトリック中央協議会や各教区の公式認可というものではなく、提言者である一人の信徒が運営する長崎の道事務局が発行しているものである。その巡礼地図帳には、この津和野の乙女峠へのルートが組み込まれている。1987年からは、津和野への道巡礼も始められ、毎年5月3日から5日の3日間の日程で広島県廿日市から津和野までの道のりを徒步巡礼する。この行程は、津和野へと流配された浦上キリストianたちが歩かれた道を復

57) 永井隆『乙女峠』中央出版社、1952、82頁。

58) 津和野カトリック教会発行『宣教百年の歩み』、1992、18-20頁。

59) 前掲44)276頁。1962（昭和37）年にネーベル神父は日本に帰化し、乙女峠で殉教した少年守山祐次郎の名をとり、岡崎祐次郎と改名した。

60) 前掲44)276頁。

61) 前掲44)276頁。



第5 7図 1960年ごろの乙女峠マリア聖堂

注) 俵家所蔵。



第5 8図 マリア出現を再現した像

注) 2004年7月28日筆者撮影。



第5 9図 乙女峠まつりの聖母行列

注) 1959年5月3日撮影。俵家所蔵。



第5 10図 マリア聖堂へ続く坂道をゆく  
聖母行列

注) 1961年5月3日撮影。俵家所蔵。

元したどるものとなっている。このように、聖堂や記念碑建立への募金の呼びかけによる乙女峠の物理的な場所の整備とともに、祈りの時間の整備ともいべき乙女峠まつりの開催が徐々に人びとへ迫害・殉教・マリア出現の場所として乙女峠が知られるようになったといえる。

津和野乙女峠に関わるこうした人びとの拡大は、すなわち新たな巡礼地の維持・管理の方法を生み出すことになる。1979(昭和 54)年に「乙女峠友の会」が結成されている。その目的は、乙女峠の維持・管理を目的としたものである。前述のとおり、津和野教会に所属する信徒数自体は、2000年現在で49人である。そのため、乙女峠の維持・管理をおこなっていくには 経済的にも人的労働力としても大きな負担となることから結成された。

その案内を以下に記しておく。

「「乙女峠友の会」会員募集

機関紙「せせらぎ」が年数会送付されます。

余剰金は乙女峠維持のために使われます。

一口 500 円。」

そして現在、乙女峠友の会の会員は全国に約 2500 人にのぼる。また、このほかにも、個人献金や全国の教会からの献金などもあるという。

## おわりに

以上、津和野のキリストン巡礼地乙女峠の形成過程をみてきた。

当初、浦上キリストンが津和野へと流されたとき、そこはまさに幕末から明治期にかけて近代国家幕開けの宗教政策における中心であった。藩の政策による藩校養老館での国学教育は、国家形成における天皇の絶対的地位確立の根拠を示す復古神道の先鋭たちを生み出していたのである。そして埋葬問題に端を発した浦上四番くずれは、総勢 3394 人の浦上キリストンを全国各地へ流配とし、613 名の殉教者を生み出す結果となった。その流配地のひとつであった津和野においても、当地での殉教者 36 名、途中での死者 3 名を数えたものの、津和野以外での殉教者も決して少なくはないのである。しかしながら、浦上キリストンの殉教地として年間 10 万人ともされる巡礼者が訪れるところはほかにないだろう。

ではなぜ、この津和野がこれほどまでに巡礼として発展していったのだろうか。しかし、その要因を探ることはかなり困難なことである。確かに、浦上キリストンの指導的立場の人物達が、津和野へ流された人びとのなかに含まれていたことや、近代日本におけるカトリックの基礎を作ったとされるヴィリオン神父の存在は、発展させる要素の一つとして含まれるだろう。また、釈放後に語られた弾圧・迫害・拷問の体験やマリア出現の話もまた、巡礼を通して苦しみを受ける犠牲というカトリックの信仰に基づく信者がもつ価値観や、聖母マリアへの崇敬の念によるものなど、多くの人びとをひきつける要素は多々あるだろう。また、津和野が小京都として知られる観光地であることも要因のひとつにあげることも可能であろう。しかし、本稿での関心の所在はそうした諸条件から巡礼地へと発展した要因を追究するものではなく、人びとがその場所をどのように感じいかなる宗教的経験を

なしうるのか、あるいは宗教的世界観がどのような空間構造を作り出すのかといったことを明らかにするものでもない。

本稿で明らかとなったことは、巡礼地として形成されていくなかで多様な人びとが関わりながら、「発見」・「整備」・「巡礼」といった段階をへるなかで、より多様な意味が付与されていくことである。最初の段階においては、殉教者を偲ぶ場所であったり、迫害の苦悩を思い出すつらい場所であった。またその場所に関わる人々も、浦上キリスト教徒に限られていた。しかし、すぐにその支持者は増加することになった。それは、殉教地の調査によってたびたび訪れることにより、その調査に協力するものがあらわれたことであり、それをきっかけとして津和野に洗礼者が生まれ始めたためである。すると、乙女峠は死者を慰霊するのみならず、信仰を守り続けた偉大な人びとと結び付けられる場所へと徐々に重心が移動していった。巡礼地として重要視される場所も、運動するように殉教者の墓碑が立てられた千人塚から、収容所と拷問の場所であった乙女峠へと移動していくこととなった。さらに、聖母マリアの出現などの話が掘り起こされることによって、より乙女峠を支持する人々は空間的にも広がりを持ち始め、徐々に巡礼者の出現へと連なっていったのである。そして、「乙女峠友の会」や有志による巡礼者の組織化といった動きも確認される。このように、そうした意味が付与された場所がまた新たに人びとの宗教的実践を促進したり、人びとの組織化、あるいは巡礼地を維持する制度を生み出すという構造が明らかとなった。

このように、聖なる場所はそこに教義や信仰体系に基づいた価値を見出すこと、また何らかの権威付けがなされることによって、人びとのなかに聖なる場所としての認識が生まれ、さらには人がその場所へ訪問することにより、その空間はさらなる聖なる価値が。そして、人々は個人的な情緒的な聖なる経験をする場所となりうるのである。そしてその過程においては、マリア聖堂や各記念碑など宗教施設の設置や乙女峠まつりなどの儀礼の催行という、聖なる空間と時間の整備が行われているのである。また浦上キリスト教徒たちの乙女峠での個人の経験としての場所の記憶は、宗教共同体としての見出される共通の記憶のとして共有されることによって価値がより強化されていったといえる。つまりは地域を越えた宗教ネットワークに支えられる場所へと展開していく過程でもあるといえよう。

## 結論

---

以上のように、本稿では空間と社会の構造や意味理解において宗教的因素に注目し、いくつかの側面から考察してきた。その目的は、宗教が社会とどのように影響しあっているのか、またその関係のなかで聖なる空間とはどのように形成されるのかを明らかにすることであった。そして、その空間、社会の関係のなかで人びとはいかなる宗教的行為を行っているのかを描き出すことであった。

研究対象としての宗教を文化的現象のひとつとしてとらえ場合、それは社会性を帯びたものであり、社会関係のなかで生産、再生産されるものとしてとらえることができることを確認した。文化のとらえ方の新たな視点は、宗教地理学においても同様に、1990年代以降、Kong や Park, Stump によって提言されてきている。さらには、現代地理学における空間、場所をめぐる概念の動向との交差から、宗教地理学の今後の課題を示すことを試みた。そして、本稿では宗教の分布・伝播と聖なる空間と社会との関係というテーマに注目するなかで、従来の研究成果より課題あるいは可能性として導き出されたのが、宗教の分布という空間パターンを地域社会レベルでの受容の様相をとらえることで、多様な実態を把握する必要性があること。また聖なる空間に関する研究においては、聖なる空間、場所を社会的構築物として分析をおこなう研究が主流となっており、その視点は、共同体アイデンティティや聖なる空間の政治という研究へと展開していくことが可能であることであった。そして第2章以降において4つの事例をとりあげ分析・考察をおこなった。

まず第2章<sup>1)</sup>では、宗教分布の空間パターンの形成について布教者の影響や他の宗教の影響から分析をおこなった。従来信仰圏として同一の圏に分類されていたもののなかにも差異が認められることを明らかにした。それは、地域社会における布教者の活動が非常に重要な影響を及ぼす可能性を指摘した。そして講組織の形成や靈神碑を建立状況から分析を行ない、他の宗教との関係も信仰形態に差異を生じさせる要因となっていることが推察された。ただし、第2章では地域社会というスケールでの宗教受容の検討を行うまでには至っていなかった。

そこで同様に、宗教が人びとに受容されていくことをより地域社会レベルで考察を行ったのが第3章<sup>2)</sup>である。地域社会におけるさまざまな社会的関係と宗教の受容について分析を行なった。ここでは、農村社会におけるカトリックへの集団改宗を対象として扱った。方法論としては、位牌や洗礼台帳を資料として、地縁的関係と血縁的関係と改宗パターン

1) 阪野祐介「新潟県・八海山を対象とした山岳信仰の展開」歴史地理学 45-5, 2003, 1-18頁。

2) 阪野祐介「京都府旧佐賀村におけるカトリックへの集団改宗と農村社会」人文地理 58-4, 2006, 21-40頁。

との関係を分析した。宗教の受容に際して人びとの地縁的なつながりがより影響を与えていることが示された。それは、同族関係以上の統制力をもつことを明らかにした。また、集団改宗以降の変遷をみると、「家」という単位が信仰の存立基盤となっていることもわかった。

そうした宗教の存立基盤の検討について、住民の宗教的実践に目を向けると、神社の祭りをめぐって、カトリック信徒と非信徒との間で摩擦が生じたことが確認されたが、それは、神社の祭が各集落の地縁的関係を基礎とした祭礼組織によって行われているためであった。つまり、それは宗教が共同体アイデンティティ形成に強く寄与することを示しているといえよう。これは、宗教がもつ、同一集団内の連帯を強化する力とともに、他者との差異化を引き起こす力を映し出しているといえるだろう。この宗教による紐帶の強化や差異化機能は、宗教現象を人びとのいとなみとしてとらえるかぎりは、聖なる空間を作り出すことによって意図的生じさせることも可能となる。そのひとつが宗教の政治的利用の問題である。

第4章<sup>3)</sup>では、1949年に行われたザビエル渡来400年祭にみられる政治と宗教との関係を明らかにした。ここでは、メディア・イベントの概念を援用しながら、このザビエル祭という宗教的式典が国家規模の行事として展開していく実態を明らかにした。

GHQの宗教政策のもと、信教の自由と政教分離が進められたが、マッカーサーにより積極的にキリスト教支援が行われ、精神的側面での支配として日本のキリスト教化が企てられていた。それゆえザビエル祭は、まさにGHQの宗教政策を人々に受け入れさせる絶好の空間と場所となった。それは宗教政策のみにとどまらず、ザビエル祭をとおして平和・復興の象徴=キリスト教というイメージを人びとに植えつける時空間として位置づけられるものであった。一方で、カトリックにとっては、ザビエル祭が宗教施設建設の契機となり、日本における宗教的拠点の充実をはかり、布教活動の空間的な拡大という戦略性も窺うことができたのである。このことは、いわば、カトリック独自の宗教的世界観が表象される舞台において、宗教を国家形成における象徴的な利用という、シンボル化の過程を看取することができる空間となっていた。その宗教がシンボル化される空間には、上記のようにさまざまな意味が複数の集団によって持ち込まれることもみられる。

第5章では、津和野のキリストン巡礼を対象として、聖地形成における人びとのかかわりに注目した。そこで明らかとなったことは、巡礼地として形成されていく「発見」・「整備」・「維持」といった段階をへるなかで、多様な意味が付与されていくことである。それは、その場所が巡礼地として発展していくにつれてそこに関わる人々の属性が多岐にわたることによって、その場所へ訪れる動機も多様となることが要因としてあげられるだろう。浦上キリストンの末裔と津和野の信者によって支えられてきた乙女峠は、地域的な結びつきによる共同体の場所から、空間的な枠組みを越えた宗教的アイデンティティを基盤とし

<sup>3)</sup> 阪野祐介「日本をめぐったザビエル渡来400年祭」神戸大学地理学論集1, 2007(印刷中)。

た人びとの出現によって、多様な意味を付与されることになっていったのである。そして、新たに出現する人びとの存在によって、乙女峠は宗教的価値基準においてより神聖性を高めていくことになる<sup>4)</sup>。

本論では人びとのいとなみのひとつである宗教を対象として、宗教と空間、社会の関係において4つの側面から考察を行ってきた。宗教を研究対象とする場合として、緒論や第1章で述べてきたように、本稿では人びとの宗教的いとなみである宗教現象を明らかにすることから、宗教のもつ力も人びとの関わりのなかで形成されていくものとしてとらえるとした。つまり人びとの慣習といった行動様式を決定付ける基盤としての文化や宗教というとらえ方ではなく、それ自体も人びとの行為や諸集団間の政治のなかで常に創り出され、変化していくものととらえる立場から分析をおこなうことを提示した。空間と社会の関係における宗教の作用という側面からは、直ちに模式図として示される以上に複雑な様相であることを承知の上で、グレゴリーの権力の目の図式に当てはめて整理するならば、信仰者の宗教的いとなみによって形成される具象空間、つまりは場所に焦点を当てた考察は、第2章の宗教の空間構造をとらえることとも交差するのである。宗教の分布という空間構造を成り立たせているものは、人びとの宗教的いとなみの集合に他ならないのであり、第3章で示したように、個々の地域における宗教の受容の様相や、第5章の巡礼地形成における宗教集団内部の多様性を明らかにしたように、人びとの宗教的行為のダイナミクスを丹念に明らかにしていく必要がある。一方で、第4章で取り上げた国家と宗教の関係における空間と社会の分析は、空間の表象と交差する領域である。本論文では、具象空間に対する方向の考察にとどまるっていることは、今後の課題となるだろうが、第4章の研究を人びとが実際に宗教的実践をおこなう場所からの分析を射程にいれることで深化させることができるのである。ただし、宗教それ自体が権力という位置づけによって構成される空間と社会の関係も成立するものであり、まさにその間形成は複雑なものとなる。そして、人びとが宗教的ないとなみのなかで感じる神聖さや畏れ、あるいは神秘といった個人の情緒的感覚を軽視することはできない。こうした感覚なしには、宗教を新たに受容するという現象も、聖なる場所に人びと引き寄せられる現象も起きることが困難である。そのため、「聖なるものとは力であり究極的にはとりもなおさず実在」するというエリアーデが示したヒエロファニーという概念を再検討することも、聖と俗を考察するなかで見過ごすことのできない課題としてあげておく。

最後になるが、本研究では主に日本において外来宗教のカトリックを対象として扱った。日本の宗教の歴史は、神道を中心軸として展開してきており、おのずと天皇制を抜きには語れない部分がある。とはいっても、古代以降、仏教、儒教、キリスト教の影響を受けながら、

<sup>4)</sup> しかし、反面観光地化していくことによる弊害が生じることも考えられる。近年、聖地の管理という視点からの研究も行われ始めている。松井圭介「ツーリズムの影響にともなう聖地管理の課題 Shackley, M.: Managing sacred sites をてがかりとして」人文地理学研究 29, 2005, 159-169 頁参照。

とくに近代以降の国家形成における日本の伝統の正当性を主張する根拠として天皇制が確立されてきた過程を顧みることができるならば、神道が形成・変容・体系化されてきたという事実が存在するにほかならない<sup>5)</sup>。丸山眞男は、その拠り所となる根拠について、「近代にいたる歴史意識の展開の諸様相の基底に執拗に流れづけた、思考の枠組み」を歴史意識の「古層」と呼んでいる<sup>6)</sup>。今日の文化論的解釈においては、この不变なる「古層」という認識自体は批判されるものではあるが、「発見」と「創出」の「古層」という解釈のもとに日本の宗教の歴史を紐解く領域は残されているといえよう<sup>7)</sup>。そうした日本の宗教の歴史を前提としたなかで、日本のカトリックの展開や信仰者のいとなみをとらえることは、日本の宗教的状況の一側面をとらえるために意味があるかもしれない。現在の状況のなかで、キリスト教は日本において信徒数からみた勢力としてはマイノリティであるが、社会的・文化的側面への影響は少なくない。では信仰あるいは宗教としての日本におけるキリスト教の展開を困難にしている要因は何であるのか。日本の宗教的状況は、多様で寛容であるといわれる場合がよくあるように思われる。しかし、多様であることが必ずしも寛容であることにつながることを意味するものではないし、日本の宗教的状況が「多様な」という形容動詞によって修飾されることすらも疑わしいのではないだろうか。日本の宗教の歴史を辿ると、多くの新しい宗教が出現すると同時に、その時々の権力はそれを弾圧・迫害してきた。たとえば、16世紀終わりから明治維新後、さらには戦中期におけるキリスト教の弾圧をみれば明らかであろう。現代の宗教的状況の特性でもある日本人の多くが自らを無宗教と称する傾向も、共通しているものを要因としてとらえ説明できるのではないだろうか。

現在日本で用いられている宗教という単語は、明治に入り西洋の「religion」の訳語として当てはめられたことを起源としている。すなわちキリスト教的形態を前提とした宗教概念がその言葉にこめられている。そのため、他者がみる日本の宗教的状況と日本社会自らが認識する宗教という言葉が表す意味とに差異が生じる可能性があるといえよう。日本の日常生活のなかには、実に数多くの宗教的因素が散りばめられている。宗教の世俗化が、社会への宗教の影響力の弱体を示すのであれば、表面上は日本社会もまた世俗化が進んでいるという認識が相当するかもしれない。しかし、実際には、初詣やお盆など習俗化したものもあれば、手段としての宗教的いとなみ、宗教的場所を拠り所としているマイノリティの人びとがいること、また現在の日本国家がひとつの宗教を事実上保護し、利用しているという現実を世俗化という説明が覆い隠してしまうこともあるだろう。つまりは、日本社会の状況に沿った宗教概念の再検討が常に求められているのではないだろうか。

以上、日本社会を背景とした宗教概念の再検討とともに、各章と関連した個々の事例的

5) 明治維新から敗戦までの間に確立された国家神道に組み込まれた神社と教派神道に含まれる諸教派の差異があることには留意する必要がある。

6) 丸山眞男「歴史意識の「古層」」(丸山眞男『忠誠と反逆 転形期日本の精神史的位相』筑摩書房、1992)、293-351頁。

7) 末木文美士『日本宗教史』岩波新書、2006。

課題とともに、分析方法や理論的枠組みにおいてもいまだに残された課題は多いが、克服すべき目標として掲げ、宗教、空間、社会についての考察を今後においてより深めていくたい。

## 付 錄

---

キリスト教関連記事の見出し一覧（朝日新聞東京本社版，1943-1950）	151-157
キリスト教関連記事全文（朝日新聞東京本社版），1948年	158-171
キリスト教関連記事全文（朝日新聞東京本社版），1949年	172-199
神戸新聞掲載のザビエル400年祭関連記事全文，1949年	200-211

1943年：キリスト教関連記事の見出し一覧（朝日新聞東京本社版）

掲載月日	見出し
2月22日	生れ変る贊美歌 三月から米英色一掃
3月27日	寺院 教会を開放 六百の鍊成道場 宗教団体委員会決定
6月16日	都下宗教団体一丸に
6月17日	市宗教報国会開会式
6月22日	宗教音楽協力会結成
6月29日	興亜宗教協力会議開く けふ宣言発表
6月30日	世界宣言可決 宗教協力会議
7月28日	加教徒も決然起つ 日本精神の宣揚へ
9月9日	聖公会も合流と決る

1944年：キリスト教関連記事の見出し一覧（朝日新聞東京本社版）

掲載月日	見出し
1月25日	戦ふ一億へ心の糧 宗教動員、宗派などは超越して
1月29日	待たれる教化活動 打樹てよ“皇国宗教” 宗教教化方策委員会の使命
5月10日	皇國の宗教かく進め 大詔の御趣旨徹底 没我報恩の精神を涵養
5月10日	全国に教化網
5月10日	宗教家一万人動員 家庭や職場でも真心こめて行事
5月10日	組織を整備 大東亜建設には専門機関
5月10日	生活の中に活かせ 大切な家庭の宗教教育
7月12日	宗教家一万、増産陣に出馬
9月23日	「宗教常会」で必勝 信仰を通じ全国民結束
10月7日	親代わりになろう 疎開学童に宗教団決起
11月1日	勝つための信仰賽銭へ 宗教報国会の中央常会開く

1945年：キリスト教関連記事の見出し一覧（朝日新聞東京本社版）

掲載月日	見出し
9月3日	文相の語る“新宗教道” 基督教温かな行いを 仏教真の“心の隣組”として
9月17日	スペルマン師来朝
9月21日	「憎しみ拭い去って」首相宮外人宣教師に御言葉 国内代表も御招待
9月21日	戦後宗教は活発に
9月22日	信仰心の復興へ 耕しつつ農村へ伝道 戦後の基督教活動
10月7日	信教の犠牲六十余名 日本ホーリネス教会への迫害
12月11日	救靈伝道隊全国へ
12月19日	日米クリスマス音楽大会
12月25日	教団は大分裂か 公布される宗教法人令

1946年：キリスト教関連記事の見出し一覧（朝日新聞東京本社版）

掲載月日	見出し
1月3日	教団の預金封鎖解除
4月22日	神宮外苑に「メシア」の歌声 復活祭とは
6月8日	キリスト教全国大会
7月6日	米から両司教来朝
7月20日	両司教謁見
7月24日	神の前に勝敗なし 詛では囚われの“東京爆撃”搭乗者 聖書を胸に近く来朝 動機は差し入れの聖書 シェザー君の手記
8月9日	教会再建に二万弗 ローマ法王から贈りもの
9月14日	米国から宣教師団
12月12日	“国際キリスト教大学”建設へ
12月14日	精神革命の成就へ— マ元帥書簡 キリスト教布教の好機
12月25日	人類の理想に点火 マ元帥Xマス・メッセージ
12月25日	Xマス・イープ“孤児の喜び”

1947年：キリスト教関連記事の見出し一覧（朝日新聞東京本社版）

掲載月日	見出し
1月15日	広島も候補地 キリスト教大学
1月16日	神学生ヴァチカンへ
1月18日	日本のみなさまへ 植村女史の言葉 謙虚に明るく— 米国とのよい面を学んで
1月22日	ふえたキリスト教徒 新興宗教めざましい発展
1月22日	宗教平和会議 各派連合で四月に開催
1月25日	日本の婦人運動を世界的に ジュネーブの植村女史の豊富 四月に帰国 (YWCA世界幹部協議会)
2月2日	米国製の聖書を献上
2月13日	農村に伸びるキリスト教 耕しながら伝道 全国の信者は二百万人 孤児を守り巡回診療・製塩や製粉に進出・協組もぞくぞく生れる
4月13日	深い日本への関心 植村女史 米国から帰る
4月24日	フランガン神父著
5月1日	聴衆に感銘 植村女史報告会
5月4日	全国一せい平和の鐘 佛、基、神が一丸となり宗教会議
5月5日	宗教界の現状
5月6日	宗教平和会議開く
5月7日	宗教平和会議第二日
5月8日	雨中に平和行進 宗教大会第三日目
5月9日	フ神父神戸を訪問
5月13日	フランガン神父歓迎 コドモ芸能大会
5月17日	“厚意に感謝” 両陛下、フ神父に御会見
5月18日	子供の世界に微笑む 神父に花束と歌 楽しいキャンプ・ファイア
5月19日	“孤児を幸福にしたい” 皇后陛下、児童福祉大会でお話
5月21日	“子供が少ない”と不審の目 フ神父、都内の保健所を初視察
5月22日	“家なし子”的調査不十分 子供にこそ民主教育を フ神父の忠言
5月25日	フ神父朝鮮へ
5月25日	—片山首相の指名—マ元帥声明 中道をさらに前進 意義深いキリスト教精神の導入
6月2日	人道主義に立つ 首相、外人記者団に声明
6月13日	フ神父、東京法廷へ
6月14日	お別れのあいさつ フ神父・マ元帥を訪問
6月14日	フ神父へ感謝状(厚生省)
6月17日	(浮浪児のため) 恒久対策を フ神父、告別の辞
7月13日	フ神父、日本視察報告
7月26日	一世帯に米六合 ス神父“愛の贈り物”
7月26日	一千万円を突破 佐賀で生活支援運動
8月7日	追悼と平和への祈り 昨朝広島市で「平和祭」
8月8日	改訳聖書は文語体
8月23日	キリスト教協力会議
8月27日	キリスト教青年部講習会
10月6日	米YWCA会長来朝
10月7日	トラピスト山梨県に
11月1日	世界婦人円卓会議
11月2日	YWCA事務局長訪日
11月10日	YWCA代表来朝 パーンズ女史談
11月12日	ツア女史談 墓場にねる若夫婦 食物次第で踊るダンサー
11月12日	全国YWCA大会
11月16日	世界婦人円卓会議ひらく 美しき「再建世界」を 理想に燃える各国代表
11月17日	パーンズ会長ら講演
11月23日	婦人代表上野を視察
12月1日	まだ敗戦を信ぜぬブラジルの日本人 “説得の旅”語るラ神父
12月8日	原爆記念教会
12月9日	きのう入所式 国際キリスト教大学研究所
12月18日	楽しいひととき 米国のコドモが日本学童を招待
12月23日	国際子供Xマス
12月24日	マ元帥メッセージ
12月24日	フ神父もメッセージ
12月24日	進駐軍のXマス行進

1948年：キリスト教関連記事の見出し一覧（朝日新聞東京本社版）

掲載月日	見出し
1月11日	基金千五百万ドルを募集 キリスト教大学の建設すすむ
2月5日	聖母女子学院で募集
3月5日	気品高い陛下 ニール司教談
3月7日	対日布教に五年計画
3月28日	きょうの日曜日はキリストの復活を祝うイースターデー。 . . .
3月28日	青銅の設計募集 広島カトリック再建
4月2日	三牧師が渡英 制限付海外旅行の第一陣
4月22日	キリスト教民主党の勝利
4月25日	米スペルマン師日本へ
4月28日	六甲山に修道院
5月13日	三牧師渡英
5月20日	フ神父をしのぶ 追悼会や収容児招待野球
5月21日	“真剣な青年層” シ夫人の中国、比島視察談 シアーズ夫人
6月1日	スペルマン大司教七日来朝
6月2日	平和ホールの壁面に刻まれる日本青年の名 レ牧師が息子の靈と共に弔う
6月4日	フ神父追悼会
6月8日	ス大司教羽田着
6月8日	「少年の町」へ空輸 なつかしいフ神父の絵
6月10日	東京の復興に驚嘆 スペルマン大司教語る
6月10日	天皇と会見 きょうマニラへ
6月10日	「青年よ自らに帰れ」 シーン教授講演
6月30日	広島聖堂設計当選者
7月5日	天皇、法王と写真交換
7月9日	宗派が五倍に ふえた日本宗教
7月10日	カナダ教会財産返る
7月16日	YWCA会議に日本代表
7月26日	カトリックの現況
8月7日	カンドウ神父日本へ
8月25日	世界宗教会議開催
9月12日	ク号入港 “日本の青年に望みを—” カンドウ神父かえる
9月23日	「ヒロシマ」の主人公が渡米
9月26日	“少年の町”を視察
10月4日	キリスト教大学、明後年開設
10月22日	小崎師帰る（世界キリスト教会議）
10月27日	キリスト教大学建設委員長訪日
12月2日	YMCA代表セイロンへ
12月6日	「世界平和を—」マレラ大司教去る
12月9日	“天皇がカトリック信者に” 法王庁の期待
12月10日	オドノヴァン神父来日
12月12日	サンタ・クローズ 中村恒夫
12月14日	憎悪を越え・伝道に来日 かつての捕虜“東京爆撃隊の牧師”
12月14日	農漁村にも福音学校 キリスト教が五ヶ年計画
12月16日	しかられてXマス・ツリー 各駅、シブシブ取りはらい
12月18日	“単なる季節的装飾” 各駅のXマス・ツリー復活
12月18日	マ元帥が名誉会長 キリスト教大学設立財団
12月22日	Xマス特赦 進駐軍関係犯罪者に
12月25日	メリー・クリスマス
12月26日	幸福の裏に“暗いかけ” 明暗とりどり今年のXマス
12月29日	一生を日本人教化に 東京爆撃隊の牧師来る

1949年：キリスト教関連記事の見出し一覧（朝日新聞東京本社版）

掲載月日	見出し
1月16日	日本からも出品 マレラ大司教の好意で法王庁が援助 初のカトリック美術展
1月23日	観光かねて巡礼団 ザビエル四百年祭 今夏国際的行事
2月5日	かつての敵日本の友へ ジエコブ・ディシェザー牧師の手記 憎しみの底に神の姿 差入れの聖書で目覚む
2月5日	ザビエル祭は好評 各国から巡礼団 ピッター神父ローマから帰る
2月8日	六月八日に京浜へ ザビエル巡礼団の日程決る
2月17日	ザビエルの聖遺物 奇跡の右腕 吉浦盛純
2月21日	キリスト教と共産主義 田中耕太郎
2月24日	麹町に東洋一の教会 祭壇も聖像も世界一流の水準
3月16日	宗教に結ぶ日米の友情 引揚者に家を チベサー神父が募金運動 “足”の援助在京米人が
3月17日	“悪”と戦うキリスト教 ジョーンズ博士日本を語る
3月17日	広島に教会 米人が寄進
3月31日	スペイン軍艦訪日 ザビエル祭列席者乗せて
4月3日	ギルロイ師 聖ザビエル祭の巡礼団長に
4月18日	復活祭 皇居前広場で野外礼拝
4月18日	聖イグナチオ聖堂のミサ
4月19日	キリスト教大学へ両陛下御寄付
5月19日	先着は25日東京へ サヴィエル祭日程本決り
5月23日	聖骨日本へ
5月23日	ギルロイ卿・きょう到着
5月23日	聖サヴィエル 語るカンドウ神父 「日本こそわが歓喜」“四百年前の種子”みのる
5月24日	ギルロイ師 岩国に着く
5月24日	“奇跡の右手”出発
5月24日	小崎牧師ら渡米
5月25日	“新鮮な美しい国” ギルロイ師の一入京
5月26日	“聖人の心”で平和を サヴィエル四百年祭 マ元帥きのう声明
5月26日	ギルロイ師 マ元帥と会見
5月26日	サヴィエルの腕きょう到着
5月26日	日本初期西洋文化史展 サヴィエル来日四百年記念 「キリストン文化史展」
5月27日	奇跡の右腕きのう着く
5月27日	聖徒一万五千 平戸で聖体行列
5月27日	“精神的再建の秋” 共産主義や避妊を語る ギルロイ枢機卿
5月28日	“奇跡の右腕”長崎へ
5月28日	陛下、永井博士を御慰問
5月29日	殉教の祖先眠る長崎へ 念願かなったロザリオ嬢
5月29日	「奇跡の右腕」大浦天主堂に安置
5月29日	全村がカトリックに改宗
5月30日	原爆の地・長崎に立って ギルロイ枢機卿の手記
5月30日	サヴィエル四百年祭ひらく 青草の丘に聖歌流る きのう浦上で荘厳ミサ
5月31日	“最後の救い我等に” 病床の永井博士に聖腕の祝福
5月31日	著書の全印税提供 “長崎文化都市”へ博士の悲願
5月31日	巡礼団、鹿児島へ
5月31日	サヴィエル記念碑きのう除幕式
6月1日	サヴィエル渡来四百年
6月1日	ローマ法王からメッセージ
6月1日	鹿児島でサヴィエル祭
6月2日	福岡で式典 サヴィエル祭
6月3日	広島の聖堂いよいよ着工
6月6日	国民宗教大会 今秋芝公園で開く
6月7日	外苑で最後のミサ 「聖腕」あす東京へ
6月9日	奇跡の右腕きのう再び入京 “聖歌”夜空にひびく 聖イグナチオ教会に安置
6月9日	横浜でもミサ
6月9日	コータス女史帰国
6月9日	日本から二代表 YMCA指導者会議へ
6月9日	今秋キリスト教新教九十周年大会
6月9日	サヴィエル来日四百年記念行事 講演と音楽の会 カトリック美術展

6月10日	サヴィエル来日四百年記念行事 巡礼団招待会 巡礼団歓迎平和会
6月12日	きょう最後の盛儀 外苑でサヴィエル祭
6月12日	きのう園遊会
6月12日	巡礼団歓迎平和会
6月12日	キリスト文化史展
6月13日	十字架胸に信徒ら三万 外苑で最後のミサ サヴィエル記念祭終る
6月13日	巡礼団、帰国の途へ
6月14日	氷上を流れる聖歌（歓迎平和祭）
6月15日	ヘボン博士しのんで 今秋・東京で記念大会
6月25日	日本のキリスト教化 マ元帥が希望
8月11日	宗教映画の会 きょう本社講堂で
9月12日	滞日布教六十年 近く祝福うけるメイラン師
9月18日	全世界戦没者追悼平和祈願国民宗教大会 参列自由 十月六日（木）午前十時開会
9月19日	ヴァチカンに「聖年」の盛儀
9月19日	500万人の巡礼団 明春・日本からも参加
9月20日	全国に響く「平和の鐘」 国民宗教大会の行事決る
10月6日	きょう・国民宗教大会
10月7日	平和の祈り 国民宗教大会
10月7日	講演と音楽の会 プロテスタント渡来九十年記念
10月17日	ありがたい“この世” ニヨキニヨキと三百余派 “戦後派宗教”不景気知らず トップは観音教
10月17日	幼い国際親善 きのう“日曜学校日”
10月23日	ヴァチカンの新語
11月20日	晴着もとりどりに きのう・世界家族の会
11月24日	『聖年』迫るローマの表情 五百万の巡礼 大車輪でホテル新築
12月18日	本文「キリストのいなクリスマスが・・・・」
12月18日	法王から マスの贈り物 衣類・クツなどを困窮者に
12月19日	聖腕ローマへ安着
12月26日	“聖なる年”ヴァチカンで盛儀

1950年：キリスト教関連記事の見出し一覧（朝日新聞東京本社版）

掲載月日	見出し
2月19日	教会建てに来日 ルーテル派のシュミット博士
3月11日	ローマへ黒住特派員
3月26日	八代司教オーストラリアへ
4月9日	聖年復活祭にわくローマ 全世界から赦罪の信徒 ローマにて 黒住特派員
4月11日	“神による平和” ローマ法王、復活祭に演説 ピオ十二世
4月12日	聖年復活祭の盛儀を見て（国際電話）ローマにて 黒住特派員 涌上る“法王万歳” 中世紀の絵巻ながら
4月25日	聖年復活祭 信者四十万に法王祝福
5月26日	日本現代美術館の世界行脚 まずローマへ 各部門の粹を集めて
5月26日	カトリック思想講座・・・聖年記念・・・
6月1日	キリスト教的な民主主義へ 日本の進路 グルー氏
6月2日	音楽伝道団・各地を巡演 一行五名 24日に横浜へ
6月22日	「音楽伝道団」着く 猛獸十一頭も上陸
6月25日	きのう試聴会 音楽伝道団
7月30日	老英婦人へ瑞宝章 伝道に滞日四十年
9月2日	何でしょう、これは 教会のオート・ベルです
9月20日	現代語訳の「聖書」 父子二代の努力成る
10月16日	ローマ法王に謁見 白い衣に赤いクリスチヤン 心をこめて祝福される 宮本さえ子
10月22日	歌う受難劇 聖年を記念して上演
11月16日	ポケット聖書連盟25日大会
12月20日	伝道に生きる 長寿結婚 合せて百四十五歳 花嫁はきょう横浜へ
12月23日	“走るサンタクロース” 孤児たちにどっさり贈りもの
12月24日	“地上に平和あれ” マ元帥のクリスマス祝辞
12月24日	米国から聖書 寄付著名帳つく
12月25日	クリスマスさまざま
12月25日	“人類史の危機へ” ローマ法王メッセージ

## 付録 キリスト教関連記事全文（朝日新聞東京本社版），1948年

### 1948/1/11：「基金千五百万ドルを募集 キリスト教大学の建設すすむ」

【ニューヨーク八日発 UP=共同】米国の著名社会事業家で目下日本にキリスト教大学を設立するための準備委員会理事長の地位にあるジェームス・フィーザー氏は八日 UP 記者と会見して同計画は本年末までに具体化するであろうとつぎのとおり声明した

「準備委員会は十四日からシンシナチで会議を開き、日本にキリスト教大学を建設するための基金千五百万ドルを米国内で募集する計画につき協議することになっているが、本年末までには相当具体的な成果が期待できるであろう。米国民は一九二三年の関東大震災の際にも千百万ドルの募金を送り日本人の感謝を集めた」なおフィーザー氏は各準備委員に送った回答の中で、計画の趣旨を次のように説明している

「ある者は米国人が日本にキリスト教大学を建てることは米国の友情と同胞愛とを立証する行為であり、貧者に與える施しと同様に、いすれば幾倍のむくいがあるであろうと考えるだろう。また他の者は米国人が本当は温い、かつ気前の良い国民であるとの証拠を示すことによって廣島および長崎のつぐないをせねばならないと考えるかもしれない。いすればせよ日本の青年たちにキリスト教的な知識を授ける最高学府を日本に設けることは、幾多の友好決議や記念碑などよりも日本の来る世代にたいしてはるかに多くの永続的な利益をもたらすであろう」

### 1948/2/5：「聖母女子学院で募集」

帝銀事件で有名になった聖母病院に四月一日から看護婦養成の聖母女子学院ができる。三月中に試験して卅名を入学させ三年卒業来週は四年制の新制大学に昇格する計画

### 1948/3/5：「気品高い陛下 ニール司教談」

八月二十三日アムステルダムで開かれる世界宗教会議にそなえてアジア諸国を歴訪、目下訪日中の英國国教会カンタベリー大僧正補佐官ステphen・ニール司教は、 日内外記者団と会見、次のように語った

天皇とは 3 日に会見した。招待は極く簡素ななかに気品を失わず。しかも親切心あふれるものであった。この天皇が日本国民の代表として国際親善をおしそうめて行けば、諸国との間に必ずやなごやかな友好関係が結ばれるとの印象を深くした。陛下は西欧諸国的精神的援助が日本の再建に大きな力を與える点に多大の希望をもたれていた。日本ではいまキリスト教が田舎に至るまで非常に参加であるそうだ。しかしこれは日本人の例のものまで上手に終わっては危険だ

### 1948/3/7：対日布教に五年計画

【パックススヒルズ・フォールス(ペンシルヴェニア州)五日発 AP=共同】四日ペンシルヴェニア州パックススヒルズ・フォールスで開かれた米国プロテスタント宣教師教会の外国布教会議において日本委員会の委員長リューマン・シャフター博士は総額二千七百万ドルにのぼる左のごとき対日布教五年計画を提案した。

日本における戦災教会の復旧(五百万ドル) 在日布教師を現在の二百七十名から六百名に増加(一千四百万ドル) 大学院および専攻科を特徴とするキリスト教大学の設立(百万ドル) 日本人(牧師および一般人)を米国の大学で再教育するための奨学資金(四十七万五千ドル) 聖書の普及(三百万ドル) 社会事者の養成(百万ドル) 地方伝道支部の設置(九十万ドル) キリスト教関係書籍の発行(三十万ドル) その他(百三十二万五千ドル)

### 1948/3/28:聖堂の設計募集 廣島カトリック再建

廣島のカトリック教会の聖堂がローマ法王ピオ十二世の賛意のもとに再建されるので同教会主催、本社後援のもとにその設計図を公募する。建設地は廣島市幟町の旧廣島カトリック聖堂跡、新築様式は日本的性格を尊重し健全なモダンスタイルで同時に宗教的、記念的に調和するもの、設計は聖堂に重点を置き講堂、司祭館とも三むね詳しい規定は朝日新聞東京本社企画部に応募申込(日本人に限る)を登録する方に呈する

募集締切、六月十日、賞金は一等十万円一名、二等五万円二名、三等二万円三名、佳作五千円八名

### 1948/3/28:青鉛筆

きょうの日曜日はキリストの復活を祝うイースター。『春分のあと満月の夜の次の第一日曜日』というから毎年日は違うが、この日の前後をやたらにイースター何とかと称して続けて休みがとれるのでアチラの遊びたいムキには結構な日

ただし信心深い善男善女は新しい帽子や着物で教会にでかけ、いつもよりは念入りなお説教を聞けば帰りに紅色のタマゴやヒヨコの絵をかいだカードがいただける風習

クリスマスがこちらのお正月なら、この日はお盆のヤブ入りというところ、都電や郵便局の休み続ぎは別にこのイースター何とかを気取ったワケではあるまいが

### 1948/4/2:三牧師が渡英 制限付海外旅行の第一陣

総司令部発表=イギリス政府から招請されて日本聖公会の三牧師が今夏ロンドンで開催するランベス会議に出席のため近く渡英する。同会議は十年目毎に一回召集されるイギリス国教の宗教会議で、渡英するのは八代斌助、柳原貞次郎、蒔田誠の三牧師でカンタベリー大僧正に招かれて行くものであるが、これら三牧師の渡英は日本人の制限付海外旅行計画の第一步をなすものである

このような海外旅行は今後いよいよ増加するものと予想されるが、財政上の問題も含めて渡航先の公認された個人または団体により発議されたものであることを要する。その性質上政治的なものでない限り、文化的あるいは科学的またはこれに関連した目的のものはすべて許可されるであろう

### 1948/4/22:【社説】キリスト教民主党の勝利

世界環視のうちに四月十八日から十九日にかけて行われたイタリア総選挙の結果は、なお一両日たたねば最終的なことは判らないが現在まで判明した数字を見ても既に大勢は決し、反共派、特にその中心にあるキリスト教民主党の勝利に帰したことはもはや動かない事実ようである。

総選挙前から数において反共派が反共派の人民民主戦線より優勢であることは十分予測されたところであったが、今後のイタリア政情、ひいて国際政局の上から一番問題視されていたのはキリスト教民主党と人民民主戦線派とどちらが勝つかということであった。反共派が総数において勝っても共産党、左派社会党、行動党、労働民主党よりも人民民主戦線派が、キリスト教民主党よりも優勢であった場合には、これらの諸党が個別的な単位をつくらず、「人民民主戦線派議員」として一致した行動をとり、政権を要求すべきことは明らかであったからであり、もしキリスト教民主党が単に第一党たるの故をもって組閣の中心となるような場合には、人民民主戦線は武力をもって政権を争うべきことを言明していたからである。すなわちキリスト教民主党は勝つには勝っても、その勝ちよう如何によっては、イタリア政局は安定どころか内乱のおそれさえありと憂慮されていたのであった。

しかるに今度の開票結果を見れば、キリスト教民主党は上院で四割八分近い得票数をあげて人民民主戦線派の三割強よりはるかに優勢であり、下院選挙においても目下のところ人民戦線派をはるかにリードしている。

もしこの圧倒的優勢が開票終了まで続くとすれば、キリスト教民主党を中心とする現デ・ガスペリ内閣は依然と

して政局を担当しうるのみならず統一社会党、国民戦線以下の反共各派中数党の強力な協力を得れば、たえず上下両院の過半数を制しうことになる。従って、キリスト教民主党の勝利の影には、もちろんヴァチカンの声援、米国の物的・精神的援助、米英佛のトリエステ返還申出等が大きく働いていると思われるが、更に深く、チェコ政変などに現われた共産党のやり方に対し、あくまで西欧民主主義を守らんとする熱意がイタリア国民を支配したことも争われないであろう。これが西欧諸国を安心させ勇気づけたことはもちろんあって、西欧側のイタリアに対する西欧連盟加入工作はいよいよ本格的に展開されるであろう。

今回の選挙に対する米国及び西欧側の熱意に対し、ソ連側が選挙直前トリエステ返還に反対の態度を明らかにして共産党の気勢をそいだとは注目をひいたが、これはソ連がイタリア選挙を勝算なしとして放棄したとみるよりも当面の問題として「鉄のカーテン」内の地固め工作に専念していることを示すものではないであろうか。本選挙におけるヴァチカンの反共声援に対し、イタリア内外の共産党が反ヴァチカンの宣伝を行なわなかつたのも、カトリック教徒の多い東欧諸国を刺激しないようにとの心づかいに出たものとも解されるのである。

イタリアの総選挙は西欧側に有利に移ったが、しかしイタリアはそもそも「鉄のカーテン」の外にあった。従つて今度の総選挙の国際的には、今までその動向を懸念されていたイタリアの立場がいよいよ西欧民主主義圏内に安定したことによって「四月危機」を伝えられて国際状態が一応解消した点にあるであろう。

無論、イタリア政界には以前共産党勢力がある以上、フランスの場合と同様に正常の終局的安定はその経済的安定にまつより他はないが、とにかくイタリアの国際的地位が安定すれば、実施期に入った歐州復興計画の前途はそれだけ明るくなるのである。

イタリアの国際的地位の安定により「鉄のカーテン」をへだてて対立する米ソ両勢力はいよいよ陣容が整備され、それぞれの方式にしたがってそれぞれ復興計画が進められるという新しい段階にはいった。

この対立のまま各国、各地域がそれぞれ部分的に安定し、ひいて米ソ間に一応の安定期をもたらすか、あるいは欧洲の対立様相の一段落により米ソ対立の新局面が地中海、近東、極東方面に発展するかは予測を許さないが、少くもイタリア選挙の終了によって国際政局の四月危機が事なくすみそうな目途がついたことを世界のために喜びたいのである。

#### 1948/4/25:スペルマン師日本へ

[ニューヨーク二十二日発 UP = 共同] 米カトリック教会の大司教で枢機官のスペルマン師は、オーストラリアのメルボルンで催されるカトリック教会百年祭に参加のため二十二日空路ニューヨークを出発した、同師は帰路日本にも立寄るはずである。

#### 1948/4/28:六甲山に修道院

[西宮発] 六甲山の中麓にトラピスト修道院が生まれようとしている、フランスから派遣されたマルキー特使らがこの土地がトラピスト生活に最適と報告。ローマ法王庁からこの度正式許可が田口大阪司教のもとにいた。

#### 1948/5/13:三牧師渡英

総司令部発表 = カンタベリー大僧正の招請で十年目に一回のイギリスの宗教会議ランベス会議に臨む日本聖公会八代斌助、蒔田誠、柳原貞次郎の三監督は十二日夜羽田空港出発、ニューヨーク経由渡英の途へ

#### 1948/5/20:フ神父をしのぶ 追悼会や収容児招待野球

都主催のフランガン神父の追悼会が二十五日午前九時から銀座三越のカトリック教会事務所で行われる。

昨年神父が視察したサルジオ、萩山学園、愛児の家、育成園などの収容所から更生浮浪児の代表五名が参

列して思い出の作文を朗読するほかチベさー神父の追悼の言葉がおくられる  
なお各収容所でも出席できないコドモのためそれぞれ式を行う。  
また二十四日は同神父が昨年日本を訪ねたとき不遇なコドモたちを東京水道橋の後楽園に集め自らグランドに立ってともに野球を楽しんだ一周年に当るので日本野球連盟では収容児役六百名を招待するとともに約一万人収容できる外野の見物席を新制中学三年生以下のコドモたちに無料で解放することになった。  
両日の試合開始は午後一時で金星 大陽、巨人 南海の二試合である

#### 1948/5/21：“真剣な青年層”シ夫人の中国、比島視察談

【横浜発】北米バプテスト人外伝道協会総主事チャールス・シアーズ夫人は戦後の極東における教会と社会事業施設を視察するため一月から中国、比島を四ヶ月にわたって旅行、去る一日羽田空港着で来訪した。一ヶ月の予定で日本を視察中であるが、十九日横浜の友人宅で次のように語った

どこの国を見ても青年層がいちばん真剣に物を考えようとしている。かつてはこの人達に、憎め、殺せ、盗めと教え、いま道義要求することの難しさを痛感する。辛抱強い長期教育が必要だ。中国では鬪共戦の傷病者が為政者からは顧みられずにちまたにあふれている。インフレは、一月に一ドル二十五万元だったのが四月上海をたつとき六十万元になっていたという有様。民衆は次に何が起こるかにおびえ、内乱の将来に絶望している。中国の学生に接して感じたことは、対外関心の強くなったことで、自国の問題を世界的視野で考えている。対日感情も若い人ほどいい。

比島では対日感情が少し悪いという印象を受けたが、ある教会で祈りの日に集められた“日本女性への献金”を私は預かってきている

“一つの世界”は宗教を通じるのがいちばん早道だと言わざるをえない。教養ある婦人も働きに出なくてはならない生活の苦しさは比島も同じで、子弟教育の特に大事な時に、母が過程に留まれないとは嘆かわしい世相だ

#### 1948/6/1：スペルマン大司教七日来朝

ニューヨークの大司教で時期法王と目されているフランシス・ジョゼフ・スペルマン師が七日夜空路来朝する。同師はメルボルンのカソリック教会百年祭に出席した帰路だが同師とともにワシントン・カソリック大学教授のフートン・シーン師、日米戦突発前日本で両国間の平和工作に力をしたウォルシュ司教らの十二人の聖職者が同行している。滞日は十日までの予定だが、八日午後三時からは上智大学で歓迎会が開かれ芦田首相、土井大司教のあいさつがあり、次いで九日正午からは日比谷公会堂で莊厳なミサが催される。

なお同師は昭和二十年九月一度来朝したことがある

#### 1948/6/2：平和ホールの壁面に刻まれる日本青年の名 レ牧師が息子の靈と共に弔う

米国アラバマ州バーミンガム市の牧師 D・Y・レジスター博士は太平洋戦域で戦死した息子マーチン君をしのび昨秋記念のレクリエーション・ホールを建て、戦没青年の氏名と略歴とを刻み込んだ十字架のパネルをホールの壁面にはめこみ世界平和への青年の悲願をえたが、息子の戦死と関係深い日本青年の名前をもぜひ刻もうと日本 YMCA 同盟へ昨年十一月そのあっせん方を依頼、このほどようやくつぎのように十二名の青年を選ばれた。その名簿の説明文には

心中に燃える人間愛の精神と戦争の惨禍の矛盾に苦しみ、ついにこの矛盾を解決せんとして尊き死へ進んだものである

と青年たちの悲願が記されている

熊井常郎(二三)(高崎) 山口千里(二八)(東京) 国吉一郎(三〇)(神戸) 富山信也(二八)(宇治山田)

米井克巳(二三)(岡山) 井上晃(二七)(高松) 伊江春生(二七)(沖縄) 宮之原右近(三一)(秋田)  
岡田太郎(二四)(小樽) 矢野信一(二九)(東京) 栗原陽一(三一)(東京) 渡辺弘 = (共同)

#### 1948/6/4: フ神父追悼会

本社厚生事業団、中央社会事業協会共催でフランガン神父追悼会を五日午後一時から原宿の日本社会事業会館講堂(旧海軍館)で開く、全国の社会事業団体代表者が列席し厚相の弔辞、同次官と司令部公衆衛生福祉局ネフ課長の神父をたたえる講演があつて聖歌隊が合唱の祈りをささげる

#### 1948/6/8: ス大司教羽田到着

ニューヨーク大司教フランシス・ジョゼフ・スペルマン枢機卿は七日午後八時十五分空路上海から羽田に到着した。一行十四名中にはジェラルド・バーガン大司教、メリノール会前総長ジェームス・E・ウォルシュ師、ワシントン・カトリック大学教授フルトン・シーン師ら世界的宗教家が同行している

スペルマン大司教はマッカーサー元帥の賓客として九日夜半ハワイむけ出発までアメリカ大使館に滞在する

#### 1948/6/8: 「少年の町」へ空輸 なつかしいフ神父の絵

世界中の子供たちを愛した故フランガン神父の油絵をアメリカ。ネブラスカ州の「少年の町」におくる会が七日午後一時から上野公園で行われた。日本の「少年の家」新日本学園や都下清瀬村の戦災孤児園東星学園の子供たちに付近の学童約千名が集まり、聖歌隊の合唱、拍手のうちに銀座教会チレザー神父に百号の大きな油絵がおくられた

この絵は昨年春来朝して廃墟の街で数名の戦災孤児たちに温い手をさしのべている銀ぶち眼鏡のフ神父のが笠鹿彪画伯の手で描かれたもので、七日朝まで約一年間上野駅正面に飾られ、浮浪児たちにも親しまれていた。この油絵はチレザー神父の手で早速アメリカの「少年の家」に空輸される[写真は孤児たちに囲まれて油絵を受けるチレザー神父 = 上野ガーデン]

#### 1948/6/10: 東京の復興に驚嘆 スペルマン大司教語る

東京滞在中のスペルマン大司教は九日あさ帝国ホテルで内外新聞記者団と会見、次のとく語った  
私はこんどマニラ、東京の二ヶ所を除いては初めての土地であるオーストラリア、ニュージーランド、マレー、シンガポールなど西南太平洋諸国や中国を訪問した。東京は終戦直後訪れたときとくらべて驚くべき復興ぶり示している。日本の人口問題がやかましくいわれているが人類学が生活の費を得、また自分の家族を養うに足るなんらかの規定が確立されることを願っている。日本の民主化を助けるためもっとカトリックの宣教師を派遣するかどうかは自分の仕事でないので何ともいえないが、宣教師は自分の家族を捨てて一身を布教にささげねばならないのだが、アメリカには現在宣教師になろうと希望しているものが多数いる。

人口問題の一つの解決策は移民させることではないかとの提案に対して、私は世界にはまだ人を容れる余地は沢山あると答える

#### 1948/6/10: 天皇と会見 きょうマニラへ

スペルマン師一行は九日午前十時半宮中で天皇陛下と会見、後藤式部官の通訳で、陛下はカトリックが世界の平和と人類の幸福に貢献していることを多としスペルマン師一行の訪問をねぎらわれ、陛下がかつて外遊のさいヴァチカンを訪問されたときのことなどを話され、スペルマン師は平和の国家再建に努力する日本国民の姿

をたたえ、旅行中の印象などなごやかな会談は約五十分におよび一行は十一時二十分辞去した。

なおスペルマン師一行は同日午後日比谷公会堂における大ミサに臨席、十日午前一時十五分羽田空港発でマニラ向う

#### 1948/6/10:「青年よ自らに帰れ」シーン教授講演

スペルマン大司教随員として来期したアメリカ・カトリック大学教授フルトン・J・シーン師は九日午後四時から日比谷公会堂で連合国軍人、日本人多数の聴衆を前に「現代人の不安とその克服」と題し約四十分間にわたり大要次のように述べた

東洋人はあまりに西洋人の真似をし過ぎる。自分自身に帰ることが大切である。西洋のわるい点まで引継いではならない。ことに西洋の理念中共産主義は危険である。これは病菌である。現代人の生活には真空状態があり、ここに共産主義が入りこもうとしているのだ。日本はキリストの生命の「太陽の昇る国」となりつつある。一つの啓示がこの国に與えられることを私は信じている。私はキリストの生命の「太陽の昇る国」に今夜帰って行こうとしているが、私は将来は若い日本の青年の手中にあることを深く信じている【写真はスペルマン大司教のミサ日比谷で】

#### 1948/6/30:廣島聖堂設計当選者

廣島カトリック教会主催、本社 で募集した同教会の平和記念聖堂再建の設計図は、参加登録千三百九名、うち規定による応募図案百七十七点の中からつぎの通り当選者を決定した(五十音順)

二等二名(賞金五万円)神奈川県中野町五四一井上一典、東京都杉並区成宗一ノ四一丹下健三

三等四名(同二万円)鹿児島 藤右三郎、東京菊竹清訓、同前川國男、同米沢 雄

佳作八名(同五千円)大阪栄木一成、東京内田祥哉、同大江透、同小坂秀雄、同高田秀三、同道明栄次、同生司 、同福田良一

準佳作二十名(同四千円)東京荒井龍三、大阪小山正、東京大塚常雄、同大沢浩、廣島河内 、東京佐藤秀三、同笠原貞 、同杉本朝次、同鈴木久弥、同竹崎文二、京都徳永正三、東京富田信一、大阪七 実、東京 富弘、神奈川 永満八、同村上潤、東京山口文 、大阪山根正次郎、神奈川吉原慎一郎、東京渡部安吉の諸氏

なお一等に該当するものがなかったのでその賞金十万円を配分するため三等一名、準佳作二十名を加えたが、賞金の贈呈は追って主催者から通知する。この展示会は八月上旬日本橋三越で開催後主要都市に巡回の予定

#### 1948/7/5:天皇、法王と写真交換【ヴァチカン市特電三日発=AP特約】

日本の天皇と法王ピオ十二世とがこのほど写真を交換されたことから、一部ではまたも天皇のカトリック改宗が取りざたされているが、三日ヴァチカン法王庁当局はつぎのとおり語った「この交換は単に儀礼的なもので、改宗のことなど全く話してていない。法王は天皇が日本のカトリック教徒に示された理解と同情を多として写真を送られたものである」

#### 1948/7/9:宗派が五倍に ふえた日本宗教

総司令部発表=総司令部民間情報教育局宗教文化資源課長 W·K·バンス博士は八日、日本の独立宗教団体の数は日本の占領開始後五百%増加したと発表した。日本人は新しい宗教の自由を得ようと努力した結果仏教各宗派は終戦時二十八だったのが約百に、神道各派は十四から八十五、キリスト教は三から十六に増加した。このほかキリスト教、仏教、神道いずれとも分類できない新宗教が約二十五または三十現われた

### 1948/7/10:カナダ教会財産返る

総司令部発表 = 総司令部民間財産管理局はもと日本で所有していた在日カナダ教会宣教師団の約五十万ドルにのぼる財産が元所有者に返還されたと発表した

これは戦争中敵として取扱われた長野, 福井, 静岡, 神奈川, 東京, 富山, 石川, 兵庫各地の住宅, 教会, 学校, 養育園, 寄宿舎, 森林, 水田など三十一物件である

### 1948/7/16:YWCA会議に日本代表

【京都発】来る八月十八日から一ヶ月間ニューヨークで開かれる YWCA の国際婦人会議へ日本 YWCA 本部総幹事光静枝, 京都総幹事内藤幸両女史が日本代表として招待され, 本月末渡米と決定した

### 1948/7/26:カトリックの現況

戦時中の重圧から解放されたカトリック教は, まず外国の著名な神父の来訪を受けて 速に活気を取りもどしつつある。終戦直後早く日本を訪れたのはニューヨークの大司教スペルマン枢機卿で, この間には再度の来朝であり, 米国カトリック会代表使節としてのオハラ, レディ両司教, 豪州シドニー大司教ギルロイ枢機卿, 「少年の町」の故フラナガン神父, 米国ジョージアタウン大学副総長ウォルシュ神父の相次ぐ来朝は, 復興途上にあるわが国のカトリック教に大きな力となったことはいうまでもない。神父, 修道士, 修道女を含めた宣教師の来朝は終戦後二百名近くに及んでいるといわれる。また新しく来た修道会では男子でアイルランドからコロンバン会(十四名)ベルギーからスクート会(二名)女子でカナダからベネディクト会(三名)クララ会(七名)等があるが, こうした外国宣教師の援助を得て布教は積極的に滑り出している。

戦時中の日本天主公教教団を解散, 全国十五教区を一丸として新しい組織替えした「カトリック教区連盟」によると, 去年六月末現在前教区教会数は三百四十五, 信徒数十一万八百九名, 邦人司祭百六十一名, 外人司祭二百八十一名, 修道院数百五十一, 男子の修道会十七, 女子の修道会四十三, 司祭でない修道士三百二十八名, 修道女千九百九十九名となっている。この中, 外国宣教師は戦争中もほとんど全部帰国しないで各収容所に残っていたので, 戦前にくらべて前記のようにふえつつある。信徒数が戦前二十四万といわれたのがその半分以下に減少したのは, 日本の教区に入っていた朝鮮, 台湾, 横浜がなくなり, 鹿児島教区の琉球, 奄美大島がガム島の米国聖ヨセフ管区カブチン会に委託されたためである。その他では新潟を除いて各教区とも増えている。一年間の洗礼数一万二千八百四十名(臨終洗礼四六五八名を含む)その前年の約三倍で, 求道者が受洗するまでには少なくとも一年間求道して試験をパスしなければならないので, 求道者の増加とともにこれは今後段々にふえ, 戦後洗礼数は二万数千名を数えるだろう。戦災をうけた聖堂ですでに再建されたのは約四割で, 完全な復興を見るまでにはまだ相当の年月を要する。長崎の浦上, 中町の両聖堂, 大阪の玉造, 東京の世田谷の各聖堂は復興した主なもので, いま工事中の上智大学聖堂六百坪, 木造では日本一の建物になるといわれている。

戦後, 各教区長が指導するカトリック運動には著しいものがあるが, 中でも大阪教区が最も模範的であるといわれている。また信徒が自主的に行う文化運動 新しい現象で, 上智大学の公開講座, シュナイダー氏, ヘッセル氏等による音楽会などがそれであり, 信徒が各 域でグループをつくって研究発表と同時に布教に協力しているのが, カトリック法曹会, 医師会, 新聞記者クラブ, グレゴリアン音楽学会, 美術会, キリスト研究会, 婦人リテラリギルド等で, 東京だけで十五を数える, 学生の領域では一般各学校のカトリック研究会の礎の建設を目的とした「カトリック学生連盟」が生れ, スイスにある世界中のカトリック学生連盟の本部と結ばれることになっている。又別にカトリック内の唯一の社団法人「カトリック文化協会」があるが, 田中耕太郎氏を理事長として音楽, 美術, ペンクラブ各方面にわたって活躍している。終戦後特に許可を得て復活したボーイ・スカウトの働きもまた

見逃すことはできない。

カトリックの特徴の一つは社会事業であるが、病院、孤児院、母子寮、養老院等非常に沢山な施設で、病院では自白の聖母病院、ライ で有名な御殿場の復生病院等が知られ、孤児院では国分寺のサレジオ学園(男の子)赤羽の星美学園(女の子)等それぞれ百二十名くらいつ収容し、学校教育もしている。川崎の白菊寮は家出、不良娘の教化を目的とし、いまでは時節柄ヤミの女を教化して、これを立派な修道女にまで育てあげようとしている。教育の面でも上智大学はじめ沢山の学校があり、また北海道のトラピストの農業経営等、いずれも活発な実際活動はカトリックのみである。(野呂)

#### 1948/8/7:カンドウ神父日本へ

昭和十四年九月、東京公教神学校校長から一 軍司祭として故国フランスへ応召したソーヴール・カンドウ神父が、九月九日サンフランシスコ出港のプレジデント・クリーブランド号で日本に帰ってくると へ最近通知があった

十五年五月フランス戦線アルデンヌの戦闘で重傷を負ったのをはじめ大戦を通じて再起と 傷をくりえし「クロ・ド・ゲール」など数多くの荣誉勲章を受けた。終戦後はヴァチカンで活躍、目下アメリカに滞在中で、同師の来朝は在日二十余年の と日本宗教界の根強い をもつだけに、わがカトリック界では大きな期待をつないでいる

#### 1948/8/25:世界宗教会議開催

[アムステルダム二十二日発ロイター = 共同] 第一回世界宗教会議は二十二日、四十二ヶ国のプロテスタントおよびギリシャ正教教会代表千二百名参加の下にアムステルダムで開かれた。この会議は卅年にわたる計画が実現したもので教会の合同問題をはじめ信仰および教会と政治、 国際問題との関係などが二週間にわたって討議される。カトリック教会は今度の会議には参加していない

#### 1948/9/12:ク号入港 “日本の青年に望みを……” カンドウ神父かえる

[横浜発] A·P·L のプレジデント・クリーブランド号と、同ウィルソン号の両船が十一日朝七時前後して横浜に入港、日本側移管を間に控えた南さん橋は数百名の乗降船客、送迎人にぎわった。クリーブランド号では昭和十四年九月東京神学校校長から軍司祭として故国フランスへ応召したソーヴール・カンドウ神父(五一)がオイのジャック君(二六)を伴って十年ぶりで再び来朝した。昭和十五年アルデンヌ戦線で戦車砲でくだかれた右の脚をいたわりながら上手な日本語で次のように語った

運は天にあり。ボタモチは棚にあり。ソノボタモチもなくなった今の日本にのつけから法を説いてもダメだ。まず衣食住の解決です。去る五月フランスから渡米 日本の話をして回り日本の友達を作ることに努めた生れた国のような日本の知識層とくに学生の役に立ちたい。彼らは戦後中心になる思想 世界的に普遍な思想を失っている戦前の危険な優越感をうちくだかれその代わりに劣等感が支配している、日本人の心眼をひらかせねばならない。日本人の直觀力は長所であり短所だ。これに論理的 養の裏付けがこれからの仕事だ。ド・ゴール将軍は反共的である点で人気があると思う。なお同船で総司令部経済科学局顧問で米経済界視察の志賀、貿易公団の飯島秀夫の両氏、米国では初の女性の二世宣教師ユニス・野田さん(二一)他五名の若い米人教師がやってきた

なお同教師らの配属は野田嬢(二一) = 横浜フェリス女学校、アルマ・ワイアット嬢(二一) = 東京女子大、ロナルド・コーヴァ氏(二一) = 明治学院、V·H·ウイリエルモ氏(二一) = 同、ヴァインズ嬢(二二) = 金沢北陸女学校、ジョーンズ嬢(二 ) = 下関梅香女学校である

#### 1948/9/23:「ヒロシマ」の主人公が渡米

世界の出版会にセンセーションをおこしたジョン・ハーシー氏著の“ヒロシマ”の主人公、広島市流川教会牧師谷本清氏(四〇)は、米国メソジスト教会伝道局の招きで二十五日午後ゼネラル・ゴルドン号で横浜出発サンフランシスコに向う。メソジスト教会事業の視察と研究が目的だが、意味深いのは米国オーカーランドを中心に全米をゆり動かしている“ノー・モア・ヒロシマ運動”(廣島の二の舞をやるな)に原子爆弾を身をもって体験した一日本人が講師として出席すること。ハーシー氏とニューヨークで会見することである。滞米は約一年間の予定

**谷本氏談** 数百通の手紙を寄せてくれた米国の未だ見ぬ人たちに会えることも楽しみです。あちらではできる限り廣島の実相を伝えたいと思います

#### 1948/9/26:“少年の町”を視察

総司令部発表=厚生省児童局の田代不二男、社会局厚生課長黒木利克の両氏は二十五日横浜出帆のゼネラル・ゴルドン号で渡米した。両氏はネブラスカの「少年の家」「少年の町」を視察しさらにオマハにおける公私の厚生事業団の活動にも参加、明年二月帰国の予定で、両氏の視察には全米カトリック厚生会議戦時救済事業団から千ドル、フランガン神父の「少年の家」から毎月五十ドルの滞在費が支給されて実現したものである

#### 1948/10/4:キリスト教大学、明後年開設

既報の国際キリスト教大学建設の計画はアメリカの好意ある協力で最近急速に具体化し、すでにその母体となる財団法人国際キリスト教学園や国際キリスト教研究所も設され、明後年には大学開設の見とおしがついたので同大学建設委員会では二日、工業クラブ内の事務所で大学建設の構想を発表した

建設予定地は都下三鷹町の元中島航空研究所跡の約四十三万坪(東京大学、上野公園、不忍池を合わせたぐらいの広さ)で、大学院に重点をおいた超教派的なキリスト新教の総合大学である。大学は前期二年、後期二年に分け、前期では各学部を共通にした基礎的教育、後期で専門教育を行う。大学院はマスターコース二年、ドクターコース三年以上で学部は法、文、経、理、工、農、医などの全学部が設けられる予定で教育学部も設置される計画である

この建設資金としては一万田日銀総裁を会長とする大学建設後援会が国内から一億五千万円の募金を行うが、アメリカでも大学建設資金一千万ドルを集める運動が米国赤十字社副社長ジェームス・フィーザー氏を中心として進められ、すでに百万ドルが集まっているという

#### 1948/10/22:小崎師帰る

アムステルダムの世界キリスト教会会議に日本代表として出席した日本キリスト教団総会議長小崎道雄氏は二十日空路帰京した

#### 1948/10/27:キリスト教大学建設委員長訪日

[ニューヨーク二十五日発 UP = 共同] 日本にキリスト教総合大学を建設する計画は米国の建設委員の手で進められているが、建設委員長ジェームス・フィーザー氏は二十五日「二十九日東京に向け出発する。日本には数ヶ月滞在し教会、教育関係者および占領軍当局とキリスト教大学建設計画について意見を交換し、東京郊外の大規模敷地も視察するはずである」と発表した

#### 1948/12/2:YMCA 代表セイロンへ

世界キリスト教学生連盟の主催するアジア地域学生運動指導者会議は、終戦後はじめて二十日から一月四日まで二週間セイロン島コロンボをさる三十マイルのカンディで開かれる

同会議には中国、韓国、シャムマレー、インド、セイロン、ランアン、インドシナ、ビルマ、フィリピンおよび日本の十一ヶ国代表約百名が出席「大学の問題」「伝道」「世界教会運動」「政治問題」の四議題を討議するが日本代表としてはYMCA学生部主事池田鮮、同主事補塙月賢太郎、YMVA学生部監事武田清子、津田塾教授山崎孝子の四氏が九日空路セイロンに向う

#### 1948/12/6:「世界平和を……」マレラ大司教去る

昭和八年以来十五年間ローマ法王庁駐日使節として活躍したパウロ・マレラ大司教( )が、こんどオーストラリア駐在使節に着任、明年早々赴任する。長い日本の生活への“サヨナラの言葉”を東京都港区新土町の使節館で同師はきのう左のように語った[写真はマレラ大司教]

日本人が敗戦後の苦難をよく乗り越えてここまで来たことに胸をうたれる。日本人は深い宗教心を持っていると信じている。この宗教心を基礎に世界の平和、新世界の建設につくすことが日本人の任務だと思う。“すべての人間は兄弟である”という言葉を平和を守る日本人にささげたい

#### 1948/12/9:法王庁の期待 “天皇がカトリック信者に”

[ヴァチカン特電七日発 = AP 特約] 法王庁消息筋は、天皇がカトリック信者になられる可能性をつぎのように述べている

法王庁のカトリック布教機関プロパガンダ・フィーデ大会への報告によると、一九四五年以来天皇、皇后両陛下はキリスト教に多大の関心を示され、日本におけるカトリックの慈善事業に対しても皇室からの援助が行われた。日本のカトリック教信者の多くは、天皇がカトリックの洗礼を受けられることを祈っている

#### 1948/12/10:オドノヴァン神父来日

総司令部発表 = アメリカ・ネブラスカ州聖コラムバン神学校教授ジョン・オドノヴァン神父は今回総司令部民間情報教育局宗教文化課のカトリック教顧問として最近日本に到着した

#### 1948/12/12:サンタ・クローズ 中村恒夫

駿河台にロシア正教のニコライ聖堂があるが、このニコライというのは人も知る通りロシアの守護神、聖ニコライのこと、キリスト教徒の子供や学者、商人、船乗りらの守護者、ちょうどお地蔵さんと金比羅さんを一緒にしたような聖徒だ。ドイツで言っている「サンクト・ニコラウス」もイギリス人の「セント・ニコラス」もフランスの「サン・ニコラ」もみな同じこの聖徒のこと。ヨーロッパでは昔から十二月六日をこの聖徒の日と定めて祝う習慣があり、またこれをまつる寺院のない国はない。イギリスだけでも四百以上もある位だから、宗教や寺院と不可分の関係にあつた昔の画家達が、この聖徒の伝記や伝説を主題にした絵を描かないはずがなく、今日でもイタリアのブレシャのマルティネンゴ美術館にはモレット、ローマのヴァチカン画廊にはフラ・アンゼリコ、デ・ニッコロ、マザッチオ等の作、オランダのアントワープ美術館にはファン・フェンの作、ドイツのウルム市美術館にはダイグの作等が一般に知られた作として残っている。

ところがこの聖徒の絵と言えば大抵、オケの中に裸で立った三人の少年を描いたものか、父親と三人の娘のいる図であるが前者は宿の主人に殺害されオケの中に入れられていた三人の金持ちの子供を聖徒がもと通りの人間にしたと言う伝説を表したもので、後者は破産して娘を嫁がすことが出来ず身売りさせようとしている一家に窓から聖徒が最後のトラの子の財布を投げ入れて救ったと言う伝説であり、いずれも聖ニコラスの代表的な物語

の場面である。子供の守護神となっているわけはこうしたところから来ており、十二月六日の祝日に親しい者や貧しい者に名を秘して物を贈る慣わしもここから生れている。そしてこの日がキリスト降誕の二十五日に近いことから、何時のまにか聖ニコラスがサンタ・クローズに変わってしまい、贈物の慣習も降誕祭のものとなったわけである。

もっとも降誕祭の贈物の慣わしも、もともとはチュートン族だけのもので、他の種族では、例えばフランスのようにやはり普通に贈物は正月を主にしているのが多い。もちろんフランスをはじめヨーロッパ大陸諸国では、「サンタ・クローズ」などと言っても極く限られた一部の人々以外は意味が通じない。もっともイギリスの「ファザークリスマス」やフランスの「ペル・ノエル」のような「降誕祭のおじいさん」といった意味の言葉はどこかの国にもあるはある。サンタ・クローズで分からなかったら早速この名高い聖者の名を出すとすぐわかる。

サンタ・クローズと言う言葉はアメリカへ渡った初期のオランダ移住民達が使っていた「サント・ニコラス」や「サンテ・クラース」というオランダ語から転じたアメリカ製の言葉だから、ヨーロッパ大陸の国々でそう簡単に通じないのは無理もないことである。

#### 1948/12/14: 憎悪を越え・伝道に来日 かつての捕虜“東京爆撃隊の牧師”

[大阪発]一九四二年四月ドウリットル東京爆撃隊の一員として東京空襲に参加、捕虜となっていた元米軍飛行士ジャコブ・デシェザー氏が自由メソジスト教会牧師として十三日サンフランシスコを出帆、明春大阪阿倍野日本キリスト教団丸山教会へ着任する

デシェザー氏(三)は本国へ帰国後シアトル・パシフィック・カレッジで三年間神学を修め『私は日本の捕虜でした』と言う手記を出版、全米各地で“日本を救え”的日本伝道賛助後援会を開くなど“ドウリットル爆撃隊の牧師”としてアメリカでの名物男となっていた。寄宿予定先の阿倍野区丸山通り二吉木三郎宅への近信で、同氏は『捕虜生活時代人類間の　　を真の兄弟愛に進展させるキリストの教に気がついた。キリストの教を説くというただ一つの目的のために日本へ渡ります』

といっている。フローレンス夫人、愛息パウル君とともにきたる廿八日ゼネラル・マイグス号で横浜入港の予定 [セーレム(オレゴン州)十一日発 AP=共同] デシェザー氏は東京爆撃のち四十ヶ月にわたる捕虜収容所生活を送ったが、そのうち卅五ヶ月は完全に一人ぼっちで独房に監禁されていた。この時看守から与えられた一冊のバイブルから人間同士のみにくい争いのすがたに疑問をもちはじめ、戦争の罪悪を悟るとともに愛によって不幸な人々を救うことを思い立ち、帰国後はシアトルの神学校に入り宣教師となったもの

#### 1948/12/14: 農漁村にも福音学校 キリスト教が五ヶ年計画

戦後キリスト教信者が激増しているが、大体都市を中心に、知識層に偏っている傾向があるので、日本キリスト教団では来春四月から五ヶ年伝道を実施し全国の中小都市および農漁村、鉱山などの伝道に主力を注ぐことになった。そのため中小都市に教会の新設や特派教師の駐在を考慮、また農漁村にも福音学校や伝道集会を設けて教化と文化指導に当る。鉱山方面にも教会や福音学校を建てるはずだが、早くも福岡県大之浦鉱山には服部団次郎師が進出している

日本キリスト教団主事 栖谷哲夫師談 これからの十年は日本の運命を決する重大時機である。この五ヶ年計画によって中小都市農漁村への伝道に主力を注ぎ、わが同胞を信仰と希望と愛とに生きる新しい国民たらしめたい

#### 1948/12/16: しかられたXマス・ツリー 各駅、シブシブ取りはらい

駅のクリスマス・デコレーションは憲法違反であるかどうか という問題が起こった。この起りは、十四日参議院

議員で大日本仏教会総務局長の職にある来馬琢道氏((七一), 緑風会)が十四日内閣にあて  
憲法第二十条に「国およびその機関は宗教教育その他いかなる宗教活動もしてはならない」という条文あるが、  
省線各駅のクリスマス・デコレーションは明らかに宗教活動と認められ、従って憲法違反になると考える

旨の質問書を出したので、内閣は十五日運輸省に注意指令を発し、運輸省では東鉄はじめ各鉄道局に鉄橋指令を発したもの

おどろいた東京駅はじめ省線各駅二十ヶ所では、待合室やホームなどにせっかく美しくかざり立てたのを、十五日はエッサエッサと取りのけ作業に大いそがし。内閣の命令には一応服従してみたものの「憲法とはむずかしいものですな」と各駅長暮の多忙の中でヅツクさいっている

運輸省藪谷業務局長は語る

「あれが宗教活動になるかどうか、われわれにはとても解らない。十五日内閣から注意があったので、早速撤去するよう指令した」

**来馬琢道氏談** 政府はさきに国家機関の宗教活動に関して、学童の神社仏閣参拝を禁じている。国家機関である駅で駅員がデコレーションを飾ったりしているのは明らかに矛盾だ

#### 1948/12/18: マ元帥が名誉会長

[ニューヨーク十六日発 UP = 共同] 日本キリスト教総合大学設立財団の代表として渡日したフィーザー博士はこのほど帰米十六日ニューヨークで次のとおり語った

マックアーサー元帥は日本キリスト教総合大学設立財団の名誉会長の一人となることを承諾し、この大学の設立によりこれまで痛感されていた大きな必要が満されると思うと語った。また天皇は私にこの大学は世界が必要としている道徳的再生のための手段となることができるだろうと語り、日本にたいし米国が与えている絶えざる援助に日本人が感謝していると米国人に伝えるよう私に依頼した。われわれは明年四月十八日から六月十五日まで米国民から一千万ドルの基金募集を行うが大学の設立工事は一九五〇年か五一年までに開始できると思う

#### 1948/12/18: “単なる季節的装飾” 駅頭のXマス・ツリー復活

駅頭のクリスマス・ツリーなどの装飾は宗教活動ではないかと参議院議員来馬琢道氏が提出した質問書が波乱を呼んで、せっかく飾りつけたクリスマス・ツリーに運輸省から撤去命令が出されたが、運輸当局ではその後来馬氏の質問書を検討の結果

「季節的な装飾の一つで宗教的かつどうではない」

ということに意見が一致。十七日の定例閣議で小澤運輸相が書面答弁をして閣議で確認、来馬氏にその旨返答することになったので一たん引いた東京駅、有楽町駅などのクリスマス・ツリーは再度のお目見得をすることになった

**岩倉内閣官房総務課長談** 駅頭のクリスマス・ツリーではいろいろ騒がれたが内閣から取り除くよう注意した事実はない。質問書の内容が運輸省に関係したことだったので、そのまま運輸省にまわし一週間以内に答弁を書いてくるよう頼んだ。きょう正式の答弁書が出されたので閣議にはかったわけだ

#### 1948/12/22: Xマス特赦 進駐軍関係犯罪者に

総司令部発表 = 第一騎兵師団長チエイス少将は二十一日、進駐軍関係の各種犯罪で服役中の日本人囚人三十九名に対し今週のクリスマスの特赦を許可したと発表した

#### 1948/12/25: メリー・クリスマス

…二十四日クリスマス・イヴを迎えた東京の街々は、人であふれた。教会では平和を祈りあちこちで子供や大人のクリスマスの集いが開かれ、ダンス・ホールはこれまたオール・ナイトでインフレ紳士と淑女方が踊り狂った

…タヤミの数寄屋橋タモト、白バラの造花を胸にした百名ばかりの子供の一団が「きよしこのよる」を歌いながら道行く人にクリスマス・カードを渡した。これは光の子連盟の街頭クリスマス・カロルで、雑踏の中からG・Iの「メリー・クリスマス」の声もかかる…またこの日、日本橋三越では、進駐軍のグランド・ハイツのカソリック婦人会の人たちが、聖心女子学院聖歌隊の合唱つきでキリスト降誕劇『博士たちの参拝』を演じ、神田共立講堂では“おかあさん方のクリスマス”の集いも開かれた=写真は銀座のコドモ・贊美歌隊行進

#### 1948/12/26: 幸福の裏に“暗いかけ” 明暗とりどり今年のXマス

【ベスレヘム特電二十四日発=AP 特約】一九四八年のクリスマスは中国やインドネシアや聖地パレスチナで血をみながら、二つの陣営に分かれた世界でも明暗とりどりなすがたで祝われた  
さすが繁栄の絶頂に立つアメリカではもっとも幸福なクリスマスが迎えられ、トルーマン大統領はミズーリ州にある郷里の町から

「クリスマス前夜にあたり平和への努力を誓う。キリスト教こそ戦争を防止する世界最大のホープだ」と放送した。戦後の復興が遅れ、その上「冷たい戦争」におびえているヨーロッパ各国ではクリスマスにも暗いかけがあった。ヴァチカンで法王ピオ十二世は恒例のクリスマス・メッセージを世界におくったが  
「戦後、今日ほど人々が新しい戦争の夢魔に悩まされているときはない。一九四八年は希望とともに明けたが、不安な危機のうちに暮れようとしている。だが新しい戦争にたいする人々の反対も強くなってきた」とのべた。ヨーロッパの広告は戦争がはじまる前の一九三八年以来もっとも明るくはなやかだったが、店頭にあふれている食料品やゼイタク品を買える人は少なかった。物価が非常に高く、ある調では昨年にくらべ六〇%の値上がりを示した。例えば西ドイツでは伝統的なカモなしでませた家庭が多かった。商人は一ポンドードル五十セントまで値段を下げたが、やはり売れなかつた。ベルリンへの空輸は終日つづけられ乗組員は機上で七面鳥をたべた

モスクワではこれまでにないほど気温が暖く、一月七日のロシア祭にそなえてクリスマス・ツリーがトラックで運びこまれた。そのツリーを飾る電燈やオモチャは戦前にまさるにぎやかさであった  
聖地パレスチナではキリスト降誕後ヨセフとマリアがベスレヘムへ旅したという道は銃座と鉄条網でかこまれ、ベスレヘムへの巡礼は十字軍このかた一番のさびれ方だった

日本とドイツの米占領軍当局はかつての敵にクリスマス・プレゼントを与えた。日本ではA級戦犯十七名は突如解放され、ドイツではルドルフ・ヘスなど目下服罪中のヒトラーの旧友七名が今年はじめて会合を許されたのである

【ロンドン特電=ロイター特約】年に一度のうれしいクリスマスが訪れて、英京ロンドンは静かな喜びに包まれている。今年はジョージ六世陛下が病気のため例年のように王妃とおそろいでノーフォークにお出でにならず、初孫のチャールス王子やエリザベス王女一家とともにロンドンで静養される。政府は

「クリスマス休日中はどの家庭でも随意にフロをたて寝室も心ゆくまであたためよろしい」と石炭不足の折柄思い切った英断を公表。国民はヌクヌクと家庭のだんらんをたのしんでいるただしフトコロ具合は 々と心細いらしく、オックスフォード・ストリートやピカデリー・ナイトブリッジなどの繁華街の商店は、あふれる商品の山をならべているが売行きはぱッとせず、大衆の金詰りをなげいている

#### 1948/12/29: 一生を日本人教化に 東京爆撃隊の牧師来る

【横浜発】ストのため三ヶ月着船が絶えていた横浜港に二十八日朝九時 A・P・L の極東定期船ゼネラル・メイグス

号が久しぶりに海の彼方の話題をのせて訪れた

昭和十七年四月ドウリットル爆撃隊の爆撃手として東京空爆に参加。三年六ヶ月の日本の捕虜となっていた元米軍軍曹ジャコブ・デシェーザー氏(三五)が今度は聖書を胸に、夫人フローレンスさん(二七)愛息ポール君(二才)を伴って日本伝道師としてやって来た。同氏は次のように語った

「東京空襲の翌十九日中国の上空でガソリンがなくなり、パラシュートで九江と瀋陽の間の基地へ降り日本軍の捕虜となった。終戦年の八月二十日北平の収容所で釈放されるまで南京の独房で過ごした。一九四四年の五月名前を覚えていないが以前からクリスチャンだった収容所長の大尉が私にバイブルをくれた。それを読んでいるうちにキリストの教えに気付き人類愛に生きる信念を持った。帰国後三年間神学を学び今度フリー・メソジスト教会派遣の伝道師として一生を日本人教化のためにささげるつもりで来た。まず東京杉並のフリー・メソジスト教会に入る予定です」

#### 内藤女史らも同船で

【横浜発】京都 Y·W·C·A 総主事内藤幸女史(四一)とクリスチャン・サイエンス教会の松方美代夫人( 五)も同じ船で帰って来た。内藤女史は八月十八日から三ヶ月コロンビア大学で開かれた Y·W·C·A 国際研究会に、松方夫人は六月三日から三日間ボストン市で開かれたクリスチャン・サイエンス教会年次大会に出席した

内藤女史談「会議には二十七ヶ国の代表六十名が出席、世界平和のために何をなすべきかを研究しました。私に集中された質問は選挙権を与えられてからの日本婦人の動向、天皇制に関する日本人の考え、選挙政策の三つでした」

## 付録 キリスト教関連記事全文（朝日新聞東京本社版），1949年

### 1949/1/16:日本からも出品 マレラ大司教の好意で法王庁が援助 初のカトリック美術展

世界で初めてのカトリック美術展は明春早々ローマ市ヴィア・ナチオナーレの展覧会場(パラツオ・デレスポジチオーネ)で開かれ、歐州各国をはじめ東洋からも中国、インドなどが参加するが、日本からも時に出品参加ができることに決った。わが国では日本カトリック美術協会の長谷川路可氏らを中心に準備を進めていたが、費用の点で行き悩みの状態であったところ、さる九日帝国ホテルで近くオーストラリアに着任になる法王使節ポール・マレラ大司教の送別会が催された際、同師から、法王庁から費用を援助するむねの言明があり、参加計画がにわかに具体化したものである。

この展覧会には主として日本カトリック美術協会会員の手による日本画が送られるが、ほかに油絵、ミサのときの祭服、教会の建設設計図も予定されており、絵画は五十点ほどがこの十月までに送られるらしい、そのほかフランシスコ・ザビエルの四百年祭を記念する五月末の東京における準備展への出品作も会後送られる。

また以前からローマへ送られている長谷川路可氏の「長崎の聖母」、岡山聖虚氏の二十六枚の二十六聖人の絵、さる十一日の航空便で送られローマの新建築成った神学教会のスケインド・グラスを飾ることになっている岡山市の「殉教者ヒヨロニモ・ジョー・トーレス」の絵画なども出品されるはず。

なおこの準備会は二十三日東京目白の長谷川氏宅で開かれる。

長谷川路可氏談 今度の費用は全くマレラ大司教の好意によるもので、同師のポケット・マネーも多分に含まれていると思う。われわれ会員の作品だけでなく出来れば有名な作家のもの、たとえば前田青邨画伯の「ローマ使節」の絵なども送りたい。

### 1949/1/23:観光かねて巡礼団 ザビエル四百年祭 今夏国際的行事

天文十八年八月十五日聖フランシスコ・ザビエルが鹿児島に上陸、日本布教を始めてから今年はちょうど四百年になるので、日本カソリック教区連盟が中心となって外国巡礼団を迎え、五月末から六月はじめにかけて東京、長崎を中心に国際的な四百年祭をくりひろげる。

このため教区連盟復興部長ブルノ・ピッター神父はさる二日東京発、アメリカを経てローマに向い、いま巡礼団派遣について各国と交渉しているが、すでにアメリカではマクドナルド大司教が巡礼団を募り、自ら率いて来訪することになっているほか北南米、オーストラリア、ポルトガルなど世界のカソリック教団から少くとも二千名から三千名の巡礼団が来訪することになる模様で、今の日本には、こうした大巡礼団を迎えるだけの宿舎設備がないので、一行は特別船を仕立てて来航、船に泊りながら行に参加し、同時に観光旅行もすませることに なろうという。

晴れの記念式典は後楽園か神宮外苑を借り切り、わが国はじめての壮大な屋外ミサを行うはずで、これを機に東京では上野博物館、図書館を会場に、キリスト教の渡来とその影響を示す一切の文献資料を展示するほか、講演会も考えられている。長崎では早くも「ザビエル行事委員会」を結成、市内美化、慰靈祭、展覧会の準備に着手、鹿児島では遺跡調査、記念教会の復興、山口では記念出版、その他大阪をはじめ全国的に記念行事が企てられる一方、日本交通公社でも巡礼団こそ四九年最大の観光客であると歓迎プランを練っている。日本カソリック教区連盟志村総務部長は語る

「ピッター神父は二月上旬帰るはずなので、その結果予想通り大量の巡礼団が来訪することになれば、教区を中心に委員会を組織して実際活動に移ることになりましょう」

## 1949/2/5:かつての敵、日本の友へ ジェコブ・ディシェザー牧師の手記 憎しみの底に神の姿 差入れの聖書で目覚む

「私は日本の捕虜だった」の著者ジェコブ・ディシェザー牧師が初任地の大坂阿倍野円山教会へ着任してから半月、震災パラックの同教会と仮の宿の同区丸山通一丁目吉木三郎氏宅を足場にもう毎日自由メソジスト教師団派遣牧師として各地協会への伝道に忙しい生活をつづけている。日本初空襲のドウリットル爆撃隊の軍曹から日本の捕虜へ、そしてまた“旧敵日本の土に”と決心して牧師に三転した同氏は、とくに本社の求めに応じて次の手記を寄せた

私はオレゴン州中部の百姓の家に育った。家族たちは皆非常に真面目なクリスチャンばかりであったが、私一人が世の中から背を向けて育って来た。軍隊へ入ってから丁度二年、日本の真珠湾攻撃のあったのは私の二十九歳の時であった。一九四二年のエイプリル・フール(四月一日)に航空母艦ホーネットでサンフランシスコを出帆することになったのである

ある朝われわれは午前三時半にたたき起された。その夕刻われわれ一同は母艦を飛立つ予定になっていたのだが、日本の漁船に発見されたため命令は直ちに飛行準備にということになった。予定より十時間も早められたのだ。安全に着陸できるチャンスがあるとは思えない決死飛行！むろん母艦は首をめぐらせて帰っていってしまった

### 日本　に高鳴る胸

東京直行の一隊と別れてわれわれは名古屋へ飛んだ。日本の空へ着いた時の興奮、私は眼に入る何物を見逃すまいとした。冒険に胸は高鳴った。私は四発の焼弾を“日本の上”へ投下した。それは私の一生で　もっとも興奮の絶頂の日　丁度十二時であった。忘れようにも決して忘れ得ない瞬間であった。爆弾は二つの石油タンクと航空機工場に命中した。ある駅では油運送列車らしいものを掃射して炎上させた。われわれは驚くほど低空で飛んだ。可愛い子供たちの姿まで手に取るように見えた。無心に遊んでいるのもあれば飛行機を見つめているものもあった。小さな丘の小道を老人が歩いていた。彼があまりにも低いわが機におどろいて地上にガバと伏せた姿も私の眼の奥から離れない

いわば短い時間の出来事であったが、われわれはやっと予定の行動を終わった思いで機首を紀州沖に転じた。一時ちょっと前だつたろう。中国の安全地帯まで飛び去るためだった。それから十時間も飛んだが　夜の十時半ごろにわれわれのガソリンはもう切れかかっていた。重慶地区へはまだはるかによばれないことは明かであった。とうとうガソリンは使い果たされてしまった。「パラシュートで機を離れろ」大声で叫ぶパイロットの命令で私は二人目に飛び出していた。暗くて一寸先も見えないような霧の夜、むろん地上など望めようはずもない。あとで知ったことだが私のパラシュートが空をただよっているその時、私の母が不思議に目覚めて「神よ彼を助けたまえ!!」と叫んだというのだ。虫の知らせといふものもあるが、神はすべてを知っていたのだろう

### 捕虜となって東京へ

日本占領地区的ド真中であったし、下ではむろん待ち構えていた。夜が明けると私はすぐ捕えられてしまった。部落にあった日本軍の本部へ連行されてから、私は同僚の四人も同時に捕まっていたことを知った。他の機からの捕虜三人も合わせて八人がすぐ東京へ送られた。きびしい拷問と飢餓の連続　長い長い二ヶ月が過ぎた。われわれはふたたび中国へ連れもどされて処刑を受けた。八人のうち三人はついに死刑にされてしまった。残りのわれわれ五名は終身刑ととなった。食事はお米とシリだけ。ひもじいひもじい毎日であった。なかの一人ボップ・メダーはついに栄養失調で死んでしまった

私はこの時ぐらい日本人を憎いと思ったことはない。日本人の方でも私やアメリカ人を憎んでいることがひしひしと感ぜられた。しかしこのときクリスチャンは“敵をも愛す”ということになっているはずではないかとフト思いついた

差入れてくれたアメリカ版の新品のバイブルを私はくり返しきり返し読んだ。バイブルが眞に神の言葉であると信じ得るようになった時の喜び。キリストは私にとってもやはり救世主であったのだ。神の啓示に目覚めた日、それは忘れもしない一九四四年六月八日であった。それからの毎日「行け、そして日本人の友となれ」としばしば神の声を聞いた

さしもの長い長い戦争もついに終わった。三年六ヶ月の獄牢生活から解放される日は遂に来たのだ。米軍落下さん部隊がわれわれを救い出してくれた。そして捕虜生活から解放されて二ヶ月とたない私はもうシアトルのパシフィック・カレッジで四年間神学を学ぶ身となっていた。歴史のコマが私の身にめまぐるしい三転を与えた

四年後 私はどうう三たび日本へ来た。希望に満ち満ちて日本へ来た。日本へ帰ったとき敵であった私に露骨な悪感情を示す人々が必ずあるに違いないと私は思っていた。しかし私のあった限りの人々の示した深い友情は私がかえってはずかしいくらいであった。私はそんな立派な気持ちを持って困難な生活と闘っている日本の人々をこよなく愛している。日本の人々はきっと立派なクリスチャンになるにちがいない。戦争はもう決して起してはならない。日本の人々が罪悪に対する“戦い”をかち得るに違いない。私は確信している

#### 1949/2/5:ザビエル祭は好評 各国から巡礼団 ピッター神父ローマから帰る

五月末から六月にかけて開かれる予定のザビエル四百年記念祭に、大勢の外国巡礼団を迎えるよう打ち合わせのためローマに赴いていた上智大学教授ピッター神父は、四日午後七時中国航空公司の旅客機で羽田に帰着した。外国巡礼団の訪日計画について同神父は次のように語った

私はアメリカを経てローマにゆき、ここで各国の駐在使節と話し合いましたが、各国とも大変な熱の入れ方で早くもアメリカではマクドナルド大司教のほか、もう一人の大司教が直接ひきいて来朝することになりましたし、スペイン、ポルトガル、ベルギーなどヨーロッパ各国でもいましきりに募集しているので、巡礼団の総数は相当なものになります。ただ日本の国内設備の不十分さが問題になりますが、何とか準備して快く巡礼団を迎えたいと思います

#### 1949/2/8:六月八日に京浜へ ザビエル巡礼団の日程決る

聖フランシスコ・ザビエル渡日四百年記念祭の主な日程が、七日四谷の東京教区連盟で開かれた巡礼団歓迎打合せ会で本決りした。去る四日帰京した上智大学ピッター神父の発表によれば、ローマ法王庁特使カーディナル・ルジェット師はじめ海外巡礼団約四百二十名が五月二十八日までに長崎に集合する

一行はフランスの哲学評論家、パリ大学教授ジャック・マルクス氏以下ヨーロッパ諸国から約百名、オーストラリア百二十名、アメリカ約二百名で構成され、五月末から六月中旬にかけて、長崎をふり出しに全国の記念事業に参加しつつ日本を巡礼行脚し、その間特別仕立の日本郵船有馬丸(予定)で行動する

主な日程は次の通り

五月二十八日長崎集合 二十九日同地で聖体行列 三十日長崎出港 三十一日鹿児島 六月一日三田尻入港、山口市 二日呉入港、廣島市 四日午後神戸入港 五、六、七日京阪神を中心に関西各地巡歴 八日横浜入港 十二日神宮外苑競技場で内外十万人参加の大ミサ 十三日神戸出帆帰国の予定  
なお大阪では細川ガラシア夫人ゆかりの大阪玉造教会、高山右近の居城跡高槻市にそれぞれザビエル顕彰の記念碑が建てられるほか、全国各地で熱心な記念事業が行われる

#### 1949/2/17:ザビエルの聖遺物 奇跡の右腕 吉浦盛純

カトリックでは昔から数々の聖人の遺骨、キリストや聖人の衣服数珠、そのほかこれらと直接関係のあった品物

を聖遺物と称して非常に大切にする。ザビエルの右腕もこうした聖遺物の一つであるが西洋では知らぬものがないくらい有名で、腕を祀った祭壇の前に、祈る人の姿の見えないことはなかった。

ザビエルは広東沖の上川島で帰天した。帰天後ローマでは、この偉大な神父のなきがらを引取りたいと思ったが、諸般の事情によって容易に実現しなかった。

「やっとヤソ会五代目の総長クラウジオ・アッカワヴィーバによって、ジュ寺に祀るために、なきがらの一部、右腕を切り取ってローマに送るよう命令が発せられた。この命令に従って、ゴアでは一六一四年十一月三日棺を開いて、腕を切り取った。そして翌々一六一六年ゴアのヤソ会修練所長セバスチアーノ・ゴンザレス神父は、これを海路ポルトガルに運ぶことになった。ところが航海の途中運悪くオランダの海賊船に見つかった。神父の船は武器も持たねば兵隊もいない中型の船で、速力ものろかった。神父の船の乗組員は、船足を早くするため貴重な積荷もドンドン海中に投げ捨てたが、ザビエルの腕だけは、どんなことがあっても渡すものかと決心した。やがて海賊船は神父の船にスレスレに近寄ってきて、ワーッとトキの声をあげた。そのときゴンザレス神父はザビエルの腕をさげて、しずしずと甲板に姿をあらわし、海賊船に向って「そこから一步も近づくな」と大声でどなった。それは神父の声ではなくて、神の声、ザビエルの声であった。今まで、帆という帆を風にふくらませて、がいせん將軍のように威張っていた海賊船は、あたかも氷に張り詰められたように、急に動けなくなってしまった。その間に神父の船はゆうゆうと、あっけにとられている海賊船をシリ目に航海をつづけ無事リスボンに入港、腕も首尾よくローマに届けられた。」

十七世紀の有名な史家でヤソ会の神父だったバルトリは、こう記している。

ザビエルの腕は“奇跡の腕”と呼ばれる。彼の腕を拝んでギリシア正教からカトリックに改宗したロシア人の話(一七四四年)、テンカンで死にかかったシティーの一貴人が、聖人の腕に祈って平復した話(一七六二年)等々、こうした話は数限りなくある。しかもその腕は初めてわが国にキリスト教を伝え、鹿児島、平戸、山口の教徒に洗礼を受けた腕であり、また四百年後の今年、再び日本を訪れんとする腕である。(筆者は元イタリア大使館書記官、キリスト文化研究家)

#### 1949/2/21:キリスト教と共産主義 田中耕太

キリスト教と共産主義とは現在の世界を二分する。相互に抗争する二大思想的勢力である。この二者は各自己の方法において人類社会の悪や不正義や不幸に対処せんとする。しかしながら両者はその方法において異なるのみではなく、実現を期待する人類社会の理想的状態においても相互に懸隔があるのである。

両者間の抗争がシ烈かつ深刻なのは、それ等が他の思想体系において類例を見ない程の、理論的及び実践的情熱を以て、人類の の獲得に努力を傾注するからである。

元来キリスト教と共産主義とは異なる平面の上に立脚しており、相互に衝突はありえないようと思われる。前者は精神的生活に關係するものであり、後者は経済的生活に關係するものである。前者は科学や技術に対して発言権をもたないと同様に、現世的経済秩序に容かさずする者ではない。これに反して後者は単に私有財産制の否定だけだとすれば、純経済的制度のみに關係し、精神生活上の問題に干与しないわけである。しかるに両者の間に衝突が起るのは、次の理由に基づく。すなわちキリスト教の立場からしては、精神的生活は肉体的生活から切り離され得ず、例えば私有財産制、家庭、結婚、子女の教育、国家的秩序、基本的人権等は、精神的宗教的問題と物質的現世的問題との混合区域と認められ、宗教がこれ等の諸範域について、自己の理想に適合する一定の秩序を要求するからである。また共産主義は、それが唯物史觀に立脚している限り、単なる経済理論たるに止まらないで、それ自体一つの世界觀として、既存の宗教に対して否定的な価値判断「宗教はアヘンなり」を下し、それ等を以て支配階級のイデオロギー、現段階においては資本家や地主などの自己擁護の武器といふからである。

共産主義は、それが単なる経済理論たることを逸脱して、世界観的、宗教的色彩 千年王国的終末論的思想を帯びていることに、そうしてそれが多くの矛盾や欠陥を抱 しはなはだ一面的に墮していくながら、とにかく科学的な理論をもって裏付けられていることに現代の知識階級の多数のものを引きつける魅力をもち、またそこにキリスト教と正面衝突をなす原因が存するのである。」

多くの者を共産主義陣営にかり立てる資本主義の害悪、「サク取」に対する は、神の国の理想を捧げ得る者のみが正当に き得るところである。唯物史觀の本来の立場からしては、資本主義(その害悪を含めて)の興亡の、単に必然の法則の現われとして、冷静に客観的に認識すること以外にはなし得ないはずである。「サク取」に対する道徳的批判をすること自体が矛盾である。従って宗教もまた歴史的必然の所産として、これに対しアヘンとして撲滅運動はなし得ないのである。

若し人道主義やヒューマニズムの要求からキリスト教を去って共産主義に走り、またはキリスト教徒たると同時に共産主義者たることを表明するものがあるとするならその者のキリスト教の信仰が偽りのものであったこと以外に、共産主義的世界の根本に関するはなはだしい認識不足に起因するものと認めざるを得ないのである。(筆者は法博、参議院議員)

#### 1949/2/24:麹町に東洋一の教会 祭壇も聖像も世界一流の水準

教会建築では東洋一というセント・イグナチオ教会が東京都千代田区麹町に建てられることになり四月の復活祭を目標に工事を急いでいる

設計には教会建築の権威で長らく日本に滞在していたドイツ人グロッパー氏が当り高さ五十尺長さ百五十尺、建坪三百五十坪で高さ百尺の鐘楼も付設され、スマートなモダン・ゴチック様式

床は総大理石で窓には世界各国の信者から贈られたベルギーのレ・ヴィトロー・ダー会社製のステンド・グラスが飾られ、正面入口上にはイエズス会の創始者イグナチオ、またほかの一つには来る五月四百年祭が行われるザビエルを描いたステンド・グラスがはめこまれる。ニューヨークのブルックリン教会から寄贈された大祭壇をはじめ、十字架も聖像も世界一流の水準を行くものだといふ

鐘楼には千二百キロの鐘のほか銀製の小さな をつって、この から流れ出る美しい音色を拡声器で拡大する装置もできており、初代の主任司祭には『二十六聖人』の著者ヘルマン・ホーヴェルス神父が就任するはず

#### 1949/3/16:宗教に結ぶ日米の友情 引揚者に家を チベサー神父が募金活動

東京中央区銀座四丁目銀座教会司祭チベサー神父が、気の毒な引揚者に住宅を与えたと四百万円募金運動をはじめた

これはローマ法王ピオ十二世が日本の引揚者救済用にとこのほど五万円を送ってきたのがきっかけとなったもので、同神父はこれをもとに日米両国に働きかけ、早ければ今月末にも住宅を貸受け、これを引揚者専用アパートとして広く解放したいといっている

同神父の呼びかけに応じてチャペル・センター内の在日米国カトリック婦人会でも一万ドルの募金活動に乗り出し、日本側でも土井大司教、犬養健、田中耕太郎、近藤鶴代の諸氏が賛助員として協力している

#### 1949/3/16:“足”の援助 在京米人が

日米両国の友情をつなぐ橋として三鷹に建設される国際キリスト教大学のため、アメリカでは一千万ドルの募金が来月の復活祭を期して開始されるが、これに呼応して日本でも一億五千万円を目標の募金が始まった。ところが鵜沢聰明、山本忠興、森村市左衛門氏らの建設委員を悩ませるのは“足”的不便だというのを聞いた在京教会関係の米人有志は、国際キリスト教青年会のラッセル・ダーガン氏夫人、同カール・クリーテ氏夫人を長として自

動車奉仕班を組織、日本人委員をのせて都内を走り回ることにして十五日から開始した。十余名の夫人がそれぞれ自家用車を運転して午後二時日赤本社に勢ぞろい。恐縮する委員たちを乗せて小雨の町に友情の“足”をんで行った

#### 1949/3/17：“悪”と戦うキリスト教 ジョーンズ博士日本を語る

先月二十二日来朝伝道旅行中のアメリカ・メソジスト教会のスタンレー・ジョーンズ博士は東京に帰り、十六日朝東京の富士見教会で日本の印象その他を次のように語った

戦争による日本の惨害が想像以上にひどいので驚いている。それにつけても世界連邦組織により共同安全保障をはかる私の平和運動に拍車をかけねばならない。キリスト教と共産党の問題だが、キリスト教は反共団体ではない。キリスト教を資本主義的と考えてはいけない。キリスト教は悪に対して戦うものだ。だから資本主義でも共産主義でも悪があればキリスト教はそれと戦うだろう

#### 1949/3/17：廣島に教会 米人が寄進

【ローマ十五日発 AP=共同】十五日のヴァチカン放送は一米穀篤志家が廣島に教会を建立するため寄進を申出たと次のように発表した一米国篤志家は廣島にカトリック教会を建立するため五万ドルの寄進を申出た。同氏は原子爆弾を廣島に落としたのは米国人だからその復興にも米国人が手を貸さねばならないといっている。ジェズイットの神父たちがこの費用で教会建立の仕事に当ることになった

#### 1949/3/31：スペイン軍艦訪日 ザビエル祭列席者乗せて

スペインのフランコ政府は、来る五月二十九日から六月初旬まで日本各地で行われる聖ザビエル渡日四百年記念祭に際して小型巡洋艦一隻の公式派遣を日本占領軍当局の同意を得て決定した旨同記念祭本部で発表した  
同艦は四月半ばスペインを出発するが、聖ザビエル祭に列席するマドリードの大司教ほか政府代表二十名が乗り込む。日本滞在は約三週間の予定で、外国軍艦の公式訪日は戦後初めてである

#### 1949/4/3：ギルロイ師 聖ザビエル祭の巡礼団長に

五月二十九日から長崎はじめ各地で開かれる聖ザビエル渡日四百年記念祭に約七百名の巡礼団が欧米各地から訪れるが、二日在日ヴァチカン使節団への入電によれば、ノーマン・ギルロイ師(シドニー駐在大司教)が同巡礼団の法王特別使節団長に法王ピオ・十二世から任命されたとのことである。ギルロイ師は昭和二十一年秋来朝したことがある(共同)

#### 1949/4/18：復活祭 皇居前広場で野外礼拝

十七日はキリストの復活を祝うイースター・サンデー。米極東軍東京牧師区では朝七時から大十字架を立てた皇居前広場で、訪日中の万国キリスト教共助会長ダニエル。ボーリング博士を迎え、賛美歌の流れのうちに進駐軍將兵はじめ在日外国人、日本人クリスチャン多数が会して天野外礼拝を行った

またカトリック側では同九時から千代田区紀尾井町上智大学構内に完成したばかりの日本一の木造教会聖イグナチオ聖堂で内外人一千余名が参列して献堂式と荘厳ミサを執行、各教会でも愛と平和の日を祝福した

#### 1949/4/19：キリスト教大学へ両陛下御寄付

米国宗教界の積極的援助と日本側有志の手で来年開校を予定されている国際キリスト教大学の建設基金として天皇陛下から十万元、皇后陛下から五万元の御寄付があった旨十八日同大学建設準備会から発表された

### 天 1949/5/12:九州御旅行の日程決る

天皇陛下の九州御旅行日程は十一日決定。宮内府から発表された。陛下の九州御訪問は昭和十年の陸軍特別大演習以来十四年ぶりである

十七日午前九時東京駅発西下、同日午後六時四十五分京都駅着京都御所に御一泊、十八日午前七時半京都発、同日夕刻九州にお入りになる。福岡をふりだしに佐賀、長崎、熊本、鹿児島、宮崎、大分の順で九州御滞在廿三日間、六月十一日午後七時十五分東京着後帰京まで往復廿七日間の全靈のない長期御旅行である

### 天 1949/5/18:陛下きのう御出発

天皇陛下は十七日午前九時東京駅発宮廷列車で九州御旅行の途につかれた

御旅行簡素化のため今回はお食事を担当するものはおつれにならず、宿舎も原則として普通の旅館、お供の宮内官は廿五人に縮小されての簡素なお旅立ちである。途中京都で御一泊、十八日夜小倉十四年ぶりに九州に第一步を印せられる

九州御滞在廿三日間、戦争犠牲者などを激励され六月十二日午後七時十五分東京駅着で御帰京の予定である

### 1949/5/19:先着は 25 日東京へ サヴィエル祭日程本決り

聖フランシスコ・サヴィエル渡来四百年記念祭は国際巡礼団約百名を迎、いよいよ来る二十九日から、六月十二日にかけて東京、長崎を中心に繰り広げられる。この式典に参加する外国巡礼団は二班に分れ、二十六名からなる第一班は二十五日、第二班(人員未定)は二十六日いずれもパン・アメリカン特別機で東京着、二十七日特別列車で東京を立ち、二十八日までに長崎に集合することになっている

式典を飾る「奇跡の右腕」はさる十四日ローマ発イエズス会員カダレロ師に奉持されてスペイン着、九名からなるスペインの公式使節団とともに十八日バルセロナから空路日本に向けて出発した。また法王特使ギルロイ枢機卿も随員五名とともに特別飛行機で二十三日ごろ岩国着の予定

一行の日程は次の通り

五月二十七日午前九時半特別列車で東京発 二十八日午後七時長崎着 二十九日長崎雲仙、朝自由行動、浦上、大浦両天主堂でミサ、二十六聖人殉教の丘で礼拝、長崎午後五時発雲仙へ 三十日雲仙 長崎、雲仙国立公園に遊び午後四時半列車で鹿児島へ 三十一日鹿児島(サヴィエル上陸の地)に新教会奉獻式、午後八時四分大分へ 六月一日大分、別府遊覧、午後六時廿分博多着夜山口に向う 二日山口着、午前九時サヴィエル建碑除幕式参列、史跡遊覧 三日、午前八時廣島着、原爆市街地見学、宮島遊覧 四日午前六時半京都着洛陽ホテル休息、市内遊覧 五日午前九時大阪へ、西宮大ミサ、大阪市長主催歓迎会、宝塚見物その他夕方京都帰還 六日高槻、大阪、奈良見物、午後十時三十分名古屋へ 七日名古屋ステーション・ホテルで歓迎会、市内見物 八日午前零時半名古屋発熱海へ、自動車で箱根、鎌倉をへて横浜へ、都知事招宴、東京ホテル帰還 九日午前八時四十分発上野駅発日光へ 十一日午前八時半日光発東京へ、午後東京都主催招宴  
十二日最終日、午前九時半から明治神宮競技場でローマ法王使節大司教の野外大ミサに参列

### 天 1949/5/19:天皇九州にお着き

[小倉発]天皇陛下は十八日午後七時四十分宮廷列車で小倉着、九州御旅行の第一步をふまれた

田島宮内府長官、三谷侍従長、鈴木行幸主務官ら隨行二十五名という簡素さ、歓迎門一つない駅頭に北九州五市市長、関係者のお迎えを受けられ熱狂する市民の中を日鉄高見クラブの宿舎にお入りになった

### 天 1949/5/20:八幡を御視察 九州の天皇陛下

【小倉発】西下第一夜を八幡市で明かされた天皇陛下は十九日午前九時から北九州工場地帯の復興状況を御視察、激励された。立小倉病院を訪問されたのち陛下は船で洞海湾を一周され、三菱化成牧山、日鉄八幡など四工場ではときどきひたいの汗をふきながら職場の人に仕事や復興状態などをあたずねになりご自身でもをべ、溶鉱炉をのぞかれ午後五時十五分八幡市日鉄高見クラブにお帰りになった

#### 天 1949/5/21: 陛下、筑豊炭田へ

【小倉発】九州御旅行二日目の二十日、天皇陛下ははじめて筑豊炭田に足を運ばれた。九時宿舎八幡市高見クラブをお発ちになり安川電機、三菱化成（黒崎）の両工場を御視察、十一時三分直方着、ボタ山の並ぶ炭田地帯に入られ、商工省九州炭鉱保安技術研究所、鉱山学校、三井田川鉱業所など四千二百万トン増産と取り組む百六十鉱山代表約四百名を激励され、庄内村公民館、川鉱地を経て午後四時五十五分二日市着、宿舎大丸別館にお入りになった

#### 天 1949/5/22: 福岡の御視察終る 陛下、きょう佐賀県へ

【福岡発】天皇陛下は二十一日朝九時から福岡県筑紫郡水城村授産所に働く二十三名の戦争未亡人、引揚者たちを激励されたのち福岡市の戦災復興状況や九州の特産貿易品をご覧になったり、孤児収容所で子供たちをおなぐさめになったが九日の学術資料や標本、福岡県立農事試験場の三毛作田の季節離れた麦刈りや田植えには“科学者天皇”的深い御关心を寄せられ夕刻二日市町大丸別館に帰られた  
きょう廿二日は佐賀県に向われ各工場、開拓団を視察される

#### 1949/5/23: 聖骨日本へ

【ニューヨーク特電二十一日発 = AP 特約】日本のサヴィエル渡来四百年記念祭にのぞむため米国経由訪日の途上にあるスペイン人宗教使節団の一一行とサヴィエルの聖骨は十九日ニューヨークに着いたが、二十三日、パン・アメリカン機で東京に向け出発する

#### 1949/5/23: ギルロイ卿・きょう到着

【山口発】サヴィエルの四百年祭巡礼団第一陣ギルロイ枢機卿一行は二十三日午前八時十五分空路岩国飛行場着、同九時十五分岩国発呉市に向う

#### 1949/5/23: 聖サヴィエル 語るカンドウ神父「日本こそわが歓喜」“四百年前の種子”みのる

“東洋の聖使徒”フランシスコ・サヴィエル四百年祭は今廿三日ギルロイ枢機卿らの来日を前奏曲に廿九日からその歴史的な幕をひらく…「日本人は富士山を誇る以上にサヴィエルを誇るべきなのに…」と外国人はみなこの日本人を愛した大聖人に対する日本人の無関心をいぶかる。ピレネー山中バスクに人となったサヴィエルの一生とその四百年祭の意義について、同じバスク人の司祭S・カンドウ師（二）の話を聞く。カンドウ神父は二十五年前来日、長く東京大神学校の校長として数百の聖職者を育てあげた人。いま全国の若い神父たちから「現代のサヴィエル」と仰がれている存在である。聖人と同じバスク人であるばかりか、カンドウ師の生家バス・ピレネー州セイジヤンビエ・ドボル町のお城はかつて若きころのサヴィエルがしばしば足をとめた親類の居城であったという深い因縁。きのう同師が教へんをとるアテネフランスで語る言葉には強い感動がこめられていた  
“日本は私の歓喜である”とサヴィエルはその手紙のなかで叫んでいる。聖サヴィエルにとって、日本人は実によろこびそのものであった。幾千里の波の上を数知れぬ困難とたたかったあと当時のように乱れていた日本にたどりつき、しかも二年にわたる不遇の日を送りながら、この感動を覚えたのである

「...日本人は私が今までに見た数多くの民族のうち最良の国民である、その親切、その善良、その名誉心、そして容易に教えにうなずこうとしない理知...」

サヴィエルは心の底からこういっているのだ。今日の日本にその四百年祭を迎えることに私は偶然でないものを感ぜずにはいられぬ

千五〇六年聖サヴィエルは当時スペイン領のサヴィエル城に六人兄弟の末っ子として誕生。十九歳でパリ大学に入った。名誉欲に燃えていた青年サヴィエルは同じバスク人の当時敵対していたイグナチオ・ロヨラ(のち聖人)と交わり、彼から「人もし全世界を受くるとも己が魂を失わば何の益かあらん」という聖者の言葉をうけて使徒への道をつかんだ。ロヨラが創立したイエスス会の最初の会員となり、四一年春インド布教へ旅立った二年のうちサヴィエルはマラッカで「ヤシロー」という日本人に会い、はじめて日本という国の存在を知った。

日本に対する

サヴィエルのあこがれは何物もおそれぬ願望となって一五四九年四月海賊船のジャンクに乗り込んでマラッカを出発。四ヶ月の波をこえて同八月十五日鹿児島へ到着した

まず天皇(当時語奈良天皇)に会おうとしたが、荒廃した御所を見て失望、將軍家(当時足利義藤)にもあきたらず、当時の文化都市山口で大内義隆からはじめて布教の許可を得たこのころ中国の影響が強かったので、サヴィエルは日本の改宗はまず中国の改宗からと考えわずか二年で滞在を一応打切って中国に赴いたが上川島で熱病にかかり一五五二年十二月三日インドのゴアで四十六歳の短い一生を閉じたのだった。この在日二年が以来四百年どんなに大きなみのりを日本にもたらしたか日本の新しい精神文化はこの二年に一子をおろされたのである聖サヴィエルが叫んだ「日本はわが歓喜である」という言葉は果たして彼の間違った直感であろうか 四百年祭にさいして私はこれを日本人の心に問いたいのである

#### 天 1949/5/23: 天皇陛下、佐賀へ

【福岡発】北九州工業地帯を三日間にわたって御視察になった天皇陛下は二十二日朝十年ぶりに麥秋の肥前路に入られた

基山町の私立孤児院洗心寮、目達原の引揚者開拓地を御視察、午後は佐賀市を中心に各種工場をお訪ねになった

#### 1949/5/24: ギルロイ師岩国に着く

【岩国発】サヴィエル四百年祭に参加する国際巡礼団の第一陣、ローマ法王特使ノーマン・ギルロイ枢機卿ほか五名の神父が二十三日午後四時シドニーからマニラ経由で岩国空港に着いた。雨上がりの飛行場に安着した一行は英連邦軍代表、津田岩国市長らの出迎えを受け、同市藤本マサ子さん(一九)から歓迎の花束を受けた。ギルロイ師の右手薬指には枢機卿の職を表示する大型の宝石をちりばめた金のリングが光っていた、枢機卿は飛行場で語る

一九四六年に一度日本に来たことがあり、今度の意義深いサヴィエル祭典に再び日本訪問の機会を得たことは大変うれしく思う。二週間滞在して美しい日本の各地を巡礼し、式典の喜びを日本の皆さんと分かちたい  
なお一行は同夜特別列車で東京に向った

#### 1949/5/24: “奇跡の右手”出発

【サンフランシスコ二十三日 UP = 共同】日本で開かれるザヴィエル四百年記念式典に臨むため聖サヴィエルの“奇跡の右手”をささげて日本を訪問するスペイン巡礼団は、二十三日サンフランシスコを出発、空路東京に向った

#### 1949/5/24: 小崎牧師ら渡米

【横浜発】東京靈南坂教会小崎道雄牧師、日本聖書教会監事阪田素夫氏夫妻が廿三日朝横浜出港のフライング・スカット号で渡米した

#### 天 1949/5/24: 陛下佐賀県を御視察

【佐賀発】天皇陛下は二十三日も佐賀県内各地を御視察、同夜武雄温泉春慶屋にお泊りになった

#### 1949/5/25: “新鮮な美しい国” ギルロイ師の一入京

ローマ法王特使としてサヴィエル四百年祭に参加するノーマン・ギルロイ枢機卿ほか五名の神父一行は、二十四日午後六時五十五分、英連邦軍司令官ロバートソン中将代理ドリゲス中佐、総司令部厚生福祉局次長ネフ氏、ベルギー使節団シュバルク少将ら在京各国使節団、ピッター神父、土井大司教らの出迎えをうけて東京駅に着いた枢機卿は語る

岩国に着いたとき、それから東上の途中見た日本の景色は美しかった、私は二度目の訪日だが最初と同じように新鮮な美しさを感じた、岩国飛行場で美しい娘さんから花束をいただいた感激は忘れない、この美しい国土でサヴィエルの四百年祭が行われ、世界の前にさらに神の道が示されることは実に意義深いことと思う  
なお一行はオーストラリア使節団を訪問したのち上智大学内の宿舎に入った

#### 天 1949/5/25: 陛下、佐世保へ

【佐賀発】天皇陛下は二十四日佐賀県武雄町から唐津を経て長崎県に入られ、潜龍炭鉱を御視察、午後三時五十三分佐世保御着、夕刻宿舎に入られた

#### 1949/5/26: “聖人の心”で平和を サヴィエル四百年祭 マ元帥のう声明

総司令部特別発表=マックアーサー元帥はサヴィエル四百年祭に際し次の声明を発表した

…聖フランシスコ・サヴィエルの来日四百年祭は人類精神進化の道程における一つの大きな宗教的里程碑である、聖サヴィエルの渡日が特に重大な意義をもつ理由はただにそれが日本人の最初のキリスト教導入であったというのみに止まらない、更に加えてこれが宗教の根本をなす考え方をひろく人類すべてに及ぼそうという遠大な目標をもった一大伝道運動の端緒となった点にも重大な意義が存するのである

宗教の根本をなす考え方とはすなわち邪を捨てて花を、冷酷を捨ててあわれみを、利己を捨てて寛容を、我を捨てて公正を、それぞれとり、見も心も清く保ち不遇に屈せず成功におごらぬという考え方であり、そのすべてはキリスト教が山上の垂訓で説いたあの美しい永遠な、しかも何の飾り気もない言葉にありますところなく現されている

…伝道という仕事の基礎をなすものは人間のもつあらゆる特性のうちもっとも崇高なもの、すなわち犠牲の精神である、この特性が現われる時にこそ人間の心の像は神の姿にもっとも近く描き出されるのである

しかも魂に一点の汚れもないこの伝道師聖サヴィエルはそれまでの世界が知り得た最大の思想を極めて謙な心持をもち極東にもたらしたのであった、彼がもたらした思想はやがてこの地においてすぐと成長し美しい花をさかせるであろうことを余は真心こめて信ずるものである、何故ならばこの思想の具現するものは健全なもの考え方という永久不滅のものだからである

…世界のあらゆる人が心から望みまた聖フランシスコ・サヴィエルが何よりも固く心に抱いていたものはあらゆる知識を超越する真の平和であった。もし人類がこの平和について見いだすときがあるとするならば、それはす

べての人がこの健全な考え方を、いなこの思想を各人の心に受入れるときであるに相違ない

#### 1949/5/26: ギルロイ師 マ元帥と会見

二十四日夕入京したギルロイ枢機卿は、二十五日朝十一時半関口教会に土井大司教を訪問したのち十二時半総司令部でマ元帥と会見、夜は対日理事会英連邦代表パトリック・ショウ氏の招宴にのぞんだ

なお同枢機卿は二十六日夜ボルトガル使節団の招宴に出席したのち二十七日朝九時半の特別列車で長崎に向う

#### 1949/5/26: サヴィエルの腕きょう到着

【サンフランシスコ特電二十四日発 = AP 特約】サヴィエル渡来四百年祭のためはるばる日本に送られる聖サヴィエル「奇跡の右腕」は二十三日夜パン・アメリカン・クリッパー機でサンフランシスコを出発、二十六日午前五時四十五分着の予定

#### 広 1949/5/26: 日本初期西洋文化史展 サヴィエル来日四百年記念

内容 サヴィエル来日関係の資料、御物南蛮びょうぶ、未公開美術品など出陳

会期 五月廿六日から六月廿五日まで 会場上野国立博物館表慶館

入場料大人二十円、小人十円(法隆寺文化展と共に通)

主催 国立博物館 後援 朝日新聞

「キリスト文化史展」

内容 = 実物参考品の出陳と東西文化の交流をパネルとジオラマで展覧 会期五月二十八日から六月十二日まで 会場渋谷東横(入場無料)

主催 カトリック文化協会 朝日新聞社

#### 天 1949/5/26: 陛下雲仙へ

【佐世保発】二十五日天皇陛下は朝九時から長崎県高島真珠養殖作業場、国際陶器、元大村飛行場跡開墾地、聖母騎士園、大村国立病院などをごらんになり、午後四時島原着、自動車で雲仙に登られ、御宿雲仙九州ホテルに入られた

#### 1949/5/27: 奇跡の右腕 きのう着く

聖フランシスコ・サヴィエルの渡来四百年記念に際して特にローマ法王から日本行きを許されたサヴィエルの「奇跡の右腕」は二十六日午前六時二十六分カバリエロ神父、スペイン公式使節団、訪日巡礼団スペイン班一行廿五名(うち婦人十名)に護られてパン・アメリカン会社の特別機レイサー号で羽田に到着した

飛行場には駐日スペイン使節代表ゴンサロ・デ・オヘダ氏、駐日ローマ法王使節団ウンベルクロード師、東京神学校教授ゴンサレス師ら多数が出迎えた、一行の団長格のホセ・ロペス・オリティス司教についてガバリエロ師が「右腕」の納められたえび茶のズック製ボストンバッグを抱えておりたり、横須賀聖泉女学院生徒から美しいシャクヤクの花束と、花輪を贈られた、小の後一行は東京港区麻布一兵衛町のスペイン代表部に向ったが、オリティス師は飛行場で次のように語った

聖サヴィエルの右腕はローマのジェス教会に安置されてあったもので、四百年前来日した聖人の右腕が再び日本を訪れるに際し、天の祝福が日本国民に豊かならんことを祈っています、祭典が終れば一行は直ぐ帰りますが「奇跡の右腕」はその後さらに一ヶ月くらい日本に置いて一般に展覧するはずです

飛行場でカバリエロ師は記者団のために特にボストンバッグを開いたが、サヴィエルの右腕は長さに尺の金のケースにおさめられ、ガラスのフタを通してみられる、またサヴィエルが常に身体につけていたコクタンの木箱に納められた十字架も一般に展覧されるはず

なお特別機について午前八時五十五分定期便でスペイン班第二陣 S·J·ホベール師ら十名、同十一時ノースウェスト会社定期便でアメリカのマックドネル助司教ら三名も到着した、また同日スペイン代表部で荘厳なミサと晚餐会が行われた

#### 1949/5/27:聖徒一万五千 平戸で聖体行列

【佐世保発】聖サヴィエル四百年祭のトップを切り廿六日午後二時半同師が三度訪れたゆかりの長崎県平戸島で盛大な聖体行列が行われた、かつて日本最初の貿易港として栄えた平戸に同師がまいだ一粒の麦はあらゆる迫害にも屈せず教えを守り抜いた古キリスト教徒を生むなど、ここにはいまだに聖サヴィエル師の教えは生きている

この日総長から黒島、生月、五島をはじめ各離島からは船でつめたほか遠くは北海道から聖徒十五名がかけつけその数一万五千二達し平戸の町を埋めつくした、大十字架を先頭に平戸天主堂を出発した行列は、大浦天主堂山口司教が奉持する聖体を中心に、米三十四連隊長スタントン大佐、外人宣教師、聖母騎士団、求道女、聖歌隊に護られ厳かに島内を練り歩いた

#### 1949/5/27:“精神的再建の秋” 共産主義や避妊を語る ギルロイ枢機卿

オーストラリアからさるに十四日入京、宗教施設の視察を続けていたローマ法王特使ノーマン・ギルロイ枢機卿は二十六日午後一時半工業クラブで記者団と会見、サヴィエル四百年祭の意識を明らかにしたのち人工妊娠中絶、共産主義、移民の問題について次のように語った

…聖フランシスコ・サヴィエルは日本の国民性とキリスト教の靈感とを結びつけた最初の人であった、カソリックがこのようにして日本に紹介され、そして日本がまた世界に紹介されたのは非常に深遠な意味がある

私は二年ぶりで再度日本を訪れ、日本人の生活が物質的も、社会的にも見ちがえるほどに再建されているのに驚いている、さらに私は精神的再建という一層偉大な事業が、この式典を機として促進されることを信じて疑わない

…人工妊娠中絶は日本に限られた問題ではない、それは道義上の問題であるが、本質的に中絶ということは悪である

これを解決する道は聖書の『故にまず神の国とその義とを求めよ、しかばこれらの物みな汝らに加えらるべき』という一節の中にある

…日本では牧師の共産入党問題が伝えられているが、彼がカソリック教徒であるならばこうしたことはありえないと思う

…オーストラリアでは別に目標主義といったことを宣言したことではない、日本人の移民問題については、人類の幸福のために働くと同じ意味においてオーストラリアのカソリック教会は努力している

#### 天 1949/5/27:陛下きょう長崎へ

【雲仙発】天皇陛下は二十六日午前九時三十分雲仙公園九州ホテルから仁田峠にお登りになり、雲仙ツツジ観賞やお好きな植物採取、有明海展望など御休養の一日を過ごされた

きょう二十七日は長崎市内各地を視察される

#### 1949/5/28：“奇跡の右腕”長崎へ

聖サヴィエルの“奇跡の右腕”と十字架はローマ法王特使ギルロイ枢機卿、オルティス司教、カバリエロ師など一行六十二名に護られ、二十七日朝九時四十七分特別仕立てのサヴィエル巡礼列車で信者達に見送られて東京を出發、長崎に直行した

一行は二十八日後ごく時四十六分長崎着、二十九日長崎の浦上大浦天主堂で四百年祭ミサを行い、サヴィエル上陸の地、鹿児島など各地を巡礼、来月八日東京に帰る

#### 天 1949/5/28：陛下、永井博士を御慰問

【長崎発】天皇陛下は二十七日朝雲仙から長崎へ入られ、原子病の永井隆博士（四二）を見舞われたが、博士は妊婦のようにはれ上がった原を黒衣に包み二見誠一君（一五）芽乃ちゃん（九才）を連れタンカで自宅から医大の本館へ運ばれ、二階廊下で陛下をお迎えした

博士は二ヶ月前から一切の面会を断り、ひたすら余命を保つことを心がけてきたが、四年ぶりの母校訪問であり興奮と緊張で貧血を起し、一人別室で看護を受けていた

午後二時十五分陛下は高瀬学長の案内で一たん屋上に登られた後、ベッドに伏したままの永井博士にお近づきになった

“どうです病気は？”“ハイ、おかげさまで元気であります”“どうか早く回復することを祈っています、著書は読みました”

このお言葉に感激した博士は

“手の動く限り書き続けます”

とお答えした、二十八日は再び福岡県に向われる

#### 天 1949/5/29：陛下、久留米へ

【長崎発】天皇陛下は二十八日午後一時十分長崎から久留米駅に御到着、ゴム工場、久留米医大、戦災引揚者集団住宅、八女郡水田村の“共同時代”などを視察された

#### 1949/5/29：殉教の祖先眠る長崎へ 念願かなったロザリオ嬢

【サヴィエル特別列車にて丸山記者】二十八日夕長崎に着いた聖サヴィエル祭巡礼団には十二名の婦人が加わっているが、その中に、祖先を長崎の丘に殉教させた若いスペイン嬢ロザリオ・バレスチーナさん（二一）がいる

彼女の五代の祖ロンピエード師の兄、聖マーチン・デ・ロイナース師といい、サヴィエルが病死した後を引継いで長崎に渡った人で、大名の権威にも異教徒の迫害にもひるまず神の道を説いていたが、一五九七年二月五日ついに捕われ、殉教の使徒として長崎の丘に果てたのであった

それから三百五十余年、今回の式典が開かれるのを聞くや、遠い祖先の眠る地、そして同じような殉教の子孫の住むという日本にあこがれ、母を説き伏せて旅立って来たのである、スペインのナバール地方に住み、サン・セバスチャンの女学院で商業を修めたというロザリオ嬢は「これが祖先です」と家系図を示しながら語る

「四百年祭が開かれると聞くとじっとしれおられず、出てきました、もちろんサヴィエルに対する崇敬心からでもありますが祖先の一人が殉教徒として眠ったという長崎の丘を一目みたいからです、早くその丘に立ってみたいと思います」

#### 1949/5/29：「奇跡の右腕」大浦天主堂に安置

【長崎発】サヴィエル四百年祭に参列するローマ法王特使ギルロイ枢機卿ら六十二名の国際巡礼団一行は二十八日午後六時四十六分長崎駅着、「奇跡の右腕」は大浦天主堂に安置された  
一行は二十九日四百年祭のミサ聖体行列などに参加したのち雲仙に泊る

#### 1949/5/29:全村がカトリックに改宗

【京都発】京都府何鹿郡佐賀村では去る三月全村を挙げてカトリックに改宗を決意、来月五日西宮球場で行われるサヴィエル記念祭の中央式典「莊厳ミサ」には、全村五百七十戸二千余名が参列することになった

#### 1949/5/30:原爆の地・長崎に立って ギルロイ枢機卿

【長崎にて丸山記者発】外国巡礼団を率いて長崎に来たローマ法王特使ノーマン・ギルロイ枢機卿は、二十九日朝原爆の中心地「殉教の丘」などを視察したのち、本社の求めに応じて特に『原爆の地長崎に立って』と題する次の手記を寄せた

空しく空にのびた鉄骨、崩れ落ちた石とカワラ、戦争と平和についてここほど人に考えさせるところはなく、宗教というものにここほど深い示唆を与えるところはあるまい、聖サヴィエル四百年祭がここで開かれる意義の如何に重大であるか、思い半ばにすぎるものがある、今日の世界は物質を精神の上に置き、現世を永遠に優位にあるものとするが、聖サヴィエルは精神的価値こそこの世の中で最高のものであることをまっさきに日本に示した、今私には聖サヴィエルの声が聞こえる「己が心を失わば世界を得るとも何の益あらん」と、まことに聖サヴィエルこそは先駆者であった、彼は日本にキリスト教を伝え、日本を世界のキリスト教国に紹介した、とくに殉教者としての勇壮な行為、信徒としての誠実さを幾世紀の迫害の中にも失わなかつた日本のカトリック史の紹介こそ、特筆大されてよい

聖サヴィエルはすべてのものに、神の子なるが故に尊敬されねばならないといった、いかに貧しくても胎児であっても、その人間としての権利は侵害されるものではないと強調した、日本再建に当ってもまず人間の権利は尊重され、その福祉が増進されることが必要である、宗教心、宗教の権利を実際に活用せずして日本は再建されるものではない、宗教は正しい理性のうえに立つ、私のいいたいのは、宗教とは普遍的ですべてのものを抱擁し、弱きものに対する愛と情けに満ちあふれているというと同時に高度の道徳律をもち道徳上の原則においては絶対に妥協しないということである共産主義は無視論を唱え、唯物思想をその根底とするゆえに、キリスト教とは当然に対立する、しかるにキリスト教の根本思想は、神が至上の権力をもつ人が神に従属する点にある、しかしこれは奴隸状態を指すのではなく、子供と後継者の地位を意味する、社会秩序に多くの重大な欠陥のあることは認めるけれども、法王もいわれたように「社会の貧困を利用して専ら社会悪を強い不満をあおる人々にわれわれはついていけない」のである、社会問題に対するカトリックの態度は、神の授ける正義と慈愛の法則を基調とする、しかるに共産主義は神を認めず、神の与える権利を否認し、解決手段として階級闘争をもつてするのである

経済的困苦は、ともすると宗教に対する関心を薄める、しかし私は日本の教会では敬けんな姿を見たし、西下の沿道では熱烈な信仰心に幾度も胸うたれた、宗教心はだれにでもある、理性は心理を求め、精神は常に神との一体化を望んでいるのだ

#### 1949/5/30:サヴィエル四百年祭ひらく 青草の丘に聖か流る きのう浦上で莊厳ミサ

【長崎発】聖フランシスコ・サヴィエルが日本に歴史的一步を踏んで四百年、その“聖跡”を祝福する国際記念祭典は「奇跡の右腕」とギルロイ枢機卿以下米、スペイン、インド、フィリピンなど八カ国七十余名の国際巡礼団を迎えて二十九日長崎で開幕された、日本二十六殉教者の聖地、西坂の祭場には祈りと喜びが五月の風にかおり、莊嚴ミサの装い清らかな浦上天主堂のほとり、かつての原爆下の野に一面の青草がなびいてい

た

全国ゆかりの地で十日間にわたって行われる記念祭典第一日は、まずこの日午前九時浦上天主堂の莊嚴ミサにはじまつた、薄曇りのにぶい光のとけた祭場には、大浦天主堂山口司教、法王特使ギルロイ枢機卿以下内外巡礼団、地元聖職者、一般信者ら三万人が参列、司祭、信者らは心を合せて聖歌隊の合唱の中に聖餐をささげ、復興の家並まばらな浦上の野には美しい聖歌の歌声がこだました

一時間余のミサが終ったのち、ギルロイ枢機卿以下の一一行は市内見物から大浦天主堂におもむき、午後一時には白衣をかぶった県内外の万余の信者らが同天主堂に續々と集合、同二時からローマの方式にならって聖腕奉持行列が開始された

先頭の大十字架、聖職者について聖母騎士、神学生、各学校の男子生徒、一般信徒がならび、楽隊、教区内内外の男子巡礼団、市内各教会役員らのあとに外人巡礼団、黒衣の聖職者が参列、つづいてオープンの自動車に聖腕をささげてギルロイ特使らが乗車、護衛隊、来賓、修道女、女子巡礼団、各学校の女子生徒、一般婦人などえんえん三万余名の行列は、同天主堂から西坂祭場にいたるおよそ三キロの市内を行進、道路の両側を埋めた市民の祝福をうけつつ、祈りと聖歌の歌声がゆっくりと行列の波にゆられて行く

午後三時過ぎ行列は西坂祭場に到着、直ちに降福式に移つた、赤、緑の祭服やスペイン婦人らの黒いヴェール、一般信者らの白衣と色とりどりの参列者は祭場にあふれ、雨もよいの空のもとに殉教の二十六人が十字架の上に帰天した悲事をしのんで、かな空氣があたり一面に漂う

式典はギルロイ枢機卿を任命する旨を書いた法王の親書を朗読する特使任命式に始まり、ここに初めてギルロイ卿が正式に法王特使の資格を備えてメッセージを朗読、山口司教の歓迎の辞について聖体降福式に移り、聖体を祭壇に顯示、聖歌と祈りの中に会衆の上に十字架を記して祝福、一時間余で厳かな第一日の宗教行事の幕を閉じた

なおこの間三十日午前九時半から行われる平戸のサヴィエル記念碑除幕式に参列のため米人カシミー神父など十三名の巡礼団は、式の途中から午後四時四十分長崎駅発平戸へ向い、残りの巡礼団は式後五時すぎ観光バスをつらねて雲仙を訪れ、同夜は九州ホテルに一泊した

#### 天 1949/5/30: 陛下、坑内服で 三井炭鉱を御観察

[大牟田発] 天皇陛下は二十九日朝九時五十分から約一時間四十分にわたって三井三池炭鉱三田坑を観察された

陛下は坑内服、キャップ・ランプ、ゲートル姿でピッケルを持たれ、田島宮内府長官、入江侍従らと人事にお乗りになり、山川社長、占部福岡石炭局長の案内で地下千五百尺の切羽までありられ、炭鉱人を激励されたついで大牟田市の戦災復興状況と三井三池染料を御観察のち午後二時大牟田駅発、同三時七分熊本着、国立病院、熊本城、物産陳列所を経て知事公舎にお入りになった

#### 1949/5/31: “最後の救い我等に” 病床の永井博士に聖腕の祝福

[長崎発] 聖フランシスコ・サヴィエルの右腕を長崎の地に迎えた同市浦上天主堂では三十日朝六時からの礼拝に引き続き特に病床の信者永井隆博士など二十五名を招き聖腕の祝福を授けて特別ミサを行つた

歩けない永井博士のために山口司教が聖腕をタンカの側に進めて祝福をたれ、御堂内にはすすり泣きの声がもれていたミサの終った後同博士は公民館で法王特使ギルロイ枢機卿と面会したが、博士の手をとったギルロイ師は「戦争中法王はじめ皆の信者達が苦しみに耐えて來て働いている、如何に迫害されても神の救いの下に最後の勝利はわれわれのものです」と激励した

永井博士は公民館で語る

「聖サヴィエルの遺志を仕事の上に活かして行きたい、自分の仕事も右腕だけでしか出来ないので思わず自分の右手を見比べて見ました」

#### 1949/5/31:巡礼団、鹿児島へ

【長崎発】サヴィエル巡礼団一行は三十日午後四時から長崎市諏訪丸馬場で開かれた地元主催のティー・パーティーに出席、同六時十五分長崎駅発で鹿児島に向った

#### 1949/5/31:サヴィエル記念碑きのう除幕式

【佐世保発】サヴィエル師ゆかりの地長崎県平戸町では四百年祭を機会に同町崎戸公園に建てたサヴィエル記念碑除幕式を三十日朝挙行した

ローマ使節団ギルロイ師代理ゴンザレス神父ほか十四名の外人巡礼団も船で平戸海峡を渡って参列した

#### 1949/5/31:著書の全印税提供 “長崎文化都市”へ博士の悲願

天皇のご激励につづいてサヴィエル四百年祭の祝福を受け、原子病の永井隆博士は感激のうちに鬱病生活をつづけているが、このほど同博士から東京の式場隆三郎医博に寄せた手紙によって、博士の「長崎の鐘」「この子を残して」などの著書四冊の全印税と自作シール(手紙封かん紙)を今後「長崎国際文化都市」建設のために投じたいとの悲願が明かされ、関係者を感動させている

原爆長崎を世界平和のための国際文化都市に再生させるという計画は、目下平山長崎博物館長らの国際平和教会を中心に進められているが、永井博士の構想は原爆中心地に診療所や託児所、公会堂、博物館などを含む平和文化会館を建設したい意向で、本年度ベスト・セラーズとなった諸著作の印税のほか、アメリカの「少年の町」や結核予防協会が資金募集のため活用しているシールを作り出ことし、博士自ら「平和の母」はじめ五種類の図案を考案、来月末までに発売準備を終る予定になっている

式場隆三郎医博談 国会の考查特別委員会では永井さんを平和運動に 力した人として表彰しようという話だ、  
永井さんのいう長崎の「平和ののろし」を世界の人々の心にはっきり印象づけるよう努力したい

#### 1949/6/1:社説 サヴィエル渡来四百年

聖フランシスコ・サヴィエル渡来四百年を記念する国際祭典は、長崎に続いて鹿児島、大分、山口などサヴィエルが伝道したゆかりの地や西宮、東京でつづぎに催される。

四百年前の日本は足利氏の末期に当り、戦乱が打ち続いている、幕府はあってもないと同様で、人民は生活に苦しみ、僧の多くは墮落して仏教の権威は地に落ちるという有様で、はなはだ惨めな時代であった。敗戦後の今日において、国際巡礼団を迎える、サヴィエルの渡来を記念するのは、四百年前と思い合わせて感慨は様々に深い。

日本が西欧と経済交易の途を開いたのは、一五四三年ポルトガルの商船が種子島に流れ着いてからであるが、サヴィエルの渡来はその六年後で、これが新しい宗教と学問の伝えられた最初である。サヴィエルの伝えたのは最新の武器である鉄砲ではなくて、平和の文化であった。彼は偶然に流れついたのではなく、日本への希望と情熱を包んだ慎重な計画のうえの渡来であった。

サヴィエルが日本に伝えたものは、日本人に教えたものは、大きく、かつ深いであろう。なかんづく、真理に対する人間の態度、それにもとづく新しい生活の態度を教えた点では、深刻なものがあったといえよう。サヴィエルが日本のこと報告した手紙の中に「日本人は才知と勇気に富んで、心広く、学を好む故、心理を進ぜしめるに十分望みがある」と書き、また日本人はキリスト教の真理を一たび理解し承認すれば財産生命すら放棄するにや

ぶさかではいといっているのは、その教えが日本人に浸透したことを語るものであろうし、その後の日本人が世界にもまれな殉教史をつづったのも、彼がまいたその種子の生長であろう。もっとも当時の日本人が彼の伝道を受け入れることができたのは、恐らく宗教として見事に出来上がっていた鎌倉仏教が、仏教その後の衰微にもかかわらず、一般に浸み渡っていて、新しい世界宗教を理解する素地が備わっていたからであろうが、それにしても、新しい宗教的精神はその素地の上に力強く実っている。

いま日本の精神史におけるサヴィエルの足跡を顧ることは、同時に日本の近代文化そのものもつ問題をも反省せしめるものがある。

サヴィエル渡来の当時、そのもたらしたキリスト教が日本文化として完全に融合した形をとらなかったのは当然であるにしても、こうした文化の不統一は、実は今日に至るまで日本文化的一大特徴をなしている。西洋においても、サヴィエル以後の近代文化は統一を欠く宿命を負うてはいるが、それにしても、キリスト教によって一たび統一された中世文化の名残は、いまも西洋精神の中に跡付けられる。日本文化の不統一はそれとは全く違っている。サヴィエル伝道中の話であるが、当時全く中国文化の影響下にあった日本人は、幾度も彼に質問を発した、なぜ中国人はキリスト教を知らないのかと問い合わせ、中国人が問題にもしないキリスト教などは取るに足らぬと考えていたことが伝えられている。こういった文化の混乱は、形を変えて、今日においても日本人の悩みとなっている。

とくに明治以後の、日本における文化の受入方があまりに性急で、無秩序であったことが、統一を失って混乱を來し、また外国の出来上がった結果のみを探り入れるために、自ら考え出すことを怠ける習性をつけ、理解の浅いことから、ときに西洋崇拜になったり、ときに西洋輕蔑になったりした。西洋文化を受入れるやり方に統一を欠いたことが、現在日本文化の大きい弱点であり、今日の惨めさを招いた原因ともなっている。

それは何故であろうか。それをわれわれはよく考えてみねばならぬ。サヴィエルが当時さとくも指摘したように、日本人はたしかに知識欲が盛んで、真理に対しては誠心誠意をもって従う。しかし、それは既成の真理に対し、与えられた真理に対してであって、与えられたいいろいろの事実や学説や教理の中から自ら真理をつかみ出し、自ら真理を作り出そうとする努力は大いに欠けている。いいかえると、自ら考えることをしないという平凡にして重大な欠陥が、今日の日本文化の混乱と不統一を生んでいるのである。宗教についても、こういった努力がなければ、その現代的な意義をつかみ、これをわれわれの文化の中に無理なく融合せしめることは困難である。

世界の文化史、精神史へと日本を最初に導き入れた聖サヴィエルを記念するに当って、これを文化の受入れ方について、また宗教の新しい任務について、われわれ地震を反省する機会としたいと思う。

#### 1949/6/1:ローマ法王からメッセージ

[ヴァチカン特電三十日発 = AFP 特約] ローマ法王ピオ十二世は三十日目下サヴィエル渡来四百年祭式典に法王使節として来朝中のノーマン・ギルロイ枢機卿あて次のようなメッセージを寄せた

日本国民にとってサヴィエルとその後継者たちが歩んできた道を進むことほど有益なことはないであろう、これまでいろいろな理由から日本ではカトリック教が普及しなかったが、今後は急速にひろまるであろう

#### 1949/6/1:鹿児島でサヴィエル祭

[鹿児島発] 鹿児島のサヴィエル四百年記念祭典は三十一日朝八時から市内山下町の記念教会堂で行われギルロイ枢機卿はじめ外国巡礼団一行六十二名が“奇跡の右腕”を奉持して参列した

式後一行は本社提唱で出来たサヴィエル胸像のある記念公園

天 1949/6/2:陛下、鹿児島へ

【鹿児島発】天皇陛下は一日朝八代市の農友会実習所、水俣市の日窒水俣工場などを御視察ののち、午後六時十五分鹿児島市に御着きになった二日は鹿児島で休養される

#### 1949/6/2:福岡で式典 サヴィエル祭

【福岡発】サヴィエル四百年祭は鹿児島(三十一日)大分(一日)を経て福岡に移り、ギルロイ枢機卿はじめ七十二名の巡礼団は一日夕刻博多着、平和台で盛大な式典が行われ、一行は二日午前零時十分博多発、山口に向った。

#### 1949/6/3:廣島の聖堂 いよいよ着工

廣島市では三日サヴィエル巡礼団を迎えて平和記念特別都市建設への第一歩をふみ出しが、かねて同市幟町一四八廣島カトリック教会堂跡に建築準備中の平和記念カトリック聖堂がこの機に着工されることになった

聖堂の設計図は昨年夏本社で懸賞募集し、賞金三十万円の当選作品に対して建築家村野藤吾氏が早大建築科の今井教授、イエズス会設計技師グロッパ神父、同会日本管区長ラッサー神父(廣島在住)の助言によつて厳密な検討を加え、聖塔の高さ百四十尺という日本に類をみない壮大なものに改修した

工費一億数千万円の大部分は、各国のカトリック信徒から集められたが、さらに上智大学のピッター神父はラッサー神父とともに今後日本各方面の寄附を求め、聖堂のほかに聖サヴィエル記念講堂を建てる運動をはじめている

#### 天 1949/6/4:天皇、鹿屋へ

【鹿児島発】天皇陛下は三日、鹿児島市鴨池グラウンドで県民十五万人の歓迎を受けられたのち午後鹿屋市にお着き、市内平田邸に御一泊になった四日は宮崎県にお入りになる

#### 天 1949/6/4:天皇、宮崎県へ

【宮崎発】天皇陛下は四日午前八時四十分、志布志駅御着、志布志港、野井倉開墾地、片倉製糸所内での優良牛馬などをごらんになった

午後一時三十分都城御着、片倉工業製糸場、市民奉迎場、森山産業、市民生館、日本繊維工業を視察、同四時四十五分都城発、同五時五十分宮崎駅御着、宿舎紫明館にお入りになった、今五日は休養される

#### 1949/6/6:国民宗教大会 今秋芝公園で開く

今次世界大戦の戦没者を追悼し、世界の永久平和を祈願する「国民宗教大会」が今秋十月六日芝公園のスポーツ・センターで催される

主催は日本宗教連盟と宗教懇話会で読売、毎日、日本放送協会および本社が後援、キリスト教、仏教、神道、回教などが一堂に会し、式後平和宣言を大会の名で決議しローマ法王や国連当局へ送るほか全国各地の寺院、教会、神社でも地方大会を開き一せいに平和の鐘をうち鳴らす

#### 天 1949/6/6:天皇、青島を御視察

【宮崎発】天皇陛下は五日あさ九時ビンロウ樹茂る青島にお渡りになり、さらに同島対岸の遊園地「子供の国」で少年少女らの歓迎をお受けになった

#### 1949/6/7:外苑で最後のミサ 「聖腕」あす東京へ

ギルロイ特使の一行は八日午後一時半東京麹町の聖イグナチオ教会に到着、サヴィエルの右手と十字架は十二日の野外ミサまで同教会に安置される

ギルロイ特使は九日 マ元帥招待の午さん会に出席十二日朝九時半から外苑競技場で開かれるミサを最後に日本を出発する

#### 天 1949/6/8:天皇,別府でお泊り

【別府発】天皇陛下は七日宮崎県の旭化成延岡工場、門川港、細島港を御視察のち大分県に入られ日鉱佐賀関製錬所を経て午後五時四十分別府駅にお着、宿舎日名子旅館に入られた

#### 1949/6/9:奇跡の右腕 きのう再び入京 “聖歌”夜空にひびく 聖イグナチオ教会に安置

九州、関西各地でのサヴィエル記念祭行事に参加したローマ法王特使ギルロイ枢機卿ら使節、巡礼団一行七十余名は八日夜八時四十分奇跡の右腕と十字架を奉持、横浜から自動車で上京、麹町の聖イグナチオ教会に入った

この夜教会広場に集った信徒学生、参観者の数は約二千、タイムズとローソクの炎が夜空をこがし、聖歌が高く、低く流れる、新装の会堂は照明塔に照され、法王旗が塔にひるがえる、土井大司教以下で迎える中を使節は会堂に入り

莊厳な安置式が行われ、右腕と十字架は祭壇に安置された

なお右腕は十二日神宮外苑の盛儀ミサののち札幌まで東北路を管区長が奉持して回る予定

#### 1949/6/9:横浜でもミサ

【横浜発】東上中のギルロイ枢機卿ら国際巡礼団一行は沼津から特別バスに乗りかえて八日の夕四時過ぎ横浜に立寄り山手天主公教教会で脇田司教司祭の莊厳ミサを行った

#### 1949/6/9:コータス女史帰國

四十年の月日を日本伝道にささげた元東洋英和高女教師S・R・コータス女史(六三)が近く故国カナダに帰ることになり、九日朝皇后陛下はとくに女史をお招きになり、その労をねぎらわれる、コータスさんは語る

四十年間私が日本で働くために姉が一家の面倒をみてくれたのですが、最近病気がちというので、一目会うために帰ります

#### 1949/6/9:日本から二代表 YMCA 指導者会議へ

【大阪発】日本 YMCA 同盟は八月十九日から十一日間バンコックで開かれる東南アジア YMCA 指導者会議に東京 YMCA 主事兼松正、大阪 YMCA ワイズメンスクラブ役員尾形茂之の両氏を日本代表として派遣することに内定した

#### 広 1949/6/9:サヴィエル来日四百年記念行事

講演と音楽の会

第一部 講演

あいさつ = 田中耕太郎氏 祝辞柿崎正治(代読) 巡礼団あいさつ 音楽(独唱)中山悌一氏(琴)宮城道雄氏 イエズス会の日本布教と西洋文化の移入村上直次郎氏 聖サヴィエル来日の現代的意義比屋根安定氏(入場無料)

## 第二部 音楽の会

=ペートーヴェン交響曲第九番 四家文子, 三宅春恵, 木下保, 中山悌一の諸氏

会員券一六〇円, 二一〇円は日響案内所, プレイガイド

十一日(土)十二時半 五時日比谷公会堂

主催 朝日新聞社 後援 東京都

## カトリック美術展

堂本印象, 小林古径画伯らの宗教画ほか百点を展示

十日 十九日

日本橋三越

主催 カトリック美術協会

朝日新聞社

## 1949/6/10: サヴィエル来日四百年記念行事 巡礼団招待会

歓迎プロ あいさつ = 東京都知事安井誠一郎氏 日本舞踊 = 宝響アンサンブル西崎緑, 若葉会ほか バレエ = 貝谷バレエ団, 宝響, 指揮上田仁氏 オペラ = 「お蝶婦人」藤原歌劇団, 宝響, 指揮 M・グリレット(招待者に限る)

十二日午後七時帝劇

東京都

朝日新聞

## 1949/6/10: 巡礼団 歓迎平和祭

あいさつ = 本社代表 あいさつ = 各国代表

第一部 合唱 関東合唱団 武蔵野音楽大学

第二部 アイス・スケート ペアー西川フリッチ・片山敏一氏, フリー塩田直重, 原田静夫, 加藤礼子氏

第三部 合唱, 管弦楽 東京音楽学校(入場無料, 会場整理のため入場券は十日午前十時から本社受付で差上げます)

十三日(月)午後六時メモリアル・ホール(旧国技館)

主催 朝日新聞社

後援 東京都

なお本社は巡礼団の記録映画「サヴィエルの回想」(理研映画株式会社撮影)を作成して広く内外に紹介する

## 天 1949/6/11: 陛下九州御旅行終る

[小倉発] 九州巡幸最終日の十日, 天皇陛下は豊後森町から新耶馬渓を経て午後六時二十分小倉駅御着, 長期巡幸の御日程を無事終えられた

十一日は午前八時三十分小倉駅発列車で帰京の途につかれる

## 1949/6/12: きょう最後の盛儀 外苑でサヴィエル祭

二週間にわたったサヴィエル四百年祭の最後を飾る明治神宮外苑の盛儀ミサは今十二日朝九時半ギルロイ枢機卿司式のもとに行われる会場の陸上競技場には大きなアーチ二つと純白の祭壇が設けられ, ここでヴァ

チカンの盛儀さながら、古式にのっとった一大野外ミサが、一万から四万と予想される信徒、参觀者の前にくりひろげられる、式典は十一時から第二部に移り、土井大司教の歓迎の辞、吉田外相の祝辞、ギルロイ枢機卿のあいさつ、信徒の聖歌合唱などがあり、ついで同競技場で茶会が開かれる  
十二日雨天の場合は、朝九時半日比谷公会堂、聖イグナチオ教会、神田教会、チャペル・センターなどで、巡礼団中の司教によってミサが行われ、二部の祝典行事は中止になる  
なおスペイン使節団、巡礼団は同夜十一時パン・アメリカン機で羽田発マニラに向かい、同地に数日間滞在のうえ帰国する

#### 1949/6/12:きのう園遊会

ギルロイ枢機卿をはじめスペイン巡礼団の一一行は、十一日午後三時文京区上富士前町六義園の安井東京都知事ならびに朝日新聞社主催歓迎園遊会に臨み、東京室内楽団の音楽、花柳壽輔門下の日本舞踊、樂焼に興じた

#### 1949/6/12:巡礼団歓迎 平和祭

十三日午後六時半両国メモリアル・ホール(旧国技館)入場無料(ただし朝日新聞社で前渡しの整理券持參者に限る)各國代表あいさつほか【出演】西川フリッヂ、片山敏一、塩田直重、原田静夫、加藤礼子氏らのアイス・スケート、関東合唱団、武蔵野音楽大学、上野音楽学校の合唱と管弦楽

#### 1949/6/12:キリスト文化史展

十九日(日)まで、会場東横デパート(入場無料)

主催 カトリック文化協会

朝日新聞社

#### 天 1949/6/12:陛下きょう御帰京

【小倉発】九州御旅行を無事に終えられた天皇陛下は、十日八幡市高見クラブで九州最後の夜をお過ごしになり、十一日午前八時三十四分小倉発列車で帰京の途につかれた、五月十八日九州に入られてから二十五日間、長途の旅行にもかかわらず元気の御様子である

十一日午後九時五分京都で下車大宮御所に一泊ののち十二日午前九時二十分京都発、午後七時十五分御帰京の予定である

#### 1949/6/13:十字架胸に信徒ら三万 外苑で最後のミサ サヴィエル記念祭終る

梅雨がはれ、ストもやんだ十二日朝、初夏の風がさわやかに流れる神宮外苑で聖サヴィエル四百年記念祭の最後を飾る盛儀ミサが、ギルロイ特使司祭の下に厳かに行われた、会衆約三万、胸に十字架を、頭に白布をまとった信徒を中心にスタンドと芝生席を埋める、貴賓席には高松宮殿下夫妻、招待席にはフランス、オランダ、ポルトガル各使節団代表、進駐軍家族らがならび、スペイン婦人巡礼団が花やかな色どりを添え、スタンド正面には純白の祭壇が設けられ、十字架を中心にショロの若木と草花が飾られる、あでやかな紅白の祭服、アーチと十字架の長旗、聖歌が静かに青草の上を流れてゆく

九時半美しく着飾った八十名の少年少女の侍者に護られた「奇跡の右腕」と十字架が祭壇に安置され、聖歌『大きいなる司祭を見よ』の合唱のうちにギルロイ特使が聖職を従えて入場「ベネディクト」のコーラス、祈りの中に盛儀ミサがはじめられた、高らかに入祭文がラテン語で歌われ、キリエ、グロリアと主のあわれみを願い、主をたたえ

る歌声が祭壇横の聖歌隊席からわき上がる

聖書の朗読があり、ついでギルロイ特使が聖サヴィエルの業績をたたえ、神はすべてのものを愛し給うと説教を行えば、全会衆起立して「われ信す」と信仰告白の歌を唱える

神への奉獻、アヴェマリア……聖歌のうちにミサはいよいよ聖体拝領式に移り、芝生に降り立った数千の信徒の口に、聖なるパンが各司教の手で入れられる、感激にひざまずく信徒の上に、ギルロイ特使の祝福の声が注ぎかかる

これで第一部のミサを終わり、十一時四十分聖サヴィエルの歌「東の海に」の合唱で第二部の祝典に移った、土井大司教が立って歓迎の辞を述べ、サヴィエルによって与えられた平和と真理を愛する国民として、世界の期待に添いたいと決意を語れば、林副総理が吉田首相の祝辞を代読

かくて午後零時十五分、祈りの鐘ひびくうちに二週間にわたった国際的記念祭は滞りなく終わりを告げた

#### 1949/6/13:巡礼団、帰国の途へ

式典を終えたギルロイ枢機卿以下の中間使節、巡礼団一行は、十二日午後零時半神宮外苑競技場における土井大司教招待の茶会に臨んだのち、ギルロイ枢機卿は夜八時三十五分東京駅発列車で岩国に向い、スペイン巡礼団一行は十一時羽田発のパン・アメリカン機でマニラ経由帰国した

#### 天 1949/6/13:天皇御帰京 九州御旅行から

九州御旅行を終えて京都大宮御所に御一泊になった天皇陛下は、十二日午前九時二十分京都駅を御出発、午後七時十五分東京駅着、皇居へお帰りになった

#### 1949/6/14:水上を流れる聖歌

聖サヴィエル巡礼団への最後のはなむけの本社主催“歓迎平和祭”は、十三日午後七時から両国メモリアル・ホールで開かれた、各国代表のあいさつ、関東合唱連盟など八百名の聖歌合唱があり、片山君、西川夫人のペア・スケーティングが公開された

#### 天 1949/6/14:お召列車の妨害はデマ

天皇陛下の御帰路、各所で石を並べてお召列車の妨害をはかったとのウワサにつき、國 本部は全面的に否定している

#### 1949/6/15:ヘボン博士をしのんで 今秋・東京で記念大会

ヘボン式ローマ字つづりの祖として名高いJ·C·ヘボン博士が来日して今年は九十年目、わが国プロテスタント(新教)を解放した同博士を記念する行事計画が日本キリスト教団、明治学院などで進められている

ヘボン博士は一八五九年(安政六年)十月十八日アメリカ長老教会の宣教師として横浜に上陸、布教につとめるかたわら、文久二年から今の横浜市山下町三九谷戸橋際に英語塾を開いた、のちに東京築地に英和学校を創立、これは今の明治学院の前身である、この間横浜の外国居留地設計や気象観測に明治政府と協力、聖書の翻訳や和英辞典「和英語林集成」の編集に当たるなど文明開化に した

記念事業として日本キリスト教団では十月四、五、六日東京で記念大会、全国教師大会や記念出版、明治学院と横浜市は共同で上陸記念日までに谷戸橋際のヘボン塾跡に記念碑を建てる

#### 1949/6/25:日本のキリスト教化 マ元帥が希望

【ロング・ビーチ(カリフォルニア州)二十三日発 AP=共同】ロング・ビーチで開かれた南部カリフォルニア、アリゾナ両州メソディスト教会会議で廿三日、ロサンゼルス教会のマッキベン博士は最近マッカーサー元帥と会見したい、同元帥が日本に若い宣教師が来ることの急務を説いて、一千名の宣教師が日本に来れば日本はキリスト教化できると語ったと報告した

#### 1949/8/11:宗教映画の会 きょう本社講堂で

サヴィエル四百年祭に来日した使節団一行の記録映画『サヴィエル回想』が本社企画、理研映画製作で完成したので、SEF 提供のフランス映画『聖パンサン』(特にオリジナル版)とともに十一日午後一時半から本社講堂で無料宗教映画の会を開き、各国使節団などを招待する(一般は先着百名に限る)

#### 1949/9/12:滞日布教六十年 近く祝福うけるメイラン師

日本では珍しいカトリックのダイヤモンド祝祭(司祭就任六十年)の大ミサが廿日四谷の聖イグナチオ教会で行われる、祝福を受けるのは北多摩郡清瀬村の“ベトレヘムの園”的主任司祭、八拾四翁の仏人ブラシ・ド・メイラン師である、この祝祭は司祭の就任を祝う行事で、結婚記念と同じに二十五年が銀祝祭、五十年が金祝祭、七十周年がプラチナ祝祭、このプラチナ祝祭はわが国では前例がなくダイヤモンド祝祭はこんどで三度目である  
師はフランスのロット県ケザック村に生れ、パリのミッション・エトランゼール(外国宣教会)を卒業、司祭になつた翌年の明治二十三年に来日した、同二十五年に八王子カトリック教会に籍を置き、以来四十年にわたって東京、神奈川、埼玉を中心に布教、昭和十一年現在の“ベトレヘムの園”主任司祭に転じ、ここで師は収容されている二百数十名の結核患者や浮浪児に福音を授ける使命にすべてを捧げて來た

こうして神と共に生き日本人と共に歩んだ六十年、今では師の洗礼を受けた日本人信者は五千七百人にのぼり、洗足教会の塚本神父をはじめ四人の神父を生んでいる、十一日“ベタニアの家”的一室に訪うと、どう椅子の上におき直って『むかし山風という相撲上りの男が“神様のおそばに行くべえ”と改宗しましたよ』と方言まで混ざる達者な日本語で

わたしにはフランスも日本も区別はない、一人でも神の祝福を受ける人がふえることが何よりの喜びだ、日本流にいえば日本に骨を埋めるつもりだ

と身をもって切り開いた日本布教師を懐古する顔には、伝道に捧げて終身独身を通し、今では故国の便りも絶えた孤独の寂しさなどみじんもみられなかった

#### 1949/9/18:十月六日(木)午前十時開会 芝大門 スポーツ・センター

##### 全世界戦没者追悼平和祈願 国民宗教大会

第二次大戦が終って世界の人類が何よりも希求するものは世界の平和であるが、また同時に“第三次世界戦争”への恐怖におののかざるを得ないのも人類の偽らない現実である、仏教であると神道であるとキリスト教であると問わず、世界の平和を願うことは共通な理想である、この宗教の根本精神の上に立ち、われわれは各宗教一体となって「国民宗教大会」を開き、人類永遠の平和を祈念し、あわせて今次大戦に殉じた人々に心からなる弔意をささげることにした、振ってご参列を願う

なお大会当日午前十時を期して全国の神社、仏閣、教会では一せいに鐘、太鼓をならす、全国民は同時刻に各所在でお祈りを捧げて頂きたい

主催 日本宗教連盟 宗教懇話会

後援 読売新聞 毎日新聞 朝日新聞 日本放送協会

### 1949/9/19: ヴァチカンに「聖年」の盛儀

来年(一九五〇年)は世界三億五千万のカトリック信者にとって「聖年」にあたる、聖年はキリスト生誕以来二十五年目ごと(昔は五十年目ごとだったのを近世になって改めた)にめぐって来る“よき年”で、法王の「贖宥」=宗教上の処罰者への大赦=が出るほか多彩な行事があり、世界各国からの巡礼団約五百万人がヴァチカンを訪れるはずだが、その正式の招待状が日本カトリック連盟にもこのほど到着、同連盟では使節、巡礼団の構想について明後二十一日から東京で開かれる全国司教会議できめるところになった、殊に明年の聖年式には現在の世界状態についてヴァチカンのハッキリした態度が示されるほか、永年宗教および考古学上の論争になっていた法王庁にある使徒ペテロの遺骨についての重大発表もあるといわれ、早くも欧米各国の注視をあつめている、以下は日本カトリック連盟および外電が伝える歴史的聖年祭の輪郭である

### 1949/9/19: 五百万人の巡礼団 明春・日本からも参加

今年十二月二十五日のクリスマスサン・ピエトロ大寺院に各国の大司教、各国の元首からの使節をはじめ、全世界からの巡礼団などが列席、法王は金の小ヅチで聖年式の門をたたき、ここに「聖年」がはじまる

ヴァチカンに集まる教徒は、この日から翌年四月の復活祭前後にかけて三百万人、同年内には五百万人と予想され、ヴァチカン市民の家の多くは期間中巡礼の宿となる。宗教会議、展覧会、各種総会などがつぎつぎと開かれ、復活祭当日の大ミサが聖年祭典のもっとも花やかな日となる

日本への招待状はピオ十二世の名で寄せられており、特に事情ある者に対しては、経済的な援助も考慮されている、日本カトリック連盟でも聖職者、信者などをできるだけ多く参加させようと望んでおり、使節巡礼団長には西宮市の田口芳五郎司教が候補に上っている

きまれば復活祭の大ミサに間に合うように来年三月ごろ出発となろう

今度の聖年式のトピック「聖ペテロの遺骨問題」については、ニューヨーク・タイムスが一面ぶち抜き(八月十二日号)で報じているほか、欧米の各紙がにぎにぎしくこれを取り上げているが、きくもいま問題の法隆寺秘宝問題と非常によく似ている、各紙の報道を総合すると

ローマ法王庁サン・ピエトロ大寺院の中央祭壇真下二十フィートに埋められていると伝えられるローマ教会の創始者ペテロの遺骨については、その真偽を保証出来がたいといふ一部の論があり、ピオ十二世は敢然とこれに対抗、法王庁考古学研究所にひそかに発掘を命じていたがその研究の結果が聖年に当つて法王から宣言される

といふのである、この問題は、もしこの遺骨が「違う」と判定されれば、ペテロの後継者である法王の法位継承権にも疑義ありとされ、久しい論議がかわされているものである、連盟に達した情報では、法王が発掘を命じた聖ペテロの遺骨のツボとともに埋められていた貨幣は、ペテロがローマで死んだ年代と一致し、この事実に新資料を加えて「歴史は証明された」という重大発表が法王によって行なわれるであろうといふ

### 1949/9/20: 全国に響く「平和の鐘」 国民宗教大会の行事決る

日本宗教連盟、宗教懇話会共催、毎日、読売、朝日三新聞社、日本放送協会後援で十月六日東京芝公園に開かれる「国民宗教大会」を前に十九日午前十一時築地本願寺で神社本庁統理鷹司信輔、神道修成派管長新田邦達、日本キリスト教連合会今泉真幸、曹洞宗々務総長本多喜禅、浅草寺貫主大森亮順、イスラム教会僧正ムアンマットアミン・イスラミー氏ら各宗派代表と大会準備委員長安藤正純氏らが打合せを行った結果、大会行事を決定、発表した

当日午前十時全国の寺院教会で一せいに平和の鐘または太鼓を鳴らし、祈りをささげて平和を念ずるが、この日東京大会では会場中央に設けられた五羽の白ハトを配した大地球儀に対して各教派の聖職者代表百五

名が花束とサカキをささげて礼拝、二万五千名の会衆が祈り、安藤大会委員長の平和宣言、マックアーサー元帥をはじめ各国元首のメッセージ朗読で終る、大会記念行事として平和塔と宗教平和会館建設が発表される、午後は平和講演、宗教音楽の演奏、同映画の上映があり、東京大会には全国各府県から遺族代表二名ずつが招待される

#### 1949/10/6:きょう・国民宗教大会

全世界戦没者追悼平和祈願国民宗教大会を今六日午前十時芝大門スポーツ・センターで行う(参列自由)また午前十時に全国の神社、仏閣、教会では一せいに鐘、太鼓を鳴らす、全国民は同時に各所在で祈りをささげて頂きたい

主催 日本宗教連盟、宗教懇話会

後援 読売新聞社、毎日新聞社、朝日新聞社、日本放送協会

#### 1949/10/7:平和の祈り 国民宗教大会

日本宗教連盟、宗教懇話会主催、読売、毎日、朝日三社、日本放送協会後援の世界戦々死者追悼、平和祈願の国民宗教大会は六日午前十時から東京芝公園外のスポーツ・センターで開かれたが、全国の神社、仏寺、教会でも同時に祈りをささげた

東京の中央大会場には全国各府県の遺族代表、宗教団体、学生一般など一万余名が雨の中を参集、三方の入口から教派神道、仏教、キリスト教、神社、イスラム教の五宗教代表百五名が入場祈念追悼を行い、五聖職代表が平和の象徴ハトを配した大地球儀に花束やサカキをささげた

#### 1949/10/7:講演と音楽の会 プロテスタント渡来九十年記念

第一部講演 回顧と展望賀川豊彦 民主主義の精神的基礎 エミール・ブルンナー

第二部音楽 天地創造(ハイドン作)武蔵野音楽大学合唱団、同大学管弦楽団

八日午後一時

日比谷公会堂(入場無料)

主催 日本キリスト教団 朝日新聞社

#### 1949/10/17:ありがたい“この世” ニヨキニヨキと三百余派 “戦後は宗教”不況知らず トップは觀音教

近ごろ新興宗教の新興宗教の繁栄ぶりはすさまじい、この金づまりの不景気をよそに、新興宗教だけはどこもノミ、カンナの音も景気よく増築改築騒ぎだし、また一般大衆も「ヤレ病気だ、事業不振だ、身上相談だ」と、吉凶禍福よろず相談をここに持ち込み、そのあげくは多額の金品を奉る、そこでかくは教運陥 となった というところらしいが、一方戦後の御時世で有力檀家は没落し四苦八苦の仏教など既成宗教陣は、これに 食されて顔色なしの形であるウケに入っている新興宗教の生態を探ってみよう

文部省宗務課の調では、戦前四十三派にすぎなかつた宗教団体は現在三百四十余、戦後届出たものだけで約三百というにぎわいで、なお続々と誕生しつつあるといふ、戦後宗教の布教所、教会は全国で三万ヶ所、信徒総数は一千二百万を越えている

これらの新興宗教を教派の系統によって大別すると、神仏混合系と神道系とが相半ばしているが、いずれも教理が簡単、平易であり、教祖はミコのような靈能技術者が大部分だ、つまりその教えるところは(一)未来にふれず、現世の解決を主眼とし(二)倫と俗との区別をとやかくいわぬいわゆる在家宗教(シロウト宗教)が多く(三)現世の利益をモットーとして貧乏の解決、病気の治療、畠作の增收などに効能あり とするものである

い今までにニュース面で報道された「踊る宗教」(天照皇大神宮教)観音教、爾光尊(爾宇教)P·L(パーフェクト・リバティ・完全自由の頭文字)のいずれもが踊ったり、歌ったり、指圧療法的な技術を表面にかけたりしているのは、その傾向の端的な代表だ

新興宗教の財力はいずれも巨大だが、その筆頭はなんといっても熱海に本拠をもつ觀音教で、終戦直後誕生当時はわずか数百の信者を有するに過ぎなかったのが、その後四年間に増大して現在届出の信徒数三十万(実際は十七、八万と文部省ではみている)熱海付近には旧藤山霜太氏邸、山下亀三郎氏邸、東久爾大妃別邸、小倉石油社長邸などをそれぞれ数百万円で買収、それでも足りず、現在熱海市背後の山林二万余坪に高さ五十メートルにおよぶ石ガキを築いたお城のような大教会堂の建築に着手、完成の暁は“地上樂園”にするという、この建築費だけでも恐らく数億と地元ではみており、財産総額は熱海税務署でもちょっと見当がつかぬが、億台は確実だといっている

熱海警察の調では、觀音教のこの膨大な資産は、毎月会員から百円の会費と病気治療、開運などの祈願でやって来る信者からの三百円から数千円の献納によるものだといわれる、宗教団体そのものには課税できぬので、岡田教祖個人の所得として判定されたものだけで昨年は一千五十二万円だったがこれはもちろん教団収入のほんの一部でしかあるまいと税務署ではいっている

また信徒十万といわれる「踊る宗教」(山口県)も、教理上献金はあまりやかましいわないので、資産三百万円と同地の税務署ではみているから、寄付金奨励をやる他の教団では、数千万円の資産はザラだという

#### 1949/10/17: 幼い国際親善 きのう“日曜学校日”

「世界日曜学校日」の国際生徒大会というのが十六日午後二時から皇居前広場で行われ、都内三百の日本側日曜学校生徒にアメリカ、オーストラリア、中国、フィリピンなど各国の在日生徒約千名が集り、幼い国際親善風景をえがいた

十五日にアメリカから来たばかりのGHQ付牧師ベネット大佐や日本キリスト教教育協議会小崎理事長のあいさつ、各国人生のかわいい賛美歌合唱、大森めぐみ教会の劇『バベルの塔』などがあり、ひとときを世界平和のための祈りに過した

#### 1949/10/23: ヴァチカンの新語

ヴァチカンの公用語となっているラテン語は、原子と科学の時代を迎え、多大な数の新語を追加しなければならなくなった。戦車、原子爆弾、無電、共産党員などの新語ができた。(AFP)

#### 1949/11/20: 晴着もとりどりに きのう・世界家族の会

世界中のYMCAとYWCAとが七十年このたび行って来た「世界新願と国際親善週間」最終日の十九日、東京神田のYWCAで午後一時から、東京在住十八カ国の母と子が集って「世界家族の会」を催した、それぞれお国の晴着を着飾ったお嬢さん方が、集ってくるなかに、高松宮妃殿下、東久邇成子夫人の顔も見え、みんなが持ち寄った自國のお茶とお菓子を分け合ってお茶の会があり、お国自慢の歌と踊りがなごやかな空気をかもし出した、最後は、世界のために祈るキャンドル・サービスで、中央の大きなロウソクから舞台にならんだ十八カ国代表の手にともしびが移され、国籍も人種も超越して六百の会衆がひとしく世界の平和を祈った

#### 1949/11/24: 「聖年」迫るローマの表情 五百万の巡礼 大車輪でホテル新築

今年のクリスマスの前日十二月二十四日、ヴァチカンのサン・ピエトロ大寺院をはじめローマ四大聖堂にある「ポルタ・サンタ(祝門)」を開く莊厳な儀式によって、カトリック教徒の二十五年に一度の祝典「聖年」が始まる

が、その前奏曲でいまローマは非常な活気を呈している」と日本カトリック教区連盟、東京メリノール会などへ入ったヴァチカン便りは伝えている

大昔はあらゆる負債は解放され奴隸は自由となり、土地は元の持主に返される慣わしだったといわれるこの「聖年」には、現代では、法王から一切の宗教的罪人に大赦が発せられる、すでにこの「聖年」を目指して、アメリカでは各教区ごとに百にあまるローマ巡礼団が組織され、ブラジル、アルゼンチンなど南米諸国、フィリピン、インドなどから特別仕立の巡礼船が予告されているが、北欧や英国から徒步でローマにたどりつくべくすでに数ヶ月に故国を出発した数百の巡礼団もあるという

ローマの「聖年」準備委員会に宿舎の準備を依頼してきた団体巡礼者の数だけで現在百五十一万、明年中の世界各地からの巡礼者は五百万と予定されている

ローマはこのため目下お化粧にいそがしく、戦争中廃墟と化したチャンピーノ飛行場はいまや欧洲随一の空港へ再生しつつあるし、かつてムソリーニが世界一を目指して計画、戦時中工事が中止されていた巨大なローマ中央駅は、巡礼者を迎える表玄関として完成を急がれている、ローマが当面している一番の困難は宿舎で、いたるところにホテルの新築、増築が行われているが、法王庁では貧しい巡礼者のために二万の寝台と五千のテントを用意している

「聖年」中ローマに集まる人々には全欧洲の著名人のほとんどが予定されているが、アイルランドからは全閣僚が参集することになっている、またカトリック教徒だけでなく、宗教を異にするエジプト、インドからもこれを機会に使節がやって来るという

来月二十四日から来年のクリスマスまでの一年間、法王が自ら司祭する莊厳ミサ、聖体行列、列聖式、列福式などカトリック教会の古式に則る多くの式典が相ついで行われるほか、哲学、社会学、その他の国際学術会議が開催され、またローマの劇場という劇場、音楽会場は、すべて「聖年」にちなんだ催し物が計画されている、中でも注目すべき世界宗教芸術展覧会で、会場はサン・ピエトロ広場入口の両側に目下壮大な建物を建設中であり、ここに世界宗教芸術の粹を集める壯觀が予想される、ここには日本室も相当の面積をとって予定され、すでに教区連盟から送った美術品のほか今後も多彩な出品が期待されている

また今度の「聖年」は、対立する唯物主義哲学とカトリシズムとの大きな闘いの一つの頂点ともみられ、法王もこの争いになんらか論及するものとみられている、ローマ最近の電報は、先般新たに誕生した西ドイツ連邦首相、ドイツ・キリスト民主党首アデナウアー氏も来る十二月廿四日の聖門を開く儀式に自らドイツ巡礼団を引導して参列、侵攻する共産主義の大波に対して西歐カトリシズムの勝利を神に祈願すると報ぜられている

#### 1949/12/18: 天声人語

キリストのいないクリスマスが、例によって例のごとく、にぎやかな前景気で近づいてきた。百貨店ではクリスマス・セールを始めるし、酒場ではクリスマス・イーヴの乱チキ騒ぎをやる。駅までが便所の臭いのはほおっておいてクリスマス・ツリーのでかいのを立てる。うわべだけ見ると日本はいつのまにキリスト教国になったかと疑われるくらいだ。キリスト教はたしか盛んになったが、それよりもいっそう、クリスマス狂がお盛んになった。それは宗教上のクリスマスではない。商業政策のクリスマスであり、デカダンのクリスマスである。キリストの欠席クリスマスであり、酒と色と浪費と敗徳の降誕するクリスマス騒ぎであることが多い。クリスマスを騒ぐような連中に聖書の一一行でも読んだ人がどれだけいるだろうか。いかなる本がベスト・セラーズだといっても、バイブルにはかなわない。聖書が何世紀にもわたって世界一のベスト・セラーの地位を占め続けているといえば、クリスマス狂徒は驚くにちがいない。もしもお前がただ一人で絶海の孤島に住まなければならぬとして、たった一冊だけ書物の携行を許されるとすれば、どんな本を選ぶか。西欧人なら言下に一語「バイブル」と答えるだろう。聖書はそれほどあらゆる意味において面白い本だ。クリスマスでピエロ帽をかぶって酒をのみステップをふむ前に、だ

まされたと思って聖書を百ページほど読んでみたまえ。

#### 1949/12/18:法王からXマスの贈り物 衣類・クツなどを困窮者に

ローマ法王ピオ十二世から送られて来たクリスマス救済金一万五千ドルで衣類、せっけん、セーター、クツなどのクリスマス・プレゼントが困窮者に贈られるこのため東京四谷のカトリック教区連盟では人夫十人が一週間ばかりで地方教区へ発送、十七日には在日法王使節M·D·フルステンベルク大司教、土井大司教らも立会って東京教区の各教会へ配分したが衣類一万五千点、セーター九百九十五着、せっけん二十箱、こども用レインコート一千二百八十着、皮クツ五百五十足などでクツは五ドルもする上等品だった

#### 1949/12/19:聖腕ローマへ安着

[ヴァチカン・シティ特電十七日発=AFP特約]聖フランシスコ・サヴィエルの日本渡来四百年祭で本年五月日本に送られた「聖なる右腕」は十七日空路ローマに安着、ジェス寺院に以前のように安置された

#### 1949/12/19:水上のサンタ・クロース

“ドブ川の小船に乗った”東京のサンタ・クロース 橋の上の坊やに「お母ちゃん、ボクンチの方へは川がないから回って来ないかナー」とチョッと心配顔をさせたが、実はこの二人組のサンタ小父さんは銀座のある洋菓子店の宣伝、十八日銀座の人手をギッチャコとこいで追いかけながら“お菓子召しませ”と川筋を流していく

#### 1949/12/26:“聖なる年” ヴァチカンで盛儀

[ヴァチカン・シティ特電二十四日発=AP特約]一九五〇年はカトリック教徒にとって二十五年ごとにめぐってくる「聖なる年」に当るが、二十四日法王ピオ十二世はこの記念すべき年を祝してサン・ピエトロ大聖堂の「聖なるトビラ」を開いた。この日法王は美しい法衣を身にまとい、「聖なるトビラ」の傍に立ち、銀のツチをふり上げて三度トビラの中心にある小さな十字架をたたいた

この荘厳な儀式に参列を許されたのは各国の名士や新聞記者数百名に過ぎなかつたが、サン・ピエトロの広場には約三十万の見物人が密集して「聖なる年」を祝う鐘の音に耳を傾けた

#### 1949/12/26:儀式最中に衝突

[ヴァチカン市二十四日発UP=共同]“聖なる年”的儀式の最中百二十五人の土地を失った農民たちはローマの労働会議所付近で抗議の集会を開こうとして官憲に逮捕され、憤激した労働会議所本部はただちにローマにゼネスト施行を宣言するという騒ぎが起つた、

しかしシェルバ内相は

サンピエトロの儀式が終つたらすぐ農民たちを釈放する

と言明し、共産系の労働総同盟も労働会議所にストはやめた方がいいと勧告したため、スト指令は三十分後に取消された

一方三千人の共産党員はこの日ローマの警察力がサン・ピエトロの儀式警備に動員されているのに乘じ、スペイン大使館に押しかけ、フランコ政府打倒とスペインのアルタホ外相のローマ滞在反対を叫んで館内に押入ろうとしたが、急報により警官隊がかけつけ催涙弾をつかつてようやく解散させた、この騒ぎで共産党側に負傷者十二名を出しほかの十二名が逮捕された

## 付録 神戸新聞掲載のザビエル400年祭関連記事全文、1949年

### 1949/2/18:西宮球場で「大ミサ」ザビエル四百年祭 六月五日に莊厳ミサの祭典

聖フランシスコ・ザビエル四百年記念祭を近くして東京、大阪、長崎三地区委員会ではローマ法王庁特使カーディナル・ジェット師の率いる海外巡礼団の歓迎記念式典の準備に多忙を極めているが、大阪地区委員会では六月四日夕方から三日三晩神戸港に停泊する巡礼団を迎えて五日午前十時から阪急西宮球場で内外人力トリック信者と一般参加数万の莊厳な大ミサを挙行、とくに東宝、日響あるいは関響のいすれかの楽団に交渉、祭典を華麗に飾ることになった

【田口司教談】国際港神戸としては絶好の機会でこのほど岸田知事、小寺市長と歓迎丁合会を開いた、具体的には決定していないが積極的に何か計画を進められると思っている、西宮球場のミサは内外の信者以外に日本の一般にも開放して敗戦の混迷に悩む人々に精神的な再起と生きる力を与えたい、このほか姫路の白鷺城の見学、宝塚での計画など応じきれぬほど沢山持ち込まれている

### 1949/2/23:称う・殉教の小聖人 ザビエル四百年祭にトマス小崎少年の顕彰碑を建立

トマス謹んで書を母上の下に呈す、児は父上とともに天主の恵を受けて不日長崎において死刑に処せらる児は神父および父上と手を携えます天国に昇りて母上の来るのを待つ(中略)人のこの世にあるあたかも夢のごとく命は風の前の燈火に似たり、されば艱難もよく耐え恥辱もよく忍び仮の榮福を願うことなく天国に昇る事を忘れたまうべからず、願くば児が死したるのち二人の弟を異教人の手に養育せしめず母上みづから之を養育したまえ此期におよび児が母上に願う所はこの一事のみ(原文のまま)これはきびしいキリスト迫害にも屈せず、眞の幸福を祈り最後まで信教に生き十字架上の露と消えた長崎廿六聖人の一人、トマス小崎少年(当時十五歳)が西宮から京都の母のもとに送った有名な手紙である

今から三百三十二年前、聖ザビエル渡来後四十八年の慶長二年一月一日(千五百九十七年)豊臣秀吉の命により京都でペドロバブチスタ神父らとともに捕われたトマス小崎少年は大阪地方で捕わられた二十五名とともに寒風にさらされ市街を引回されながらもキリスト教に殉する喜びと榮福にうち震え京都一条の獄舎から大阪、堺を経て一月九日今の甲子園付近に当る枝川にたどりつき、その場で昼食をとり同夜は西宮に泊った、今も内外に語り伝えられ絵本や物語になっているトマス小崎少年の手紙はこの夜囚人宿で書かれたものである、そして同年二月五日長崎立山で処刑され、文献「日本聖人鮮血遺書」によると百六十六回もあった殉教者のうちこれら二十六殉教者のみがとくにローマ法王から聖人の位を贈られている

聖フランシスコ・ザビエル四百年祭の記念行事としてカトリック大阪教区ではこの少年の健気な信仰精神を永久に記念しようとゆかりの地上甲子園の北郷公園付近の老松茂る丘にザビエル四百年祭総務委員加藤省吾氏らの手によって顕彰碑の建立計画が進められている

【大阪教区司教田口芳五郎師談】涙ぐましい少年の行為ことに立派な手紙など今の混迷と汚濁の世界から起上がりうとする若い人々のよい道標となろう、立派な顕彰碑を立て教会堂もぜひ建設したいと計画している

【加藤省吾氏】トマス少年のことは日本人よりも外国人の方がよく知っている、二十年前に平山政十氏が作った二十六聖人の映画は今でも欧州で引張りだこだということだ、カトリック美術連盟の画家に依頼して少年が机に手紙を書いている像を描いてもらい全文を銅版に刻んで夙川教会の正面にもまつりたいと思っている

### 2月27日 六月四日神戸に ザビエル巡礼団の日程

聖ザビエル布教四百年を記念しローマ法王庁からの特使のほか米国から二百名、オーストラリアから百名スペイン、ポルトガル、ベルギー、フランスなどから百廿名の巡礼団が五月ごろ来訪する予定であるが日本カトリック教区連盟事務総長、大阪司教田中芳五郎氏のもとに入った報告によると一行の日程はつきの通りである

五月二十八日長崎上陸、二十九日長崎での祭典に参加、三十日鹿児島訪問、三十一日から六月三日まで山口、広島を訪問、六月四日神戸着、五日西宮球場での大ミサに参列、六日堺、大阪、高槻を訪問、九日横浜着、十日東京着、十二日神宮球場での大ミサに参列する

なお一行のうちにはベルギーの元駐日大使バツソン・ピエール夫妻も含まれている

### 3月13日 “奇跡の右手”日本へ ザビエル四百年祭

【ヴァチカン・シチー十一日発 AP = 共同】聖フランシスコ・ザビエルの鹿児島渡来四百年祭は五月廿四日から日本各地で行われるが、ローマ法王ピオ十二世はこの式典のため全世界のカトリック教徒が『聖なる奇跡』としているザビエルの右手を日本に送ることを許可した、奇跡の右手は現在ローマの消え座時エス教会に安置されている、なお四百年祭には世界各地からカトリック教徒の巡礼団が参加するが、ローマ法王庁ではたぶん十二世代理として法王使節を日本に派遣することとなる

### 3月14日 明石と高山右近「キリスト大名」に異説

地位と名誉を捨てて信仰の自由に生きたキリスト大名高山右近は一般には、大阪高槻城主の時に追放されているが、これに誤りで兵庫県明石城主であった時その栄誉をなげうってキリストの教養に殉じたのだ」と兵庫県宝塚に住むザビエル四百年祭総務委員加藤省吾氏(六二)が次の如く異説を立て話題を投げている

高山右近長房は洗礼名をジュストといい、天正元年(一五七二年)高槻城主となり信長、秀吉に仕え茶道もよく究め文教には力を入れていた、天正十三年十月(一五八四年)高槻城主八万石や 主十二万石に 封、翌年九州征伐に出陣、天承十五年六月秀吉が禁教令を発した時、背教か榮達かの岐路に立ったが、巖然として明石十二万石をすて、キリスト教信奉 天草など諸国を二十五年間流浪し慶長十九年二月ルソン島へ追放され、元和元年一月二十八日死亡したものである、そのころの明石城は現在残っている城ではなく、明石市郊外林崎村船上字古城にあったもので、今では城郭などはないが、水田中に十坪ばかり、高さ一間余の丘があり「船上城跡」の石碑からあるのがそれである

加藤省吾氏談=二年間ではあったが明石城主をしていたことは多くの文献にもある通り真実だ高槻市には高山右近の顕彰碑が建てられ公園まで作られ海外巡礼団も立寄ることになっているが、最後の土地明石が今までかえりみられなかったのは兵庫県としては残念なことだった、姫路市では、各行列など巡礼団歓迎準備を進めているが、明石と高山右近との関係について何かスケジュールを組みたいと考え

### 3月16日 神戸市の歓迎プラン ザビエル巡礼団を迎えて

聖フランシスコ・ザビエル記念巡礼観光視察団一行六百二十名は来る六月五日から三日間にわたって京阪神視察のため神戸港に上陸することになっているが、同団の宗教的儀式は関係宗教団体が主催になって高山右近ゆかりの西宮、高槻、堺の三ヶ所で行うが、神戸市では十五日市首脳会議を開いて歓迎準備打合せを行った結果、今後に市観光課が県とともに毎週火曜日に協議会を開いて歓迎の具体計画を練ることになった、現在阪神には六百二十名を収容するホテルの設備はないので APL の観光船で宿泊する模様、神戸市としては南蛮美術品と集めている池長美術館や元町商店街の遊覧、県市共催の園遊会開催などを計画している

### 3月23日 日本のキリスト教 説教が紋切型 青年の共感を呼ばぬ UP 東京特派員記

(本社特約 UP 通信社ピーター・カリシャ東京特派員記)終戦以来三年半にわたる日本のキリスト教はどのような傾向をとっているのだろうか、以下は在日米人宣教師三氏が記者に対し率直に表明した意見である ダーレイ・ダウンズ(総合教会派、滞日三十余年)ウイリアム・カシュミッター(カトリック派滞日二年)両氏は「われわれの生存中に日本のキリスト教信者がいかにふえても総人口の一割までにはとても達しないであろう、しかしわゆる信者となるものは少しでもキリスト教的な考え方は一般化し、これが日本の民主政治をうまく運営させる根幹の力となる」とみている、これに対しサラム・シヨロツク氏(使徒教会)は

「キリスト教を信仰しなければ日本人の民主化運動はどうてい永続きしない」  
と反対論を唱えている、次に日本の青年が物心両面の悩みの解決策としてキリスト教よりもむしろ共産主義にひかれていたり、三氏とも認めているが、これについてダウンズ氏は  
一、日本人牧師の説教が一般に紋切型で青年の共感を呼ばぬこと  
二、外人宣教師の不足  
三、終戦直後は本国民がキリスト教への関心が圧倒的に強かったにもかかわらず、日本のキリスト教団体は現実の問題にあえて直面する勇気と努力に欠けているためこの機会を取り逃がしたなどの諸点を理由としてあげつぎのように語った

降伏当時のキリスト教熱にもかかわらず現在日本の信者数は卅二万五千足らずで熱も冷めている、しかし私はかえってこれこそ健康的な着実な歩みにかえった証左とみる、たとえ今日天皇が信者になっても国内のキリスト教熱は終戦当時ほど盛んにはなるまい、しかしこれでよいのだ  
ショロツク氏は日本のキリスト教指導者に積極性がかけていることを指摘、少年団などでさえ日本の百五十団体中百は仏教の指導下にあり、キリスト教団体でやっているのは四団体にすぎないと述べて、日本の指導者に国際会議や各会派大会をみせて刺激を与えることが大切だ と強調している

### 3月31日 ザヴィエル観光団の歓迎委員会を設置

六月五日来神予定の聖ザヴィエル祭巡礼観光団受入れのため県では神戸市、神戸商工会議所、神戸海運局、県国土観光連盟、日本交通公社、カトリック大阪司教区、姫路市、明石市など関係団体とともに歓迎委員会を設けることになり、事務所を県貿易課内において共同歓迎会の打合せ、観光箇所の選定、関係地区道路の改修および市街の装飾、交通機関の配備などを行う

### 4月3日 ヴァチカン巡礼団長にギルロイ枢機卿

来る五月廿九日から長崎はじめ各地で開かれる聖ザヴィエル渡日四百年記念祭に約七百名の巡礼団が欧米各地から訪れるが、二日在日ヴァチカン使節団への入電によればノーマン・ギルロイ枢機卿(シドニー駐在大司教)が同巡礼団の教皇特別使節団長に教皇ピウス十二世から任命されたとのことである。ギルロイ卿は昭和二十一年秋にも来訪したことがある

### 4月9日 諸君は世界の将来を担う 世界青少年の父モット博士の来日第一声 クリーヴランド号神戸入港 輝く定礎・起工式モット博士を迎えて YMCA会館と体育館

APL の太平洋航路定期船プレジデント・クリーヴランド号(一,六〇〇〇トン)は八日午前七時朝日に照り映える豪華な姿を神戸港に現し同八時第五突堤 U 岸壁に薄紫色の巨体を横着けた、船客四一二名中八二名は京都を経て陸路横浜へ、一〇七名は六甲、長田神社、ニューオリエンタル・ホテル元町などの市内見物へそれぞれ突堤から観光バスで乗出したが、船客中には今は亡きフランガン神父とともに世界青少年の父としてまた平和運動の使徒として知られたわがYMCA 育ての親、世界キリスト教青年会同盟名誉会長ジョン・R・モット博士が十三年ぶりで日本を訪れた元気な姿が見られた博士は同伴の元京都、東京 YMCA 主事フエルプ氏(七三)とともに北米 YMCA 同盟日本駐在主事ダーギン氏はじめ阪神キリスト教青年会、救世軍関西連隊本部の各代表多数に迎えられ同日生田区中山手通二丁目で行われた神戸 YMCA の会館定礎式ならびに体育館起工式に臨んだが、長身の博士は白髪の温顔に八十五歳とはとても思えぬ若さをたたえながら訪日第一声を記者団につぎの如く語った

一八九六年はじめて日本を訪れてからこれで九回目だが、人を説くには一回だけではダメだと信じている、私は五十三年間に大西洋を百十回、太平洋を十六回往復し八十三の国々を歴訪した、どこの国でもそれぞれの特色があり、振りかえってみると教えることばかりではなく教えられたことが多い、ことに日本には教えられたことが多いと思う私が知っている限り現在の日本の若い人々が希望を失い落胆に沈んでいるとは信じない、世界

は今最も重要な時代に直面している、そしてその将来のすべてが若人たちの肩にかかっているこの時にこそ私は日本の新時代を担う人々に奮起してもらおうとやって来たのだ、時代は若者の活躍を望んでいる、世界の青少年が一丸となって平和の使命にたくましく前進してこそ人類平和の実が結ばれるのだ、私はこんど約三週間日本に滞在するができるだけ機会をつかんで日本の青少年と語りたい

なおクリーヴランド号は神戸から帰米の日系市民ら二十六名を乗せて同夕五時横浜へ向け出港した  
神戸キリスト教青年会の第一期会館定礎式ならびに体育館起工式は八日午後二時から生田区中山手通二丁目でこの日来訪した世界キリスト教青年会同盟名誉会長モット博士を迎え、兵庫県政部司令官アトウッド中佐、岸田知事、小寺市長、八代日本聖公会総裁、宮崎神戸商工会議所会頭、畠中神戸YMCA理事長、田村同復興後援会長はじめ京阪神、名古屋各教会代表ほか在神各教会牧師、青年会会員ら多数列席し盛大に行われた、式場では本城神戸YMCA総主事の司会でまず学生ばかりで編成された青年会のプラスバンドの吹奏や聖歌隊の合唱、黙祈、聖書朗読に引き続きモット博士の手によってこの日の各新聞、各教会の名簿などを会館敷地に埋める定礎、体育館起工のクワ入れ、記念植樹のほか各代表祝辞などが行われ同四時前なごやかに式を終えたが、博士は同式場での講演の中で「何世紀もかかってやらねばならない仕事をいまこそ日本人はこぞってやりとげねばならないときだ」と叫んで多大の感銘をよんだ、なお同博士は同伴のフエルン氏、ダーギン氏とともに同夕五時神戸出港のクリーヴランド号で横浜に向かったが、九日朝、横浜着後帝国ホテルに入り十二日は天皇陛下、十三日はマッカーサー元帥とそれぞれ会見するほか各地の歓迎会や講演会に臨み、卅日横浜からAPL太平洋航路のウイルソン号で帰国する予定

#### 4月16日 祈り アラベスク

貿易の街、犯罪の街 神戸は同時にひそやかな数々のお祈りが日ごと夜ごとくりひろげられている街でもある、世界の祈りがそれぞれの願いをこめて静かな花を咲かせる異国情緒ははなつかしい、在神外人の多くはなんといってもやはりキリスト教信者、日曜日のセント・マイケル、セント・マリア、ユニオン・チャーチなどをのぞけば英語で賛美歌をうたうフランス人の老婆や何を祈るのか十字架の前にさしうつむく混血の金髪娘の美しい横顔、和服の日本娘の姿も見られ、お互に母国の違う人々が三三五五男女手をとて教会からわが家へ向かう姿も神戸風景、トア・ロードを上りつめたところ右に折れると二十年の歴史をもつ回教寺が見える、緑の丸屋根と白銀の三ヶ月が春の斜陽を浴びているその下では信者のトルコ人が白髪のキルキ僧正を囲んで毎週金曜日遠くメッカを望んでアラーの神を呼ぶ姿がみられる、これは在神トルコ人一八四人の心のふるさとだ、中国人たちは大部分が仏教徒、それぞれ家庭に仏壇が飾られ奥深い家屋のなかに読経の声も響く、下山手の関帝廟は参拝する華僑たちでにぎわい、武神関羽様もいまでは在神華僑の護り神、ひとりロシヤキリスト教を信ずる白系ロシア人たちは小柄で日本語のよくわからない年老いたバダコフスキーメテル牧師の自宅(生田区山本通二丁目)内に設けられた黒いこじんまりとした教会に縁、赤、白と色とりどりの電球をつけ神秘な祈りをささげるのも神戸では捨てがたい情緒の一つであろう

#### 4月18日 イエス復活の喜び 真紅の太陽浴びて暁に祈る

“神の御名をば朝またぎ起き出でてこそほめまつれ”と英語と日本語が美しく調和した賛美歌がマツケリー軍曹の指揮する神戸ベース第十五軍樂隊の吹奏に和してまだ膚寒い夜明の大気にこだまし聖書を囲んだ人たちの胸には一瞬一様にイエス復活のよろこびに沸く キリスト教復活を記念するイースター早朝礼拝式は十七日午前六時半から神戸諏訪山金星台で在神進駐軍と神戸YMCA会員ら日本人がなごやかに入りまじって挙行され、真紅に上る太陽を浴びて厳肅な聖書の朗誦、進駐軍および家族と市内各教会の聖歌隊員で編成された国際色も豊かな大聖歌隊の合唱、神戸ベースのモリス・R・ホルト従軍牧師の説教などに心あたたまる“暁に祈る”早朝のひとときを送って同七時半散会した

#### 5月10日 伊丹に愛の殿堂 カトリックオブリエート会

一般世情の悪化によって生まれた多くの不良少年少女を宗教力によって決定的に更生させよう とカトリック信徒である前伊丹市長岡田利兵衛氏の懇請と田で口師教のあっせん伊丹市に教会と幼稚園が建立されることになり、新伊丹梅之木町の約一千坪を買収、来年度開講を目指して工事に着工するが、今年中には二教室とお堂一むねを建て、七歳の幼児を集めた幼稚園の開校を期している

この教会はカトリック・オブレート会(本部ニューヨーク)のもので、同会が日本に建立されるのは最初のもので、これが同会日本連絡本部になるはずであり、今後この教会が宗教の国際的発展に大きな役割を果たすものとして期待されている

#### 5月19日 (皇室)御西下の天皇陛下 車窓から県民に御会釈

本文略

#### 5月21日 奇跡の右手を迎う 西宮球場で莊厳のミサ 阪神地区のスケジュール決る

聖ザヴィエル渡来四百年祭巡礼観光団一行の阪神地区でのスケジュールがこのほど歓迎委員会で決定した、一行は当初六百名の予定であったが、海路をたどる豪州仏印方面の希望者四百余名は中国の動乱で航路の不安から取止めになったため空路によるアメリカからのお客様だけで百二十名、五月二十六日羽田飛行場へ到着後長崎へ汽車で直行、帰路鹿児島、別府、大分、山口、廣島と巡礼観光しながら六月四日京都、洛陽ホテルへ到着、五日午前十時から正午まで行われる西宮球場での莊厳なミサに出席するが当日は高松宮、同妃殿下も臨席され日響コーラス部百名、国立音楽学校コーラス隊二百名によるベートヴェンの「ミサの曲」大合唱が行われ、式典終了後神戸班五十名は自動車で午後一時六甲山ケーブル下に到着五十分間六甲山頂でミナト神戸を望みながら持参の弁当で昼食し午後二時半大丸着、池長美術館出品のキリストian美術品を二十分間観覧してから元町で買物、午後三時三十分元町を出発して宝塚へ向い日本舞踊、歌劇「高山右近」を鑑賞、幕間に三府県知事のレセプションに出席して午後七時三十分京都へ帰る予定である、なお兵庫県からはおみやげとして出石焼のスプーンかローソク立を贈呈する予定

#### 巡礼団日本へ

[リスボン十九日発 AP=共同] 来る廿九日から日本各地で開かれるザヴィエル渡来四百年記念式典に聖フランシスコ・ザヴィエルの「奇跡の右手」を奉持して参列するスペインの巡礼団は十九日特別機でマドリードからリスボンに到着、数千のポルトガル・カトリック教徒に見送られて日本に向った

#### 5月22日 ザヴィエル 四百年によせて 池長孟

ザヴィエル聖人の奇跡はあらたかである。私は熊内方面空襲のころには、身からは押部谷に疎開したが、南蛮美術品は持ち出す機会を失い、田舎から黒煙天をこがすのをながめて、死んだような気持ちになっていた。しかるに周囲がみな焼けた中に、宝物は安泰だったのである。この上人像は高槻と能勢の妙見さんの中ごろの辺村の千提寺村の東家の屋根裏にかくされていた箱の中から、他の切支丹関係遺物とともに出てきたのである。この近には他にもこんな例があり、クツ脱ぎ石をひっくり返すと信者の墓石であったりする。この辺が忍びの切支丹の遺跡であるのは高山右近の領地であったからでしかも厳しい弾圧のために遺物は大抵焼棄せられた中に、現在珍しくも残っているのは交通不便な山間の地の利のためであろう。

今度の四百年祭がなければいまだにザヴィエル聖人の名も知らない人が多かろうが、昔から私はこの日本にキリスト教とともに西洋文化をもたらした偉人にあこがれことに南蛮美術を集めた関係上、何とかしてこの貴重な聖人像を私の手におさめたいものとねらっていた。それでたしか昭和七年の暮だったと思うが、ある寒い日に西村貞君(昨年『キリストianと茶道』を著す)と一緒にこの山の中のスッポコ谷に出かけて、あつかましくも一面識もない東家に乗り込んだ。ところがケンモホロロのあいさつで座敷にあげてもらえない。上りかまちに腰をかけ祖父さんと話した。いかにも忍び切支丹の末孫らしい気品ある人だが「大学の先生にも見せないのだ」といっていはっている。気に食わぬオヤジだ。仕方がないから引揚げて、能勢の妙見さんから宝塚に出て料理屋で一ぱい

ひっかけ、ようやく人心地がついた苦い経験がある。

しかるに今度は千提寺の小学校の藤波大超氏(京都大学の遺物を紹介されし人)からの手紙で、東家のものを譲りたいとのこと。さっそく茨木で自動車を拾って飛んで行った。昭和十年の十二月であった。今回は座敷にもあげられ気に食わなかったオヤジさんもていねいで大いに気に食うようになり、聖人像の話をまとめて辞し、十六日に金額を持参してかしわのすき焼きをごちそうになり、銘酒に酔うて、聖人像を車に積み込み引揚げるときの満悦の状態は、收集狂でなければ分かるまい。私はこの聖人像を買うために垂水海岸の別荘を売ったのである。一品を入手するにもこんな苦心が払われているのである。

サヴィエルといえばいつもこの画像は辞典や教科書をはじめ何にでも、うるさいほど写真にのせられている。私蔵がその原本で日本人の描いた聖人像の天下一品の至宝である。画者が聖人に面接したか否かは不明であるが、トルセリノの聖人では一五九四年(文禄三年)のローマ版以来 出版され、その口絵の銅版聖人像でも見て描いたかとも思われる。筆者もたれかは分からぬが HIS の遊印があるから耶蘇会に属する切支丹画家であること、壺印をおしているから狩野派であることだけは確かである。壺印の字は耶省であろう。また著名の漁父環人もよくは分からない。画像下の字は「瑤夫羅怒青周呼、山別論応、瑤可羅綿都」すなわちサンフラヌシスコ、ザベリヨモ、サカラメントと読める。

さて 奇跡といえばここに一つの因縁話がある。私は押部谷に疎開したことは最初に記したが、その仮居真向いが福住小学校(今は神戸市立押部谷小学校)であった。奇妙なことはこの学校が大変なものを持っている。それは朱地に黒漆で南蛮人を描いた馬のクラである。そしてこれは長らく京都大学に寄託されて村の人たちや学校の先生もほとんど知ってはいない。なぜこんな所にこんなものがあるか。このクエスチョン・マークは大発見を生むだろう。押部谷からほど近い三木では天正十三年以降切支丹大名の中川秀政秀成の兄弟が相ついで城主となった。その北西の河合村にはフロイス書簡にも出てくる斯波家の一族がある。村重の子孫といわれる私の亡妻の実家、加古川在氷丘の荒木家には切支丹灯籠がある。美術愛好家、史家も仏像ばかりにたからず、新天地を開拓するがよい。播州路の農家の屋根裏からも、思いがけぬサヴィエル聖人画像が出現しますかもしれません。

### 文化短信

宝塚歌劇六月公演は一日から二十日まで星組公演で番組はつきの通り=歌劇キリストン大名「高山右近」十場(香村菊雄作および演出、銭谷光三振付、河崎一郎作曲および編曲)グランド・レビュー「想い出の薔薇」十二場(小西松茂作、内海重典演出)の続演

### 5月25日 “奇跡の右手”とは 科学者もついに降参 四百年前のものがそのままに 海賊船が動けなくなった話など

サヴィエル渡来四百年の式典に臨むため聖サヴィエルの奇跡の右手を奉持するスペイン巡礼団は廿三日サンフランシスコを飛行機を出発東京にむかったが、この奇跡の右手は六月四日神戸六甲イエズス会に午後八時から翌五日午前九時まで安置され、西宮球場の莊巣ミサに臨んだのちふたたび神戸中山手教会堂で午後一時から三時半まで奇跡の右手を安置してミサが行われるが、この奇跡の右手の由来をカトリック大阪教区長田口芳五郎司教に聞いてみた

…私はローマ留学中ローマ・イエズス聖堂に安置されてあるサヴィエルの右手を拝観しましたが、金ケースの普通のガラス張りの中に入れてあって色は少し茶色を帯びて指などにシワがあるほかは生きている人間の手と少しも変わりません、ケースの中は別に真空などといった特別の装置もありません、四百年前のものがそのままに残っているのはおかしい、何か特別な薬でも使ってあるのだろうと世界の科学者たちが調査しましたが、結局何の薬も使っていないことが判明し、これは奇跡の手だ、神様の手だということになったのです

…聖ザヴィエルはこの右手だけでなくインドのゴアに祭られているなきがらも本当に生きている姿そのまま

で、アメリカのアームストロングという有名な無神論者がそんなバカなことはないと十年に一回開かれるゴアの棺開きに立会い実際にみて驚き、直に自分の今までの主張を投げ捨ててカトリック信者になっている、サヴィエルの右手については一六一六年(サヴィエルは一五五二年、広東沖三上島で帰天)ローマのヤソ会五代目総長クラウジオ・アツクワウイーバの命令でゴアのヤソ会修練所長セバスチアーノ・ゴンザレス神父が右腕を切り船でローマに運ぶ途中オランダ海賊船に襲来されいまや撃沈という寸前にゴンザレス神父がサヴィエルの腕を献げて甲板に出て海賊船に向って「そこから一步も近づくな」と叫んだところ海賊船は急に動けなくなり、その間に裕々航海をつづけて無事リスボンに入ったといわれるほか彼の腕を拝んでギリシャ正教からカトリックに改宗したロシア人、テンカンで死にかかった一貴人がサヴィエルの腕に祈って全快した話など数限りない

#### **5月26日 マ元帥声明 サヴィエル四百年祭に寄す 人類精神進化への一里塚 遠大な伝道運動の糸口**

【涉外局特別発表】マッカーサー元帥は聖フランシスコ・サヴィエル四百年祭に際しつぎの声明を発表した  
聖フランシスコ・サヴィエルの日本來訪四百年記念祭は人類精神進化の道程における一つの大きな里程碑である、聖サヴィエルの渡日がとくに重大な意義を持つ理由はただそれが日本への最初のキリスト教導入であるということのみにとどまらず、これは宗教の根本をなす考え方を広く人類すべてにおよぼそうという遠大な目標を持った一大伝道運動の端緒となった点にもある、宗教の根本をなす考え方とはすなわち邪を捨てて正を、冷酷を捨てて寛容を、我意を捨てて公正をそれぞれとり、身も心も清く保ち不遇に屈せず成功におごらぬという考え方でありそのすべてはキリストが山上の垂訓で説いたあの美しく永遠なしかも何の飾り気もない言葉にありますところなくいいあらわされている

伝道という仕事の基礎をなすものは人間の持つあらゆる徳性のうちもっとも崇高なもの すなわち犠牲の精神である、この徳性が現われるとときこそ人間の心の像は神の姿にもっとも近く描き出されるのである、しかも魂に一点の汚れもないこの伝道師聖サヴィエルはそれまでの世界が知りえた最大の思想を究め謙虚な心持をもって極東にもたらした、彼がもたらした思想はやがてこの地において成長し美しい花を咲かせるであろうことを余は真心こめて信ずる、なぜならこの思想の具現するものは健全なものの考え方一つという永久不滅のものだからである、世界のあらゆる人が心から望み、また聖フランシス・サヴィエルが何よりも堅く心に抱いていたものはあらゆる知識を超越する真の平和であった、もし人類がこの平和を見出すときがあるとするならばそれはすべての人がこの健全な考え方、否この理想を各人の心に受け入れるときであるに相違ない

#### **法王特使 マ元帥と会見**

入京したサヴィエル四百年祭ローマ法王特別使節ギルロイ枢機卿は二十五日午前中東京都文京区関口教会に土井大司教を訪れ旧交をあたためたのち、午後零時半マッカーサー元帥と会見、夜は招かれて対日理事会英連邦代表パトリック・ショー氏の夕食会に出席した

#### **5月27日 サヴィエル巡礼団一行三十五名到着 金の箱に『奇跡の右腕』 聖骨に黒ずんだ血 予期せぬ公開に出迎群感激**

聖フランシスコ・サヴィエルの右腕と十字架を奉持したスペイン巡礼団第一陣二十五名は二十六日午前六時二十六分米国を経てパン・アメリカン航空特別機レイザー号で羽田に到着した

スペイン在日使節団長 G・D・オヘダ氏夫妻アンベルクロウド法皇使節団長代理をはじめ十数名のスペイン系カトリック神父や横須賀聖泉女学院学生らに迎えられてタラップからまず降り立ったのは団長ホセ・ロペス・オルティース卿、つづいて右腕と十字架をおさめ「サヴィエル四百年祭」と書いた紅黄紅三段の絹リボン付の大型ボストンバッグをうやうやしくさしだしたホセ・キャバリエロ神父、前マドリード市長アルベルト・アルコセール氏、ジョージタウン大学(ワシントン)ホセ・ソブリーノ教授、それにマリア・アリスケスタさんら十名の女性も交り 胸にサヴィエル肖像のメダルつけ大部分がサヴィエル生誕地の近くの人たちとのこと、聖泉女学院専攻部三年生の真野允子さん(二一)がひざまづき「よくいらっしゃいました」と団長に美しい芍薬の紅白の花束と歓迎のメッセージをささ

げれば団長は

ム チャスク ラシアスケヴ・ニト・フロレス(どうもありがとう、きれいな花ですね)

とにかくお礼の言葉を述べ女学生たちを喜ばせた

やがてロビイに入った団長らは出迎えの人たちにせがまれ長崎の式典当日までは公開しないことになっていました聖骨と十字架をとうとう開いてみせることとなり、キャバリエロ神父は敬恭な面持でバッグのカギをあけ大きなスペイン国旗とサヴィエル生誕の土地ナヴァロ県の旗に包まれた箱をとりだした

しなびた膚に黒ずんだ血がこびりついている右腕をおさめているのは長さ約二フィートの腕型の金の箱、ガラスのふたがついて重さは三ポンドぐらい、サヴィエル日本伝道中もっていたという木製十字架の方はハインチくらいの木箱、出迎えの神父や女学生たちはその箱にキッスして胸に十字を切って祈りを獻げればにぎやかなロビーは一瞬おごそかに静まりかえる、バスを連ねた一行は日本安着を感謝するミサを十時から行うため東京四谷上智大学へ赴き右腕と十字架を清められた会堂内に安置した、なおスペイン巡礼団第二陣 S·J·ホーヴェル神父ら十名は同八時五十五分パン・アメリカン航空定期便で羽田着、第一陣に合流した、一行は同夜東京駅構内の特別巡礼列車内に泊り二十七日長崎へ向う

#### アメリカの三代表も到着

聖サヴィエル四百年祭に参列のため廿六日早朝羽田着のスペイン巡礼団について同日午前十一時アメリカからニューヨークのトマス・J・マクドーネル司教 R·ギャノン・J・スカリー両神父の三代表がノースウエスト航空便で羽田に着いた、一行はザヴィエルの右手やスペイン巡礼団とともに二十七日朝の特別列車で長崎に向いて式典に参加する

#### 出石焼を贈る

サヴィエル四百年祭に「奇跡の右腕」を奉持してはるばる訪日するスペイン巡礼団にカトリック渡米当時をしのぶ風俗を画いた出石焼を贈るため県立出石窯業試験場の野崎、渡部、瀬尾の各技師が製作を急いでいたサラ、燭台、スプーンなど九十五点が二十五日焼き上がり、近く神戸工業試験場に発送される

この出石焼はカトリック渡来当時のポルトガル船員の姿を中心、周囲には「神の栄光のために」のイタリア語、またポルトガル船を記念するポルトガル語が書かれているのをはじめ、カトリック寺院などを描いた直径六寸のサラ十五種類と高さ八寸の南蛮人風俗の人形を象った電気スタンド三種類、紅で十字架を描いた白磁色のスプーン三種類である

#### 5月30日 新たな勤勉と徳行で天上の幸福の達成へ ローマ法王の教皇勅書

サヴィエル記念式で奉読されたローマ法王ピオ十二世の教皇勅書要旨つぎの通り

日本国民にとって疲れを知らなかったこの使徒は彼の靈にならいし宣教師によって指示されたるところの眞の救いの道に入ることによりももっと幸福なことはありえない特に日本国民が先般の戦勝においてあのように多くの大きな災やくと破壊を経験し、そして天主の樂しき牧場において勤勉と徳行との平和の仕事にあらたなる力をもって從事し聖なるお恵みによって彼等の心を天上の幸福の達成の方向に高めつつあるにおいては特に然りとする、日本国民はカトリック教が単にキリスト教的えい知に止まらない、すぐれて人間的文化でもあることは一層容易に知りかつ消化することが出来るであろう、われらは愛子なる卿シドニーの著名な大司教の司牧職の地位にありかつローマの紫服の光輝を与えられた卿をわれらの個人的代表者として選びかつ任命する、この故に卿はわれらの個人的代表者として行動し聖フランシスコ・サヴィエルの日本諸島への光輝ある四百年記念祭典入国の記念のための四百年祭典を主宰されたい、一九四六年四月十七日教皇即位第十一年ローマにおいて発信

教皇ピオ十二世

サヴィエル四百年祭の幕開く 聖腕の前に莊嚴ミサ 殉教の地長崎で世紀の祭典

サヴィエル祭の冒頭を飾る長崎浦上天主堂跡における野外の司教莊巣ミサは二十九日午前九時二十五分から行われた、この日浦上一帯の信者ら一万五千の男女は定刻前から広場につめかけミサの始まるのを待つ、原子爆弾で破壊されたここ浦上天主堂跡のレンガの残骨をバックに設けられた祭壇には聖サヴィエルの像を描いた大十字架が立てられ、サヴィエルが用いた十字架とサヴィエルの聖腕とが飾られている、白いヴェールをかぶった信者たちの敬恭な祈りの中に定刻よりやや遅れて九時廿五分アンジェラスの鐘がおごそかに場内外に鳴りひびけば、聖歌隊の歌う莊厳なフランシスコ贊美歌の中をきょうの莊巣ミサの執行者サヴィエルの故国スペインの神父オルティス司教を先登に聖職者が入場する、オルティス司教の唱える入祭文、贊美歌「キリストあわれみ給え」に続き栄光の聖歌、ラテン語による福音マルコ章など終始聖歌合唱によりミサが進められオルティス司教の説教、使徒信教の合唱あり祭壇に香をささげたのち聖体祭領が行われ、ふたたびフランシスコ贊美歌の合唱により同十時四十分司教莊巣ミサを終った、引続き長崎教区山口司教によるゼン・ショウ・ユウがあり同十一時ごろ散会した

ついで午後二時大浦天主堂の鐘が中空に鳴り響けば金色の十字架を先登に二万の行列は肅々と動き出した、十字架のわきにはロウソクの火が赤々と燃え盛り、聖母の騎士團の孤児達をはじめ腰の曲った老人達までが口々にお祈りを唱えながら贊美歌のリズムにあわせて歩いている、行列の中央部付近の楽隊、外人巡礼団のうしろにつづいて長崎教区山口司教の手に奉持された聖腕を乗せたオープン車が通り沿道四キロを人垣で埋めた見物の市民達は一せいに息をのむ、つづいてギルロイ枢機卿を乗せた乗用車、修道女、教区外女子巡礼団などヴェールをかぶった婦人信者の群れといつまでもいつまでも行列はつづく、午後四時五分聖腕は日本二十六聖人殉教の地長崎市西坂公園に到着した、さしも広い西坂公園も山の上まで人で塗りつぶされてしまった、西坂公園に集った信者見物の市民は裕に三万を突破する盛況で、同四時十分聖歌隊の感謝の贊美歌合唱により記念式典は開かれた、

サヴィエルの右腕は中央祭壇に安置された、ギルロイ枢機卿を中心に聖職者達の着座式が終れば星脇神父は中央に進みローマ法王ピオ十二世の勅書をラテン語で読み上げる、つづいて勅書の日本語翻訳文朗読があり、山口司教あいさつ、ギルロイ司教から信者一同に対する説教がありギルロイ師聖腕を奉持して参会者一同に祝福を与えれば折から降りしきる雨中をもいとわず満場の信者たちは一せいにひざまづく、かくて同五時記念式を終り引きつき聖体降福式に移り認聖者贊美歌の合唱裏に香をささげ、ギルロイ師の祈祷文朗読聖体贊美歌の合唱によりふたたび香を献じギルロイ師により御聖体による祝福を与え聖体降福式贊美の祈りが行われ「キリスト教は勝てり」二十六聖人の贊美歌の合唱裏に同五時半世紀の祭典の幕を閉じた

### 5月31日 サヴィエル祭にちなんで 姫路城の十字架 築城奉行は篤信家の黒田如水

聖サヴィエル渡日四百年を記念し巡礼団を迎えて厳粛な行事が続いているとき、西洋文化から遠くかけ離れた国宝姫路城の屋根上に三百六十余年前の十字架が残っていることがわかり話題になっている

姫路城「にの門」の破風の上に十字の鬼ガワラが使用されていることから姫路城とキリスト教の関係が究明され興味ある問題となっている、この十字架の鬼ガワラは昭和十六年文部省が門を解体修理した際発見されたが、当時戦時中でもあり一部の新聞に報道されただけで一般に関心がもたれず、いつごろだれが刻んだかについてはナゾに包まれていたが、サヴィエル四百年祭を機にこの話題が再燃し、郷土史家によって高山右近とともにキリスト教の先覚者である黒田官兵衛孝高(如水)が秀吉の築城奉行として姫山に三層天守閣築いたとき用いたのであろうと見られるにいたった、右について郷土史研究家橋本政次氏はつぎのように語った

サヴィエルが鹿児島に上陸したのは天文十八年で、京に上り宣教に努めたが戦国時代のあわただしさで目的を果さず山口に帰った、つづいて永禄二年にウィレラが渡日したころ僧兵が織田信長に反抗していたので信長はキリスト教を利用して仏教を抑え京都に有名な南蛮寺(永禄寺)を建立させたほどでそのころキリスト教は全国に多くの信徒を得た、孝高がキリスト教を信仰したのは天正十一年高山右近から勧められたといわれ

ているが、サヴィエルが九州から上洛した当時孝高は姫路城主であったからそのころ高山右近とともにキリスト教を信仰したものでないかと考えられる、秀吉が姫路城を築いたのは天正八、九年で孝高はそのとき築城奉行を命ぜられたから姫路城に十字のカワラがあるのはそうした関係から孝高がひそかに使用したものであろう

#### 東芝の建物買収 カトリックの街建設計画すすむ

兵庫県揖保郡揖津町にカトリックの街を作る計画は最初に同町新舞子海浜基山を開拓、同地一帯にカナダのカトリック本部の手で女子高等学校を建設することになり、目下その用地を実測中であるが、このほど同計画の一つであった東芝網干工場内の基同社播磨地方事務所建物をベルギーカトリック教団が買収することになり同教団と東芝の間に契約が成立した

ベルギーカトリック教団では本国から資金が到着次第引き続き東芝用地の買収に乗出すものと見られ、今回買収の元播磨地方事務所は恐らくカトリック御津計画の建設本部に使用されるものと見られている

#### 6月2日 「奇跡の右腕」まつ大十字架

「奇跡の右腕」を迎えた聖サヴィエル渡日四百年祭の最大祭典、野外荘厳ミサは五日午前十時から西宮球場で法皇特使ギルロイ枢機卿の主祭で日本交響楽団、国立音楽学校合唱団、現楽壇最高声楽家ら編成の演奏で華麗にくりひろげられる、平和と復興の祈りをこめた「荘厳ミサ」は世界史上第十六回目の盛儀で、祭典の準備は阪急西宮球場経営部の手で進められ、すでに球場正面屋上には聖なる祭場を象徴する高さ四十二尺の大十字架が建てられその日に備えているピッチャー・プレートに設けられる大聖壇もほとんど出来上り、阪神国道から球場までの自動車道路は兵庫県と西宮市の協力で拡張工事が進められており、当日ミサ終了後「奇跡の右腕」は一たん神戸の中山手教会に安置、つづいて午後三時から四時まで阪急小林聖心女学院に、四時十五分から三十分まで甲東園カルメル修道会と巡礼団に奉持され、五時から六日午前七時まで西宮夙川教会に信者に守られて安置され夜通し一般の拝観が許される

#### 6月5日 [社説]カトリック精神と日本

聖フランシスコ・サヴィエルの日本渡来四百年記念祭は、きょう五日の西宮球場における野外荘厳ミサによって最高潮に達する。恐らくは数万の信徒、一般観覧者を迎えて空前の盛観を呈するであろう。

サヴィエル渡來の意義についてはすでに語り尽くされている。マッカーサー元帥はその声明で「伝道という仕事の基盤をなすものは、人間の特性のうちもっとも崇高なもの、すなわち犠牲の精神で、この徳性が現われるときこそ人間の心の像は神の姿にもっとも近く描き出されるのである、聖サヴィエルがもたらした思想はやがてこの地において成長し、美しい花を咲かせるであろう」といっている。伝道こそはまことキリスト教精神のはなしといつてもよい。今日地球上にその宣教師の足跡が印せられないところはないといわれるくらいである。

二千年の歴史を持ち、全世界の信徒三億、西欧文明の母であり、教育者であったローマ・カトリック教は、好むと好まざるにかかわらず、これを無視しては何も語れない。荘厳ミサの盛儀を見る前にカトリック教徒はどんなものかを知っておく必要はないであろうかプロテスタン트は信仰のみによる救済を説き神との個人的な接触を念願とするが、カトリックは教会を離れては存在しない。宗教をまず社会全体のこととして考え制度化し、伝統を尊重し、秩序を愛好する。それを具体的に代表するのが「教会」である。だから教会と信徒のつながりはこのうえもなく強固である。

その教会の権威も一事は全く地に落ちて、カトリック危機が叫ばれたことがあった。人間と世界の発見だったといわれるルネサンスと、ルーテル、カルヴァンによる宗教改革である。しかしこれはロヨラやサヴィエルらの献身的な聖者の手によって救われた。そしてかえって欧洲だけでなく全世界にその福音を伝道し得たのである。カトリックの特徴は人性に対する深い理解と、排他的ではない包容力の大きさにある。そして常に現実に立脚している。一八九一年法皇レオ十三世が社会主義に関する教書を発表して富者とプロレタリア、資本家と労働者の

守るべき権利、義務明らかにしたのも有名な話である。また社会事業や慈善事業のためには、あらゆる努力、犠牲、献身を惜まなかつたことは、たれもが認めないわけにはゆくまい。

現実日本人の道義の退廃や、社会秩序の混乱を見るとき、何かそこに精神的な空白のあることを痛感させられるのである。ある人はこれを敗戦国当然の宿命だとあきらめ、ある人は「衣食足って初めて礼節を知る、生活が豊かになれば自然に解決できる」という。もっと深く人間の内奥にまで掘り進み、その究極の原因を突き止めてみようともしない。

食えないから食わせろ、家がないから建てろという権利の主張はよく分る。しかしいくら民主主義でも権利の主張とともに必ずそれに先行すべき社会に対する義務というものがあるはずである。食えないからどんな不道徳をしてもいいという理屈はない。義務とは決して命令や強制によって生じるものではなく、心奥から自然と盛上って来る愛情の発露でなくてはならない。正直者がバカを見るからといって、だんだん正直者が減って行く世の中が一番恐ろしいのである。闘争による社会革命もいい。しかしそれによって与えられるものが、ノルマ万能の愛情のない冷たい社会だとしたら、われわれはまた別の道を探さざるを得まい。

九原則の実施で、日本人全部が耐乏生活を要請され、やれ首切りだ、金詰りだ、税金だ、と全く息がつまりそうな現在にあって、われわれは再び清純な精神界の喜びにその心の一角を開放してもいい時期ではないか。聖サヴィエルのごとき偉大な宗教家、哲学者を望むこと今より切なるはない。

#### きょう西宮で莊厳ミサ集う五万の信徒、二百の聖歌隊 “聖腕”神戸へ

サヴィエル渡日四百年を記念するわが国最初世界でも十六回目の「莊厳ミサ」が五日午前十時から西宮球場の特別祭壇で高松宮はじめ信者約五万人が集りローマ法皇特使ギルロイ枢機卿主祭のもとに行われ、日本交響団百名、国立音楽学校生徒二百名によるベートーヴェン大作「ミサ・ソレニムス」の演奏、聖歌唱があるが

これにさきだち奇跡の右腕を奉持する海外巡礼団ギルロイ枢機卿の一一行は九州、中国の巡礼を終え、四日午前六時三十分特別列車で廣島から京都駅着、駅頭で信者代表から贈られた歓迎の花束を受け「聖腕」は一たん三条河原町のカトリック教会に安置、午後二時から岡崎グラウンド特設祭壇で信者約二千名による莊厳な聖体降福式を行い、式後二千人の聖体行列を古都に繰り広げてのち

奇跡の右腕は神戸六甲修道院フェルケン院長が奉持して京都から自動車で同七時半初の神戸入りをした、待ちかまえた在神カトリック信者多数出迎えのうちに六甲イエズス教会に安置、同八時半から聖体降福式、崇敬式を行い、引き続きカトリック青年会の人々が徹夜で聖腕にお祈りをささげた

#### 莊嚴ミサへ高松宮

高松宮殿下は四日午前八時五分大阪駅着来阪され、日紡貝塚工場その他を視察、甲陽園の「はり半」に向われた、なお殿下は五日莊嚴ミサ

#### 6月6日 清麗・真白き花園のごとく 聖徒五万の祈り 世紀の感激“莊嚴ミサ”

世紀の祭典、聖フランシスコ・サヴィエル渡来四百年を記念する“莊嚴ミサ”はギルロイ法皇特使一行七十四名の巡礼団を迎えて五日午前十時から西宮スタジアムの特設会場できらびやかなうちに厳粛に繰広げられた—

…この日西宮球場に集った信者は遠く佐賀県から駆けつけたのをはじめ京阪神各地から約五万の信者の冠る純白のヴェールに色とりどりのパラソルがすっかり夏めいた陽ざしに照り映え内野席一ぱいに開いた景は咲きそろった花園のような美しさ、とくさる三月十四日全村あげてカトリックに改宗して話題をふりまいた京都府佐賀村の信者約七百名が板倉神父に引率されて来場、聖なる祈りを獻げる姿が人目をひいた

…山田和男氏の指揮する日本交響団百名がベートーヴェン作曲「ミサ・ソレニムス」の入祭文前奏曲を演奏するうちに特使一行はサヴィエル生誕のラボール国旗を先頭にニューヨークのマケドネル大司教を先導として聖腕と十字架を奉持して入場、ファチナの聖母像を祭る球場中央の特別祭壇にひざまづき聖腕と十字架を安置、国立音楽学校生徒二百名の「主あわれみたまえ、キリストあわれみたまえ、主あわれみたまえ」のキリエ・コ

ーラスの音律が青空にとけ込む中をギルロイ枢機卿主祭で日本最初の莊厳ミサの式典を開始した  
...莊嚴な主祭文に集った信者達はひざまつき遠く祭壇に祈りの言葉を獻げ世界のすみすみまでひびけと  
聖歌を合唱、きょうの佳き日にめぐりあわせた幸福を神に感謝した。この日来阪中の高松宮殿下もとくに御臨席、  
お祝いの言葉を述べられた

...約二時間にわたる式典後奇跡の右腕と十字架はウンテルワルド神父に奉持され中山手教会に安置され、  
午後二時半から多数の在神信者により聖体降福式を行い、同三時半ふたたびウンテルワルド神父に奉持され  
て夙川教会に安置され、徹夜でカトリック青年会の人々の祈りがつづけられた

...一方巡礼団一行は式終了後二班に分れ、一班は神戸へ、二班は大阪へ向ったが、午後五時宝塚で合流  
の一行は宝塚大劇場で記念歌劇「高山右近」を観劇、地元小浜、良元両村の歓迎仕掛け花火に打ち興じ、同夜宿  
舍京都ラクヨウ・ホテルへ向った

#### ミサとは

ミサはキリスト教の主要な礼典の一つでイエスが十二人の弟子達とともにした「最後の晚餐」を記念しイエスの死  
の意義と復活を期待し祈る集会から起ったもので、西宮で行われたミサは法皇特使主祭として行われた最高の  
ミサで日本では初めてのもので世界でも十六番目の莊厳ミサである

#### 小寺市長の招宴

神戸へ向ったサヴィエル巡礼団ガバリロ神父以下二十四名の一行は午後二時すぎニュー・オリエンタル・ホテ  
ルに到着、小寺市長の招宴に臨み在神関係各代表と懇談後同四時特別バスで宝塚へ向った

#### 6月7日 「奇跡」奈良へ

滞洛中のカトリック信徒巡礼団一行は六日朝来高槻市の高山右近記念碑、堺市の信徒顕彰碑の除幕式などへ  
各班に分れて参加、午後三時一部は奈良公会堂の奈良県・市歓迎ティ・パーティに臨んだのち東大寺、春日大  
社を歴訪した、なお「奇跡の右腕」は奈良カトリック教会に安置、一般公開された

#### 6月10日 巡礼団帰京

「奇跡の右腕」を奉持して帰京の途、八日横浜市に立ち寄ったギルロイ枢機卿らの国際巡礼団一行は午後七時  
四十五分横浜から特別自動車を連ね同八時半過ぎ東京四谷上智大学構内聖イグナチオ教会に到着、かがり火  
で真昼のように明るい会堂前広場には信徒、カトリック男女学生ら数千名が合唱するうち恭しく同会堂内の祭壇  
に安置された

## 参 考 文 献

---

- 赤嶺政信(2002):奄美・沖縄の葬送文化—その伝統と変容—, 国立歴史民俗博物館『葬儀と墓の現在—民俗の変容—』吉川弘文館, 2-27頁
- 浅野ひとみ(2002):サンティアゴ『巡礼案内記』研究(上), 純心人文研究8, 1-16頁
- 浅野ひとみ(2004):サンティアゴ『巡礼案内記』研究(中), 純心人文研究10, 147-170頁
- 芦田昇・松田公一・野田吉夫編(1979):『三十年のあゆみ』報恩寺カトリック教会
- 阿部安成・小関隆・見市雅俊・光永雅明・森村敏己(1999):『記憶のかたち—コメモレイションの文化史』柏書房
- 綾部市史編さん委員会編(1979):『綾部市史 下巻』綾部市役所
- 新屋重彦(1978):現代キリスト教界におけるアイデンティティをめぐる闘争—日本基督教団の場合—, 宗教社会学研究会編集委員会編『現代宗教への視角』雄山閣出版, 129-143頁
- 荒山正彦・大城直樹(1998):『空間から場所へ—地理学的想像力の探求—』古今書院
- 蘭信三(1982):村落研究における共同体論的アプローチについて, ソシオロジ26-3, 81-98頁
- 有薗正一郎・遠藤匡俊・小野寺淳・古田悦造・溝口常俊・吉田敏弘(2001):『歴史地理調査ハンドブック』古今書院
- 安齋伸(1976):キリスト教—カトリック教の場合—, 九学会連合沖縄調査委員会編『沖縄—自然・文化・社会—』弘文堂, 355-361
- 安齋伸(1976):保良のキリスト教の受容—カトリック教の場合—, 九学会連合沖縄調査委員会編『沖縄—自然・文化・社会—』弘文堂, 313-317
- 安齋伸(1979):基層伝統信仰と移入宗教—沖縄、宮古島調査から—, 柳川啓一・安齋伸編『宗教と社会変動』東京大学出版会, 195-233
- 安齋伸(1984):『南島におけるキリスト教の受容』第一書房
- 井門富二夫(1970):宗教地理, 木内信蔵『文化地理学』〔朝倉地理学講座8〕朝倉書店, 68-103
- 井門富二夫(1986):宗教と社会変動—世俗化の意味を求めて—, 宮家準・孝本貢・西山茂編『日本の社会学19宗教』東京大学出版会, 247-257
- 池内泰(2006):神奈川県・江の島における天王祭の成立との背景—祭礼にみる祭祀空間の考察を通じて—, 人文地理58-5, 1-20
- 池上善彦編(2001):『現代思想(臨時増刊号29-15)』青土社
- 池上良正・小田淑子・島薦進・末木文美士・関一敏・鶴岡賀雄編(2003):『宗教とはなにか』(岩波講座宗教第1巻)岩波書店
- 池上良正・小田淑子・島薦進・末木文美士・関一敏・鶴岡賀雄編(2004):『宗教への視座』(岩波講座宗教第2巻)岩波書店
- 池田亨(1974):八海山火渡祭 - 八雲流三段法 -, 高志路231, 3-5
- 池田敏雄(1968):『人物による日本カトリック教史会』中央出版社
- 池田敏雄(1992):『津和野への旅』中央出版社
- 石飛一吉(1976):屋久島における山岳信仰圏の研究, 鹿児島地理学会紀要22-2, 44-52
- 泉琉二(1972):山村におけるキリスト教の受容(一)—和歌山県日高郡隨神村下柳瀬地区におけるカトリック教会の設立—, 待兼山論集5, 101-122
- 泉琉二(1974):山村におけるキリスト教の受容(二)—和歌山県日高郡隨神村下柳瀬地区におけるカトリック教会への集団改宗とイットウ組織—, 研究紀要25-3(三重大学教育学部), 1-25
- 磯岡哲也(1986):新宗教の地方伝播・浸透・定着とその要因—立正佼成会茨城支部の事例—, 森岡清美編

- 『近現代における「家」の変質と宗教』新地書房 , 303-334
- 今里悟之 ( 1995 ): 村落の宗教景観要素と社会構造—滋賀県朽木村麻生を事例として— , 人文地理 47-5 , 42-64
- 今里悟之 ( 1999 ): 村落空間の分類体系とその統合的検討—長野県下諏訪町萩原を事例として— , 人文地理 51-5 , 1-24
- 今里悟之 ( 2002 ): 日本村落の空間テクスト論の視角と課題 , 人文地理 54-4 , 1-21
- 今里悟之 ( 2004 ): 景観テクスト論をめぐる英語圏の論争と今後の課題 , 地理学評論 77-7 , 483-502
- 今里悟之 ( 2006 ): 『農山漁村の 空間分類 —景観の秩序を読む』京都大学学術出版会
- 今村仁司 ( 1999 ): 文化の生産と表象の鏡 , 田村克己編『文化の生産—二〇世紀における諸民族文化の伝統と変容—』ドメス出版 , 285-292
- 今本暁 ( 2000 ): 村落内小社会集団の成立と基礎地域の社会的紐帯—滋賀県神崎郡川並を事例として— , 人文地理 52-2 , 63-79
- 岩谷建三 ( 1978 ): 『近代の津和野』津和野歴史シリーズ刊行会
- 岩鼻通明 ( 1981 ): 観光地化にともなう山岳宗教集落戸隠の変貌 , 人文地理 33-5 , 74-88
- 岩鼻通明 ( 1983 ): 出羽三山をめぐる山岳宗教集落 , 地理学評論 56-8 , 535-552
- 岩鼻通明( 1983 ): 宗教景観の構造把握への一試論—立山の縁起 , マンダラ , 参詣絵図からのアプローチ— , 京都大学文学部地理学教室編『空間・景観・イメージ』地人書房 , 163-185
- 岩鼻通明 ( 1989 ): 立山マンダラにみる聖と俗のコスモロジー , 葛川絵図研究会編『絵図のコスモロジー 下巻』地人書房 , 223-238
- 岩鼻通明 ( 1999 ): 城壁都市ソウルの発展と大都市圏の形成 , 成田孝三編『大都市圏研究 ( 上 ) —多様なアプローチ—』大明堂 , 185-202
- 岩鼻通明 ( 1992 ): 戸隠信仰の地域的展開 , 山岳修験 10 , 31-40
- 植島啓司 ( 2000 ): 『聖地の想像力』集英社 ( 集英社新書 )
- 上野和男 ( 2002 ): 日本の位牌祭祀と家族—祖先祭祀と家族類型についての一考察— , 義江明子編『親族と祖先』( 日本家族史論集 7 )吉川弘文館 , 206-232
- 上原秀明 ( 1985 ): 近世におけるハケ岳南麓農村の空間構造 , 人文地理 37-6 , 1-28
- 梅森直之 ( 1999 ): 歴史と記憶の間 , 阿部安成・小関隆・見市雅俊・光永雅明・森村敏己『記憶のかたち—コメモレイションの文化史—』柏書房 , 167-187
- 浦川和三 ( 1973 ): 『浦上切支丹史』国書刊行会 ( 初版 1943 )
- 江口信清 ( 2001 ): クルーズ船観光の人類学に向けて—島国ドミニカとクルーズ船観光の関係を例に— , 民族学研究 66-1 , 106-121
- 海老沢有道 ( 1957 ): 明治迫害期における切支丹社会の考察—五島青方天主堂御水帳による— , 史苑 ( 立教大学 ) 17-2 , 1-42
- 海老沢有道・大内三郎 ( 1970 ): 『日本キリスト教史』日本基督教団出版局
- エリアーデ , ミルチャ ( 1974 ): 『聖なる空間と時間—宗教学概論 3—』( エリアーデ著作集第 3巻 )せりか書房 , 57-86
- エリアーデ , ミルチャ ( 1993 ): 『聖と俗』法政大学出版局 ( 初版 1969 )
- 応地利明 ( 1996 ): 『絵地図の世界像』岩波書店 ( 岩波新書 )
- 大城直樹 ( 2001 ): 「場所の力」の理解へむけて—方法論的整理の試み— , 南太平洋海域調査研究報告 35 , 3-12

- 大城直樹 (1992): 村落景観の社会性—沖縄本島北部村落の祭祀施設の場合—, 歴史地理学 159, 2-20
- 大城直樹 (2003): 地理学と社会学—折衝の第二ラウンド?—社会学雑誌 20, 111-124
- 大城直樹 (1994): 墓地と場所感覚, 地理学評論 67A-3, 169-182
- 太田好信 (1993): 文化の客体化—観光をとおした文化とアイデンティティの創造—, 民族学研究 57-4, 383-410
- 大平晃久 (2003): 場所をめぐる構築主義的アプローチの可能性, 東海女子大学紀要 23, 73-83
- 岡田章雄 (1983): 『キリスト教と南蛮文化』思文閣出版
- 岡部一興 (1977): 明治前期におけるキリスト教受容の一考察—弘前教会を中心として—, 日本歴史 348, 57-75
- 沖本常吉編 (1970): 『津和野町史第1巻』津和野町史刊行会
- 沖本常吉編 (1976): 『津和野町史第2巻』, 津和野町史刊行会
- 沖本常吉編 (1989): 『津和野町史第3巻』津和野町史刊行会
- 沖本常吉 (2004): 『乙女峠とキリスト教』津和野町教育委員会 (津和野ものがたり第3巻, 初版1971)
- 奥村直彦 (1989): 近代日本におけるキリスト教受容と変容—近江地方の事例を中心に—, 社会科学討究 35-2 (早稲田大学), 457-491
- 長田俊樹 (1998): インド・日本・キリスト教—はたしてバイアスなき宗教研究はなりたつか—, 山折哲雄・長田俊樹編『日本人はキリスト教をどのように受容したか』国際日本文化研究センター, 307-323
- 小口偉一・堀一郎 (1973): 『宗教学辞典』東京大学出版会
- 小口偉一編 (1985): 『宗教学』弘文堂 (弘文堂入門双書)
- 小澤浩 (2004): 『民衆宗教と国家神道』山川出版社 (日本史リブレット)
- 小関隆 (1999): コメモレイションの文化史のために, 阿部安成・小関隆・見市雅俊・光永雅明・森村敏己『記憶のかたち—コメモレイションの文化史』柏書房, 5-22
- 小田匡保 (1984): 小豆島における写し靈場の成立, 人文地理 36-4, 59-71
- 小田匡保 (1987): 「山家集」に見る山岳聖域大峰の構造, 史林 70-3, 129-154
- 小田匡保 (1989): 山岳聖域大峰における75靈地觀の成立とその意義, 人文地理 41-6, 24-40
- 小田匡保 (1993): 山岳宗教研究の地理学的諸問題—岩鼻通明著『出羽三山信仰の歴史地理学的研究』を評して—, 駒沢地理 29, 135-153
- 小田匡保 (1993): 本山修験宗の1992年度大峰奥駈南部修行について, 駒沢地理 29, 79-111
- 小田匡保 (1994): ギスペルト=リンシェーデの巡礼研究について, 駒沢地理 30, 129-141
- 小田匡保 (1995): 聖ヴォルフガング没後千年祭にみるドイツ南部のカトリック巡礼, 駒沢地理 31, 39-68
- 小田匡保 (2002): 戦後日本の宗教地理学—宗教地理学文献目録の分析を通じて—, 駒沢地理 38, 21-51
- 小田匡保 (2003): 修験道教義における大峰, 地理 48-11, 14-19
- 小田匡保 (2004): 信仰圈研究の地理学的課題—松井圭介著『日本の宗教空間』を評して—, 駒沢地理 40, 105-120
- 小野寺淳 (1990): 道中日記にみる伊勢参宮ルートの変遷—関東地方からの場合—, 人文地理学研究 14, 231-255
- 小野寺淳 (2005): 伊勢参宮における講組織の変容—明石東二見を事例に—, 歴史地理学 47-1, 4-19
- 小野泰博・下出積與・帽山林継・鈴木範久・蘆田稔・奈良康明・尾藤正英・藤井正雄・宮家準・宮田登(1985): 『日本宗教事典』弘文堂
- 小幡義信 (1980): 歴史的風土と伝統形成の問題, カトリック研究 38, 259-286

- 遠城明雄 (1992): 都市空間における「共同性」とその変容—1910~1930年代の福岡市博多郡—, 人文地理 44-3, 21-45
- 柏木亨介 (2004): 祭祀空間の再構成—祭祀の場所の移動を通して—, 日本民俗学 237, 67-83
- 片岡樹 (2003): 悪魔の神義論—タイ国の山地民ラフにおけるキリスト教と土着精霊—, 民族学研究 68-1, 1-22
- 片岡春太郎編 (1951-1954):『佐賀村報』佐賀村役場, 15~50号
- 片岡弥吉 (1980):『日本キリストン殉教史』時事通信社(初版1979)
- 加藤隆久 (1989): 神戸宗教論—まつりの諸相にみる神戸の特異性—, 都市政策 56, 31-46
- 加藤隆久 (1990): 津和野藩に於ける神葬祭問題とその展開, 神戸女子大学紀要 24L, 21-37
- 角川日本地名大辞典編纂委員会編 (1982):『角川日本地名大辞典 26 京都府 (上・下巻)』角川書店
- カトリック報恩寺教会 (1949-2000):『洗礼台帳』
- カトリック報恩寺教会 (1999):『50年のあゆみ』カトリック報恩寺教会
- 金井年 (1980): 宗教都市の景観と立地についての覚書, 待兼山論叢 14(日本学篇), 5-23
- 金子直樹 (1995): 日本における信仰圏研究の動向—山岳宗教を中心にして—, 人文論究 45-3, 104-117
- 金子直樹 (1997): 岩木山信仰の空間構造—その信仰圏を中心にして—, 人文地理 49-4, 1-20
- 金子直樹 (1998): 岩木山における参詣登山道の歴史的変遷, 歴史地理学 40-5, 26-46
- 金子直樹 (2002): 生業—三岳金山地区の概要—,『福知山市北部地域民俗文化財調査報告書—三岳山をめぐる芸能と信仰—』(福知山市文化財報告書 43)福知山市教育委員会, 5-11
- 金子直樹 (2002): 宗教景観の検証—三岳山の祭礼と信仰—,『福知山市北部地域民俗文化財調査報告書—三岳山をめぐる芸能と信仰—』(福知山市文化財報告書 43)福知山市教育委員会, 142-178
- 金子直樹 (2003): 岩木山の宗教景観について—模擬岩木山・末社・石碑を中心に—, 人文論究 52-4, 73-88
- 金子直樹 (2005):「廃墟」の歴史地理—摩耶觀光ホテルを事例に—, 人文論究 55-1, 63-88
- 金子直樹 (2007): 近現代における岩木山参詣習俗の変容—徒步参詣の伝統化—, 38-77
- 紙谷威廣 (1998): 潜伏キリストンの終末論—民俗宗教の世界観として—, 山折哲雄・長田俊樹編『日本人はキリスト教をどのように受容したか』国際日本文化研究センター, 249-286
- 川合泰代 (2004):「聖なる風景」の復原方法についての一試論—富士講と富士山を例として—, 歴史地理学 46-1, 50-64
- 川合泰代 (2006): 近世奈良町の春日講からみた「聖なる風景」—春日曼荼羅と儀礼の分析を通じて—, 人文地理 58-2, 57-71
- 川田力 (1989): 日本におけるプロテスチント・キリスト教会の立地過程—明治期・関東地方を中心として—, 地理科学 44-4, 207-222
- 川又俊則 (2001): キリスト教会の日本社会への適応—東北・関東の教会墓地を中心に—, 国立歴史民俗博物館研究報告 91, 187-200
- 川村邦光 (1998): 懿性としてのキリストン—殉教と旅の重さ—, 山折哲雄・長田俊樹編『日本人はキリスト教をどのように受容したか』国際日本文化研究センター, 37-60
- 川森博司 (2001): 現代日本における観光と地域社会—ふるさと観光の担い手たち—, 民族学研究 66-1, 68-86
- 岸上英幹 (2004):『乙女峠—殉教の地を訪ねて—』サンパウロ
- 北原かな子 (2002): 明治初年の津軽地方におけるキリスト教布教風景—宣教師報告書・書簡を手がかりとして—, 青森県史研究 6, 33-51

- ギデンズ, アンソニー(1993):『社会学(改訂新版)』而立書房, 1993
- 金光億(1999):国家と文化の生産, 田村克己編『文化の生産—二〇世紀における諸民族文化の伝統と変容—』ドメス出版, 329-335
- 金承哲(2003):韓国キリスト教史における「民族」と「宗教」について, 南山宗教文化研究所報 13, 15-30
- 「郷土」研究会編(2003):『郷土—表象と実践—』嵯峨野書院
- 国枝幸子(2002):島根県の「津和野幼花園」の創設についての一考察, 聖園学園短期大学研究紀要 32 号, 37-54
- 窪徳忠(1976):宗教研究の展望, 九学会連合沖縄調査委員会編『沖縄—自然・文化・社会—』弘文堂, 362-364
- 窪徳忠(1976):道教的信仰—本島中・南部の土帝君信仰—, 九学会連合沖縄調査委員会編『沖縄—自然・文化・社会—』弘文堂, 348-354
- 窪徳忠(1976):保良の中国的習俗, 九学会連合沖縄調査委員会編『沖縄—自然・文化・社会—』弘文堂, 305-308
- 熊野栄助(1976):津和野—城下町をたずねて 21—, 月間文化財 156, 34-46
- 倉田和四生(1964):信仰組織と部落構造—長崎県南松浦郡奈留町大林部落の例—, 社会学部紀要 8(関西学院大学), 15-30
- グールド, ホワイト(1981):『頭の中の地図:メンタル・マップ』朝倉書店
- 群馬県教育委員会編(1964)『境町の民俗』(群馬県民俗調査報告第5集)
- デュルケム(1983):宗教現象の定義, 小関藤一郎編訳『デュルケーム宗教社会学論集』行路社
- 五来重編(1983):『山岳宗教史研究叢書 17 修驗道史料集 [1]』名著出版
- 五野井隆司(1993):『日本キリスト教史』吉川弘文館(初版1990)
- 米家泰作(2005):歴史と場所—過去認識の歴史地理学—, 史林 88-1, 126-158
- 子持村誌編さん室編(1987):『子持村誌 下』子持村
- 阪上善政(1975):津和野本学とキリストン—森鷗外とキリスト教の出会い—, 関西外国語大学研究論集 23, 355-365
- 佐賀加工農業協同組合清算人会(2003):『報恩寺タケノコの歴史』(冊子)
- 阪野祐介(2003):新潟県・八海山を対象とした山岳信仰の展開—大崎口崇敬者の分布を中心に—, 歴史地理学 45-5, 1-18
- 阪野祐介(2006):京都府旧佐賀村におけるカトリックへの集団改宗と農村社会, 人文地理 58-4, 21-40
- 阪野祐介(2007):日本をめぐったザビエル渡来 400 年祭, 神戸大学地理学論集 1
- 坂本武人(1964):丹波地方における基督教の受容(四)—田野村を中心として—, キリスト教社会問題研究(同志社大学) 8, 49-75
- 坂本英夫・高橋正・木村辰男編著(1994):『基礎地理学』大明堂
- 桜井徳太郎・小沢浩(1971):外来宗教の土着化をめぐる問題, 史潮 108, 68-82
- 桜井徳太郎(1978):民間信仰の機能的境位—創唱宗教と固有信仰の接点—, 桜井徳太郎編『日本宗教の複合的構造』弘文堂, 3-22
- 笹川紀勝・本間信長(2000):『宗教』(GHQ 日本占領史第21巻), 日本国書センター
- 佐々木克(1994):明治天皇の巡幸と「臣民」の形成, 思想 845, 95-117
- 佐々木宏幹・村武精一編(1999):『宗教人類学—宗教文化を解読する—』新曜社
- 佐々木高弘(1989):都市景観のなかの宗教—宗教地理学の一試論—, 日本学報 8, 105-128
- 佐藤直助(1979):明治期におけるカトリックの社会的文化的影響, 文学 47-4, 86-95

- 滋賀県教育委員会・京都府教育委員会・奈良県教育委員会編(1999):『都道府県別日本の民俗分布地図集 成第8巻 近畿地方の民俗地図1 滋賀京都奈良』東洋書林
- 島尻勝太郎(1976):『外来宗教の受容と歴史的展開』九学会連合沖縄調査委員会編『沖縄—自然・文化・社会』弘文堂, 319-324
- 島尻勝太郎(1976):『宮古の宗教概観』九学会連合沖縄調査委員会編『沖縄—自然・文化・社会』弘文堂, 295-297
- 島薦進(1998):『日本における『宗教』概念の形成—井上哲坎郎のキリスト教批判をめぐって—』山折哲雄・長田俊樹編『日本人はキリスト教をどのように受容したか』国際日本文化研究センター, 61-75
- 島薦進(2003):『社会の個人化と個人の宗教化—ポストモダン(第2の近代)における再聖化—』社会学評論 54-4, 431-448
- 島津俊之(1986):『村落の空間的社会構造とその変容—京都府宇治田原町禅定寺地区の事例—』人文地理 38-6, 62-78
- 島津俊之(1989):『村落空間の社会地理学的考察—大和高原北部・下狭川を例に—』人文地理 41-3, 1-21
- 島津俊之(1995):『デュルケムの社会空間論—その意義と限界—』経済地理学年報 41-1, 20-36
- ジョンストン, R.J.(1997):『現在地理学の潮流(上)—戦後の米・英人文地理学説史—』地人書房
- ジョンストン, R.J.(1999):『現在地理学の潮流(下)—戦後の米・英人文地理学説史—』地人書房
- 新カトリック大辞典編纂委員会編(1996)『新カトリック大辞典 第1巻』研究社
- 水津一郎(1959):『大教区の形成とその地理学的意義について—ドイツにおける三、四の事例を中心として—』人文研究 10-2, 73-96
- スイングドー, ヤン(1992):『キリスト教と日本の宗教文化の出会い—祖先崇拜に対するカトリックの態度を中心にして—』脇本平也・柳川啓一『権威の構築と破壊』(現代宗教学4)東京大学出版会, 59-81
- 末木文美土(2006):『日本宗教史』岩波新書
- 鈴木昭英(1977):『八海山信仰の展開』新潟県教育委員会編『新潟県文化財調査報告第15集 南魚沼』新潟県教育委員会, 402-410
- 鈴木昭英編(1978):『富士・御嶽と中部霊山』名著出版
- 鈴木岩弓(2003):『この世に現れた「地獄」—霊場・恐山のコスモロジー—』池田紘一・真方忠道編『ファンタジーの世界』九州大学出版会, 143-157
- 鈴木範久(1974):『日本のカトリック村』宗教学研究会
- 鈴木博之(1999):『日本の 地靈』講談社
- 鈴木博之(2001):『日本キリスト教史物語』教文館
- 関戸明子(2005):『メディア・イベントと温泉—「国民新聞」主催「全国温泉十六佳選」をめぐって—』群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編 54, 67-83
- ゼルナ, インゴ(2004):『記憶の場』として見た二宮尊徳, 年報人間科学 25, 155-165
- 全国神社名鑑刊行会編(1977):『全国神社名鑑 上』全国神社名鑑刊行会
- 千田稔(2005):『伊勢神宮—東アジアのアマテラス—』中公新書
- 総務省統計局(2001):『平成12年国勢調査全国都道府県市区町村別人口及び世帯数(確定数)』総務省統計局
- ソーファー・D.E.(1971):『宗教地理学』大明堂
- 当麻成志(1961):『日本宗教地理学の提唱』人文地理 13-4, 65-78
- 当麻成志(1960):『天竜河岸の1農村における宗教受容と地域構造の関係』地理学評論 33-4, 13-26

- 当麻成志 (1958): 丸山教団の発展と土着化過程について, 地理学評論 31-8, 13-22
- 孝本貢 (1978): 民衆のなかの先祖觀の一側面(一) —靈友会系教団の場合—, 桜井徳太郎編『日本宗教の複合的構造』弘文堂, 357-381
- 高野友治 (1958): 天理教と伝播と既成教宗団との関係, 天理大学学報 26, 21-40
- 高橋伸夫・田林明・小野寺淳・中川正 (1995)『文化地理学入門』東洋書林
- 高橋理 (2004): 中世ドイツ都市における宗教機關の意義と役割—ケルンとリューベックを比較して—, 立正大学人文科学研究所年報別冊 15, 5-17
- 武田清子 (1967): キリスト教受容の諸形態—土着と背教—, 武田清子『土着と背教』新教出版社, 3-26
- 竹村一夫 (2000): 末日聖徒イエス・キリスト教会受容の地的差異に関する研究—山形・富山地域における事例を中心に—, 地理学評論 73-3, 182-198
- 竹村一夫 (1995): 末日聖徒イエス・キリスト教会布教の地理学的考察, 立正大学大学院年報(文学研究科) 13, 163-186
- 田中智彦 (1986): 近畿地方における地域的巡礼地, 神戸大学史学年報 1, 45-63
- 田中智彦 (1987): 『四国偏礼絵図』と『四国遍路道指南』, 神戸大学文学部紀要 14, 41-61
- 田中智彦 (1987): 愛宕越えと東国の巡礼者—西国巡礼路の復元—, 人文地理 39-6, 66-79
- 田中智彦 (1988): 石内より逆打と東国の巡礼者—西国巡礼路の復元—, 神戸大学文学部紀要 15, 1-23
- 田中智彦 (1989): 西国巡礼の始点と終点, 神戸大学文学部紀要 16, 39-61
- 田中智彦 (1996): 日本における諸巡礼の発達, 国際日本文化研究センター編『聖なるものの形と場 Figures and places of the sacred (国際シンポジウム第 18 集)』, 225-244
- 田中雅一 (1998): インドにおける二つのキリスト教—村と聖地—, 山折哲雄・長田俊樹編『日本人はキリスト教をどのように受容したか』国際日本文化研究センター, 287-305
- 田邊重敬 (1995): 『佐賀村誌』田邊重敬
- 谷富夫 (1979): 集団改宗の原理と過程に関する一考察—五島キリストian村落と大本—, 社会学評論 30-3, 42-60
- 谷富夫 (1994): 『聖なるものの持続と変容 社会学的理解をめざして』恒星社厚生閣
- 玉置泰明 (1989): 社会関係としてのキリスト教—フィリピン低地農村における世俗化と変容—, 南方文化 16, 57-88
- 田村克己 (1999): 文化的生産, 田村克己編『文化的生産—二〇世紀における諸民族文化の伝統と変容』—ドメス出版, 13-29
- 垂水稔 (1987): 仏教的結界について, 桜井徳太郎編『聖地と他界觀』(仏教民俗学大系 3)名著出版, 37-57
- 津金澤聰廣編著 (1996): 『近代日本のメディア・イベント』同文館
- 津金澤聰廣編著 (2002): 『戦後日本のメディア・イベント [1945 - 1960 年]』世界思想社
- 筒井裕 (1999): 秋田県における太平山三吉神社の信仰圏の空間構造—講中を指標にして—, 秋大地理 46, 27-32
- 筒井裕 (2000): 太平山信仰における講中活動の現況, 秋田地理 20, 27-35
- 筒井裕 (2001): 鳥海山大物忌神社の信仰圏に関する地理学的研究, 秋大地理 48, 1-8
- 筒井裕 (2004): 山岳信仰の神社における講組織の形成—国弊中社大物忌神社を事例に—, 歴史地理学 46-1, 32-49
- 筒井裕 (2004): 昭和初期における鳥海山山中への物資運搬—吹浦口ノ宮からの運搬を中心にして—, 日本民俗学 240, 76-92

- 椿真智子(1987):法華宗移民における同化過程の考察—米沢藩椿村を事例として—,歴史地理学 138, 14-31
- 津和野カトリック教会編(1992):『宣教百年の歩み』津和野カトリック教会
- 寺田勇文(1991):外来と土着—フィリピンにおける民衆カトリシズム世界—,前田成文編『東南アジアの文化』(講座東南アジア学第五巻)弘文堂, 69-92
- デランティ, ジェラード(2006):『コミュニティー—グローバル化と社会理論の変容』NTT出版
- トゥアン, イーフー(1992):『トポフィリア—人間と環境—』せりか書房
- トゥアン, イーフー(2003):『空間の経験—身体から都市へ—』筑摩書房(ちくま学芸文庫, 初版1993)
- 鳥越皓之(1993):『家と村の社会学』世界思想社(初版1985)
- 永井隆(1952):『乙女峠』中央出版社
- 中尾堯(2004):都市と宗教空間, 立正大学人文科学研究所年報別冊 15, 1-7
- 長岡市編(1992):『長岡市史 別編 民俗』長岡市
- 中川正(1983):集落の性格形成における宗教の意義—霞ヶ浦東岸における二つの集落—,人文地理 35-2, 1-19
- 中川正(2003):聖地とは何か, 地理 48-11, 8-13
- 長津一史(2004):「正しい」宗教をめぐるポリティクス—マレーシア・サバ州, 海サマ人社会における公的イスラームの経験—, 文化人類学 69-1, 45-69
- 中野毅・飯田剛史・山中弘(1999):『宗教とナショナリズム』世界思想社(SEKAISHISO SEMINAR, 初版1997)
- 中村彰彦(2003):津和野藩校 養老館—搜魂記:藩学の志を訪ねて—, 諸君 35-10, 103-113
- 中山和久(2001):巡礼をめぐる理解と誤解, 国立歴史民俗博物館研究報告 91, 537-552
- 奈良大文化会地理学研究会(1989):津和野城下町の地域制とその変容, Landshaft2, 51-84
- 西井涼子・田辺繁治編(2006):『社会空間の人類学—マテリアリティ・主体・モダニティー』世界思想社
- 西光義秀(1986):農村社会へのキリスト教伝播とその要因, 龍谷大学社会学論集 7, 86-102
- 西山茂(1975):日本村落における基督教の定着と受容—千葉県下総福田聖公会の事例—, 社会学評論 26-1, 53-73
- 日本カトリック諸宗教委員会編(1985):『祖先と死者についてのカトリック信者の手引』カトリック中央協議会
- 野口武徳・宮家準(1976):保良の基層宗教, 九学会連合沖縄調査委員会編『沖縄—自然・文化・社会—』, 弘文堂 297-304
- 野口武徳(1976):漁業および航海の信仰, 九学会連合沖縄調査委員会編『沖縄—自然・文化・社会—』, 弘文堂 325-331
- 野口英雄(1991):聖別された場—建築のトポロジー—, 前田成文『東南アジアの文化』(講座東南アジア学第5巻)弘文堂, 242-255
- 野崎清孝(1980):長崎県生月島の触とかくれキリストン組織, 奈良大学紀要 9, 34-48
- 野村暢清(1962):馬渡島集団カトリックの研究, 哲学年報 24(九州大学文学部), 51-86
- 野本晃史(1981):小京都の街づくり—津和野—, 地理 26-5, 42-48
- パウロ・フィステル(1984):『日本のイエズス会史』イエズス会日本管区(非売品)
- ハーヴェイ, ダヴィッド(1981):モニュメントと神話, 千田稔訳編『地図のかなたに』地人書房, 225-272
- バッティマー, アン(1981):生活世界のダイナミズムの把握, 千田稔訳編『地図のかなたに』地人書房, 103-149

- 濱田琢司(2002):維持される産地の伝統—大分県日田市小鹿田陶業と民芸運動—,人文地理 54-5, 1-21
- 濱田琢司(2006):『民芸運動と地或文化—民陶産地の文化地理学—』思文閣出版
- 浜谷正人(1988):『日本村落の社会地理』古今書院(地理学選書, 入門-実践編)
- 林和生(1989):丹波山地における村落の空間構成と社会構造—兵庫県多紀郡西紀町北郷区の事例—, 浮田典良編著『日本の農山漁村とその変容』大明堂, 255-271
- 林一馬(2002):長崎のカトリック教会堂群—その歴史的意義と特徴—, 月間文化財 1月号, 9-12
- 原武史(1999):津和野と明治維新(講演), しまねの古代文化 6, 53-64
- 原武史(2003):『皇居前広場』光文社(光文社新書)
- 原田敏明(1975):『村の祭祀』中央公論社
- 阪急交通社 30年社史編集委員会編(1991)『株式会社阪急交通社創立 30年史』株式会社阪急交通社
- 久武哲也(2000):『文化地理学の系譜』地人書房
- 秀村研二(2003):韓国社会とキリスト教, 地理 48-3, 35-41
- 平山眞(2002):聖地巡礼の観光人類学的考察—宮城県仙台市の宗教法人・大和教団を題材として—, 観光産業 19, 145-157
- 広島教区 80周年記念大会, 殉教地・巡礼地ネットワーク(2003):『広島教区殉教地・巡礼地案内(2003年版)』カトリック広島司教区
- 福田アジオ・宮田登編(1983):『日本民俗学概論』吉川弘文館
- 福武直(1971)『日本の農村』東京大学出版会
- フーコー, ミシェル(1984):主体と権力, 思想 718, 235-249
- 藤井正雄(1987):聖域とその境界 総説, 桜井徳太郎編『聖地と他界觀』(仏教民俗学大系 3)名著出版, 27-36
- 藤井正雄(1976):仏教について,九学会連合沖縄調査委員会編『沖縄—自然・文化・社会—』弘文堂, 341-347
- 藤井正雄(1976):保良の仏教的習俗, 九学会連合沖縄調査委員会編『沖縄—自然・文化・社会—』弘文堂, 309-312
- 藤村健一(2001):奥熊野の一村落における宗教の多様性とその要因, 歴史地理学 43-5, 21-37
- 藤村健一(2003):新宗教教団・大本の聖地の建設と再建, 地理 48-11, 29-35
- 藤村健一(2004):越前に於ける真宗と村落社会—道場の変遷を中心に—, 歴史地理学 46-1, 1-14
- 藤村健一(2004):近年の英語圏における宗教地理学的研究の動向—L・コンとR・W・スタンプを中心として—, 立命館地理学 16, 71-80
- 藤村健一(2005):宗教施設と社会集団との相互関係とその変化—福井県嶺北の寺院・道場の事例から—, 地理学評論 78-6, 369-386
- 藤村健一(2006):Problems with essentialism and constructionism in contemporary geographical studies of religion, Geographical review 75-5, 73-85
- 藤原久仁子(2003):「奇跡」の物象化—マルタにおけるマリア崇敬と巡礼地の現在—, 宗教と社会 9, 67-90
- 藤原武弘(2000):自己過程としての巡礼行動の社会心理学的研究(3)—サンチャゴ・デ・コンポステラ巡礼者の調査的研究—, 関西学院大学社会学部紀要 88, 23-31
- 古川久雄(1996):マライシアの心—意識と行為種子—, 山折哲雄・中西進編『宗教と文明』朝倉書店, 122-138
- 古野清人(1957):生月のキリシタンと部落—とくに祭祀組織について—, 九州文化史研究所紀要 5, 1-44
- 文学津和野刊行会編(1980):『文学津和野』文学津和野刊行会発行
- 平凡社編(1981):『日本歴史地名大系 26 京都府の地名』平凡社

- ペラー, R. N. (1973): 近代日本における価値と社会変動,『社会変革と宗教倫理』未来社, 201-239
- ペラー, R. N.他 (1991):『心の習慣 アメリカ個人主義のゆくえ』みすず書房
- ヘルマン, オームス (1987):『祖先崇拜のシンボリズム』弘文堂
- ホブズボウム, E·レンジャー, T(1992):『創られた伝統』紀伊國屋書店
- 松井圭介 (1993): 日本における宗教地理学の展開, 人文地理 45-5, 75-93
- 松井圭介( 1995 ): 信仰者の分布パターンからみた笠間稻荷信仰圏の地域区分, 地理学評論 68A-6 ,345-366
- 松井圭介 ( 2001 ): 山岳靈山における空間利用の垂直的变化, 徳久球雄他編『地域・観光・文化』嵯峨野書院, 173-192
- 松井圭介 ( 2003 ):『日本の宗教空間』古今書院
- 松井圭介 ( 2003 ): 信仰間競合からみた金村信仰圏の空間的意味, 人文地理学研究 27 , 49-70
- 松井圭介 ( 2003 ): 民衆宗教にみる聖地の風景, 地理 48-11 , 36-42
- 松井圭介 ( 2005 ): 信仰圏研究の成果と展望—金村別雷神社信仰を事例として—, 歴史地理学 47-1 , 23-39
- 松井圭介 ( 2005 ): ツーリズムの影響にともなう聖地管理の課題—Shackley, M. : Managing sacred sites を手がかりとして—, 人文地理学研究 29 , 159-169
- 松井圭介( 2006 ): 観光戦略としてのキリストン—宗教とツーリズムの相克—,人文地理学研究 30 ,147-179
- 松崎憲三 ( 1983 ): 村落の空間論的把握に関する事例的研究—千葉県海上町倉橋を試例として—, 国立歴史民俗博物館研究報告 2 , 1-39
- 松島弘 ( 1994 ):『藩校養老館』津和野歴史シリーズ刊行会 (津和野ものがたり第 8 卷)
- 松島弘編 ( 2005 ):『津和野町史第 4 卷』, 津和野教育委員会
- 松本皓一 ( 1974 ): 越後八海山信仰調査の中間報告—実体と今後の課題—, 宗教学論集 8 , 29-50
- 真鍋祐子 ( 2001 ): 現代韓国の 巡礼 と民主主義 光州事件 ( 1980 年) 以後, 国立歴史民俗博物館研究 報告 91 , 293-309
- 丸山眞男 ( 1992 ):『忠誠と反逆 転形期日本の精神史的位相』筑摩書房
- 三木一彦( 1996 ):秩父地域における三峰信仰の展開—木材生産との関連を中心に—, 地理学評論 69A-12 , 921-941
- 三木一彦 ( 1998 ): 山間村落における信仰集団存立の地域的基盤—江戸時代の秩父郡大野村を事例とし— 歴史地理学 40-2 , 2-21
- 三木一彦 ( 2001 ): 江戸における三峰信仰の展開とその社会的背景, 人文地理 53-1 , 1-17
- ミッケル, ドン ( 2002 ): 文化なんてものはありやしねえ—地理学における文化概念の再概念化に向けて—, 空間・社会・地理思想 7 , 118-137
- 三俣俊二 ( 1996 ): 姫路藩流配の浦上キリストンについて, 聖母女学院短期大学研究紀要 25 , 32-42
- 三俣俊二 ( 1999 ): 金沢藩流配の浦上キリストンについて, 聖母女学院短期大学研究紀要 28 , 19-35
- 三俣俊二 ( 1999 ): 大聖寺藩流配の浦上キリストンについて, 聖母女学院短期大学研究紀要 28 , 1-18
- 三俣俊二 ( 2000 ): 伏見のキリストン史蹟, 聖母女学院短期大学研究紀要 29 , 1-10
- 水内俊夫 ( 2005 ):『空間の政治地理』朝倉書店 (シリーズ人文地理学 4 )
- 宮家準 ( 1976 ): 神社信仰について, 九学会連合沖縄調査委員会編『沖縄—自然・文化・社会—』弘文堂 , 332-340
- 宮家準・孝本貢・西山茂編 ( 1986 ):『日本の社会 (19) 宗教』東京大学出版会
- 宮家準編 ( 1981 ):『修験者と地域社会—新潟県南魚沼の修験道』(慶應義塾大学宮家研究室報告 ) 名著 出版

- 宮崎賢太郎（1998）：日本人のキリスト教受容とその理解，山折哲雄・長田俊樹編『日本人はキリスト教をどのように受容したか』国際日本文化研究センター，169-212
- 宮崎章（1985）：占領初期における米国の在日朝鮮人政策，思想 734，122-139
- マクス・ミュラー（1990）：『宗教学入門』晃洋書房
- 村井早苗（2002）：『キリスト教と民衆の宗教』山川出版社（日本史リブレット）
- 村上重良（1998）：『日本宗教事典』講談社（講談社学術文庫，初版 1988）
- 村武精一（1987）：『祭祀空間の構造—社会人類学ノート—』東京大学出版会
- 村松晋（2003）：昭和戦前期長野県のキリスト教をめぐる—考察—長野市柳町小学校の一教師の日記をとおして—，信濃 55-12，17-36
- 室田保夫（1977）：丹波第一教会時代の留岡幸助，キリスト教社会問題研究 26，163-192
- 森岡清美（1953）：日本農村における基督教の受容，民族学研究 17-2，1-14
- 森岡清美（1972）：「外来宗教の土着化」をめぐる概念的整理，史潮 109，52-57
- 森岡清美・西山茂（1979）：新宗教の地方伝播と定着の過程—山形県湯野浜の妙智會会員調査から—，柳川啓一・安齋伸編『宗教と社会変動』東京大学出版会，137～194
- 森岡清美（1986）：日本農村における基督教の受容，宮家準・孝本貢・西山茂編『日本の社会学（19）宗教』東京大学出版会，134-146
- 森岡清美（2002）：大正昭和戦前期の新宗教における先祖祭祀，義江明子編『親族と祖先』（日本家族史論集 7）吉川弘文館，233-261
- 森正人（2001）：場所の真正性と神聖性—高知県室戸市の御厨人窟を事例に—，地理科学 56-4，252-271
- 森正人（2001）：遍路道にみる宗教的意味の現代性—道をめぐるふたつの主体の活動を中心に—，人文地理 53-2，173-189
- 森正人（2002）：近代における空間の編成と四国遍路の変容—両大戦間期を中心に—，人文地理 54-6，535-555
- 森正人（2002）：戦後から 1980 年代までにみる四国 88 か所巡礼の動態—マス・メディア，観光とのかかわり—，人文論究 51-4，160-173
- 森正人（2005）：接合される日本文化と弘法大師—1934 年の「弘法大師文化展覧会」を中心に—地理学評論 78-1，1-27
- 森正康（1985）：地域社会における教派神道の受容と定着—山梨県下の禊教—，歴史地理学 130，1-17
- 兩角克夫（1984）：文化と宗教—人間学的考察—，カトリック研究 45，145-169
- 八木谷涼子編（2002）：『日本の教会をたずねて』平凡社（別冊太陽—日本のこころ）
- 八木谷涼子編（2004）：『日本の教会をたずねて』平凡社（別冊太陽—日本のこころ）
- 八木康幸（1986）：近江湖南村落における宮座と象徴空間，人文地理 38-2，27-50
- 八木康幸（1988）：村落空間論の諸相—象徴的空间を中心にして—，関西学院史学 22，55-67
- 八木康幸（1999）：ふるさとのけしき，鳥越皓之編『景観の創造』（講座人間と環境 4）昭和堂，172-201
- 八木康幸（1989）：村落墓地の規模について—淡路島を例として—，浮田典良編著『日本の農山漁村とその変容』大明堂，273-288
- 山折哲雄（1998）：日本人とキリスト教—半・日本人クライシスについて，山折哲雄・長田俊樹編『日本人はキリスト教をどのように受容したか』国際日本文化研究センター，3-18
- 山折哲雄（1998）：はしがき，山折哲雄・長田俊樹編『日本人はキリスト教をどのように受容したか』国際日本文化研究センター，1-2

- 山崎久雄 (1968): 越後三山地域の八海山信仰, 日本自然保護協会『越後三山・奥只見自然公園学術調査報告』(日本自然保護協会調査報告第34号) 財団法人自然保護協会, 243-259
- 山下晋司 (1996) 観光人類学案内—「文化」への新しいアプローチ—,『観光人類学』新曜社, 4-13
- 山代宏道 (2003): 中世ヨーロッパにおける巡礼の旅—時空間移動の視点から—, 広島大学大学院文学研究科論集 63, 33-50
- 大和町史編集委員会 (1991):『大和町史 中巻』新潟県南魚沼郡大和町役場
- 山野正彦 (1976): 丹波山地における村落の空間形態とその内部構造, 人文研究 28-2, 23-53
- 山野正彦 (1977): 分類体系としてみた村落の空間構成—丹波・吉備高原地域を事例として—, 人文研究 29-6, 1-23
- 山野正彦 (1979): 空間構造の人文主義的解説法—今日の人文地理学の視角—, 人文地理 31-1, 46-68
- 吉住和子 (2001): 世界と日本を結ぶ—人流とその魅力を探る 聖地・ルルドの泉をめざす人(フランス) —, 国際人流 166, 36-39
- 吉田禎吾 (1983):『宗教と世界觀—文化人類学的考察—』九州大学出版会
- 吉見俊哉 (1998):『博覧会の政治学—まなざしの近代—』中央公論社(中公新書)
- 米村竜治 (1998): 隠れキリスト教と隠れ念佛, 山折哲雄・長田俊樹編『日本人はキリスト教をどのように受容したか』国際日本文化研究センター, 121-136
- 吉見俊哉 (2004): 遷都と巡幸—明治国家形成期における天皇身体と表象の権力工学—, 東京大学社会情報研究所紀要 66, 1-26
- リード, デイヴィッド (2000): キリスト教徒と祖先の関係, PL.スワンソン・林淳編『異文化から見た日本宗教の世界』(叢書・現代世界と宗教 2) 法藏館, 72-96
- リーチ, エドマンド (1981):『文化とコミュニケーション』紀伊国屋書店
- リーダー, イアン (2001): あれは宗教・これが信仰—現世利益と日本の宗教の構造—, 国立歴史民俗博物館研究報告 91, 481-492
- リンチ, ケヴィン (1969):『都市のイメージ』岩波書店
- リンチ, ケヴィン (1974):『時間の中の都市』鹿島研究所出版会
- ルフェーヴル・アンリ (2000):『空間の生産』青木書店(社会学の思想 5)
- レルフ・エドワード(2001):『場所の現象学—没場所性を越えて—』筑摩書房(ちくま学芸文庫,初版1999)
- 若林幹夫 (1999):『地図の想像力』講談社(講談社選書メチエ)
- 『八海山大崎口里宮崇敬者名簿』八海山尊神社社務所

- Gilbert, A (1988): The new regional geography in English and French-speaking countries. Progress in Human Geography, 12-2, 208-228
- Brace, Catherine, Bailey, Adrian R. and Harvey, David C. (2006): Religion, place and space: a framework for investigating historical geographies of religious identities and communities. Progress in human geography, 30-1, 28-43
- Buttimer, Anne (2006): Afterword: reflections on geography, religion and belief systems. Annals of the association of American geographers, 96-1, 197-202
- Chivallon, Christine (2001): Religion as space for the expression of Caribbean identity in the United Kingdom, Environment and Planning D: Society and Space, 19, 461-483

- Cooper, Adrian ( 1994 ) : Negotiated dilemmas of landscape, place and Christian commitment in a Suffolk parish. *Transactions of the Institute of British Geographers* NS 19, 202-212
- Crang, Mike. Travlou, Penny S. ( 2001 ) : The city and topologies of memory, Environment and Planning D: Society and Space, 19,161-177
- Crang, Mike ( 1998 ) : Cultural Geography, Routledge
- de Blij, Harm J. and Muller Peter O.( 1986 ) : Human geography: culture, society, and space 3/E, John Wiley & Sons
- Eade, John and Sallnow, Michael J ( 2000 ) : Contesting The Sacred The Anthropology of Christian Pilgrimage, University of Illinois Press
- Ferber, Micael P. ( 2006 ) : Critical realism and religion: objectivity and the insider / outsider problem. *Annals of the association of American geographers*, 96-1, 176-181
- Graham, Brian and Murray, Michael ( 1997 ) : The spiritual and the profane: The pilgrimage to Santiago de Compostela, Ecumene, 4-4, 389-409
- Harvey, David ( 1979 ) : Monument and Myth, *Annals of the association of American geography*, 69-3, 362-381
- Holloway, Julian ( 2006 ) : Enchanted spaces: the Séance, affect, and geographies of religion. *Annals of the association of American geographers*, 96-1, 182-187
- Ivakhiv, Adrian ( 2006 ) : Toward a geography of "Religion": Mapping the distribution of an unstable signifier. *Annals of the association of American geographers*, 96-1,169-175
- Jackson, Richard H. ( 1978 ) : Religion and landscape in the Mormon cultural region, Karl W. Butzer, ed., *Dimensions of Human Geography*, University of Chicago, Dept. of Geography, 100-127
- Kong, L ( 1990 ) : Geography and religion: trends and prospects. *Progress in Human Geography*, 14, 355-371
- Kong, L( 1993 ) : Ideological hegemony and the political symbolism of religious buildings in Singapore. *Environment and Planning D: Society and Space*, 11, 23-45
- Kong, L ( 1993 ) : Negotiating conceptions of 'sacred space': a case study of religious buildings in Singapore. *Transactions New series/Institute of British Geographers*, 18, 342-358
- Kong, L ( 2001 ) : Mapping 'new' geographies of religion: politics and poetics in modernity. *Progress in Human Geography*, 25, 211-233
- Lande, Aasulv ( 1993 ) : Christianity's 'Three waves' . Ian Reader, ed., *Japanese religions: Past and present*, Japan Library, 155-160
- Levine, Gregory J. ( 1986 ) : On the geography of religion, *Transactions New series / Institute of British Geographers*, 11, 428-440
- Ley, David ( 1981 ) : Cultural / humanistic geography. *Progress in Human Geography*, 5-2, 249-257
- Nash, Catherine ( 2002 ) : Cultural geography: postcolonial cultural geographies. *Progress in Human Geography*, 26-2, 219-230
- Oda, Masayasu ( 1999 ) : Distribution of Christianity in Japan. *The Pennsylvania Geographer*, 37-1, 17-32
- Paasi, Anssi( 2002 ):Place and region: regional worlds and words. *Progress in Human Geography*, 26-6, 802-811

- Paasi, Anssi ( 2003 ) : Region and place: regional identity in question. Progress in Human Geography, 27-4, 475-485
- Park, Chris C. ( 1994 ) : Sacred world: An introduction to Geography and Religion, Routledge
- Peach, Ceri( 2002 ) : Social geography: new religions and ethnogeography-contrasts with cultural geography. Progress in Human Geography, 26-2, 252-260
- Proctor, James ( 2006 ) : Religion as trust in authority: theocracy and ecology in the United States. Annals of the association of American geographers, 96-1, 188-196
- Reader, Ian ( 1993 ) : Christianity in Japan. Reader, Ian. ed., Japanese religions: Past and present, Japan Library, 153-155
- Shilhav, Yosseph ( 1983 ) : Principles for the location of synagogues: symbolism and functionalism in a spatial context. The Professional Geographer, 35-3, 324-329
- Sopher, David E. ( 1981 ) : Geography and religions, Progress in Human Geography, 5-4, 511-524
- Tanaka, Hiroshi ( 1981 ) : The evolution of a pilgrimage as a spatial-symbolic system. Canadian Geographer, 25-3, 240-251
- Tuan, Yi-fu ( 1976 ) : Humanistic geography. Annals of the association of American geography, 66-2, 266-276
- Tuan, Yi-fu( 1978 ) : Sacred space: Explanations of an idea. Karl W. Butzer ,ed., Dimensions of Human Geography, University of Chicago, Dept. of Geography, 84-99
- Walter, Bronwen ( 1986 ) : Ethnicity and Irish residential distributionTransactions. New series / Institute of British Geographers, 11, 131-146